

奇譚クラブ

1959年 11月号

新連載小説「影」の国 雪俊 遙
懸賞入選「女はそれでも我慢が出来る」 鳴滝 三郎



11月号

昭和三十四年十一月二十日印刷 (第十三卷 十一月号) (毎月一回一日発行)
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

奇譚クラブ

昭和三十四年十一月号

11

奇譚クラブ

昭和三十四年十一月二十日印刷 (第十三卷第十四号)
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

定価二百円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



IBM. 2805

限定版特別号の第二弾！ 全巻に張る美花の香り！

緊縛写真と緊縛画集

限定版特別号の第二弾として、お待ちかねの、『緊縛写真と緊縛画集』が完成しました。本特別号は題名通り、絵画と写真にて全巻を構成、定評ある四馬孝氏の麗筆にて、写真にては不可能なところを描出し、同様に、絵画にては足りぬニュアンスと雰囲気美人モデル緊縛姿の実写写真に依ってマニヤ諸氏を堪能せしめ得ると自負致しております。華麗な緊縛芸術の殿堂が皆様のノックをお待ちしています。尚書店売りは致しませんので直接本社へお申込下さい。

素晴らしい写真集

- ▽序曲「手吊り」のポーズから（四葉）
- ▽第二章逆手吊りと足吊り（四葉）
- ▽緊縛感のクローズアップ（四葉）
- ▽拘束女性の経過（四葉）
- ▽股間縛り競艶（四葉）
- ▽麗しき果実列（四葉）
- ▽狂っただ果実曲（四葉）
- ▽晒し者なんだ（四葉）
- ▽腰巻きの乱舞（四葉）
- ▽女性の飲み八態（六葉）
- ▽女さア、どうでもして（八葉）

- ▽陳列された女体！（四葉）
 - ▽忘れぬ豊満美（四葉）
 - ▽黒蛇地獄（四葉）
 - ▽女のふんどし（四葉）
 - ▽女のサポータ（五葉）
 - ▽吊り人形の哀歌（五葉）
 - ▽断然、これは凄いの！（四葉）
 - ▽女囚第十四号罷り通る（二葉）
- モデル……絹川文代嬢
大塚啓子嬢
愛川悦子嬢

—お申込は—
大阪市阿倍野郵便局
私書函第十四号
天 星 社 へ

四馬 孝緊縛画集

- 1 女体耐久テスト
- 2 女体は美しき玩具
- 3 素晴らしい会食
- 4 人間燭台の実験
- 5 オシメカバーと大きな赤ん坊
- 6 物置小屋の怪
- 7 白いけにえ
- 8 生埋めの私刑
- 9 アクロバットの訓練
- 10 奴隷という責め
- 11 女学生の嫉妬
- 12 水責にあら美女
- 13 回転する女体
- 14 浴場の悦虐
- 15 女の掟（華かなリンチ）
- 16 鞭の御馳走
- 17 三醜女の逆恨み
- 18 淫虐な美容師
- 19 遠慮はいらねえぜ
- 20 狂気の復讐
- 21 女体の荷物
- 22 ヤキを入れてやる
- 23 トランク詰の裸女
- 24 電気責めテスト
- 25 吊し責めにあら美女



価 五 百 円
略号「緊縛」
各冊限定番号押捺

☆懸賞愛読者原稿募集☆

規 定

- 一、原稿の内容は本誌の掲載にふさわしいものであれば、どんなものでも結構です。
- 二、創作、小説、文庫、研究、物語、告白体験等形式は如何なるものでも構いません。
- 三、枚数は最高百五十枚位まで（四百字詰）
- 四、必ず未発表の作品であることが必要です。
- 五、締切は毎月十日。以後に到着の分は翌月廻しとします。
- 六、入選者は毎月の誌上に発表。賞金は一篇につき二千元以上五万円迄贈呈いたします。
- 七、掲載外の佳作には、本誌三月分乃至一年分贈呈いたします。
- 八、封筒には「懸賞愛読者原稿」と朱記のこと。原稿返戻御希望の方は返信料同封下さい。
- 九、発表に支障のある箇所は掲載の際に訂正又は削除することがありますから予め御承諾願います。

天 星 社 編 集 部

読者原稿募集

- 【体験、告白、手記】 なたにも一つや二つは必ず思い出とか、体験とかいってものはあるものです。物いわざるは腹ふくめるのとえ、どうか皆様の真実の叫びをお寄せ下さい。内容や長短は問いません。採用篇には本誌三月分以上贈呈します。
- 【創作、小説、物語】 一度自分も小説らしきものを書いてみようと思われた方は出来の如何に拘らず御遠慮なく御投稿さい但し未発表の自作に限ります。いずれも誌上の匿名は御自由です。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。
- 【映画、雑誌通信】 映画や既刊雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項がありましたら通信下さるようお待ちします。映画は撮影所名、題名。雑誌は発行所名、雑誌名、発行年月の明記をお願いします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。
- 【レポート】 新聞記事（週刊誌を含む）の切り抜き又は感想など皆様の関心をお持ちの事項について御知らせ下さい。掲載の分には本誌二月分以上贈呈します。
- ◎尚、以上の五項目の採用原稿には御希望により編集部作成の各種フォトを贈呈する準備がございます。
- 【読者通信】 編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、希望、感想、思い出話、或は読者相互間の交歓文通応募、編集上の御意見など忌憚なきお便りをどしどしお寄せ下さい。誌面の許す限りつとめて発表いたします。

本誌御購読の榮

- 一月分（1冊） 送共 二百円
- 三月分（3冊） 送共 六百円
- 半年分（6冊） 送共 千二百円
- 一年分（12冊） 送共 二千四百円

本誌は直接郵送による販売を主としておりますので、購読御希望の方は直接発行所宛お申込下さい。半年分予約の方には景品として大手札型緊縛写真三枚、一年分予約の方には同じく六枚一組贈呈いたします。御予約の方へは発売の都度厳重荷造りの上急送申し上げます。尚、発行済の旧号は別項記載の通り在庫の上、御注文をお待ちしております。

奇譚クラブ 定価 二百円

- 十一月号…復刊第五十号
- △通刊第百二十八号△
- 昭和三十四年十月二十日印刷
- 昭和三十四年十一月一日発行
- 編集印刷兼発行人 吉田 稔
- 大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号
- 発行所 天 星 社

電話 天下茶屋 三六〇七番
振替口座大阪第五〇〇四二番

御送金は、事故の際困りますので出来る限り振替、現金書留、又は書留にてお願い致します。切用代用は、八円か十円の少額のものを利用下さい。宛先は必ず楷書ではっきりお書き願います。尚振替用紙は当社作成のものは品切となりましたので御諒承願います。

縛られた女体ばかりの写真集 第一弾!!

限定版『緊縛フォト・アラベスク』

各冊、限定番号押捺 特価 五百円 (送共)

限定版特別号第一集として、最近撮影の新人モデルによる各種緊縛ポーズの中から選集いたしました。題して「緊縛フォト・アラベスク」。文字通り表紙から巻末に至るまで若き美人モデルの緊縛写真ばかりを網羅いたしました。可憐愛すべき緊縛フォトアルバムとして、どうか一冊を皆様の座右にお備え下さい。

△収載内容△ 二十六項目、写真七十七葉

- | | |
|----------------------|--|
| 一、鏡……………愛川 悦子 | 十五、鏡台と腰巻……………花坂 道子 |
| 二、銘花二輪……………花坂 道子 | 十六、腰巻と鏡台……………花坂 道子 |
| 三、鉄鎖……………大塚 啓子 | 十七、奇妙な休憩……………絹川 文代 |
| 四、諦観……………大塚 啓子 | 十八、田代悠子表情集(その二) |
| 五、庭園にて……………絹川 文代 | 十九、脱がされた高手小手……………愛川 悦子 |
| 六、謎の微笑……………田中 芳代 | 二十、亀甲縛り……………愛川 悦子 |
| 七、田代悠子表情集(その一) | 二十一、吊責折檻……………村井知可子 |
| 八、誇る脚線美……………田代 悠子 | 二十二、立木縛り……………村井知可子 |
| 九、この足どうかしら……………田代 悠子 | 二十三、豊 醇……………愛川 悦子 |
| 十、裏と表と……………愛川 悦子 | 二十四、乱れ髪三景……………大塚 啓子 |
| 十一、落陽の丘……………愛川 悦子 | 二十五、椅子と絨綴……………愛川 悦子 |
| 十二、ポリウムの花園……………大塚 啓子 | 二十六、姐上の美鯉……………絹川 文代 |
| 十三、緊縛感の綾……………大塚 啓子 | △本限定版特集号は一切書店売りは致しませんから直接発行所宛お申込願います。△ |
| 十四、奔放な肢体……………大塚 啓子 | |

臨時増刊 限定版 悦特 No 2 定価 三百円

「悦虐小説と緊縛写真」特集号第二集 (略号「悦特第二」)

巻頭の四馬孝画、緊縛絵画から始まって、百十六葉に亘る特写グラビヤ写真、本文の昭和二十八年年度本誌掲載の傑作サド読物と全巻息もつかせぬ充実した、S一遍倒の編集により二百頁を掩う妖気は、必ずや皆様を完全に圧倒することでしょう。

……四馬孝緊縛画集……

- | | |
|-------------------|---------------------|
| ◎柱背負い……………捕われ人 | ◎造形美術……………花坂道子 |
| ◎深夜の水浴……………椅子縛り | ◎艶肌の拘束……………絹川文代 |
| ◎喰込む縄……………水道責め | ◎ロープ・ブラジャー……………愛川悦子 |
| ◎あんよは上手……………答打ちの果 | ……往年の好読物集…… |

……悦姿態特選集……

- | | |
|-------------------|--------------------------|
| ◎逢瀬のポーズ……………絹川文代 | ◎妓の影……………泉 辰之助 |
| ◎しずかなる受縄……………花坂道子 | ◎凌辱の幻想と期待……………古川 裕子 |
| ◎はかなき悶え……………田中芳代 | ◎僕の記録……………黒井 珍平 |
| ◎美囚第十四号……………絹川文代 | ◎くすぐられるよろこび……………山本 百合 |
| ◎羞姿晒陽……………愛川悦子 | ◎キメラ愛好会……………岡田 咲子 |
| ◎悦びの一刻……………浜本喜美 | ◎被虐の愛情……………若林 啓子 |
| ◎綾なす白縄……………絹川文代 | ◎責 苦……………竹谷 十三 |
| ◎乱れさく哀花……………絹川文代 | ◎アブノーマル・ファンタジー……………岡田 咲子 |
| ◎柔肌の喘ぎ……………平野笑子 | ◎変の字問答……………浮家 鷹三 |
| ◎荒縄と美貌……………絹川文代 | ◎マダム紅鶴……………野村恵美子 |
| ◎未知の驚き……………岩井知子 | ◎哀艶責め場絵噺……………岩 広志 |
| ◎悦虐狂奏曲……………大塚啓子 | ◎蜘蛛と蝶々……………飛田 良二 |
| | ◎由紀子のお仕置……………大川由紀子 |
| | ◎聖画の誘惑……………近見 啓 |



奇譚クラブ 復刊第五十号 目次

四馬孝傑作集 地下の調査	四馬 孝・画
緊縛フォト「たそがれのブレイ」	絹川文代嬢
縛り絵 落花一輪（受難の洋装の花嫁）	滝れい子・画
俊平戯画 少女王国誕生	南村俊平・画
緊縛画 船室の珍客	四馬 孝・画

話の肩籠	辻村 隆	18
足フェチと責め（宝塚二三夫氏へ）	山川 正人	23
揮刑事捜査ノート「反応試験」	楨村 奏	24
幕末奇譚 艶色赫夜姫	海野 築朗	34
アクロバットの魅力	堀 美佐男	44
創作「王宮の浣腸室」（第三回）	柴崎 梨子	46
旧い日本の面影―切腹研究夜話（十）―	中康 弘通	56
創作「昼の倉」	三条 卓史	58
マゾヒズム百景	馬場 好男	66
特高拷問史	庄田美起夫	68
新連載長編第三次元小説『影の国』（第一回）	雪俊 遙	72

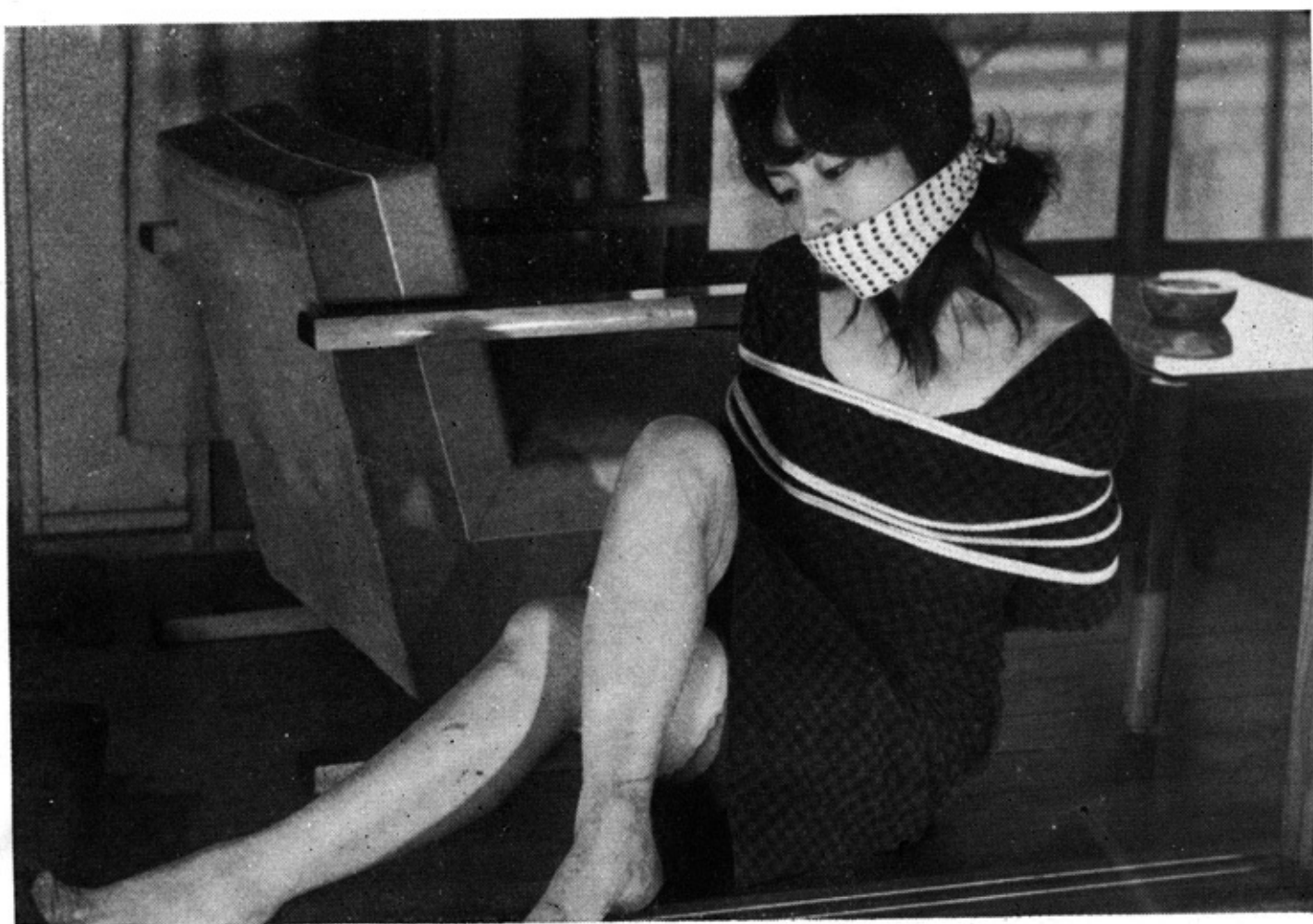


麻生保氏の生活と意見	麻生 保	80
連載告白小説V 或る倒錯生活（二）	西村 憲一	84
真屋の告白	泉 辰之助	94
乗馬ズボンシリーズII 秀緒の日記	藤山 秀緒	98
告白マゾの散歩から	中瀬 一夫	103
告白被虐の一夜	中沢 一郎	106
画筆通信「私の風俗画」	遠藤 春一	113
或るフェチストの素描（汽車の中にて）	早野 勇作	114
「話の肩籠」補遺（本誌を組上にのせた）	辻村 隆	116
愛好者の記録	とよま・かつひ	118
通信「浣腸」の記事に寄せて	岡崎 春江	120
現代マゾヒズム芸術時評	原 忠正	122
夢三夜 第二夜（吊るし女）	牧 高志	125
MSスリラー「ベビードールの恐怖」	沢木 雪二	131
考察「腹を切る事」	折伏 下男	140
写真のアイデアについての雑感	大熊 寿夫	142
懸賞募集原稿入選作品		
創作「女はそれでも我慢が出来る」	鳴滝 三郎	146
本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品		
十字架の囃（乳房に火をつけるな・第八回）	藤木 仙治	158
沼 正三だより	沼 正三	166
読者通信		167

地下の調室

「いい加減に白状したらどうだ。いつまでも強情をはっていると、その綺麗な身体が台なしになってしまう責め手だって、考えてあるんだからナ」





たそがれのプレイ



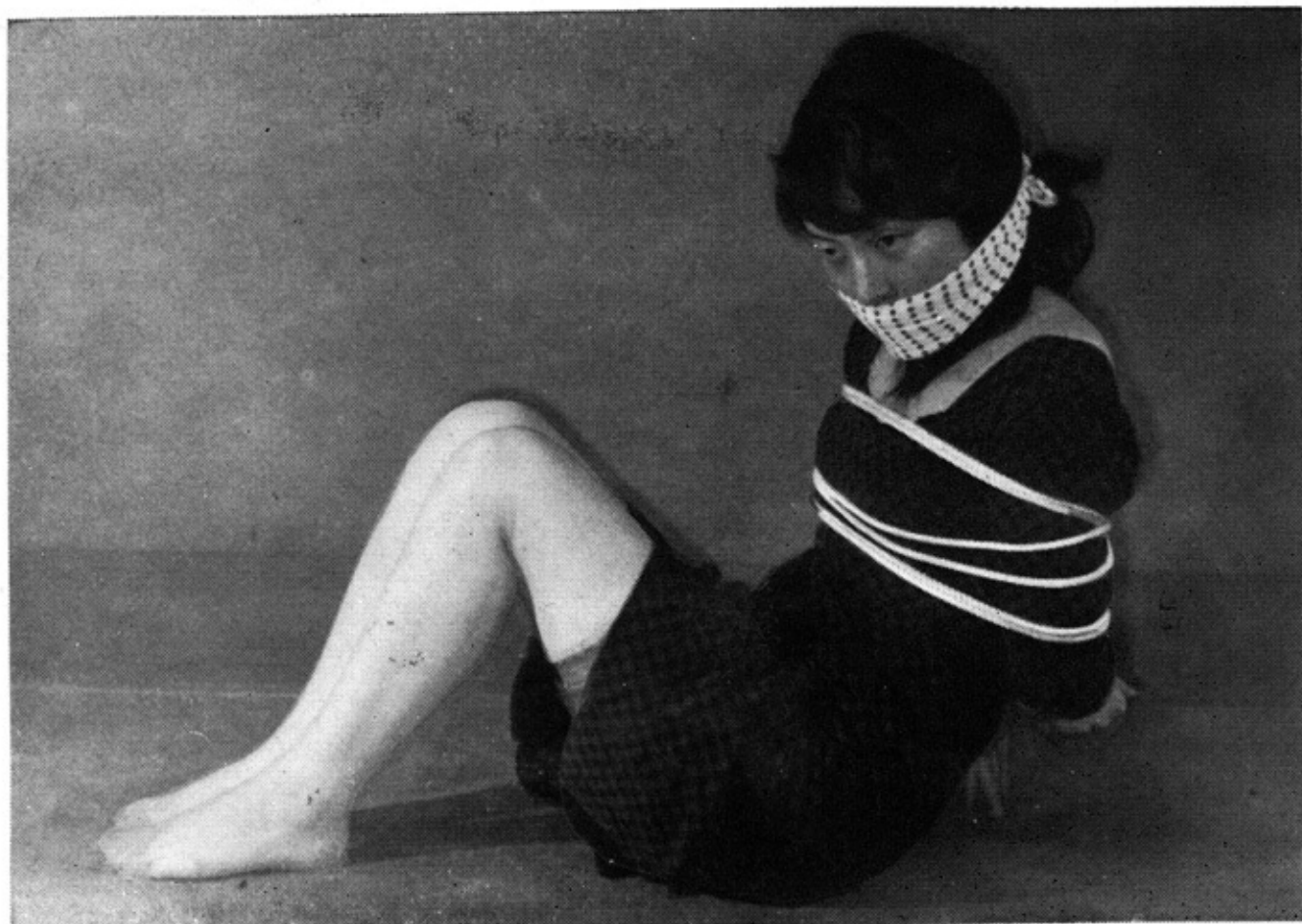
△ モデル 絹川 文代 ▽

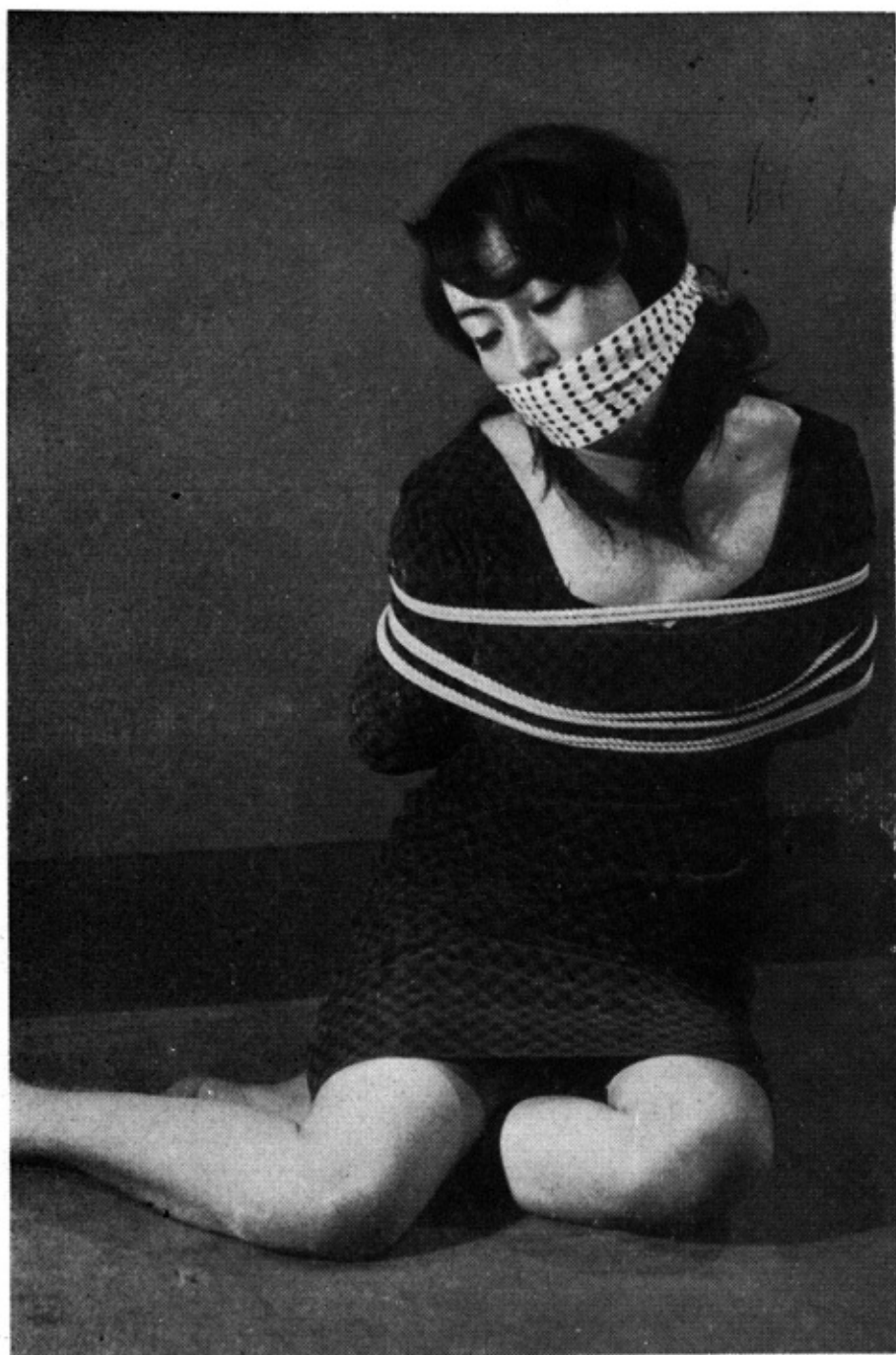




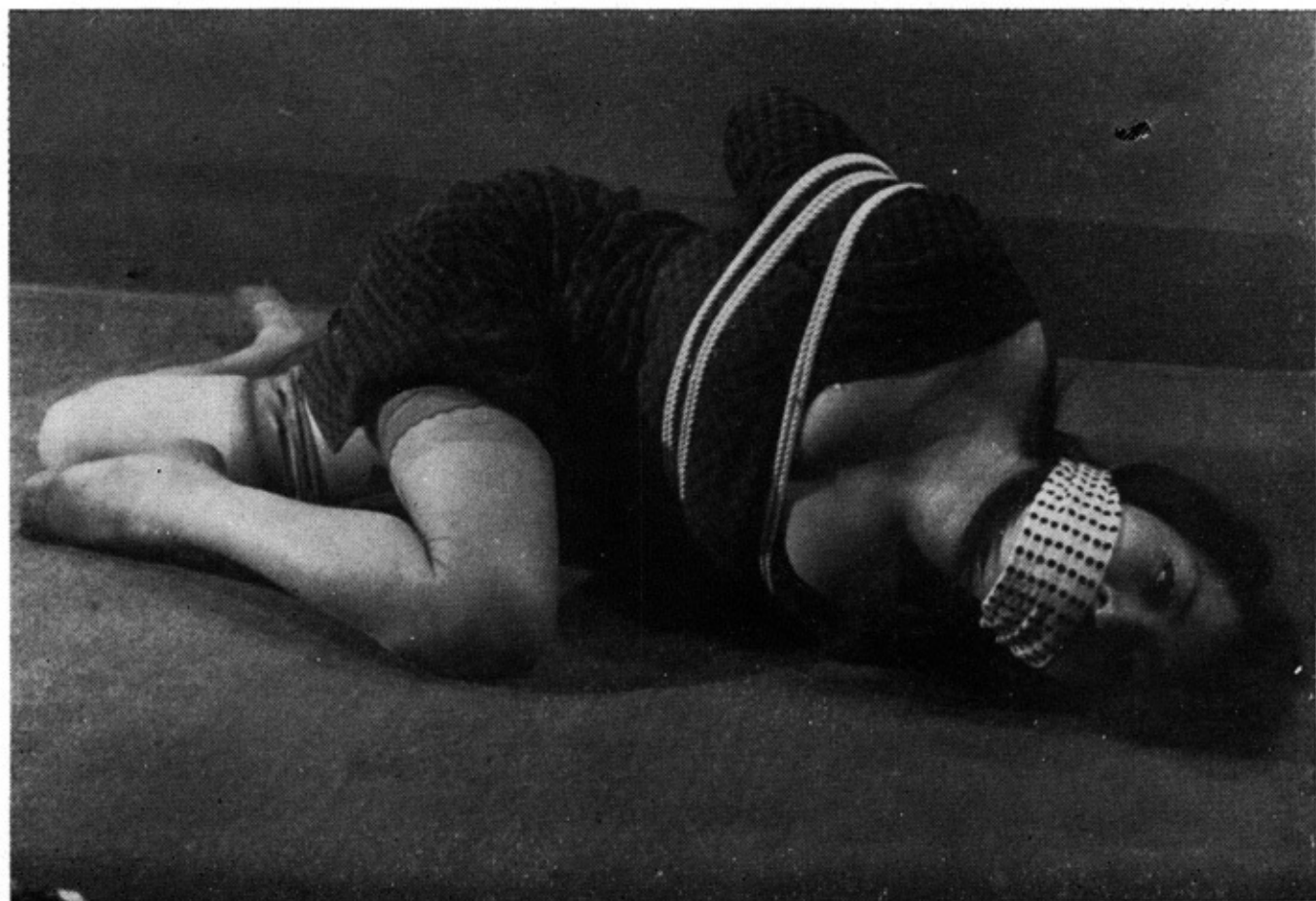
緑のドレス

△モデル 絹川文代▽





白い紐と



落花一輪

＜受難の洋装の花嫁＞



広大な庭園の木下闇に白く散った大輪の花一輪。

今まさに盛大な結婚式に臨もうとする盛装の花嫁が何故、このようなところに転されているのであろうか。（ストーリーは読者諸氏がお考え下さい。）

（滝 れ い 子・画）

少女王国誕生

人間の中で最も道徳的情操のすぐれているのは少女である。一天才少女の出現により、ここに輝しい道徳の勝利は、少女王国の建設に成功した。先ずキャバレー、待合が廃止され、酒類の製造が禁止された。今、元愚連隊の一人が少女王国国軍の手によって逮捕された。「おいアンちゃん、よくも今迄善良な女民を苛めたナ。この鼻柱をへし折って、みせしめにしてやる」彼は裁判の結果、重労働三十年位に処せられ、一生少女王国の奴隸として過すことになるだろう。

(南村俊平・画)



船室の珍客

南支那海の荒浪をけたてて謎の貨物船は密航する。その薄暗い船室には、太いロープをギリギリと巻きつけられた女客が、うらめしげな眼でじっと一隅をにらめつけるのであった。



新しい文献研究誌

奇	譚	ク	ラ	ブ
---	---	---	---	---

1959年 11月 号

(第十三卷 第十四号 通刊第百三十号)





『話の屑籠』

辻村隆

早いもので、私が本誌に初めて寄稿してから十二年の歳月が流れた。大判のカストリ雑誌時代を知る読者も、今は数少ないのではなからうか。初めて寄稿した頃生れた次女が、今は小学校の五年生になっている。時代の流れと読者の嗜好の変化が、本誌をかく脱皮せしめて、通俗的な群小雑誌から、今は誌界でも稀有の特殊の風俗誌に変貌せしめている。私自身も書いたものも、その当時の時代に阿諛迎合したエロ味がかったものから、いつしか嗜虐的なものへと、本誌の進展と共に転換していった。過去を顧みると、読者通信欄にも、随分私に対するあれこれの御高説や御忠言をうけたまわったものである。直接お目にかゝった人。数年以前よりずっと文通を続けている人。嗜虐の実演を私の為にわざわざ行なってくれた人等……。私は個人の名誉を尊重してこれらを今まで筆

にしなかったが、時の経過は、これらの人々を過去の人とした今、思い出のよすがとして、何れ稿を改めて支障のない限り書き綴って見たいと思っている。

大判時代の誌面を賑わした人々のうちで、夫々に一応大成している人もある。高村暢児氏はサンケイの社会部次長として活躍の傍ら又テレビ作家として或は幾多の単行本の著者として華々しい活躍をされているし、喜多玲子こと須磨利之氏は『裏窓』の編集人としておさまっておられる。夏目千代氏なども大衆雑誌のあちこちに、盛んに通俗小説で張切っておられる。

本誌の性格転換?のしからしむるところ、やむなくこれらの人々は離れていったものではあるが、辻村隆自身、十二年間、相も変わらず、拙い文で、こつこつと本誌唯一つにしがみ



ついで、途切れ／＼に書き綴り半面は凡々たる一市井人として本誌と共に生きてきた。奇クに関する限り生辞引的な役割でもあるが、本人はそれを甘受して、筆で一家をなすという大それた野心もないのだから、気楽気儘である。

× × × × ×

故に又、有難い事もあって、先日も知人から、東京の粹古堂の緊縛写真だが、参考にと戴いた。御存知、伊藤晴雨氏の舎弟の方で、一時は相当にお苦しい経営の様子であったが、じっくりと立直られたのであろう。

写真はキャビネで二十枚、他人の花は紅いというが、又本誌掲載のものとは違った味わいである。モデルの女の人も相当年配のギス／＼した人であるが、嗜虐を甘受している様に見受けられた。逆吊り、石責め（この石は本ものの石との註釈あれ共、大きな軽石か、セメント造りの様に見受けられる。本物の石抱きは伊豆石を使用するそうである）水責め等やはり晴雨氏御指導のものだけあって、一見に値するものである。私自身の趣味からいえば、大いに興を催おすシロモノである。さりとて、本誌には又別の味わいがあった、一言でいうと、晴雨調は陰惨であり、奇ク調は明朗である。晴雨調の小道具は懐古趣味横溢し、奇ク調は現代的でシンプルである。

晴雨氏が徹底的に日本髪の流れ毛で撮るのに反し、こちらはパーマのカットでとくる。勿論、好き／＼もあろうが、私も懐古派であるので、屢々箕田氏に進言して、その都度、私の言を容れて、嘗っての大塚嬢の算盤木責めや、絹川嬢の囚

衣といったもの、又、村井嬢の腰元折檻と、いろ／＼構成を手伝っては見たが、出来上りはやはり近代調である。謂わばこれが他誌に真似られない奇クカラーであるといえればそれまでだが……。

× × × × ×

折あって、私は粹古堂の写真を箕田氏に、参考迄にお渡しした。

「辻村君がそれ程いうなら、一度やって見ようじゃないか」ということになり、八月某日、モデルは大塚嬢でY温泉の広大な庭園を借切って構成にとりかゝった。

前日迄に種々のアイデアを考えておいたが、いざ実施となると、縛ったり、解いたりで仲々予定通りには涉どらない。松の木から荒縄で吊したり、梯子にはりつけに縛りつけたりその梯子を又逆さに立て、逆さはりつけにしたり小柄の大塚嬢はその都度、悲鳴をあげて相当に振舞った。長い黒髪が、ために乱れて、相当凄惨な感じは出たと思っている。

Y温泉のあの広い庭園を後ろ手錠でこずき乍ら、延々と歩を運ばせたのも、この道の者ならではの知る事の出来ない醍醐味であろう。

頃は八月初旬の盛夏である。責めには強い大塚嬢も藪蚊の襲撃にはたえかねて、足許に線香をくすべたり、団扇で蚊を追ったりの、構成者も仲々の苦勞——。

最後は泥沼に倒れ、泥にまみれた荒縄縛りに、苔蒸した石を抱かせての名演技、下手に撮ると見ていられない醜いものになりそうである。顔一面から、おへそまで泥まみれになっ



て、漸やくこの日は終わった。二、三カ月先に、何れこの時のシーンの写真が掲載されると思うが、期待して下さい。

× × × × ×

その大塚嬢も、奇クと契約以来すっかりモデルづいて、本業の玩具問屋の女店員を止めて、遂々本職のモデルに転向した。

ミナト神戸のRスタジオでピカーというから、モデルの人材も可成り私底の模様である。

一寸垢抜けのしたモデルがくると、すぐに引抜かれるらしい。写場へヌードを撮しにくる連中だから、金と暇と根があるのか、すぐ口説いてしまうそうさ。怪しげなのはコールガール化する由。といって、私もその口説いた方の一人であるが。近頃大阪に簇生したヌード写場で、これはと思った娘がいたのでズバリ口説いたら早速のって来た。ファッションモデルだから、体もいゝし、顔立ちも充分である。斯々如々数葉のシンプルな縛り写真を見せると、パンティをはいてならOKだという。その足で箕田氏に連絡して、翌々日、御意の変わらぬうちに実行に移った。相手がマゾなら話し易いが、最初は誰でも危惧と不安を感じるらしい。時間通りやって来たのはいゝが、中学二年の妹を同行して来たのには閉口した。……が、えゝい儘よと、初手からボツ／＼初める。体軀は柔軟だし、肌は綺麗だし、いつしか妹の存在など忘れてあれこれと撮りまくった。私が流石に縛り疲れて、ホッと一息ついていると、妹が憶する色もなく近寄って来て、お手伝いしようと仰有る。箕田氏も苦笑して、じゃ手伝って

もらおうや。ということになり、姉を縛るのに、私と二人が／＼で縛り始める。姉も一向ひるんだ様子もない。かくして二時間——。奇妙な立会人の許に終わったが、最後に沢山の縄や電球まで片付けて、少女は姉の側で、ヘイチャラの顔をしていたのには、悪童二人啞然、呆然、今更乍ら、ローティンの生態をまざまざ見せつけられた気がした。いずれ彼女の麗姿が本誌に錦上花を添える日も近い事と思う。

× × × × ×

それにしてもローティンの近頃の傍若無人振りは目に余るものがある。解放的な海浜では尚更、激しい。厳しい暑さ続きに家族連れで、琵琶湖畔マイアミに涼を楽しんだ夜の出来事——。

私は寝つかれぬ儘、一人起き出してパンガローを出た。月が綺麗で、もう午前〇時に近いというのに、あちこちでラジオのナイトミュージックや、笑い声が渦巻いていた。

ぶらぶらと木の間隠れのテント群に差しかけると、急にガヤガヤと若い少女達の怒声が聞える。何事かと近寄って見れば、テントの隣り同志が、喧ましい、静かにしろの応答から始まった喧嘩らしい。傍観者の立場で木蔭に佇ずんで眺めていると、一方は高校になるかならぬかのローティンの少女三人に高校生二人というメンバー、今一方は、口汚なさからも紡績工場辺りの十七、八の少女四人。

そのうち紡績がわから石を投げつけたのがきっ／＼で、どちらにもパンティにブラジャーだけのセミ・ストリップの肉体が、華やかな悲鳴と嬌声をあげて、掴み合った。高校生二人



はむしろ止め役だ。引摺む、搔く、蹴る、押さえつける。高
校側の少女達も仲々負けていない。騒ぎをきいて、弥次馬が
あちこちより駆けつけるが、誰といって止めに入らない。こ
の光景が若者にとって愉快でたまらないのだろう。ヒューと
口笛を吹いてけしかけている。

弥次馬の誰かがランタンを樹枝にかけて、この場を明るく
する。こうなると、これはもう新東宝好みのシーンだ。警備
員が駆けつけて来て騒ぎは納まったが、隣り合わせのテント
で朝迄仲良くいったかどうか――。そこまでの根気が私には
なかった。

朝がくる。白ナンバーや、オートバイ族が、続々騒音を残
して走り去る。若々しい二人が、恥らいもなく、ショートパ
ンツの儘で、オートバイに乗る。少年は荷台の縄を解いて、
自分と、後に乗った少女の体をぴったり寄せて、腹にぐるぐ
る縄を巻きつける。スピードに振り落されない配慮であろう
か。少女は強く腕を廻して少年にしがみつく。マフラーを外
し、けたたましい爆音を跡に、白ナンバーを抜いて、見る見
る小さくなって行く。スリル、セックス、スピードの3Sが
彼等少年少女にとって、いうにえない刺激と興奮を与える
のであろうか。若いつもりでも時代の違う私は、羨やましく
も亦、ハラハラと彼等を見送って突っ立っていた。

× × × × ×
本誌八月号の読者通信欄で懇切なお便りを戴いた、岩手県
の新山生さんへ御返事差上げます。箕田氏に聞きましたが、
貴君の住所が曖昧ですので直接御返事出す筈でしたが、やむ

なく誌上を借りた次第で、それだけに制約もあって、精しく
はお伝え出来ぬのが残念です。

一九五八年一月号『夜光る』の主人公、仁川有三氏、通称
「おとう」は本誌の愛読者で、箕田氏も充分御面識のある人
です。御仕事の樹脂化学が、セキスイ等の大企業に押され、
氏の現在はいさか不況です。この人は典型的マゾヒストで、小
説『夜光る』ではサドのプレイをする男性に描かれています
が、氏の秘書の右近ちか子（仮名）とは全然対象が反対で、
職業を離れると、ちか子は女王、「おとう」は奴隷に変身す
るのです。以前「ヴィナスの重石」という小説があった様に
思いますが、あれが正しく「おとう」の赤裸々な姿を描いた
ものです。ちか子は「おとう」を馬化し、肥満した体に鞭を
当て床を這いずり廻らせているのです。不況とはいえ、「お
とう」は、ちか子をどうしても離れえず、軽妾というか、む
しろ男妾的存在で一緒に、今も暮しています。右近ちか子は
唯今、大阪市内のアルサロ「P」にいます。

尚『夜光る』の冒頭の津熊氏の民族博物館は実在で、来阪
されれば何時でも御案内の労をとります。唯この際一言
申上げたいのは、よくある事です。貴君自身、護身的に名を
伏せて、当方のみにありの儘を明かせと仰有っても、私自身
貴君のことを詳しく知らぬ限り、裸と裸の御交際は出来ぬの
は当然で、多少虫が良すぎると思えます。こうした事は過去
再三再四ありましたが、突きつめて行くと、とどのつまり保
身的に逃げを打つ方が多く、今迄に大分苦しい思いをして来
ました。



尚、一九五七年十二月号の『真実は誰も知らない』は、私の斗病時代の創作です。浜田照子は私の附添看護婦をイメージに描いて、丁度その頃、退屈の間に間に、八ミリカメラを買ったので、それにヒントを得て書いたフィクションのものです。辻村隆の住所は編集部へお訊ねになれば何時でも分ります。

× × × × ×

十二年間、間けつ的に書いてくると、自分でも何を書いたか忘れてしまう。その中で一番記憶に残るのは『猥らな虫』で、これは私の体験でもあるからだ。あの六頭身の浣腸好きなトミが、真実、私の中年に至っての恋人であると、今更白状しても、読者諸賢は、すっかり記憶から外されているかも知れない。

『闇雲博士の回想』が松井籟子氏への挑戦文だったとは、恐らく松井さんだけが御存知であったかも知れない。

『ガーベラの甘き香り』の女性は真実、近鉄沿線、富雄の靈山寺、地獄洞のレリーフ拝見の際、擦れ違った女性であるが小説はえてしてこんな所から湧いてくる。あの物語中、真実の犯行から、女性とバラ庭園で語るに落ちて、それからフィクションに入っている。

『フアンドロナの女王』は、山陰三朝温泉の旅館「後楽」で深夜、ピンクのカーテンに遮えられた浴場で、戸外の沈々と降りしきる雪を眺め、浴槽に思いを致してヒントを得たものである。編集部の都合で、ズタズタに切られ、羊頭狗肉のものと変身してしまって、残念に思っている。

『拷問に笑う女』は大阪OSミュージックのアクロバットダンサーよりヒントを得、当時の支配人、S氏とは知友の仲間ら、色々懇談して聞き出したものだ。S氏はその後、東宝芸能課長を経て、現在、ブラジル、サンパウロの異境で活躍しておられる。御健斗を祈るや切である。

× × × × ×

この稿を終ろうとした時、知人のSが訪れた。女房をモデルにとった写真だが、責具が珍らしいだろうと、キャビネ判十二枚を示してくれた。夫人はSの好みの灰色の囚衣を着せられてそれに、S自慢の責具が嵌っている。

小犬の首輪程度の皮輪を二つ、ニッケルの細鎖でつなぎ、首輪を両手に嵌めて、尾錠をしめ、小さい錠をとりつけてある。皮手錠といったところか。後手錠、前手錠、両手吊り手錠の三ポーズ、ついで同様のものを手足に嵌めたポーズが前背二枚。尚、皮手錠には二カ所程円環を通してあって、之で手足と一緒に繋いだり、縄を結んで足したりするのだという。奇クにのせて見ないかと、誘いをかけると、「いやあ、女房以外のならネー」と流石にその道の猛者も照れていた。あとの七枚は顔面までぐるぐる巻きにした、サジストの本性を発揮したシロモノで、公表出来ないものだ。私の眼前で平気で細君を縛る程親しい仲のSだから、これもついでと見せてくれたのだろう。

Sとのことについては、別に改めて、書いて見たいと思う。敢然と首輪を買って来て、責具をつくるSの熱意に圧される。

(この項終り)

足 フェ チ と 責

山川 正 人

△宝塚二三夫氏へ▽

九月号に投稿した小生の通信に対して十月号の読者通信にて懇切なる回答を宝塚氏から頂き厚く感謝いたします。小生、現在、某化学工業会社の取締役兼製造部長の任にあり繁忙のため十分な文章は書く暇はないのですが本朝配達された十月号を拝見し、とりあえず速達を出す次第です。小生が女性の足に関心を持ち出したのは小学校六年の末期です。といゝますのは当時、小生が男子組の級長で朝礼のとき組の先頭で号令をかけていたわけですが女子組の級長で色の白い大柄な女の子がやはり毎朝、小生の横で号令をかけていて、子供心ながら心にくからず思っていました。しかし当時のことゝて名前も知らず、まして言葉をかわすことなど余りなかったのですが卒業式の前の日、男女組の級長が各々組を代表して講堂内の奉安室を掃除することになったときです。小生は拭掃除するときの彼女のむっちり肥った太股、脛、足、足の指などを間近かに見ることが出来て、初めて女性の足部に対して強い関心を持っていることを知ったのです。中学生時代は文学に志したいという気持が強く、高等学校も文科を選びたかつ

たのですが、米沢高工の応用化学科出身の父の選定で理科にきまり、大学も応用化学科を選び卒業後は父の会社に入って現在に至っています。小生の女性足部の責に対する憧憬は美貌の深窓の令嬢の（要すれば平常は足袋或はその他の方法で足部を隠蔽し、人前に素足を出すことに強い羞恥を抱くという設定）、色は白く肉づきのよい整った美しい足を無理矢理にさらけ出すすということに激しい興味を持っていきます。従って盛装の花嫁がお茶をこぼして足袋をぬぎ着物の裾をからげて白い素足をまる出しにしたというような場面は最も好むところのものです。従って縄は必ずしもいりませんが、強制的に素足を鑑賞させるという場面に緊縛方法もよいと思います。

久米仙人は川で洗濯をする女の脛を見て神通力を失い墜落したとのことですが、小生の調べたところでは江戸時代の粹人の中にも、こういう趣味の者も少なくなく、一流芸者に素足を出させてコンクールをやり、一番美しい者に大枚の懸賞金を与えたとか、又、寒中でも素足でいるのが粹だと芸者などは下駄に抽出をつけて、その中に濡雑巾をしのばせてそ

れで拭いて汚れた足を人に見せなかったという事です。小生は年令的にも貴下より若く車は特別の場合以外自分で運転し、京都の自宅から会社まで往復しています。洛北に小生行きつけの趣味に徹した面白い料亭を知っていますので一度御案内いたしましょう。現在化学製品の競争が激甚のため、プライベートの時間を見つけ出すのに苦しんでいます。

女性の美しい足は芸術品として鑑賞するもの。という主義からいえば、我田引水ながらまことに高尚な趣味ということが出来ます。小生の今までの経験からいえば、概して顔の美しい婦人は他の身体各部も均整がとれていて鑑賞にたえるようです。然し、中には全く素晴らしい脛の持主で惚々するようなのが、顔を見て案外なものなきにしもあらず。やはり容貌も十人並以上でないと艶消しになりかねません。顔はピカピカに磨きたてゝいても足の方は一向に留守というのは、今の若い人に一番多い欠点です。これは小生らフット・フェチ・マニアにとって一番悲しむべき現象です。それと足部露出に対する羞恥心の欠除ということもイタダけません。異性の前に自分の足をさらけ出すことに強い羞恥心を抱く女性こそ絶対的な魅力を与えてくれるものなのです。デスクでの走り書きで意をつくしませんでした。いすれ又詳しくお便りできると思います。

仰向けになった川島巡査の顔が、何とも恐ろしい形相をしていたからである。瞳孔の散大した眼球が、いまにも飛びだしそうにカッと見開かれた両眼は天井の一点を睨み、固く喰いしばられた唇の端からは血が一筋、糸を引いている。

（死んでいる！）と感じたのは直感で、栗田はそのまま表へ駆けだした。

事件の起こったのが駐在所では、どこへ報せたものかと、咄嗟には判断がつかかねて、栗田は往來をウロウロしていたが、消防団長の海野寛次が、最近、買い込んだ自慢のオートバイで走って来るのを見つけると、大声で叫びながら手を無茶苦茶に振った。

「川島巡査が死んでいる」と聞かされても、海野には「まさか」と打消す気持のほうが強く、栗田を急きたてるようにして駐在所の表戸を開けると、そこにも鍵はかかっていず簡単に開いた。

部屋へ一歩踏み込むと、海野ももはや栗田の言葉を認めないわけにはいかなかった。

海野は、川島巡査の頸に巻きついていて手拭を見ると、

「和市さ。旦那の身に触わっちゃなんねえぞ。それから、その辺のもんにも手を触れるな」

と呶鳴るように云って、事務所の電話に飛びついた。

急報によって本署からは、係官一行を乗せたジープが到着した。市中のように忽ち弥次馬の集まるようなことはなく、農具を手にした人々が畑のあちこちから、不安な面持ちで眺めている。

殺しの現場には殆んど不感症になっている刑事達も、それが同僚の死体となると、また特別の感慨があった。殊に、はじめの経験である風間刑事は、名状し難い憂鬱に捉われこの現場だけは、絶対に一般部落民の眼に触れさせてはならないと思った。

川島巡査は仰向けに大の字に近い姿勢で倒れ、上半身には制服の上衣がかぶせてあったが、下のほうは毛深い脚がむきだしになっていた。上衣をのけると、巡査は六尺禪のよう、なものを着用している。ようなものというの、は、それがいかにも不細工な締めかたで、単に白い布を巻きつけたとしか見えなかったからである。

警察医の検視がはじまると、高梨部長刑事は禪にしてあった長い布を取りあげて、

「風間君、こいつは六尺禪にしちや長過ぎやせんかね？」

と、「禪刑事」と異名のある風間刑事の顔を見た。

用の布じゃアないようすナ」

「フウン。やっぱりな。『禪刑事』の君が云うだから確かだろう。とすると、どういふことになる？」

「一寸、待って下さい。川島巡査は、禪を常用してたでしようか？私の知る範囲ではパンツだけだったと思うんですが、これはよく調べてみる必要があるんじゃないでしょうか」

その禪代用の布を、それ程重大に考えていたわけでもない高梨部長は余り気のない顔で頷いたが、一応証拠物件として押収されることにはなった。

川島巡査の死体には、肩や腿など数カ所に挫傷が認められ、念の為にメスを入れてみると、新しい傷痕であることが確認された。

風間刑事は検視に立合ったのも一度や二度ではなかったが、体格のいい川島巡査の屍を二、三人がかりでひっくり返し、その上に医師の綿密な検屍の仕方を見ると、思わず眼を逸らし（変死だけはしたくないナ）と胸の中で呟くと同時に、こんな大それたことをした犯人に、いいしれぬ激怒を覚えるのだった。

捜査本部は近くの町の警部補派出所に設けられ、時を移さず活動が開始された。

川島巡査の死因は扼殺によるもので、頸部に巻きつけた手拭は、死後犯人が蘇生を惧れて絞めたおしたものと推される。

警察官が殺害された場合、まず誰でもが考

えるのは復讐ということ、事実そんな小説的な事例が馬鹿にならない数字を示しているのだ。物盗りの仕業ということは、場所が駐在所であるし、死亡時刻の午後八時前後ということから推して、いくら淋しい田舎とはいっても考えられなかった。それで捜査の方針は怨恨一本でいくことになったが、川島巡査の人柄からして個人的に恨みを受けることはまずないとみて、前科者を一通り洗うという意見が一番妥当のように思われた。

そして一方、聞込み捜査のほうでも、事件でも、事件のあった当夜、駐在所から二キロメートル離れたバス停の前の酒屋でビールをラッパ飲みした男があったという有力な聞込みを得、幸いにもそのビール壺が残っていて、かなり鮮明な指紋が検出された。もうそうなれば時間の問題で、前科者のリストの指紋と照合され前科五犯、熊谷三男が浮き上った。捜査本部は解散され、本署の取調室では連日、担当刑事によって熊谷の追及が行われた。被害者が同僚であるという事件だけに、多少人間的な感情も手伝ってか、加えてスピード検挙の功名心もあって刑事達の取調べは、どうしても苛酷になり、ときには平手の一つも飛んだが、熊谷は頑強に否認し続けた。しかし、一週間目に熊谷も、とうとう当夜の行動を自供した。それによると、熊谷は拳銃を盗る目的でM町の駐在所に狙いをつけ、

道を訊く振りをして、八時少し前頃に立ち寄った。そのとき川島巡査は制服で何か調べものをしていたが、道を訊ねただけでは隙をみつけることができなかった。熊谷は便所を借りたといふ、巡査が「奥にあるから」と教えて再び机に向った時、背後から、いきなり頸を扼めグッタリとなったところを、外から見えないように部屋へ引きずっていき、拳銃をケースから抜き取り、とすると、表へ入の入ってくる気配がしたので、慌てて裏口から逃げだし、結局、目的は果せなかった。夢中で走って逃げたので、ひどく咽喉が喝きフツ見ると酒屋があったのでビールをラッパ飲みにした。それまで手袋をしていたのが、ツイうっかりはずしてしまい、指紋を残す結果になった――。

熊谷が口を割りだしたとき、刑事達の面に隠しきれない勝利の喜びが輝いたが、それがまた曇りだしたのは、熊谷が当夜の行動を自供しながら、川島巡査殺害の事実については、あくまでも未遂に終わったことを主張して譲らないからだ。――

「そりやアね。面を見られてンだから殺るつもりではいましたよ。だが、部屋へ引きずり上げたときア、まだ死んじやいなかったア確かですよ。仕事がすんでからもう一度、扼めなおそうと思ってたんですからね。あんとき入って来た奴が助けようとすりやア、充分

まにあつた筈ですよ。それに、死体は裸だったっていうんでしよう。何ンで、あつしが巡査を裸にする必要があるんです？ それを考えたって、あつし以外の人物の存在は明らかでしようが。こんなことなら、あんどき、そいつの顔を見ときやアよかつたんだ――」

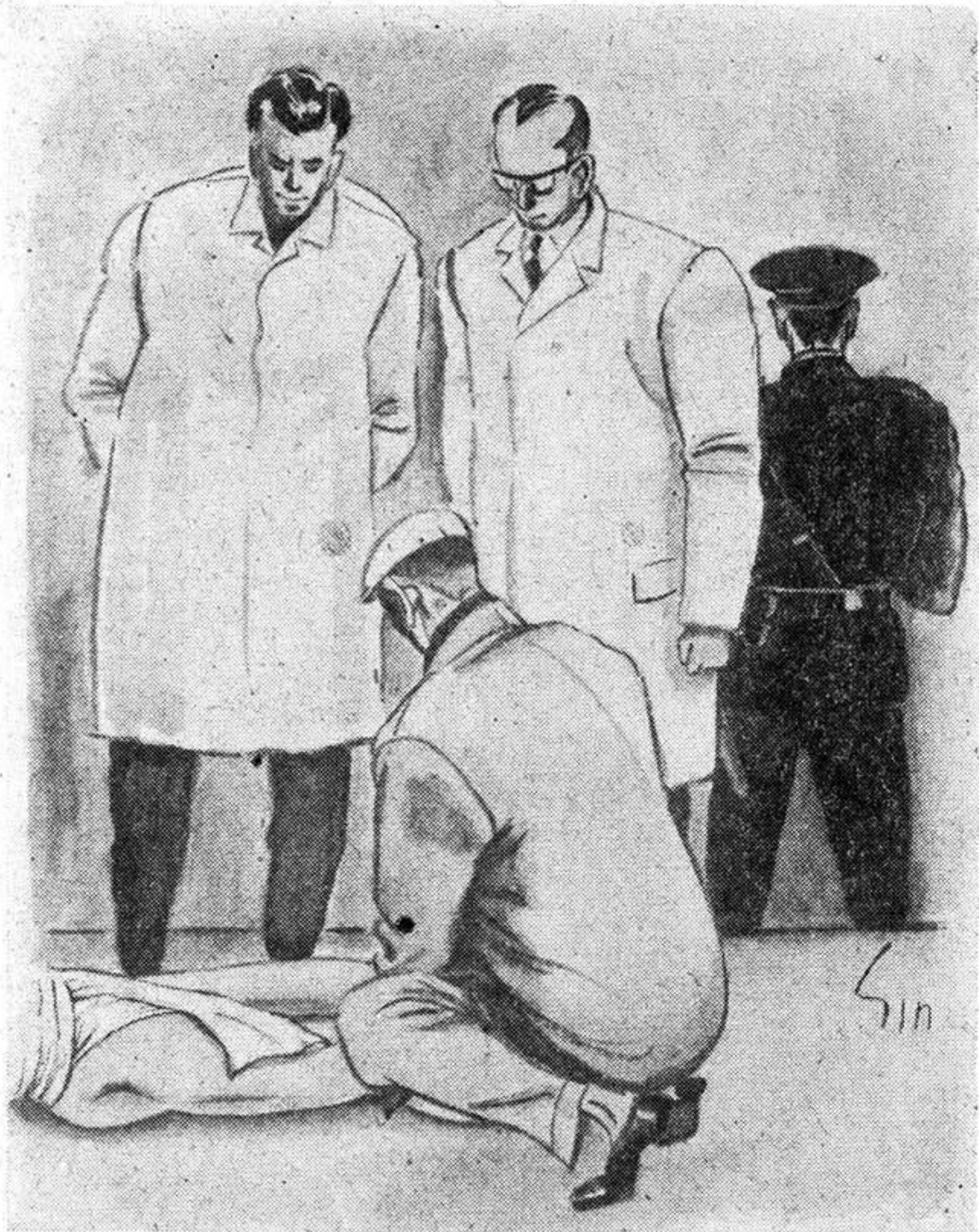
熊谷の自供は、一応スジが通つてはいるものの、作意的なフシもあり、犯行の動機も明白で殺意もあったことから、係官の意中は、どこまでも熊谷を黒として押していくという線、追及は前にも増して酷くなった。

(二)

風間刑事は、押収されたまま、いまでは誰もが忘れてしまったようになってる晒の布を、人のいない当直室で何遍も締めしてみた。しかし、どんな締め方をしてみても襷にはいかにも長過ぎる。鑑識の結果では、常識的に云えば、川島巡査の下着であることを実証するような検査結果も現れたのだが、風間刑事にはどうしても納得がいかなかった。

風間刑事が、例の布について単独で捜査してみたいから許してほしいと申しでると、高梨部長は一寸考えてから

「よからう。さすがは『禪刑事』だけあって禪に対する執念はオソロシイ程だナ。イヤ、これは冗談だが——実は俺も、熊谷をこのまま押していくことに無理を感じだしている。何か新しい線が出てくれることを祈るよ」



と云って、部下に信頼を示すときの癖で、風間の肩を軽く叩いた。
風間刑事は、川島巡査の未亡人、智子の奉職する私立の女子高校へ電話をして所在を確かめると、新聞紙包を大事そうに抱えて学校

を訪ねた。

一通りの悔みをのべたあと、風間は相手の緊張をはぐすために煙草に火を点け、

「ご推察とは思いますが、今日は仕事でまいりました。必ずしも愉快でない質問もしなければなりません、お赦してください」

「承知しております。私としましても、一日も速く犯人をあげて戴きたく思いますし、できる限りの協力は惜しまない積りです」

智子は、殆んど化粧のあとの見えない蒼白な貌に、感情を表すまいと努めながら、意識した明確さでものを云っていた。

「ではお訊ねしますが、川島さんは、下着は——つまり、下穿きなんです、どんな種類のものを用いておられましたか？」

「パンツでした。地質はキヤラコで、私が全部仕立てたものです」

「たまに禪をされるというようなことはなかったでしようか？」

「いいえ、絶対に。パンツ以外は使用したことがございません」

「そうですか。私も多分、そうだろうと推っていました。実をいいますと、川島さんの死体はパンツを穿いておらず、かわりにこの布を禪のように締めていたんです」

事件は智子が研究会へ出張で上京している留守中に起った。だから、川島巡査が殺されていたことは知っていても、禪をしていたこ

とまで聞いていなかったに違いない。彼女は信じられないというふうに眉をよせ、気味悪そうに眼の前に出された布を眺めた。

「しかし、これは六尺襷にしては大分、長過ぎます。それで、襷用としてではなく、別な用途、もしくは、特に用途はなく単なる布として、お宅にあったものかどうか、それをお伺いしたいんですが——？」

「全然、見覚えはありませんでした」

智子が言下に否定すると、風間刑事は、予期していた答えを聞いたように頷き、手早くを包みながら

「どうもありがとうございます。おかげでたいへん参考になりました。ついでにもう一つお訊きしますが、川島さんの親しくしていられた人の中で、六尺襷を常用していた男はいませんでしたでしょうか？」

「さア……川島のところへよく遊びにみえた方は二、三ございました、そこまでは」

無理な質問をするなというように、智子の眼が一瞬鋭くなったのを見ていると、風間はやや周章で、

「イヤ、結構です。では参考までに、そのよく遊びに来ていたという人達の名前を聞かせていただけませんか？」

「よく来ていたといっても、友人といえる程親しい方達ではありませんが、青年会の会長をしている小学校教員の小森仁さん。それ

に、やはり青年会幹部の石山昭一さん。この方は、確か農業高校を出て家で農業をしていたと思います。小森さんと石山さんは、たいてい二人一緒にみえていました」

「その他には——？」

「消防団長の海野さんの甥で、丹羽幸彦という人も、ときどきみえていました。川島とは大分、気が合っていたようで、夜遅くまで話し込んでいくこともありましたが、川島のほうでも、警邏のおりなどよく立寄っていたようでした」

「その人は、ずっと海野さんのところにいるんですか？」

「いえ、何ですか、病後の静養とかで、先月の末頃から海野さんのお宅へ逗留していられました」

「じやア、川島さんとの交際といっても、ごく最近なんです」

「はア、一カ月ぐらいのものでしょうか」

風間刑事は、三人の氏名を手帳に書き記すと、丹羽幸彦だけを○印でチェックした。それは川島巡査の交友関係を調査した際に、どうしたわけか丹羽の名はもれていたからで、一応事件当夜のアリバイを調べてみる価値がありそうに思えたからである。

風間は智子に礼をのべて学校を辞すと、その足でM町の巡査駐在所にまわった。バスを下りて駐在所の五十メートル程手前まで来た

とき、痩せた長髪の三十前後の男といき違ったが、どうもその男は駐在所から出て来たように思えて気にかかった。

川島巡査の後任者として来た沢井という独身の若い巡査は椅子にもたれてボンヤリしていたが、風間刑事の姿を見ると急いで立ちあがった。

「沢井君。いまそこで髪の長い男に逢ったが、ここへ来てたんじやないかね？」

「え、ええ。そうです——」

「何て男だ？」

「丹羽っていう、消防団長の——」

「判った。やっぱり——で、どんな話をしてたんだ？」

「どんなって、別に、ただの世間話ですが、あの人、川島さんと仲が良かったようですね。とても残念がっていました」

風間が黙って煙草をとりだすと、沢井巡査は自分のマッチをすって差しだしながら、

「あの人が何か——？」

「ウン。川島巡査の交友関係は全部洗ってみる必要があるんだ」

「熊谷が自供を讀ましたんですか」

「彼は、いまだに被疑者にすぎん。犯人と決ったわけじやないよ」

「はア」

「念には念を入れよ。誤認逮捕とあっちゃ警察の名折れだから」

「でも、丹羽さんはいい人ですよ」

沢井巡査は今夜、酒を飲みに来ないかと誘ってくれた丹羽の顔を憶いだしていた。それだから云うのではないが、上品なものと優しそうな眼つきは、確かに人をひきつける魅力があるし、いくら人を疑うのが刑事の習性でも一度、話でもすれば、そんな気持は消えてしまふだろうと思われる。

「誰も容疑者とは云ってないぜ」

「すみません」

「何もあやまることはないが、とにかく君にも頼むことがあるかもしれんから、そのつもりでいてくれよ」

「はい。アア、それから、さっきヘンな男が来ましたよ」

「ヘンな男？」

「管内の者じゃあなさそうです。見たことのない男です」

「フウン。で、何しに来たんだ」

「それが判らんです。イヤに落着きはらって、とりとめのない話をして、それから随分ジロジロと部屋の中を見回していました。三十分ぐらいで出ていったんですがね」

「ホウ、ヘンな奴だナ。誰だろう？」

風間刑事が呟くように云ったとき、ガラリと戸が開いて、

「それは俺だヨ」と云った男がある。

愕いた二人が振り返ると、長身の男がニヤ

ニヤしながら中へ入って来た。

「峰村さん！どうしてここへ……」

風間が思わず大声をあげると、呆氣にとられていたような表情をしていた沢井巡査は、「何だ、お知りあいだったんですか」と云って頭を掻いた。

「フフフ、愕いたかね。イヤ、実をいうと偶

然なんだ。君が仲々あらわれないんで、独りで現場でも見ておこうかとやって来たんだがネ。帰ろうとすると君の姿が見えたんで、一寸隠れてやりすごしたというわけサ」

「人が悪いなア。峰村さんも——。それよか、丁度よかった。近くお訪ねしなけりやアと思ってたんですよ」

「そうかい。じゃア、何ンだったら、この奥の部屋を借りて話を聞こうか」

「そうですね。沢井君。奥を借りるよ」

峰村と風間が部屋に上ると、沢井巡査は柱にかけてあった警棒をとって腰につけ、

「僕は一巡りして来ますから、あとお願いします」

と声をかけて自転車を出した。

「——とにかく、お茶でもいれましょう」

風間は気軽に台所へ立っていったが、
「独身者はしょうがないナ。湯も湧いてない……」とボヤキながら戻って来た。

「いいよ。お茶なんか、どうでも——」

「ええ。いまヒーターへかけてきましたか

ら、すぐ沸きます」

「ここが惨劇の部屋か。警察官が殺されて、しかも、その死体は制服を剥がれていた。実にショッキングな事件だねえ。それを知った晩、俺は妙に気がたって眠れなかったよ」

「私も検視に立ち合ったんですが、実に嫌な

気持ちでした——」
お茶がはいると、風間刑事は事件の概要と捜査の経緯をかなり細部にわたって話した。いちいち頷きながら聞いていた峰村は聞き終るとニコリして、

「君の推理は仲々鋭い。そこまで喰いさがったのはさすがだナ」

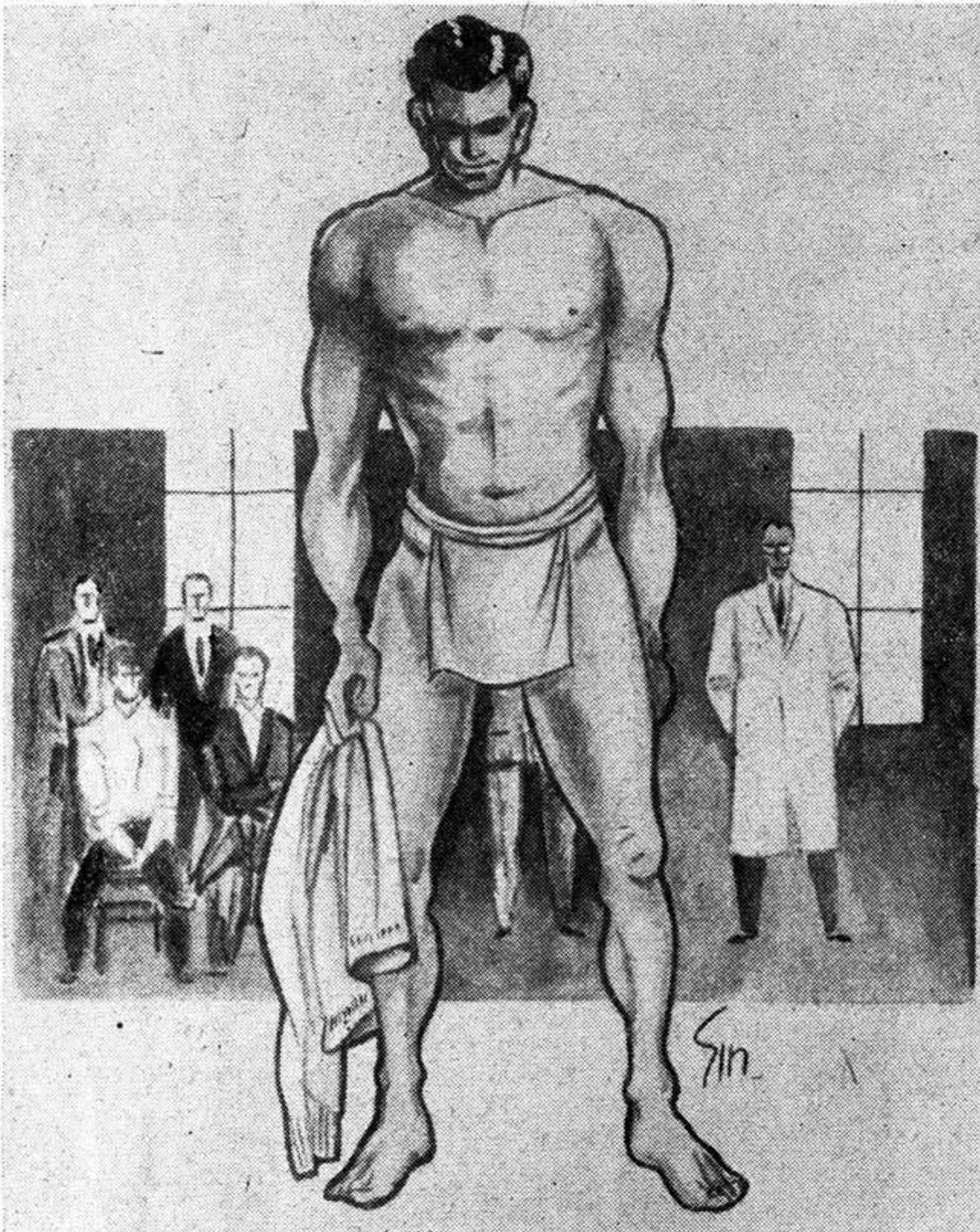
「イヤア、僕のは推理っていうより、第六感みたいなモンです。——被害者が女ならありがちなことかも知れません。男が男をこんな状態にする——それには理由が、しかも必然的な理由がなければなりません。熊谷の場合は拳銃を奪うのが目的で衣服を奪るのが目的ではないんですから、気でも狂わない限り被害者の官服を剥いだりする筈がありません。ただ、熊谷は前科者ですから、多かれ少なかれ警察官に対しては悪感情をもっているでしょう。そこでフト思いついて巡査を辱めようとした——ということも考えられないことはありませんが、では、なぜワザワザ禪をさせたりしたのかと考えると、もっと別な理由が存在しなければなりません」

「うん。そこで君は、異常性格者の犯行を想定したわけだ」

「ええ。熊谷の云う、後から来た男——つまり第二の容疑者ですね。丹羽をそれに見立てるにはまだ何の根拠もありません。しかし捜査してみる価値は充分にあると推します」

「同感だね。俺の空想的推理によると——熊谷が川島巡査を倒したところへ第二の男、Xが偶然やって来た。熊谷は逃げてしまったから他には誰もいない。倒れている巡査を見たとき、Xはムラムラと湧きあがってくる欲求を抑えることができず、前後の考えもなく常軌を逸した行動にでてしまった。そのときのXの心理状態は容易に想像することが出来る。俺が彼の立場だったとしても、欲望にうちかてるかどうか疑問なものナ。——Xは夢中で巡査の衣服を剥ぎとる。禪マニヤの彼は、それだけでは満足しきれず、自分のしていた腹巻をとって、巡査に禪をさせてみる。それでもなお巡査が失神を続けていたら、こんな大きな悲劇は起らずにすんだかもしれない。不幸にも正気に返った巡査の頸を絞めたXは、殆んど殺意を意識するまもなく、違ったに違いない。彼は、己の非行を巡査に知られるのが恐ろしかっただけなのだ——」

「驚きました。まるで見ていたようなことを云うんだから——。しかし、腹巻とは気がつかなかった。なるほど、そうか……」



「それから、君に忠告しとくが、禪マニヤだといって、必ずしも本人自身が禪を常用しているとは限らないぜ。君のように常用者であってもマニヤでないのと同様にな。そうして、そういう奴のほうは他人の禪姿を見たい

欲望が強いらしい」

「そういうもんですか。とにかく、丹羽を任意出頭の形で取調べることにします。しかし、問題は彼が異常性格者であるかどうかですが、精神鑑定によるしかないでしょうナ」

「精神鑑定でも勿論、判るだろうが、もっと簡単に確かな方法があるよ。そのかわり君が一役買わなけりや駄目だぜ」

「僕でできることなんですか？」

「むしろ君でなけりやできないことだネ。それと警察医の協力が必要だ」

「何でもやりますよ。方法を教えて下さい」

「いいとも。しかし、果して上司がそれを取りあげてくれるかな」

「進言してみます。デカ長の高梨さんなら、たいていのことはきいてくれますから」

「じやア話そう。その前にまずお茶を一杯。」

三

丹羽幸彦は、それが癖なのか、ときどき指を櫛のようにして長髪を騒き上げては、雨漏りの染みのある刑事部屋の壁を、何が面白いのか、いかにも興深げに眺めている。

「ところで、丹羽さんは、川島巡査とは大分お親しかったようですね」

風間刑事は、掌の上でマッチの箱を弄びながらも、相手の顔から視線を離さずに訊問を続けた。

「え？……失礼。いま一寸他のことを考えてたもんですから」

（人を喰った奴だ）と思ったが、顔には出さず、風間は微笑して、

「お隠しにならず正直に答えていただきたい

んです。あなたは川島巡査を、単なる友人としてより以上に、深くおつき合をしていられたんじやアありませんか——？」

「それは、どういう意味でしょう。私と川島さんと交際のあったことは事実です。ですが、正直に云うと、私は川島さんを利用していたに過ぎません。私は、ときどきつまらない雑誌に寄稿しているんですが、いま執筆中の作品が駐在巡査を主人公にしているんで、色々と資料がほしくて彼に接近したんです。だから、私としては彼にそれほど友情を感じていたわけではありません。しかし、川島さんは意外なくらい私に好意を示してくれました。推測するに、川島さんの家庭は冷たかったんじやアないでしょうか。それが心ならずも彼を歪んだ気持へ導いていったとも思われます。口にも出さず、行動にも現しませんでした。私にはどうも、そんな感じがしてありませんでした」

バカな！川島君と同性愛者だということのか。とんでもない奴だ。逃げを打とうたってそうはいかんぞ。しかしあの奥さんは美人だが、確かに冷いところがあるな——。まてまて、そんなことはいずれ判ることだ。

「では次に、十二月二日。つまり事件のあった日の午後七時から九時までの間、あなたがどこにいたかお訊きしたいんです」

「アリバイですか、驚きましたナ。私も嫌疑

をかけられているとはネ」

「お訊ねすることに答えてだけいただければいいんです」

「夕食後はズツと部屋にこもって読書をしていました。夕食の終わったのが六時頃でしたから、そのあと十一時に寝るまでの間ということになります」

「その間、あなたの部屋に入った者は？」

「いません。残念ながら私のアリバイを証明してくれる者はいないわけです」

こいつこんなに落着いていやがるが、どうやら「黒」に近くなってきたぞ。沢井巡査の報告で丹羽が晒の腹巻を用いていることも判っている。よし、もう一押しだ。

「丹羽さん。たいへんお気毒ですが、あなたに不利な条件が揃い過ぎました。ご迷惑でも、いま少し積極的に御協力を願いたいんです」

「つまり、拘留というわけですか」

「長い間ではありません」

「やむをえないでしょう。愉快なことじやアないが——」

高梨部長刑事は、風間刑事の突飛な進言に、はじめは大分面喰ったらしいが、

「実は、これは私の思いつきじやアありません。異常心理の研究をしている友人の助言があったことです。警察医の浜崎さんにも相

「談しましたら、それは面白い、やってみよう
と云われました——」

と云われると心が動いてきたらしく、

「浜崎さんがそう云うんなら根拠もあること
だろう。じゃ、とにかくやってみたまえ。何
なら俺が立合ってもいいよ」

ということになった。

高梨部長が丹羽幸彦を連れ、谷口刑事が熊
谷三男を連れて部屋に入ると、そこには既に
浜崎医師と一人の助手が待っていた。

丹羽も熊谷も、どこかに不安そうな表情が
見える。

「心配いりませんよ——」

浜崎医師は、眼鏡の奥で柔和な眼をしばた
きながら、まず丹羽の脈搏を診た。普通よ
り少し速いようである。次に熊谷のを診ると
全く正常だった。

そのとき扉がノックされた。

「誰だ?——」と、高梨部長が咎めるように
云う。

「風間です。浜崎先生に一寸……」

「あとじやいかなのか?」

「エエ——じゃ、あとで来ます」

「かまわんでしよう。入ってもらったら……」

……浜崎が口を添えた。

風間刑事が恐縮した表情で入って来ると、

浜崎医師は、すぐに

「どうしました?まだ痛みますか——?」

「ええ、単なる打撲ならもう痛みが無くなっ
ていい頃だと思ふんですが、どうも——」

「じゃア、診ましようかな」

「でも、いいんですか——?」

「時間はかからないんだから、先に診ましょ
う。裸になってみてください」

風間が部屋に入って来たときに、丹羽は明
らかに関心を示したが、それは、どこかで見
た貌だと、憶いだそうとするふうでもあっ
た。熊谷のほうは、はじめは全く無関心だっ
たが風間刑事が服を脱ぎにかかる、チラチ
ラと横眼で見たりしている。もっとも、さし
て広くもない部屋だったから、関心の多少に
かわらず、そこにいあわせた人々は皆、風
間を注目していたといっている。

風間刑事は、皆に背を向けた位置で手早く
衣服を脱いでいる。アンダーシャツを首から
抜くと、巾広い背中では寒気に鳥肌もたらず、
動作につれて発達した筋肉の動きが現われ
た。ズボン下を下げると、いきなり皆の眼に
映ったのは真白な六尺褌で、それを知ってい
る浜崎医師や高梨・谷口らは別として、あと
の三人は、物珍しそうに眼を瞠った。

固く締めまりピッチリと胴に喰い込ませた褌
は、柔道で鍛えた逞しい体軀を、小気味よく
くびり、その緊縛感を見るからに爽快だっ
た。

褌一本になった風間刑事が浜崎医師のほう

に向きなおると、さすがに無遠慮な視線を送
る者はなくなったが、筋肉質の精悍な体軀に
締めこまれた真白な褌の美事さは、男でも惚
々と思惚れるくらいだった。

浜崎は、風間を後向きに立たせ、脊椎を上
から順に押してみても、

「ここでしたね。こうするとやはり痛みます
か?」

「ええ……」

「打撲からカリエスが誘発される症例もあり
ますがね。あなたの場合は一寸考えられませ
ん。では、上体を前に倒して、ずっと曲げて
いってみてください。ずうと。そう——痛み
ますか?」

「いいえ、別に——」

「心配はないと思いますがね。あとでもう少
し詳しく診ましよう。ひとまず服を着ていて
ください」

その言葉を合図のように、助手の青年が丹
羽と熊谷に、上衣を脱るように命じた。シャ
ツ一枚にされて、寒さに顫えながら不満そう
にしている二人に近寄った浜崎医師は、丹羽
の脈搏をとろうとして、急にやめると、熊谷
の手首に指を当てた。脈搏は非常に速い。丹
羽のを診ると通常で、さっきよりは余程落着
いている。

風間刑事は、服を着るように云われながら
まだ褌一本のままだった。

浜崎医師の眼がキラリ光って、風間の方をチラチラとみた。

奇妙な鑑定の結果は、数十分後の別室で浜崎医師の口から明らかにされた。

「意外にも——と云うのは、風間さんから予備知識を得ていたからですが、結果は全く逆でした。最初緊張から多少速くなっていた丹羽のプルスは、輝を見たあとでは、むしろ平常に戻っています。それに反して、熊谷のほうは、はじめ通常のプルスだったのが、輝を見て非常に速くなった。不随筋の反応は、熊谷がきわめて顕著、丹羽には全く認められません。これによると、熊谷は輝、もしくは男性の裸体に対して、かなり強いアブノーマルな性向を有していると考えられ、丹羽は完全にノーマルであると思えます」

この報告を聞いて、風間刑事は拍子抜けがしたようにガッカリしたが、高梨部長刑事は満足げに頷いて、

「風間君。君の感は外れたが、お蔭で事件の解決は早くなった。反応試験のあと、熊谷の様子が変わったというから、今度は真実の自供をするかもしれない。やっぱり熊谷が黒だったとしても、あのまま押していったんじや無理があったし、昔のような取調べはできんのだから、悪くするとこっちの負けにならんとも限らん。これでうまくいけば、やっぱり君の

功績さ」

と半分は慰めるように云った。

果して、この反応試験は熊谷にとって相当なショックだったらしく、もう逃れられないと観念しものか、改めてスラスラと自供をした。

何度か罪を重ねるうちに、熊谷はあるとき連行される途中で、それは警察署の廊下だったが、フト川島巡査を見かけた。熊谷が模範囚だと云われるくらい真面目に刑を務めたのも、出所したら川島巡査に逢えるという希望があったからだ。しかし、いざ逢えるときがくると、熊谷は気おくれがして躊躇が先きにたった。それは自分でもいじらしい程だった。もし川島巡査の同情を得ることができたら、俺は立ちなおれるかも知れない。いや、キット更生できる。そう思うと勇気がでた。彼は、とうとう思いきって駐在所を訪ねた。川島巡査は決して冷淡ではなかった。だのに、長い刑務所生活の心の渴ききっていた熊谷があせったのがいけなかった。それに、やはり前科者という僻みもあった。恐いのは、兇行後の熊谷の心理だった。川島巡査が死んでしまうと、熊谷は、あれほど思いつめていた巡査への慕情をケロリと忘れてしまったのである。

「前科者が警官に惹かれるようになったりしたのが、そもその間違いだっただけさ。刑

務所へいったら、またかわりを探しますよ。囚人同士だったら文句はねえ筈だ。なんていったって、ひよっして、又、看手を好きになるかもしれませんかね」

そう呟く熊谷の言葉に、慄然としたものを感じた係官も何人かあったろう。

事件が落着くと、風間刑事は、いつにないひどい疲労を覚えた。捜査に追われて洗濯をする暇もなく、締め替えたまま洗っていない輝が何本もたまっていることを憶いだすと、彼は署の帰りに奮発して晒を一反買った。包を抱えて店をでると、十二月とは思えない暖い街路には、甘く霧が漂っている。風間は不意に峰村の貌を心に描くと足を速めた。

(おわり)

絵画 写真 のアイデア募集

本誌の口絵(写真を含めて)並に代理部の分譲写真、或は「画帖」「写真帖」などのアイデアを広く皆さまから募集いたします。内容はどんなものでも結構です。採用の分には、原画、若くは引伸写真、画帖、アルバムを贈呈の外、優秀なプランは本誌に掲載の上、編集用のフォトを贈呈いたします。

(編集部)

幕 末 奇 談

艶 色 赫^{かく} 夜^や 姫^{ひめ}

海 野 築 朗

一 月 見 の 宴

「御覧遊ばせ、八千草さまが通りますわ」

「まあ、本当。でも八千草さまだなんて……そんなに気安く云っては失礼ですよ。以前は朋輩でも、今は御家老様の御内室様でございますからね」

讃岐国高松城の奥庭である。——毎年中秋の名月には、お目見得以上の家臣達には、奥と表との差別を除いて奥庭で月見の宴を催すのが例であった。

日頃きびしく隔絶されている城中の男女が、此日だけは公然と相見る事が出来るのでその賑いは極めて華やかなものであった。

着飾った腰元達は裾をからげて、風情艶めかしく逍遙し、若侍達

もまた、心ときめく様に、その群を縫って往来する。——聞けよがしの腰元達の嬌笑や、はじらいの瞳、思わせぶりの囁きや秋波が、行交う若者達の間にゆれ上るのである。

その中で二人、もういずれも二十二、三と思われる腰元が、いま向うの泉池の八橋を渡って行く美しい女を、妬^{ねた}ましげに見やり乍ら蔭口を叩いていた。

「そうでしたわね。でも、私には分りませんわ。八千草様ともある方が、あんな御老人と……」

「御老人でもお禄高は二千石の御家老様ですもの。当節は、竹の柱に芽^{かや}の屋根、手鍋さげてもなどという心意気は、はやらなくて、身分とお金さえあれば、良いんですって……」

「まあ、八千草様って、矢張りそれが目的でしたのね」

——今、噂の主、八千草は橋を渡り切った。

膚の真白い、やや大柄の体つきである。少し陰はあるが、黒目勝ちの表情の多い目許、小高い鼻、赤い花卉の唇、類い稀な美貌であるが、どこか、利発できかぬ氣の印象を与える。

恐らく二人の腰元の蔭口を耳にしているのであらうが、澄んだ瞳を正しくあげ、悠々と臆した様子もなく通り過ぎていく。

——八千草は孤児である。家は高松藩譜代の年寄格であったが、両親が養子を定めぬうちに死亡したので、自然、家名が絶え、十五才の時より側主の恵明院の腰元として大奥に仕めていたのである。

高松城の赫夜姫などと噂され、然るべき家柄の求婚者も相当あり又附文をしたり言寄ったりする者もあったが、八千草はどれも相手にせず、超然として二十三才という年を迎えてしまった。

——心驕っている。

——才色に慢じて、人を人と思わぬ。

——外面如菩薩。内心如夜叉。

——棘ある花よ。

——緋牡丹の値を高く売る無風流。手の届かぬ花を憎んで、若侍達は様々に批判した。

「八千草は、高慢と共に白髪で終るのだ」と、人々は予想した。

然し、その予想は見事に裏切られた。

慶応二年も押しつまった去年の暮。

「——実は、嫁に参りとうございます。」

と、八千草は初めて心を決めた如く、恵明院に願い出た。そして嫁ぎたい相手は国家老三和甚左エ門であると云ったのである。

一城の才色と謳われた八千草が、自ら望んで嫁したいと云うには余り意外な相手である。甚左エ門は早く妻に死なれ、子供もないやもめで五十八才になる頑固一徹の老人である。

「……なにか訳があるのか？」

と恵明院は繰返して訊いたが、八千草は微笑して

「ただ、良人として恥しくない様に存じますので……」

と答えただけだった。

今、無遠慮な嘲笑の中を、八千草は黙々と歩いて行った。

八橋を渡ると道は小松林の丘を登る。その丘の宴席に恵明院も臨席しているので八千草はそこへ挨拶に出ようとしているのだった。

その小松林の中ほどへさしかかった時

「——八千草殿、しばらく」

と、声をかけて一人の頑丈な若侍が出て来た。

八千草には、それが馬廻り役の大河内魁であると判った。

曾て、最も熱心に八千草に恋心を通わせた若侍達の一人である。

「何か御用でございますか？」

八千草は冷い眼を向けた。

「お祝いの言葉を申し上げ様と思って、お待ち申していた……」

大河内の醜惡な巾広い顔が、痙攣している様である。

「貴方様に、お祝いの言葉を戴く程、私は貴方様を存じ上げておりません」

八千草は唇を左へひきしめ乍ら、刺す様に云った。

「——成程、貴女は、そんな女だ。心のありたけを燃やした拙者など、屁とも思わんだろう」

大河内の眼は、陰しく歪んだ光を湛えて、八千草の美しい面を、ひたと瞞めた。

「八千草殿。では今一度拙者の名を申そう。拙者は、大河内魁。魁とは余人に先がけて君の忠なる者。若しお忘れになっていたら、改めて良く覚えていて下さい」

八千草は、冷く微笑した。

「さあ……どうですか？。そんな必要がございますかしら……」

「有る。大いにありますとも。やがて世も変わる、すべてが変る。その時に拙者が必要になる。それも、決して遠い先の事ではないでしよう……」

と、大河内は踵をかえして月光の中を逃げる様に去って云った。

二 御 前 会 議

そして、その大河内の言葉を裏書きするかの様に幕末の騒然たる情勢は、変転限りなく遂に慶応四年正月、——上方では、鳥羽伏見に戦争があつて、朝敵の汚名を蒙った將軍慶喜は、海路あわただしく江戸城へ逃げ帰った。

高松藩は徳川家にとつては、御三家に次ぐ親しい間柄である。従つて、今迄の態度は徳川宗家大事と云う佐幕派であつた。

然し、鳥羽伏見で敗れた高松兵が、大阪から高松へ逃げ帰り、四国では勤王の魁首である土佐藩は、早くも朝敵、高松藩追討の兵を起して三千に余る大軍が国境へ迫つて来ると、高松藩の上下は外敵の侵入に混乱し、人心恟々として毎日の様に城中で評定が行なわれた。

帰順か！ 抵抗か！

藩論は容易に決せられなかった。

佐幕派の首領は三和甚左エ門であり、勤王派を代表する者に中沢恒太郎があつた。

「薩長土が、なんじや。皆幼帝を挟んで、己れ天下の権を取り、あわよくば徳川に代り慾をほしいままにしよう云う狐どもではないか。そう云う連中の振りがさず大義名分に恐じ怖れて、徳川御宗家を見捨てると云う法があるうか。我々が、祖先以来、高禄を戴いて安閑と妻子を養つて来られたのは、こう云う時のために、一命を捨てて、將軍家へ御奉公する為ではなかったのか。こんな時にこそ一命を捨てなければ、我々は先祖以来、禄盗人であつたと云うことになるではないか。」

城中の大広間で行われた御前会議で、甚左エ門は、大きな目をむいて一座を見廻した。

「左様、左様！」

「御尤も。」

「御同感！」

座中、所々から声が挙がつた。

「左様では、ござりましようが、……」

と、言葉を挟んだのは中沢恒太郎であつた、端麗な顔が、やや青ざめていたが、その反駁は、理論整然としたものがあつた。

「王政復古は、天下の大勢でござります。將軍家に置かれても、朝廷へ御帰順の思召があると云う噂もござります。この際、將軍家の御意向も確めないで、官軍である土佐兵と戦いますのは、如何なものでござりましようか？」

「黙れ！ 將軍家に帰順の思召あるなどと、奇怪な事を申すな。鳥羽伏見には破れたが、あれは云わば不意に仕掛けられた戦いじや。將軍家が江戸へ御帰城の上、改めて天下の兵を募られたら、薩長土など一溜りもある筈がない。もし、今土佐兵に一矢も報いず降参などして、もし再び徳川家お盛んの世とならば、わが高松藩は、お取り潰しになるは必定。それよりわれわれが身命を賭して、土佐兵を撃ち退け、徳川宗家長久の基を築けば御家繁昌の為にもなり御先祖以来の御鴻恩に報いることにもなるではないか。土佐兵の恐い臆病者どもは、城に籠つて慄えているがよい。この甚左エ門が真先がけて一戦を試みてみせようぞ。帰順、降参などとは思ひも寄らぬ事じや。」

と、恒太郎を睨み据え乍ら怒鳴りつけければ

「御道理！」

「まさに、お説の通り！」

「御尤も千万！」



などと、賛意の言葉再び洩れる。

だが、恒太郎は日頃、京洛の事情を熱心に研究して、天下の情勢に通じている。ここで藩の順逆を誤らせてはと、甚左エ門の怒声に臆せず

「三和殿のお言葉ではござりますが、徳川御宗家に於かせられても

庄せられたのか、大広間の座中八、九分までは、まなじりを決して起立してしまったのであった。

三 非常手段

その夜、志を同じくする家中の若侍達が、恒太郎の家に集って

未だかつて錦旗に対し、お手向いしたことは一度もございませぬ。まして、御本家水戸殿に於ては、義公様以来、夙に尊王のお志深く烈公様にも、いろいろ尊王に尽された事は世間周知の事でございませぬ。然るに水戸殿とは同系同枝とも申すべき当家が、かかる大事の時に順逆の分を誤り、朝敵になります事は誠に嘆かわしい事でないかと存じます」

恒太郎の言葉にも、騒がしい賛意の言葉が大広間の諸士の口から洩れた。

だが頑固一徹、すっかり興奮している甚左エ門は、耳を貸そうとしなかった。

「ええ黙れ！ 黙れ！ 何が順逆じやもはや問答無用！ 薩長土につくか、この甚左エ門につくか、各々方、この甚左エ門の申す事に御同意の方は御起立下され！、よろしいか、御起立下され！」

時の勢いか、甚左エ門の激しい力に

た。

「土佐兵に抵抗すると云うのか、錦旗を奉じている土佐兵に……負けるに決まっているじゃないか。土佐は、スナイドル銃を二百挺も持っているじゃないか……」

一人が嘲る様に云った。

「賊軍になった上、散々射たれて、その上王政復古となれば、高松藩はお取潰しになる……こんな暴挙を我々が見て居られるか」

今一人が齒をかねで口惜しがる。

「どうだ諸君、今一度、三和邸へ押しかけて行って、あの頑固爺を説得しようではないか！」

今迄首を垂れていた恒太郎が必死のまなじりを上げて云った時「手ぬるい、手ぬるいよ」

と、不意に傍若無人な声がして、ヌツと入って来た男がいる。

日頃、その向背をはっきりさせず、この情勢の最中に茶屋女などに、うつつを抜かしていた大河内魁だった。

「あの甚左エ門が、説得などで動くものか」

と一座の真中にドカツと坐る。

ごつてりと塗りたくった鬢つけ油が強く匂って、おし潰された銅壺の様な横のひろがりの顔が、ふとい猪首にのっかっている。

「大河内、貴公、勤王なのか？」

一人が、肱を怒らしながら気色ばんで云うのを

「左様！、俺は、見す見す高松藩が朝敵になるのを見過ごす訳にいかなくなつた」

軽くいなして

「実は拙者に存じよりがある」

と云って一座を見廻した。

「存じより？」

「いかにも。拙者、大河内魁とは、余人に魁けて君に忠たる事、名

は体を現すとは古語にもある通り……」

「名の事は、どうでもよろしい」

と、恒太郎は遮ぎって

「存じよりとは何だ？」

「それは、大義名分を誤らぬ様に、主家を興す道……」

と、うそぶいてから

「藩論が定まった以上、狂瀾を既仆に覆すは非常手段あるのみ、即ち、今夜中にも三和甚左エ門を斬って、藩論を一変させるのだ」

と、盛り上がった肩をそびやかした。

一座の者は、さすがに緊張した面持で、顔を見廻した。

「三和十人を仆せば後に肚がある奴は少い。三日後の出陣も三和がいなければ躊躇逡巡して沙汰止みになるのは目に見える様だ。その間に貴公等が尊王の主旨を吹聴して藩論を一変させる事は案外容易かと思う。どうだ、三和を斬る事は、天朝の為になり、ひいては主家の為になる。各々方も御異存はござるまい」

「異議なし！」

「同感！」

銘々、一座の者は口々に叫んだ。

中沢恒太郎だけは、さすがに何も云わなかったが、やがて静かに「拙者も同意する。だが、方法手段をどうする？……多人数押しかけて、御城下を騒がす事は外敵を控えての今、慎まねばならぬ」

「左様！」

と、大河内は尤もらしくうなずいて

「討手はまず二人、三和は小太刀をとっての動きは家中無双であるから、腕に覚えのある者でなければならぬ。まず貴公と拙者……」

と、大河内は恒太郎の顔をニンマリと見つめた。

四 崩れる緋牡丹

いつもは、もうとつくに暗い城下町がさすがに子の刻近くなっても物音がし、人声や灯の洩れる家が多い。恒太郎と大河内は人目を忍んで、甚左エ門の邸の裏に落合った。

二人共、勿論覆面をしていたが、大河内は手に縄梯子をぶら下げていた。

「大河内、無用の殺人は慎しんでくれ。家来達が邪魔をすれば、止むを得んが、婦女子などには怪我をさせてはならんぞ」

恒太郎は何か重い心を吹きとばす様に、りんとした声で大河内に云った。

「婦女子？、ふんこの邸には八千草しかおらぬよ。俺の命に賭けてまでも欲しいと思った八千草よ。今じゃ頑固爺の新妻よ。けたた糞悪い」

かっつと青痰を吐いて。

「然し、天は我に幸いをもたらし給うた」

「……………」

「甚左エ門は、天朝の為、刀の錆になる……………」

「大河内！貴公、一体目的は何だ？」

恒太郎は、大河内の言葉の中に邪心がひそんでいるのを察して、ムラムラと怒りがこみ上げて来た。

「今更、おかしな事を云うな」

「人の内室を横取りする事か？」

「冗談はおけ。天下大事の場合、左様な色事にこだわっていられるか。」

と、肩をそびやかして、大河内うそぶいた。

二人は裏手の塀を乗り越え、中庭へ入った。忍び足で雨戸に近ずくと、小刀を差し込んで雨戸をはずし、廊下に上った。

「この部屋だ」

廊下を二、三間歩いて、大河内は振り返って恒太郎にソツとささ

やいた。

障子が、サツと開かれた、その途端

「何奴じや？」

甚左エ門の鋭い声が響いた。

「天朝の為、命を貰いに来た」

大河内が、叫んだ。

「推参！ 名を名乗れ！」

甚左エ門は寢床の傍から飛び退って、床柱を背に、二尺に足らぬ刀を正眼に構えていた。老人乍ら颯爽たる姿である。

「くたばれ！」

と、大河内が片手なぐりに斬りつけた。

ジーン！

と刃と刃の焼ける匂い。

恒太郎は、パツと足で行燈を蹴った。

一瞬の闇。

大河内が、又呻いて斬りつけた。

と同時に恒太郎は持っていたが、ん、燈の光を甚左エ門に当てた。

「あっ！」

と、光に目を射られて、大河内の太刀を受け損なった甚左エ門は肩先から血煙りを上げて仆れた。

邸内が、ざわめき出した。

「よし、大河内、いこう！」

手間どってば大事である。

恒太郎は思わず、大河内の名を呼んでしまった。

其時、ガラリと隣りの襖を開け、燃える長襦袢一枚の八千草が、懐剣を振りかざして大河内に斬りかかったのである。

「小癪な！」

大河内が、ムズと八千草の利腕を押えた。

「女に構うな！」
恒太郎は焦った。

「そうはいかぬ、この女、拙者の名を聞いて仕舞った」

大河内は、八千草の脾腹に刀の柄で当身をくれると、崩れる緋牡丹の様な八千草をそのまま、ぐいと小脇に抱きかかえたのである。

五 妖しき獲物

城下町を少しはずれた、田圃の只中に小広い境内を亭々たる老樹にうつ蒼と埋めつくした荒寺が、真黒く影を沈めて眠っている。

その無住の荒寺の本堂にポーツと灯がともった。

甚左エ門の邸から、止むを得ず、八千草を拉致して来た、大河内と恒太郎だ。

その足元に、艶かしく八千草が、グツタリと身を横たえている。「扱、どうする？」

大河内は、八千草の姿態にちらちらと視線を投げて、あごをさすった。

もう情心の闇に好きな痴蝶を舞わせて、勝手な想像を心の奥で逞しうしているのだ。

「兎も角、拙者は、今夜の首尾を同志に知らせて、今後の手を打たねばならぬ」

「この女は？」

「一時、この寺に閉じ籠めておくより外にあるまい……断って置くが大河内……」

「おっと、判ってる。天下大



事の場合、変な推量は無用だ」

「うむ。では……」

と、恒太郎は心を残しつつ闇に消えた。

見送って、大河内はニタリとした。

一人になると、途端に燃え上って来る怨みのこもった情炎だ。大河内は八千草の傍へ膝を折った

グツタリとした身体を、自分の膝へ仰向けに仆すと、メラメラ燃え上る瞳で、八千草の乱れた長襦袢姿を、ジーツと見下した。

日頃一糸の乱れさえ見せず、むしろ冷たい位に膈たけて見えたその姿が、今は乱れて無残なばかりに艶しく崩れているのだ。

（見る、八千草。日頃は手の届かぬ地位にいる筈の女だったが、それが、今、俺のなすがままに横たわっているんだぞ）

その思いが、無性に大河内の心をかき立てる。その眼に、残忍な光りがぐっーと燃え上った。

と、八千草の白い喉が上下に動いて

「うーむ……」

と呻きが唇から洩れた。

（気が着いたらしい、こいつは願ったり叶ったりだ）

大河内は、肩に手をかけて八千草の体をゆさぶった。

ゆさぶって、ふと気付いた。（そうだ、正気に返って声でも立てられたら……）

大河内は懐に手をつ突っ込んで、かくある事を予想したかの様に手拭を二本出した。

一本は、ピリピリと小さく裂いて、それをクルクルとまめる。

一本は、広げてから三つにたたむと、猿轡の用意だ。

まず、花卉の様な唇を、太い指でコジあけると、無意識のうちにかぶりを振って避け様とする八千草を

(いい子だいい子だ)

と、なぐさむ様に、無理矢理に小布れをつめて、こんどは三つ折の手拭だ。

まず、下端で唇をふざぎ上端で鼻孔まで、念入りに、ピツタリとふさぐと、膝をちよいと持ち上げて、後の鬘に廻しぎりぎりと締め上げた。

(少し、きつかったかな？ まさか、こと切れはしまい……あの茶屋女の時も、この位だった。……)

兎に角明日の朝になれば、もうこの女と二人きりになる事はないだろう。俺を振り抜いた憎い女。思いきり苦しみ悶えさせてやらねば……)

と、思うと、胸がうずいて、小鼻に汗がたまってくる大河内だ。

(よし、猿轡の次は、後手だ)

大河内は、長襦袢の上に巻かれている伊達巻を、するすると解いた。

そして、ワザと襟をぐいと広げて胸の上から一巻き二巻き、細い



手首にかけて、キリキリと縛り上げた。

(もうどんな事をしたって、声も立てられず、逃げられない)

と、まずニンマリして、八千草を抱き起し背中に膝を当て、グイと活を入れた。

「う、う、う……」

と、かすかに呻いて八千草は動き出した。

そして、自分の体が、手が口が、自由を奪われている事を知ると、僅かに残された目を一ぱいにあけてあらん限りの険を籠めて、大河内を睨み上げた。

「どうだ八千草、俺だ。判るか、大河内魁だ。よくもこの俺を、ふって、ふってふり通したな。見ている男の意地とはどんなものか。その美しい冷たい顔を苦しさと怖ろしさに、震え、おののかして見せるぞ。」

と、獣にも似た笑みをニタリと浮かべて、八千草をのぞきこめば「う！」

と、八千草は切なげに喘いで身悶えする。

「ふ、ふふ、苦しいか、声が出まい。それは猿轡と云って、美しい女が、気持を踏みにじられた男に必ず嵌められるものだ。これから夜明けまで、タツプリと女の耐えがたい苦しみを、次々に一つずつ得心行く迄味わわせてやるからな……ふ、ふ、ふ、苦しめ、もがく

が良い。嘔吐を催し、目がくらみ、油汗をうかべてのたうち廻るが良いぞ……」

「う！」

八千草は、身をくねらして男の手をはらい、必死の努力で立ち上ろうとした。

立ち上ろうとして——不自由な身、思わず、一、二歩、よろよろとよろめきさま、乱れた長襦袢の裾をふんで、崩れる様に、どつと仆れた。

裾が宙に舞って、白い脚と湯文字が無残にもはだける。

その妖しい迄の濃艶な姿態の上に、大河内の手に破れ襖の外骨が鞭のかわりに握られて振り降された。

「う！」

白い喉がそり返って悲鳴をあげる。

続いて一撃、二撃、五撃、十撃……。

ギラギラ光る大河内の眼に、この世のものと思えぬ苦痛の悶えが映った。

狂人の如く振り降される筈の下、八千草は絶望の呻きを上げて、ころげ廻った。

六 同 志 討

「おい！ 大河内！」

突然の声だった。

大河内は、はじかれたように血走った眼で声の主を求めた。

「……こんな事だろうと思った」

いつ戻ったのか、恒太郎が突っ立っている。

その目は、忌わしいものを見る様に、声には憎悪の響きが籠っている。

「こんな事だろうとは、どんな事だ？」

大河内は、不貞不貞しくうそぶいた。

「貴様、いやしい私怨を晴す為に天朝を利用する気だったのか？」

「大事の前の小事だ、ほおって置け」

「たわけ！」

「何！」

ギロリと目を剝いた。

大河内の胸には、狂い、奔流し出した嗜虐の血汐が、せき止められただけに殊更烈しく疼いているのだ。

（畜生！ この美しい、高慢な女を存分に呻かせて跪かせて、俺の足許にひれ伏させて踏みにじってやれるものを……）

舌なめずりする思いに半ば夢中だったのに、それが、思わぬ再来者に中断させられてと思うと、勝手な怒りがムラムラとこみ上げて来る大河内だ。

「何故、戻って来た？」

場合によっては、こやつも斬る。そんな狂暴な気になっている。

「城下町は、上を下への大騒ぎだ。総登城のふれが出た。」

「だから？……」

「これからの一刻が、藩論が決定する大事な時だ。貴公も来い！」

「女をどうする？」

「藩論が決定し次第、女は邸へ戻してやるのだ」

「邸へ帰せば、俺達の事が判る」

「藩論が決定すれば、命は惜しくない。仇を討つと云うなら討たれてもやろう」

「そうか、判った。では先へ行っている。俺は後からいく」

「いかん、女に手を出すな、勤王の志あるものが、見苦しいぞ」

「だが、俺の血が納まらんと云えば……」

「そんな心情を持った男が同志とは情けない。泣いて血祭りに上げるぞ」

「そうか……」

大河内の目に一瞬、殺気が流れた。

だが、それもすぐ消えて、狡猾な色が浮んだ。

「今更、同志打ちも出来ん。女はあきらめよう……」

と、八千草の傍へ、しやがみ込んだ。

緋の長襦袢も、真紅の湯文字も、すっかりはだけて、白い肩が荒

々しく喘いでいる八千草だ。

「とり敢えず柱へでも、つないで置るか。」

大河内は、八千草をむずと抱き上げた。真白い膚に己れがつけた
答の痕。苦痛にのたうった八千草の姿……又、ずきんずきんと狂っ
た血が脈を打ち出した。

だが、ぐっとこらえて素知らぬ顔で、グッタリしている八千草を
床柱につなぐと。

「よし、いこう」

と恒太郎と並んだ。

歩きかけて。

「そうだ、猿轡を嵌め直して置るか……」

と、立止って戻り、サンバラ髪サンバラの八千草の猿轡を一旦はずした。

恒太郎は、八千草の姿態に目をやるのも痛々しいらしく背を向け
て待っている。

その隙を――

大河内は、振り向きざま、抜打ち斬りつけたのである。

「危い！」

と、咄嗟に叫んだのは八千草であった。

一瞬！ 恒太郎は身をかわして、横なぐりに大河内の脾腹を深々と
斬りないでいた。

「ぎえッ！」

と、朱に染って仆れる大河内。

「お！」

恒太郎は、自分が八千草の声に救われたのを知った。

「八千草殿……」

複雑な感動が、恒太郎の五体を巡った。

七 使 者

三和甚佐エ門横死の報は、佐幕主戦派にとって大打撃であった。
藩論は忽ち勤王恭順に傾いた。

藩論は、鳥羽伏見の責任を出先の隊長である小夫兵庫、小河又右
エ門の二人に負わせて、切腹させる事になった。

三人の首が、高松城下に滞在している土佐兵の陣営に届けられる
事になった。

城下町の不動院が本陣であり、その本陣に四国鎮撫使、四条侍従
四条少納言以下、陣羽織の面々が厳めしく左右に居並んでいた。

其処へ二つの首を捧げて入って来たのは盛装の八千草と、袴の恒
太郎であった。四条少納言は思わず「あっ」と口の中でさげんだ。

陣羽織、筒袖、ダンブクロなど着した兵隊の中に、臆する色もな
く入ってきた八千草である。真菰の中の菖蒲と云おうか、松林の中

の一本桜と云おうか、その美しさは一層引立って見えたのである。
恒太郎の弁舌爽やかな答弁と、八千草の絶世の美しさ、その態度

はいたく四条少納言の心を動かした。

土佐兵は高松城下に二、三日滞在しただけで引き上げた。

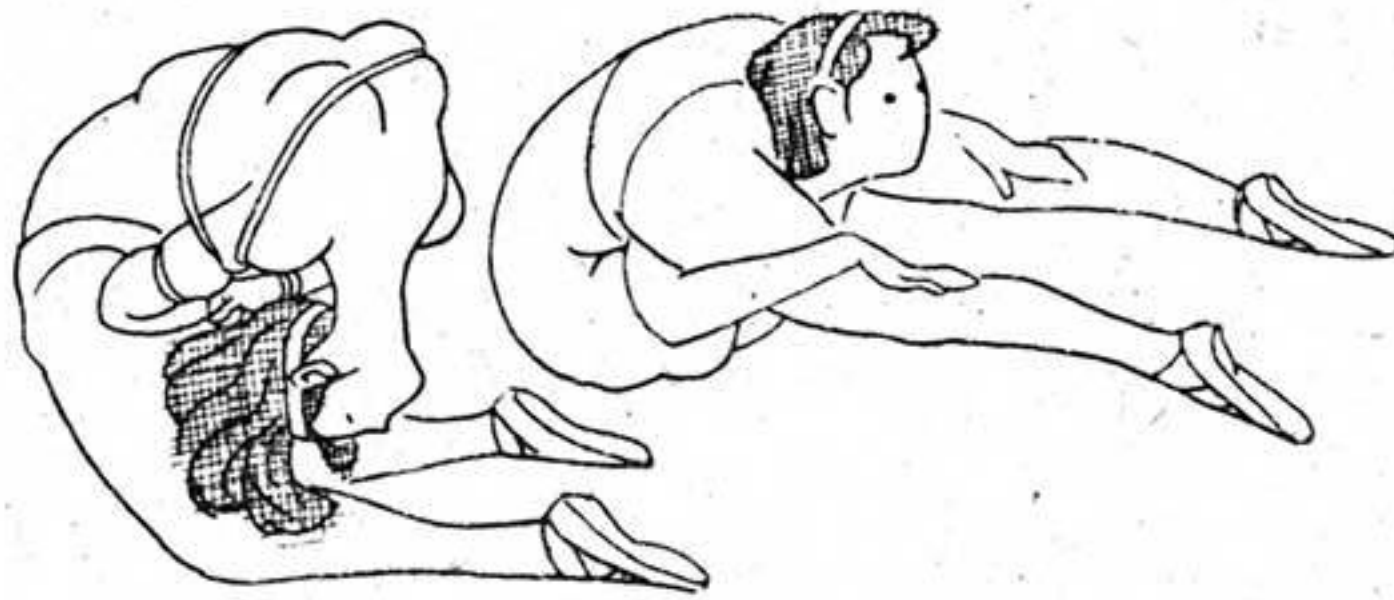
そして輝かしい王政復古の御世が来た。

その後、四条少納言が陸軍中將となり、八千草を是非側女にと県
知事を通じて申入れて来た。

だが、八千草は或月夜の晩、勿然と高松城下より姿を消してしま
った。

「矢っ張り、あの女は赫夜姫かぐやだったのだ」

そんな噂がどこからなく起った。
その頃、中沢恒太郎は、学才があるだけに、出世も早く県判事になつていた。



ア ク ロ バ ッ ト

の

魅 力

堀 美 佐 男

そして、八千草の消息を知る唯一人の元高松藩士であつた。
八千草は、髪を剃り落して、片田舎で三和甚左エ門の墓守りをしていたのである。

— 完 —

僕はイカモノ喰いかもしれないが妙なものに関心を持つのだ。あの哀調を帯びたジンタの音にも胸をしめつけられるような郷愁を感じるセンチメンタリストなのだ。サーカス、そうだ、僕はあのサーカスの持つ頹廢的なガラスのような儚ない美しさが、こよなく好きなのだ。

あの小便くさい、小屋がけのストリップのゴザの垂れ幕をくぐって何度となく財布の底をはたいたことだろう。ことほど左様に僕は貧乏なのか、庶民的なのか、そのどちらもだろうが、チビたっつけを引きずりながら見る小屋がけに無類の興味を感じるのだ。

と、いつて僕は戦前派の老人でもない。がしかし、戦後派のアンチヤンでもない。いくなれば戦中派の不良中年とでもいうべき万年浪人の一人なのである。僕の好みを、そのものずばりといったのけようか、それはアクロバットである。

勿論、手品から初まって曲芸奇術のたぐいは好きであるが、あの魂の底まで揺さぶるものはアクロバットをおいて外にはない。
何故、このように僕がアクロバットを好む

か、その理由は僕自身にもわからない。只、いつとはなしに、なんとなく好きになって、というより外に言葉はない。

ここに新関西新聞に載ったアクロダンサー松山由美子の『松山由美子が語る「アクロとヌード」』から引用してみよう。

「十八乙女のはじらいも愛らし、四年続けた『舞台精進』と題があつて、——肝心なのは、一にも二にもレッスン——とサブタイトルしてある。

このインタビュは、OSミュージックにアクロバット・ダンサーとして初お目見得した松山由美子の「吉田御殿」出演中の楽屋裏で聞いた話ということになっている。

一にも二にもレッスン、という点で「お酢だなんて、とんでもない」やはり訓練ということが第一らしい。彼女の言では、「アクロバットはお酢を飲んで身体を柔かくするの？なんてよくきかれます。フッフ、お酢飲んだらグニャグニャになるんですか？ あたしネお寿司でもキライなくらいだから、お酢なんてトンでもない。じやどうするのって、きかれれば、一にも二にもレッスンからですよ、とお答えします。」

つまり、あのグニャグニャの章魚のような女体は厳しいレッスンの賜なのである。

「柔かくないとダメ」だそうである。

彼女はいう。「でも、二十才くらいからじや体が柔かくないから多分ダメでしょうね。

若いに越したことはないわ。あたしで三、四年前からでしょ。いまスイング・スターにいる松山宏さんから教わったのです。途中で三年ほどヌードだけやっていましたが、ここへ来てアクロバットに逆戻りしました。アクロバットはとても難しいのよ、それならどういう勉強するのかときかれると困っちゃうけど、あたし口で巧くいえないのですが、バレエのレッスンと同じことを普段稽古すると思えばいいわね。」

口では巧くいえない勉強の仕方というのを一つ彼女の口から聞きだしたいものである。

「知らざる名人も」

「いま、若山昌子さんが第一人者でR・テンプルさんや最近売り出しの双見麗子さんとかここで一緒に出ているピンク・ローズさんなどいますが、案外世間に知られない隠れた名人もいますわよ。」

案外世間に知られていない隠れた名人を一つ本誌の写真部でもキャッチして素晴らしいアクロバット・ダンサーの縛り写真なんかを実現してくれないかなア等と虫のよいことを考へたりする。

同じく新聞の切り抜きで「木村姉妹にきくアクロバットのあれこれ」という紹介記事。

これはアクロバティック・ダンサー木村君子、美代子の姉妹、同じくOSミュージックの「七つの門」に出演している曲線美の女王のアクロバットについての話。

「アクロを習ったのは川田三知雄さんから好きだったのです。その曲線の美しさが……強習はあくまでも洋舞と同じです。

よほど好きでないと、長続きしないのは事実、よく私たちのところへ、お母さんが子供を連れてやって来られますが、一カ月続いたらもうやめちまいます。進んでやる気でないとダメね。」

とおっしゃる。一寸した思いつきだけでは辛抱しきれない激しい訓練がその裏に物語られていて面白い。血のにじむような猛訓練によって初めて一人前になるアクロバット・ダンサー、絢爛たる舞台上でのアクロの演技もこのような猛訓練があつてこそだ。しかし、今迄アクロのレッスンのことについて詳しく語った言葉をきかない。

然し、それはさておき（その実、僕の一番聞きたい事柄はそこであるのだが）激しいトレーニングで逞ましく伸びた肢体が躍動するあのアクロの演技は、僕を夢の世界へと誘ってくれる。今日も又僕は、その桃源境を求めて盛り場をさまようのだ。

王宮の浣腸室

(第三回)

柴 崎 黎 子

九

マギが疲れきった様子で悄然と戻って参りましたのは、私があおいましいお部屋から許されて帰って、ベッドの上で泣き飽きた頃でした。私は涙を流れるだけ流してから、この日の出来事を我身の不運として諦める他、仕方がないことを悟っていました。それでもイベットに比べれば問題にならないぐらい軽い折檻だったのです。イベットは身体中はれ上がって、今頃は身動きもできないでいるに違いないと思われるのでした。

我身に諦めがつくと、何かつらい目に会って来たらしいマギの様子が気になりました。私はベッドに上半身を起こしてマギを招きました。マギはベッドのかたわらに膝をついて私のなすがままに、かわいい顔を私の胸に埋めました。それは本当に悲しそうな仕ぐさでした。

「どうしたの、おまえがこんなにしょんぼりしているなんて始めてね」

私が、やさしく髪を撫でながらそう申しました。マギはかすかにしやり上げました。「話してごらんさい。マギはどこへ連れて

いかれたの。どんな事をされたの？」

「はい、御主人様。マギ達にはマギ達のつらいおつとめがございます。時々きょうのような目に会わなければならぬのです。そのひどい事といったら、御主人様には想像もできませんわ。」

そう前置きしてマギはポツリポツリと話し始めるのでした。私は、なおもマギの細い首や柔らかな肩を撫でながら聞きました。

「いろいろなお調べがあるのです。係のお役人様やお坊さんがいる前で、日ごろのおつとめのもようを御報告させられ、もし一つでも

落ち度があったのなら正直に申せと言われます。そこで、どんなささいな事でも正直に申しますと、お役人様がただちに罰を言い渡すのです。もし落ち度はございませんでしたと申しあげると、そんな事はあるまい、よく思い出してみるがよい。隠さないで告白して自分の折檻を受けた方が自分の為になるのだと言われます。どう考えても、立派におつとめ致しましたとお答えしても、なかなか認めては下さいません。しまいには、お前は不正直な奴だ、その性根をなおさなければいけないと、どっちにしても無事には許して下さらないのです。お役人様はそうして、あわれな召使い達に、鞭うちいくつと係のお坊さんが紙に記録しておきまして、あとで全員揃った所で、刑を執行なさるのです。刑量はさまざまで、必ずしも罪科の軽重とは一致しません。まったくお役人様の考え一つで適当に決められてしまうのでございます。ですから、このお調べの時は、もう始めから罪人として出て行くようなものなのです」

「まあ、おまえ達も、そんな目にあうのね。理由もないのにいじめられるのは私達ばかりかと思っていたのに」

「いいえ、御主人様、それはそれはおそろしうございますわ。鞭うたれる時には、多勢の殿方が観賞していらっしやるのですもの。私

達だって女でございますから、それほどつらい事はございません。鞭で受ける痛みより、その殿方の目の方がどれほど苦痛でございすか、おわかり下さいますか」

「まあ、かわいそうに！」

と私は叫んでしまいました。自分の身体や屈辱を受ける姿を他人に見られる事がどの位女にとって甚だしい苦しみであるかを、人一倍感じていた私です。マギが置かれた立場が私には目に見えるようでした。私は自分がなされた屈辱などはすっかり忘れてしまつて、マギに次を話すように申しました。

「殿方と申しますのは、お若い貴族や、身分の高い将校達なのです。その方々は、私達のお調べに立ち合う特権を与えられていらっしやるのです。私達は、その方々のお慰みとして自己批判をさせられ、鞭の下に身体をさらすのですわ。それが堪まらずに泣き出す人や抵抗する人がおります。すると、決められた刑量の上に更に鞭うちの回数が増ええられるのです。どっちみち逆つても余計苦しい目をおわされるのですから、新しい人でない限りはおとなしくされるままにしているのですけれど。でも鞭うちはまだしもなのでございす。と申しますのは、そのお調べがすみすきと、もっとひどいお医者様の検査が待っているのですぞいす」

マギはそこで言い淀みました。私の大嫌いなお医者様、その言葉を聞いただけで、ぞつと身体中の毛が逆立つ思ひです。

「スザードなの？」

「いいえ、スザード様はマギ達など診て下さる筈がございません。もっと残酷なお医者様です。兵士や召使いだけを診て下さる方なのです。そのお医者様は、本当に気味の悪い方で、わざと私達を羞しめるような質問をなさいます。終始ニヤニヤ変な笑いを浮かべていらっしやつて、あんなに意地の悪い眼つきをしている方を見た事がございません。でも鞭うちの回数が増える事をおそれて、皆従順に目をつぶつてこらえているのです。そんな姿を、やっぱり物好きな殿方がまわりで眺めているのです。お医者様は、私達の身体のどこかに病気がひそんでいはいないかと、それは驚くほど且念なお調べです。その間中、立つたまま後を向いたり前を向いたり、四つ這いになったりさせられて、死ぬほどの思いをさせられます。結局、そこにいるだけの十何人という殿方に、結構な観物の種にされてしまふのでございます。お医者様もその殿方達のお仲間ですわ。その証拠に、殿方達から何かお声がかかりますと——それは私達にとって地獄の悪魔の声ですけれど——、お医者様は、その御希望に答えるような仕打ちをなさ

います。時には、あまりな御希望が出ますけれど、誰かが金貨をお医者様のポケットにねじこみますと、ちゃんと望みが叶えられてしまうのでございます」

「それは、あまりにもひどいではありませんか。女官長や宮内卿がそんな事お許しになっておくのかしら」

そう言う私の言葉は、常識外れでした。私自身が加えられているさまざまな屈辱を思い合わせても、わかる事でした。

「そういう体験が、私達を従順なよい召使いにする一番の近道だとおっしゃるでしょう。きつとその通りですわ。始め生意気な召使いでも、こういう体験が重なりますうちに、皆すなおになってしまいますもの。……お医者様の診察が終了すると、終った人からお薬が与えられます。私達が一番いやなのは、このお薬なのです。これを飲みますと、たちまちお腹が痛み出して、立っていられなくなりま

のお薬は鞭うちの時に見苦しいお粗相がないようにという意味もあるのではないかと存じます。というのは、ひどい苦痛が与えられるのでございますから。鞭うちは、力の強いお坊さんが、満身の力をしぼってなさるのでございます。ベッドを使う事もありますが、たいていは床の上だとか、椅子の上にいろいろな形で鞭を受けやすいような恰好をさせられます。どんな場合でも、打たれますところは決まっておりますので、その姿を思い出し、すと、頭に血がのぼってしまいます。始めは懸命に身体をちぢめておりましたが、一度鞭がヒュッと振りおろされましたら、駄目ですわ。身体中ジーンとしびれてしまっています。自分がどんなあさましい姿を、殿方の前にさらしているかも忘れて、殿方の思うつぼにはまってしまうのでございます。あとで静かに思い出して苦しむのですわ」

「マギ、このベッドにおあがりなさい」

私はマギの肩を抱いて立たせました。マギが悄然として戻って来た訳が、すっかりわかって本当にかわいそうになったからです。私はマギが口には出しませんが、痛む鞭痕をがまんしているのではないかと思いました。私はマギを抱きかかえるようにしてベッドに上げて寝かせました。

そして打たれた痕を手当して上げようとし

ました。マギはちよつと抵抗しましたが、すぐに手を引っこめておとなしくうつ伏していました。

案の定、そこは幾条もの赤い筋がついて、痛々しくはれ上がっていました。私はそれを見て自分の事のように戦慄を覚え、大急ぎでオリブ油を持って来て、やさしく塗りこんでやりました。マギは痛そうに身体をふるわせましたが、

「ありがとうございます。御主人様。御主人様にこんな事をしていただいている所を見つかりましたら……。でも、御親切な御主人様を持って、マギはしあわせです」

と申しました。私はマギが大好きでした。ですからそうマギに感謝されますと、この上なくうれしいのでした。

十

王様が御帰還になりました。わずか四五日でしたのに、そのお知らせがどんなに嬉しかった事でしょう。私はいつのまにかそんなにも王様をお慕い申し上げるようになっていたのです。それに王様がいらっしやりさえすれば王子様の急襲もございせんし、いくら女官長でも勝手に私を罰することはありませんから、大きな安堵が得られました。

王宮にお仕えする私達のような女性は、本

当に王様だけにおすがりして生きて行くほかはない事を、痛感させられました。

その夜、王宮の大広間では、盛大なパーティが開かれました。それは、私が入内して始



めての賑やかで豪華なものでした。

私達が盛装して参りました時には、煌々と輝くシャンデリアの下に都中の貴族や市民の代表が集まっております、それぞれ装いをこらした優雅な姿で語り合っている情景は、美しい絵のようでした。おそらく何百人という数の人々だったでしょう。上品な貴婦人や老紳士、若い娘や生き生きとした青年達、皆この国のすぐれた階級の人々ばかりでした。私達が扉を開けて入って参りますと、皆の目がいっせいに注がれました。特に青年紳士達は話をやめて興味ありげに眺めています。中には早速親しげな会釈をしてほえむ方もあって、私などは我知らず耳まで紅潮してしまいました。

私はなるべくお仲間の女性達から離れまいとして、皆の後にかくれるようにしてついて行きました。皆はもうすっかり慣れているのか、そこに集まっていた貴婦人達と比べて少しも遜色のない態度で平然としています。中には青年達に向って嫣然と、ほおえんでみせる人もあります。私には、とても真似のできない事でした。

とまどいがちな私の気持を見てとったのか、イベントがそばへ寄って来て私の手をぎゅっと握りました。私もその手を握りかえして彼女の顔を眺めると、ニッコリ笑ってこう申

しました。

「今夜はお話できますのよ。あとで舞踏会が始まったら、なるべく殿方の申込みを受けないようにかくれていらっしやいね」

私がうなずくを見ると、イベットは離れました。今夜のイベットの姿は、よく似合うグリーン舞踏服をつけて、見まがうばかりあでやかでした。あのかわいそうな懲罰を受けている時のイベットとは、どうしても思えない位でした。

イベットの姿を見ているうちに私も落ち着いて来ました。この夜の私は、といえば、マギの懸命な奉仕のおかげで、イベットにも劣らないほど美しいに違いありませんでした。白とピンクの清楚な舞踏服に純白な腕衣、髪は前から後へさらっと流して、これもピンクのリボンできちんと押さえてあるのです。先刻、鏡の中の自分が驚くばかり美しく仕立てられている時の喜びが甦って来た私は、少しずつ自信を取り戻し始めました。気のせいか青年達の目が殊更、私の上に注がれているように見えました。私は、ゆっくりと大広間の中を見渡しました。

正面上段に玉座が二つ置かれているのは、今夜は皇后様もお出ましになるのですしょうか。横の方にはすでに威儀を正した楽士達も控えています。そして壁ぎわにはずらっと並

べられた無数のテーブルと椅子……。

やがて楽士達が起立して荘重な音楽を奏し始めました。人々もいっせいに正面を向いて直立しました。急にしんと静まった大広間の中を吹奏楽器の音が響きわたります。それは私など予期もなかった緊張した雰囲気でした。

正面の大扉が左右に開かれて、王様と皇后様が並んでお出ましになりました。その瞬間私ははっと胸をつかれる程の壮厳さを感じました。さすがは一国の王様です。雄々しい礼服にきっちりと身を固められ、きらめく王冠を頂いたお姿は、どうして私などを御寵愛なさる時の王様と思えるでしょう。あの立派なお鬚も鋭いお眼も、本当に王者らしい威厳を現わしていました。

それに反して皇后様は、見た所は御立派でしたけれど、始めてお目にかかった時の印象が残っているためか、どこか弱々しいお気の毒な感じがしました。それは後に知ったのですが、私の思いちがいではなかったのです。皇后様はこの頃、御出生国のシオンとこのシナライとの関係がうまく行っていなかった中で、王宮での権威も薄く、お苦しみになっていたのです。

お二人が玉座の前にお立ちになると、音楽は止み、玉様が次のようなお言葉を仰せにな

りました。私達はそのお言葉を聞いて、始めて今夜のパーティの意味と、王様がみゆき遊ばされた先とを知ったのでした。

「余は無事に大責を果たして戻った。ブルドニア国王との会談は大成であった。遂に戦わずして勝利を収めたのじや。余自らブルドニアへ出向した甲斐があったと思う。ブルドニア国王は、東部ブルドニアの大部分を我国に譲渡する事を約した。これで我国はいや栄え、いや富むであろう。今宵は皆と共に心から祝おう。」

すると人々の間から歓呼の声があがり、どこからともなくバンザイが始まり、全員がそれに和しました。

「シナライ、バンザイ。キヤタル五世、バンザイ」

音楽が始まり、盃が配られ、大広間は急に活気を帯びました。王様も大きなグラスをお持ちになって玉座からお立ちになり、老貴族や大臣達と御歓談をお始めになりました。料理人が多勢人々の間をまわって料理やお酒を配って歩きます。皇后様もいつのまにやら老貴婦人達に囲まれて楽しげに御談笑なさっていました。

私はじっと王様のお顔を仰いでいました。胸の中が何か感激でいっぱいでした。そうです、それは熱い恋心でした。この王様を國中

の人々が心からお慕いしている理由がわかる気が致しました。

まもなく舞踊が始まりました。私も一人の青年に手をとられて、ワルツの渦の中に入っていました。本当にほんやりしていて、くるくると身体がまわり出すまで相手がどんな人であるのかも気付かなかった程なのです。

「おお、あなたは美しい」

そう小声で囁かれて相手の顔を見ますと、まことに端正な貴公子でした。私はその時やと笑みを浮かべました。

「お名前を、どうぞ。僕はスラヴ男爵です」

「レイ・モールです」

「レイ・モールさん。お邸はどちらですか」

「ここでございますわ。陛下にお仕えしておりますの。故郷はずっと遠い所でございますけど」

「おお」

彼は明らかに失望の色を浮かべました。でも私は別に気になりませんでした。その時私はハレムの寵妃であることに誇りと喜びを感じていたのですから。

一曲、一曲と曲は進んで行きました。その度に私は若い貴公子達の申込みを受けて休むひまもありませんでした。でもこんなに楽しい事はありませんでした。久しぶりで気儘におしやべりをし、踊りまわって日頃の単調な

生活も一度に吹きとんでしまう気が致しました。他の女性達だって同じ事だったでしょう。いつのまにかイベツトや、その外の方達もちりじりに殿方のお相手に専念しているのです。

人々は酔って顔をまっかにしていました。それでも後から後からと運ばれるグラスがたちまち空っぽになってしまふのです。御婦人方も平気でお飲みになっているさまは、私には驚きでした。

スクエアの踊りをしております時に、偶然王様と同じ組になりました。王様も赤いお顔をなさって、上気嫌でいらっしやいました。

でも一つだけ気になる事がありました。それは、王様がしきりに一人の若い貴婦人と親しげなそぶりをお交わしになり、そばへお寄りになるとおたわむれになるのです。私以外の誰もがそれには気付いていない様子でしたがその夜の私は王様に関してはとても敏感でした。とうとうその曲が終わった時、王様はその貴婦人と連れだって隅のお席の方へ行かれようとしていました。私は只、茫然とそこに立っておりまして。すると不意に王様は私をふり返ってご覧になり、

「おお、レイ」

とやさしいお言葉をかけて下さいました。

「そうじや」

王様は私を見ながら仰せになりました。

「そちは、この子爵夫人を余の室に案内してくれぬか」

「はい、陛下」

そしてこの夜、私は奇妙な立場におかれてしまふのでした。

十一

王様の御寝所の豪華さ、といったら——実際に見た者でなければ想像がつかない程でございます。

広さは五十組の男女がワルツを踊ってもまだ余る位ありまして、さまざま設備や調度がおかれてあります。一番美しいのは、室の三分の一ほどの面積にしつらえられました室内庭園でしょう。黄金の実をつけた植物や、花盛りの灌木が焰々と照る灯りの下にやわらかな陰影を投げ、その間からはチヨロチヨロとかそけく水の音さえ流れ出して参ります。そして照明の操作一つでいろいろなシルエットを作り出すその美しさは、本当に夢のお国へ行ったようです。更にその茂みの中には生きたオルゴール、つまりいつでも妙なる調べをかきならせるようにハープをかかえた女官が侍っているのです。

一方には薄羅を垂らした陰に、こんこんと溢れ出す湯をたたえた大浴槽があり絶えず淡

い芳香を放つように細工された、香守の大理石の彫塑が立っています。この浴槽にも常時美しい女官が侍っております。

ベッドも特大で、五人並んで寝むことができそうな程です。ここにも四六時中、二人の女官がおつき申し上げているのです。

このお部屋で天からこぼれ落ちる星くずのようなハーブの音を聞きながら王様の御寵愛を受けた私でした。幸せではありませんが同時に恐ろしく、そして苦しい程の羞恥を感じた私でした。

そうして王様とこのお部屋とを独占した形の私でした。

ですが、私が案内して来たはずの子爵夫人は、このお部屋に入ったのが始めてではなかったのです。それは物なれた態度ですぐにわかりました。私は何か満たされない、失望のようなものを感じました。ほんの僅かですけれど、この若くて美しい貴婦人を憎いと思いました。

まもなくお顔を酔いで真赤に染めた王様がおいでになりました。

「おう、アリカ夫人、そなた

はいつ見ても輝くばかり美しい」

王様は上気嫌でいらっしやいました。夫人と私とは、うやうやしく床にひざまずいて、王様の左右のお手に接吻致しました。その御挨拶が終ると、夫人は王様に抱き起こされ、私だけが床の上にとり残されました。ふと悲しい気持になりました。

「久しぶりで、ピリッとした余の鞭を、そなたの怠惰に慣れた体につかわそうかのう」

王様はお笑いになりました。夫人はさしうつむいて、

「はい、陛下」

と嬉しそうなのです。

「陛下」

その時私はおそろおそろ申し上げました。「レイはお退り申し上げましょうか」

どうやらこれ以上居てはお邪魔ではないかと感じたからなのです。

「うむ、いや、そちも居るがよい」

とのお言葉でした。いつもならば早速にも私に接吻をたまわる王様ですのに、それだけでした。私はうつむいたまま、そこに坐っていました。

「ここへ参るがよい」

「はい、陛下」

お二人はベッドの方へいらっしやった様子で、

「そこへ膝をつくのじや」

サラサラと衣ずれの音が致しました。

「まあ、陛下」

「そうしているのじや。美しい女にはこれが何よりじやて」



ヒュウツと風を切る音がしました。思わず顔を上げた私の目に映ったものは、ベッドに上半身を投げ出して下半身を床の上に落した夫人の姿と、今や王様のお手に握られた幅の広い鞭が、試し振りをされて柔軟にくねった所でした。

「レイ、ここへ来て、余の手助けをせい」

王様は私にそうお命じになりました。私は御命令通り夫人の横に行き、指示されるままにドレスを押さえました。

王様は仁王立におなりになって、鞭をお振り上げになりました。思わず心にあっと叫んで顔をそむけた途端、私の耳もとでバシッと皮膚の鳴る音がし、夫人は「ああ」と呻いて身をよじりました。

「どうじや。余の鞭の楽しさを思い出したかの？」

王様は更に二振り三振り鞭をお打下しになりました。夫人はその度に痛そうに体をよじり「あ、陛下」と叫びます。私は次第に自分が打たれているかのような錯覚を感じていきました。

「そうじや、もっと全面を打ってやろう」

バシッ、バシッと鞭はつづけざまに振り下ろされました。夫人は呻き、何とか鞭を逃げようとし始めました。傍にいる私は身体中が熱して来て、じっとしてられないで、夫人

にしがみついてしまいました。

その私を、王様は夫人が逃げようとするのを私が押さえつけようとしているとおとりになつたらしく、

「そうじや。しっかり押さえて居るのじや」

と仰せになります。そのお声は先程とは違って、恐ろしい位強く激しいものでした。

私を御寵愛なさる時の王様とは、まるきり違った王様でした。

私に対してはあれほどやさしく、しっかりとなさっている王様が、どうしてこんなに残酷なことをお喜びになるのでしょうか。

バシッ、バシッと鞭はつづきました。私はもうすっかり怖えて、夫人の膝の上に顔を埋め、逃げ出したくなる気持ちを必死に堪えていました。夫人は、

「ああ、お許し下さい、陛下」

哀願を始め、泳えきれないというようにもがき苦しむのでした。

やっと鞭うちが終った時、私はヘトヘトに疲れてしまって、そこに坐りこんでしまいました。夫人もしばらくは、じっと動かずに休息しているようでした。

けれど、どうしたというのでしょうか。たった今まで苦しげに呻いていた筈の夫人が、そんな事は忘れてしまったかのように、御自分で身づくろいをなさって、王様にこんなことを

を申し上げるのです。

「陛下、陛下のお力は身体の中にまで浸みわたりました。又ねむられない幾夜かを送らねばなりません。陛下は罪なお方でいらつしやいますわ」

すると王様は、さも御満悦げに高笑いあそばされるのでした。

「それならば又いつなりと参るがよからう」

「まあ」

夫人は私に気付いて申しました。

「どうなさったのでございましょう。この方はお顔の色までおかえ遊ばして」

その言葉には、本当に驚いてしまったのです。夫人こそお顔の色をかえて痛みをこらえるはずでしょうのに。

「この方には、陛下はまだお鞭を参らせないのでございますか。こんなにびっくりなさっていらつしやるではございませんか」

すると王様は、こうお答えになりました。

「食物にも、ナイフを使って食うものと、スプーンを使って食うものと、いろいろあるうがの」

「まあ嫉ましいお言葉を」

「さあ、人に気取られぬ間に戻るがよい」
そう言われて夫人は、うやうやしく王様のお手に接吻をして一人出て行きました。
あとに残った王様は、傍らの侍女にお酒を

お命じになり、さすがにお疲れの色を見せながら長椅子にぐったりお倚りになりました。私は、といえ、その王様にも負けない程の疲労を感じて、じっと床にうずくまったまま動けないのでした。私の臉には、あの美しい夫人が苦悶に怯えながら、見る見る間に無惨な鞭痕に彩られていくさまが、鮮明に焼きつけられていて、なおも恐ろしい戦慄を覚えさせるのでした。もう幾度か見聞きした出来事ですのに、私にはどうしても慣れてしまう事のできない、酷い印象でした。

でも、そのために王様をお慕いする気持ちが少しでも傷ついたものではありませんでした。王様のなさる事は、すべて絶対の御命令であるかのように、私は従順に受け入れていたからです。私は典型的なハレムの一員になりつつあるのでした。

十二

世の中には、ずい分と変わった方があるものだという事を、やがて私がもう一つ知る機会がやってきました。

その後、何かと御多忙だった王様が、久しぶりに昼餐のあと私をお召しになって、いつもながらのおたわむれに時をお過しになつていた午後なのです。

女官の一人が、王様にお目にかかりたいと

いう女客のある事を告げました。それはディージイ公爵夫人でした。王様はその名をお聞きなると、ソファからお立ちにもならず、すぐ通すようにとお命じになりました。

ディージイ公爵夫人の名前は、私もよく知っており、王様の御従妹に当られるお方で、その御夫君の公爵は国中に知られた勇将だったのです。もう大分前に公爵は御他界になり、今は未亡人の夫人だけがディージイ家ただ一人の存在なのでした。けれど、国のいろいろな慈善事業や、社会事業にたずさわって、その功績は御夫君にも劣らぬ名望を集めていらつしやる方でした。

その公爵夫人が入って来た時、私は思わず（この方こそ、本当の貴婦人だわ）と心に叫んでしまいました。それほど夫人は上品で優雅でした。お年がら少しばかり肥っていらつしやるのも、かえってそのおだやかなお顔に氣品を添え、よく洗練された装いは、もとより、その身のこなしも今までに見た事のない優美なものでした。

「何を申しに参った？」

王様の方からお声がかかり、見なれた固い御挨拶もなしに、お二人は打ちとけた態度でお話を始めるのでした。

「陛下、きょうは孤児院の計画を持って参ったのです。ぜひ、お聞き取り下さいませ」

「またそなたは金を引き出しに参ったな？。ハハハ……、よからう、あとで大臣に言いなさい。そのかわり、きょうはその話一つしか聞かぬぞ。よい。そのような話はやめて、ゆっくり休んで行かぬか」

「はい、仰せどおりに」

そんな会話の間、私はこの著名な夫人の横顔を飽かず眺め入っていました。お年を召したとはいえ、モール伯爵夫人に比べては驚くほど若々しく、まだ三十才になったばかりと思われるのでした。聞くところでは、これほどにも違ふものでしょうか、多彩な活躍で知られた方とは信じられない位でした。

「陛下はまた愛らしい姫を得られました事」

と、夫人は王様の横にかけている私を見て微笑しました。

「そなたも妬くか」

王様もお笑いになりました。私は面映ゆくて頬の染まるのを感じました。

夫人の視線は、思いの外、執拗に私の顔に注がれて、なぜか私はとまどいました。

「妬きは致しません」

夫人は、いいました。

「けれど私の事もお忘れになりませんよう」

「そなたは何が望みななのじゃ」

「まあ、お意地の悪いこと。私にそれを言えとおっしゃるのでございますか」

「おお、そうか」

王様は、はたと自らのお膝をお打ちになりました。

「ならば望みを叶えてつかわそう。ひとつ、ばかでかい奴をな」

そして王様はお立ちになりました。

「まあ、ひどい事を。でも嬉しゅうございませわ」

夫人も心もちお顔を赤らめながら、なまめかしい媚態をお示しになるのです。

私は一体、何のお話かと思ひながら聞いていました。夫人の、何か王様におねだりしている様子が不思議でした。しかし、次の王様のお言葉で謎が解けると同時に、私は夢を見ているのじやないかと思う程びっくりして、文字通りあっけにとられてしまいました。

「では浣腸室に参るがよい。」

この上品で美しい夫人が、事もあるうに自分からそんな事を望むとは！。しかもその楽しそうな、明るいお顔はどうでしょう。

お部屋の隅から一人の侍女が立ってお供をしようと致しますと、王様の後からついていらっしやろうとした夫人は、

「陛下、きようはこの方をお連れ下さいませんか」

と私をお指しになりました。

「うむ。ならばそちが参って手伝うよう」

王様に言われまして、私も夫人の後に従わされたのでした。

あの、もう既に幾度か入った事のあるお部屋で、私は王様の背後に身をかくすようにして眺めておりました。夫人は、すっかり御用意なさって、寝台に横になっていました。若々しく美しい背が、印象的な白さでこちらに向けられていました。

本当に王様は、ばかでかい器具を両手にお持ちになっていました。一リットルも優に入りそうな、金属製の浣腸器でした。

私のお役目は、その後でした。そのお役目を果たすために、私は深い皿型の道具を持っていました。とても、いやなお役目ではありましたが、できるだけ親切にやさしくと努めました。

夫人は、すっかり私のやり方がお気に召したようでした。そのお部屋での奇妙なプレイが終わりますと、夫人は王様に、一度私を招待させて下さいとお頼みになるのです。長くではない、二三日でよろしいのだと、なかなかお許しにならない王様をかきくどくのです。

私は、この夫人が、そんな事をした後でも、きらいではありませんでしたので、できるならば王様のお許しが出て、遊びに行けますようにと心の中で祈りました。それに、王宮へ来てから一度も外出した事のない私でした。

王宮の外へ出てみるというだけでも、大変な魅力なのでした。

「よかろう。そなたに会うては余も敵わぬ。いつなりと連れて参れ。そのかわり、きちんと三日の約束じゃぞ」

王様は、ついにお許しになりました。夫人は、ニコニコして私の腕をとり、やさしく唇をつけて下さいました。私も何とはなしの期待に頬をほころばせてしまいました。

マギに聞きますと、こうして外出を許されるのは全く異例の事だとの事でした。私が、よくよく王様のお気に入りであったから、という理由のようでした。(未完)

『女体浣腸風景十二態』

モデル 大塚 啓子嬢

大手札(9×13センチ) 印画紙焼付

十二枚一組 九百円

略号 (ちふ)

『女体滌腸連続フォト』

モデル 愛川 悦子嬢

大手札(9×13センチ) 印画紙焼付

十二枚一組 九百円

略号 (ちよ)



旧い日本の面影

切腹研究夜話(十)

中 康 弘 通

先年の本誌に、「変った切腹の掟」という題で、東北地方の旧家に伝わる家憲の伝承が記されていた。そういう話が何処まで事実であらうかと、不都合のあったものは年少の女中に至るまで十文字の切腹を命じたという厳しい掟のあり方に、余りきびしすぎて非現実的な感じもし、些か疑問を抱いたのであったが、たまたま、雑誌「朗」本年二月号で、新田次郎氏の随想「切腹座敷のあった家」を拝見したので、ここに氏のお許しを得て一部を引用させて頂く。こういう文章は、この場合

建築関係という特殊な分野の雑誌に載ったので、歴史的な考証として読まれ、記憶される可能性に乏しいと思われるので、特に注意した次第である。

(前略) 私の家は信州の諏訪で周囲が山にかこまれており、私の生れた当時養蚕業が盛んだったために、古い平家をこわして、総二階に新築したものであった。

(中略) この私の生家の二階の隅に四畳半があった。その部屋だけはなにか

特別の意味があるのか、誰も入れなかった。そういうふうな家の法則を作っているのは、当時、家の采配を振っていた祖父であった。

私にはこのおじいさんが世界中で一番おそろしい人であった。(中略) この少年時代の新田氏が、小学四年生の時土蔵にある武具が珍らしさに、三本槍の穂を折ってしまったのである。

祖父にえり首を擱まれて四畳半に坐らせられたのは、その直後であった。

「この部屋は切腹座敷だぞ。」

祖父はそういつて、出ていく時、外からしんばり棒をかった。(中略)

切腹については、かねて祖父から聞いていた。大事な家宝を折った罪で四畳半の切腹座敷におしこめられた私はひよっとすると祖父が刀を持って切腹しろといいに来るかも知れないと思つた。

その恐怖で私はふるえていた。(略)

こういういい伝えは、大きな戦争の起伏とともに、記録が焼かれ遺跡が害なわれ、やがて老人の記憶からも薄れて行つて、次第に消耗してゆくであろう。

いつか、田島春代という人が本誌の読者通信で、祖母君の物語りとして、むかし女が切腹するときの身支度など記されていたし、また筆者のもとに寄せられた手紙の中にも、妙齢の女性が終戦時、自刃するに際し、祖母に教えを乞い、その教えのままの作法通り切腹して潔く世を畢えた、という例もあったけれども、そんな形式でも語り伝えられるのは極くわずかな部分で、大概は忘れられてゆくのか、と思うと、何か旧い日本の総べてが忘れられて行くような感慨もする。

かつて幕末から明治にかけては、紅毛碧眼の駐日外交官さえもが、書き遺そうとした旧い日本での出来事が、今日では日本人にさえ

も顧りみられなくなつて行くのであろうか。

(註) 英国人ミットフォード「旧日本の面影」を著す。その他にも外交官の報告書、見聞記多数あり。また小泉八雲の著書も多い。

そんな昔のことばかりでなくても、ほんの十数年以前のことにしても、今年もまた八月十五日が廻つて来るのか、と思うと、終戦前後に顕現された殉国の至情が、殆んど文字通り、夏草に埋もれたままに推移してゆくことに、つまり、純烈無比の憂情を一口の日本刀に托した人々の最期を想えば想うほど、その悲壮な心事を後世に伝えるべき責めの果たされぬことに、いい知れぬ淋しさを感じるのである。是をしも非力な筆者の徒らなる繰りごとというべきであらうか。また今の世にあり得ぬ純粹さに胸を搏たれるのは筆者だけであらうか。

(追記) 本誌八月号で藤山秀緒さんの文章を拝見して、感じたままを一言、附け加えておく。

今度の氏の文章が、従来の氏の文章の背景をなすものの解明に、一つの示唆を与えていることはいうまでもない。然し、氏の内面的な懊悩と其の哀歎は、徒らに誌上で指摘すべきものではない。かつて筆者が信太蓉子氏の「開花の契機」を分析した如き試みは遠慮すべきであらう。一つには信太氏とは直接書信

を交し許容を求めることも出来たけれども、藤山氏とは其のすべもないことゆえ御諒解も頂けまいし、よし頂けたとしても、筆者自身が青年の客気に委せて書き続けた往時を顧りみて些か、みずからに慚愧するところもあるからである。

藤山氏に限らず、信太蓉子氏をはじめ幾人かの女性の方々の文章やお手紙から判断した範囲では、強度のナルシズムの具象化が、擬態に繋がっている、という感じを受取った。

そして此のことを卒直に申上げたために、文通も絶えた方が少くない。藤山氏も、やはり私見を全く誤りとされるであらうか。

氏の文章に「男性化願望」という言葉が見える。たしか筆者の古い執筆になる「女ハッキリ」という文章の中で、「男性化願望」を以て分析した側室の挿話を示したことがあった。そうなると藤山氏の場合は単なるナルシストではないのかも知れない。

察するに藤山氏は筆者と同年輩の人の様である。戦前から戦時にかけて初・中学教育を受けた人の様である。いわば広い意味で思考の場を筆者と共通にする人といえよう。氏が内包する精神的苦悶のいたまじさを筆者が理解出来る様に思うのは、一つには其の故かも知れないと思う。氏の御多幸を祈ってやまない。

倉

の倉

三々木卓史

作
画



信吉が中学校の制帽を脱いで、真新しい鳥打帽子をちよこんと冠り、風呂敷包み一つを抱えて大阪へ出て来たのは、関東大震災の翌年、大正十三年の正月過ぎであった。父が急に逝くなつて、母一人の手では三人

の兄弟達を養なつて行けないと云われ、母の友達が女中として住みこんでいると云う大阪の店へ頼んでもらつて、丁稚奉公に行くことになつた。

「大阪の駅へ着いたら、みんなが改札口を出

て行つても、じつとホームにいるのだよ。お松さんがホームへ迎えに出て呉れることになつてゐるのだから慌てて迷い子にならないように、そして服の胸の名札がよく人の眼につくようにしているんだよ」

小さな故郷の駅の待合室で母は、くどくどと信吉に云い聞かせた。

「うん、立派な商人になつて帰つて来るから心配しなくてもいいよ」

母や弟達と別れるのは辛かったが信吉はまだ見ぬ都会の賑やかな景色を頭に描きながら元気に云つた。

「他国へ行くと水が変わるから、身体には呉れぐれも気を付けるんだよ」

「わかつてるよお母さん。それより弟たちのことを頼みますよ」

汽車の窓から帽子を脱いで、それを大きく振つた。母は木綿縞の筒袖の袖口を頬に当てた。それを見ると信吉も急に悲しくなつて思わず

「お母さん」

と大きく叫んだ。ゴトン、ゴトンと車輪の音と共に、母の姿も故郷の駅の小さなプラトも、次第に小さくなつて行つた。

○ 信吉が、お松さんと共に梅田の駅を出たの

は早や夕暮れ近い頃であつた。彼は、まず駅前に渦巻く大勢の人の波に驚いた。まるで渦になって流れて行くような人の洪水に呆然としてしていると、手を曳いていたお松どんが「さア、急いで行こ。そないに、ほんやりしていたら、あかんがな」

と云つて電車の停留所へ連れて行つた。そして「霞町行」の電車に乗つた。信吉は複線の反対側の電車の行先も「霞町行」となつてゐるのが不思議でならなかつた。

——大阪ツて、変な処だなア——と思ひながらも、必死で満員電車の吊皮にぶら下つてゐた。

途中で一度乗換えて、二人が降りた処は、信吉が想像していたような賑やかな処ではなく、古い建物と倉庫とが入り組んで並んでゐる淋しい街であつた。そこは海産物を取扱つてゐる問屋ばかりが集つてゐる街で、乾魚特有の匂いが街のそこ此処に漂つてゐた。

「さア、ここだよ」

と、お松どんが先へくぐつた古めかしいのれんには、紺地に白で「八三」と大きく染め抜いてあつた。山三商店というのが信吉の奉公する家であつた。

○ 翌日から信吉は、お仕着せの厚司(あつし)に松下駄と云う姿で働くことになった。この家には主人夫婦の外に、二十一になる久子

と云う娘と、小学校へ通つてゐる敬一と云う男の子の四人家族で、奉公人は為七と云う番頭を初め、手代、小僧や女中を合わせて十四、五人もゐる大世帯であつた。

信吉は、藤七という三番番頭について廻つた。藤七は三十才ばかり、大勢の奉公人の顔がどの顔もみな白々しい眼で自分を見ているような中に、この番頭だけが何も分らぬ信吉に同情的な素振りを見せて呉れてゐるようだった。

夕暮れ頃、手持無沙汰のほんの一刻を、夕陽に映える倉の壁に凭れて、茜色に変わつて行く雲を眺めてゐると、故郷の母や弟達の顔が眼の前にちらついて、思わず涙の雫が頬を伝つた。

「おや、この子、泣いてんやワ」

ふいと通りかかつた久子が、信吉の顔を覗き込むようにして、いたずらっぽく笑つた。

「とうはん(お嬢さんのこと)。誰かて奉公に出たときは淋しいもんだす」

「そやろか。わてら淋しい氣持なんか、持つた事あらへんし。あんたもしっかりしいや」藤七が倉から出て来て、信吉を庇うように云うのを、久子はそう云つてはね返した。

——我儘に育つてゐるのか、氣位の高い女だなア——と信吉は唇を噛みながら久子の美しい顔をそつと見た。

「信吉とん、今日はもう終い^{しま}や。そこいらを

掃いたら、手を洗つて店へ来なはれ」

藤七は、そう云うと、前に締めてゐる帆前掛を、ほんぽんとはたいて店の方へ出ていつた。

「信吉のお家は、お松の家の近くやの？」

久子は、ぼつと出の信吉の戸惑つたような様子を面白そうに見ながら話しかけた。いかにも大店のお嬢さんらしい氣品のある垢抜けた久子の姿に、信吉は何か氣押されるような氣がした。

「いいえ、遠いんです」

「どの位あるの？」

「さあ、山を二つも越すんです」

「そんな田舎かいな。そんな遠いところから出て来たんやから、しっかりと商売を覚えなアカんよ」

久子は、そんな事を話しながら、まだ都会ずれのしていない信吉の様子を珍らしそうに見凝めてゐた。

○ 「おい、起きや」

と、隣りに寝てゐる手代の佐七に頭を突つかれて、慌てて跳び起きた信吉は、厚司を着て革バンドを締めると、薄暗い店の土間へ降りた。他の者はまだ広い店の間で、思ひ思の格好で眠つてゐる。

中庭の隅にしまつてある掃除用具の中から竹箒を取り出すと、音のしないように表の潜

り戸をあけて戸外へ出た。人通りのない海産物の問屋街の夜明けは、軒並みに掛けた屋号を入れた筵の看板が、冷たい朝風に揺れていた。

信吉は身体を縮めるようにして、隣りの家の表から順に表の通りを掃いていった。この店では、朝起きて顔を洗う前に、それぞれ仕事の分担があった。雑布がけをする者、手洗鉢を磨いて水を張る者、奥に飼っているカナリヤに餌をやる者などで、一番番頭は火鉢に火を入れるだけで、あとは順番に仕事の位がついていて新丁稚の信吉の表掃きが一番寒い辛い仕事であった。

信吉が寒風に吹かれながら半分程掃いた時店の潜り戸から女中のお松どんが顔を出してそっと手招きした。

信吉が彼女の後について家に入ると、まだ他の者は蒲団を冠ったまま眠っていた。お松どんは信吉を漬物小屋へ連れて行くこと

「暗いけど、ちいッ和我慢しいな」



と云って出て行ったが、直ぐに大きな握り飯を持って入って来た。「みんなが起きんうちに、早よ食べや」

「ありがとう、おばさん」

信吉はそう云うと、一気にその握り飯に噛りついた。それは両手に余る程大きな、まん丸い握り飯で、中に塩昆布が入れてあった。「奉公て辛いもんやけど、気を強よう持って辛抱するんやで」

お松どんは、夢中で貪り食っている信吉の顔を見ながら、はげますようにいった。信吉には何だか母の言葉のように感じられて心に泌み込んでいった。

春が来て、店の者達は今年の運動会（店員の慰安旅行のこと）について、いろいろ話し合っていた。それは奉公人達にとっては年に一度の官費旅行であり、最大の楽しみであった。

「信吉、お前済まんが運動会の日には留守番しててんか」

と番頭に云われ、

「へい」

という新参の信吉を残して、当日は夜の明けぬうちから、がやがやわいわい騒いで仕度をし、八三の印の入った小旗を持って出て行ってしまった。

信吉は表の大戸を下すと、手箱の中から近所の古本屋で借りて来た雑誌を出して読みはじめた。広い家が空洞のようにガランとして静まり返っていた。

暫らくすると奥から女中のお松が出て来て

信吉の傍へ寄った。

「今日は居残り食わせられてんのやな」

と気の毒そうに云った。

「洗濯物溜めてんのやろ。出しいな、洗うといたげるさかい」

「いいんですよ。僕が洗いますから」

「僕（ぼく）なんか云うてると、小僧の癖に生意気なッてばやかれまっせ。いいからお出し。わてのも、これから洗うんや。一緒に洗うといたげるわ」

「さよか、えらいすんまへん」

「そやそや、大分、大阪弁が板について来よりましたな。さあ、遠慮せんとみんなここへ出しなはれ」

「そんなら、頼みます」

信吉は物置部屋の行李の中から、汚れた下着類を持って来ると、

「たったこれだけだったか。こんなもの、ぼろくそや」

と笑いながら奥へ持って行った。

○

昼食が済むと、主人夫婦は子供を連れて「ちよつと百貨店へ行って来るさかい、留守を頼んまっせ」

とお松と信吉に云って出て行った。

「ちよつと、こっちへ来てんか」

お松は二人きりになると、そう云って信吉

を奥の倉へ連れていった。

「お店、誰も来えへんだっしやるか」

「おついたち（一日）は、みんな休みや云うこと知ってるさかい、大丈夫や」

そう云いながら倉の戸をギーッと締めると急に暗くなった。高い窓が半開きになって、そこからわずかに光が入って、高く積まれた

乾し鰯の入っている吠を浮き上らせている。お松は倉の隅から藁箆を持って来て、そこへ敷いて信吉を坐らせた。

「信吉とん、恥かしいこっちやけんど、一ぺんだけわての頼みきいて呉れへんか」

「頼みて、何だす」

「わてな、まだかたずかん頃、あんたのお母さんと面白い遊びをしていたんや。二人でこ

つそり谷の水車小屋へ行ってな、お互に縛りごっこをしたんや。あんたのお母さんは力が

強かったよつてに、何時でもわてを縛り上げて、さんざん苛めよつた。水車小屋の米搗き

杵に縛りつけられるねん。空白やけど、荒縄で縛られたわてが臼の中で伸びたり屈んだり

えらいこっちや。そんな格好のわてを、また竹箆の柄で小突いたり叩いたりして、まるで

おもちゃやわ。でもあの頃が懐かもうて、よう思い出したもんや。この手を、こんな風に

して。ナア、信吉とん。まだ年も若いアンタには悪いんやけど、真似ごとでもええよつて

一ぺんお母さんがしたようにして見て呉れへんか」

んか」

信吉は聞いているうちに、急に頬がほてつて来るような気がした。薄暗くてよくは分らないが、お松も上気しているようであった。

「ぐるぐる巻きに縛られ、あのさんきり（滑車）で宙に吊り上げられたら、苦しいやろなア」

と信吉の肩に片手を掛けて倉の天井を見上げた。其処にはかますの荷積み用に天井に大きな滑車が取付けられ、太い綱が、だらりと床の上まで垂れ下っていた。

「ねえ、信吉とん。頼むさかいに縛つてや」

すると、薄暗い中で帯を解く音がした。暗がりに馴れた信吉の眼に、やがて、お松の長襦袢姿がホンノリと映った。今まで女の長襦袢だけの姿など見た事のない信吉にはとても面はゆくて正視できないような気がして眼をそらした。

「なア、早よしてや」

お松は、しなやかな両手を後に廻して、誘うように上半身を信吉の膝へ投げ掛けた。その瞬間、椿油の匂いが、ふッと信吉の鼻をかすめた。

信吉は傍の藁の縄を取ると、おそろおそろ後へ廻しているお松の白い手首に廻した。

「そこでいったん結えて、それから胸へ廻すのやで」

そう云いながら上体を起すと、今度は大き

く胸を張った。

「そないに遠慮せんかて、もったときゅッと、きつう締めてんか。そこやない。ああ、そうやそうや。まだもつと何回も巻いて呉れたらええのや」

信吉は、お松に言われるままに、縄を掛けていった。大きくはだけた丸い肩が白く輝いて信吉には痛々しいように思えたが、お松は身体をくねらせ、その緊縛感に満足しているように眼を閉じていた。

信吉は、お松に云われるままに、その上体を縛ったが、その大きな体を持てあましていた。そうかと云って、じつと後から支えているのも、何だか気が咎めるようであった。

「おばはん、縄がきつうて苦しいのと違うんか？」

と氣遣かしげに覗き込むと

「何云うてんの。久し振りに縛って貰うたんで、身体が痺れるようで、ええ氣持や。序でに足も縛ってえな」

と甘えるように云って、うんとお松のけぞったので、そのまま、どしんと荒筵の上に転がった。

「そंनाにしたら、なお苦しいやろに」

「かめへん、かめへん。信吉どんて意氣地がないんやなあ」

「そない云うたかて……」

「ナア信吉どん、すまん。あんな、大きゆ

うなっても、こんなこと絶対にしたらあかんのやで……わてが無理にこんなことさしといてゆうたらおかしいけど、わてはこंनाにして貰いたいのがさかい、今日だけは、夢みてる思うてかんにんしてな。他に頼む人てあらへんものナ。ほら、あそこの隅に長柄の棒摺があるやろ。あれでこの身体を、うんと突いたり叩いたりしてんか。あんたの足で、無茶苦茶に踏んづけて呉れたって構えへんのだっせ」

信吉が踏み込んで、別の縄で左右の足首を揃えて縛ると

「その縄尻を後の手首に通して、うんと引っ張って——」

と注文した。

「もつと、もつと」

と云う声に、きりきりと締めると、お松の両膝が割れて俯伏している体が弓なりに空に反った。胸が張って苦しうだった。

「ああ、きつうて何とも云えんわ。早よ棒摺りを持って来てえな」

苦痛を耐えようとする為か、その顔に少し汗が滲んでいるようであったが、眼には一種異様な媚を湛えて信吉の姿を逐っていた。

「こんな格好で、苦しいだろうに」

信吉には、お松の変った氣持は分らなかつたが、いつも眼をかけて優しくして呉れる人が云うので、のそりと立って倉の隅に立てか

けてあつた棒摺りを提げて来た。

「さあ、打ってえな。でも顔だけは、かんにんしてや」

「変つたお人やなあ」

そう呟いたが、打つのは余りにもむごたらしい氣がして、軽く突いた。

「なんや、そんな真似みたいなことでは、あかんし。頼みやから、もつときつうして」

「痛うても知りまへんで、あとで恨まんといとくれやす」

「なんの、きつうして呉れる程嬉しいんや」

お松は、そう云って身体をぐるりと横倒しにしたが、信吉はたじろいだ。そうでなくさえ、先刻からの生れて始めて見る狂氣じみたお松の要求と肢体の動きに、ともすれば眩惑しうになつていたのである。

「おばはんの身体、わて、よう打たんわ」

「何で苛めてくれへんの？」

「だって、氣の毒で見えられへんもの」

「あかん信吉どんやな。ほんなやつたら、わてを仰向きにして、その棒摺りを胸の上へ縦に置いて、その上へ足で乗ってんか」

「そないなことしたら、息がつまるやろ」

「何でもええから早よう、そうしてえな。頼みや。ナ」

そう云って、お松は自分の力で仰向きになろうと身体を揺すぶつたが、両手足を後で縛られているので、それは不可能なことであつ

た。

信吉は仕方なく、お松を仰向けにし、その胸のあたりに棒摺りを横たえた。そしてお松の顔を見ないようにして片足を、みぞおちの辺りへ掛け

「えッ」

と軽く掛け声をかけて、ひよいと棒摺りの柄の上に跳び上ったが、後の足がその柄の上に揃った途端、はずみで前へすとんと降りた。お松は

「あうッ」

と軽く呻いたが、ほんの一瞬だったので

「直ぐ降りたら、あかんがな」

と、なじるように云った。

「降りたんやない。落ちたんや」

「あかんナア……」

「今度は落ちんように上りまっさ」

「足を開いて踏ん張らな、又落ちるんや」

「よいしょっと」

今度は少し身体を屈してそっと左足を棒摺りの柄に乗せて片足立ちに右足を浮かせた。

「ああッ」

と、お松が呻いた。荒縄で締め付けられている上から竹の棒が、人間一人分の重力で押え付けられているのだから、大抵苦しいに違いない。しかも手足は、その背の下に縛り止められて、胴体が弓なりに反っているのだ。荒い呼吸をして、必死に苦痛を耐えようと



しているのが信吉に感じられた。

——むごい姿だな——

そう信吉は思った。

「もう、ええやろ」

と云って床の上へ降りた。

流石に、お松は直ぐには口を利かず、はあッ、はあッと大きく呼吸を弾ませていた。信吉は、

「ほら、えらい汗や」

痛ましげにお松の顔をのぞきこみ、

「もう、ええのだったしやろ」

と、足首の縄を解いて、続いて後手の縄も解こうとすると

「ああ、信ちゃん、待って」
と喘ぎ喘ぎ止めた。

「信ちゃん、お願い。あのさんきりで、わてを吊って」

「そんな無茶な——」

「無茶でも構えへんね。信ちゃんが打って呉れんさかい、その代りやわ。な、背中吊ったら、あんまり苦しいことないと思うわ」
そう云いながら信吉の処へ、いざり寄って来た。

「仕様ないなア」

信吉は「負けた」と云う顔付きで、お松を立たせると、綱の下っている滑車の下へ連れ

て行った。

「どないに綱を掛けよ」

「どないでもええんや。しっかり括つていてや」

そう云うと、眼元でニコツと笑った。

——宙に吊ったら、今度は思い切つて棒摺りで打って見たるか——

信吉はそう思いながら、お松に綱をかけたが、荒縄よりも太いので思うように締まらなかった。お松は観念した者のように、じっと眼を閉じている。

「さあ、吊りまっせ」

信吉は、お松の耳許でそう云うと、だらりと垂れている綱を取つて、するすると引いた。お松の背と天井の滑車との間にたるんでいた綱が、ピンと張った。

——キリ、キリ、キリ——

滑車の軋む音につれて、お松は爪立立ちになり、一揺れぐらりと揺れて斜に前のめりの姿で宙に浮いた。急に全身の重みが綱へ集まったのであろう。お松は

「あうッ」

と呻いた。そして宙に浮いた体が綱のよじれにつれて、くるりと廻った。

丁度、その時である。倉の戸口から急に明るい光が射して洋服姿の久子が入って来た。

「信吉。お前、店番もせんと、こんな処で何してんね？」

「へえ」

信吉は久子の突然の出現に吃驚して、急には返事も出来なかった。

「あの、お松どんが——」

と云いながら、慌てて手で曳いていた綱を緩めたので、お松は危うく横倒しになりかけたのを、よろめきながら立った。

「お松、その格好は何や。みんなの留守をええことにして、ふざけてたんやな」
「済んまへん、勘忍しとくれやす」

お松は久子の顔から眼をそむけるようにして頭を下げた。

「信吉、お前、お松の後に立って両手を上げとき」

「え、何だす？」

「ふざけていた罰や、わてが、これから二人を折檻したるわ」

「あれ、とうはん。信吉どんには罪はあれへんのだす。わてが無理に頼んだんやさかい。

信吉どんは勘忍してやつとくれやすな」

「お前は黙つとり、信吉、ええか」

久子は其処にあった荒縄を取ると、高く上げて信吉の両手首を固く縛り、お松を吊っている綱へ、しっかりと結えつけた。

「信吉どん、勘忍してや」

お松が背中越しに小さな声で云った。

「何をばやいてんね」

久子はそう云うと、信吉の締めている革の

バンドをすりと外した。

「ええか、信吉もお松も、よう思い知るのやで」

革のバンドを右手にした久子は、そう云いながらピシッピシッと信吉の左の肩口へ振り下ろした。その途端に

「呀ッ」

と声を上げたのは、お松だった。バンドの先端は信吉の肩を越して、お松の胸に躍ったのである。

次は信吉の胸へ一ト鞭。だが、これも却つてお松の方が苦痛は大きかった。久子は信吉を責めているような格好で実際は、お松を責めているのである。

ピシッ、ピシッ、とバンドが鳴るたびに、お松は呻き声をあげて身をよじた。信吉も苦しかったが、それは耐え切れないと云う程の激しさではなく、閉じている眼を、うっすらと開けて、久子の行動を見る余裕があった。

久子は頬を赤くしながら両足を大きく踏ん張ってバンドを振っている。

「おや、あそこに、えらいええもんがあるやないの」

バンドを振う手を休めて、一息入っていた久子は先刻、信吉が使った棒摺りが隅にあるのを見付けると、その方へ行つた。信吉は怖る怖る首を後へ捻じ向けたが、久子の姿は見えなかった。やや、あつて

「怪我さしたらあかんよって、こないしたらどうや」

と云う久子の言葉と同時に

「あッ、とうはん、やめて。かんにんして」

とお松が叫んだ。

「お松！こんな若いもんに、こんなことさしてええのんか？」

「ああッ、かんにん」

信吉には見えないが、棒摺りの先端がお松の胸の縄目に喰い込んで、縄がひきしぼられてゐるらしい。

先刻まで信吉にあればど責めを望んでいたお松が、苦しい呻きを上げるのが、信吉には不思議に思えた。久子に対する気持の上からわざと仰山な素振りを見せているのか、それとも、お松が耐え得る以上の苦しい責めなのかと、そんな事を考えていた。

「うわッ、うッ、うッ」

と呻き、爪先立って藻掻き出した。

「これにこりて、そんな妙な病気をはようなおしや。ええか」

そんな言葉と殆んど同時に

「ううッ」

と、一際苦しげなお松の呻きが起って、プツリと小さな音と共に、お松の締めていた縄が、棒摺の柄によじられて切れたようであった。

「信吉や、なんば頼まれても、もう二度とこ

んなことしたらあかんで、ええな。早よお松の縄を解いて、お店へ出や」

久子は、信吉の手首の縄を解くと、さとすようにいって倉を出て行った。

「おばはん、しっかりしいや」

信吉はぐったりとなつてゐるお松の縄を次々と解いた。ワラとはいえ、ひきちぎれるまで絞られた縄の跡が、はだけた胸について痛々しい。

「きつかったやろなア」

と云いながら解いた縄を丸めている信吉の手を握ったお松は

「信ちゃんまでをえらい目に会わせてしもて……かんにんしてや、ほんまにかんにんしてや、わては悪いことしてしもたなア」と云つて眼を閉じた。その眼尻から涙の玉が、スーッと尾を引いて流れ落ちた。

——終り——

臨時増刊号

「青い廃院」

定価 二百円（送共）

「青い廃院」

弓沢俊二郎作、四馬孝画

美貌の踊子に執拗につきまとう無気味な男。婦女誘拐団の魔手に陥ったレビュースター。

「与那国奇談」

永山久美雄作、杉原虹児画

南支那海に浮かぶ与那国は世に云う女護ヶ島。女ばかり住むこの孤島に展開される男性共有の風習。

四馬孝画「青い廃院」画廊

- 美貌の人
- 苦悶する美貌
- 踊り責め
- モデル責め
- 美女誘拐
- 屈辱の責め
- 廃院の中
- 救出

▲変ったレッスン（表紙裏）
▲受 縄（目次裏）

本文内容主な項目

青い廃院（弓沢俊二郎）

- 一、三人の男
- 二、地の底にあるもの
- 三、美貌の人
- 四、劇場に居た二人の男
- 五、忠告
- 六、美女誘拐
- 七、苦悶する美貌
- 八、屈辱の責め
- 九、踊り責め
- 十、探索行
- 十一、廃院の中
- 十二、モデル責め
- 十三、手繰りの網
- 十四、救出
- 十五、勝者の心

与那国奇談（永山久美雄）

- 女護ヶ島与那国
- 股裂きになる女
- 人肉の炙り焼
- 筏流しの刑罰
- 女百人に男一人
- 股裂きと火焙り
- 孤島の殺人



マゾヒズム百景

馬場好男

第二十三景 映画から

本誌にも度々紹介されたが、大映映画「氾濫」には、全くマゾヒスト向きのシーンが可成りあった。劇の構成には其の余地はないが部分々々には第一が、船越英二を馬にして三宅川和子が乗り廻すシーンだ。此の馬乗りのシーンは「痴人の愛」の時より迫力があつたのは、静でなく動だからだろう。

「痴人の愛」では、京マチ子が宇野重吉を馬にしたのはよかったが背中あたりに軽く腰掛けた程度だった。それが此の氾濫ではハイシハイシと部屋中を這い廻らせるのだ。然も画面はワイドで、その三宅川和子のグラマー

な姿態のポリュウムが、むんむんと観ている私を威圧する様で、服装も洋服とか和服でなく、短いネグリジェにショートパンツでハイドウハイドウと乗り廻すシーンは、圧巻中の圧巻であった。尚、多勢の観客がこのシーンを見ているという事と、劇中、この二人のお馬ごっこの最中に、第三者が現われてこれを見ると云う事に、私のマゾ意欲はますます高鳴ってしまった。普通なら、仮に私がそんな事をしていても、トントンとドアがなかったら、いそいで立上り、何でもなかった様な顔で現われる。処が此のシーンでは、三宅川和子は船越英二に起ち上る事を許さず、来訪者に対して

「はい、どうぞ、あいてますから」と、馬のりになったまま客を招き入れるのだ。

「みてごらん。私は、こうして男を馬にしているんだよ」と誇示する強さというか、或は現代女性の奔放な態度というのか、こう云う女性になら私は一生奉仕しても悔いがないと思ったりしたものだ。自分での空想では、若く美しい女性に馬乗りになって苛められる事から、第三者の前で、そんな目に逢わされる事を考える事もあるが、現実的に(映画だが)此のシーンがあったのは、たまらない程のシヨックと云うものだった。余談になるが、私は此のシーンはシナリオを読んで始めから知っていたので、大いに期待していたのだが数

人の女性に封切りされる前に、それとなく此のシナリオを読ませて反応を知ろうとしてみた。勿論、伊藤整の原作の問題から話を始めて、それとなく「原作にはないが此のシーンには、こんな凄い事を本当に撮るのかね」と云った調子である。

A子は「さア、だってシナリオ通りに撮るんじゃない?」

B子は「だって、こんな事位なら何でもないワヨ。お馬ごっこしてるだけでしょ?」

C子は「凄いわね、これからの映画は。でも、こんなの嫌だワ」

D子は「私、早く見てみたい。きっと面白いわよ」

と云った調子で頭から否定する女性がないのには、本当に現代と云うものを感じた。又、面白いのは、此のうちのA子が、生半可な返事をして居り乍ら、産経新聞の映画欄に紹介された、只今撮影中の中で、此の氾濫の馬乗りのシーンが写真入りで出ていたのを、わざわざ買い求めていた事が偶然判ったことである。勿論、彼女の家は別の新聞をとっているもので、此の馬のりの写真、及び説明のためにのみ求めた事は間違いない。とすると、非常に此のシーンには興味をもったのではないかと思われ、多くの若い女性が、私も男を一度位、馬にしてみたいと、心ひそかに思っているのではないかと考えたりもする。

映画上映中、なるべく私は若い女性の傍に座を占めたが、

「まあ凄い」と云ってかみしめた様な笑いをもらしたり、穴のあくほど見つめたりで、一種異様なふんいきを、あのシーンではたしかに感じさせたと思っている。その他のシーンは、第二、第三、第四……とみた同じ様なもので、川崎敬三が叶順子に云い寄るのに、自分は坐ったままで、立っている叶順子の足元に伏れしたり、脚にキスせんばかりにしてみたり、若尾文子の処へ連れて行ってもらいたいと、両手をついて半身低頭してみたりするシーンである。

それから九月号の読者通信にも氾濫と一緒に出ていたが新東宝の暴力娘も我々むきものだったと云える。万里昌代が神岡と云う男(俳優名を一寸忘れました。役柄の名)を床の上に正座させて椅子にかけたまま見下しているシーンは特によかったと思う。マゾ愛好者にも、趣味がいろいろあるので判らないが、私は特に、脚の美しい女性には殊更ひかれてしまう。

勿論、脚がよくて顔が悪くては困るが、此のシーンでの万里昌代の脚の美しさは、私も共に身を投げ出したかった。此の外、大映々画「鍵」も見応えがあったと思う。マゾ向きに考えると谷崎油一郎の原作にしては、まだまだ失望此の上ないが、それでも、

美しい女体の前には如何に男が無能であるかと云う事を見せられると、別な意味の満足が得られるのだ。

東宝の「貸間あり」にも乙羽信子の馬乗りの処があったが、氾濫には及ばない。

日本映画も段々と、こう云ったものが多くなって来たので、我々もまだまだ生きなければならぬと、つくづく思うのである。

第二十四景 旅の恥はかきすて

社用で一週間ほど四国の松山市へ出張で行った時の事だ。四国と云えば、ペギー葉山の「南国土佐を後にして」の歌謡曲がヒットし都市対抗野球では松山市の丸善石油が優勝、それから例のミス・ユニバース・コンテストで見事、世界第一位の美女となった(我々には女神である)児島明子さんが高知の出身で、一寸した四国ブームだが、此の四国の松山で私は旅の恥を一つかき棄てて来たのである。

社用も思いの他早く片ずき、予定より自分の時間を多く持てた私は、今度の出張が、いわば招待された側になっていて、いろいろと利点の大きいのをいいことにして思いきり遊んでみたのである。市内の盛り場を相手会社の人に案内されて遊び廻っているうち、ある酒場ですっかり意気投合した女性があった。

名前は加代さん。自称二十二才。なかなか

特高拷問史

庄田 美起夫

の美人で、グラマースタイルを少しづつめたくらいで、和服ながらそのポリュームは、酔った私のマゾ感をかき立てるのに十分だった。彼女も相当酔っていたには違いないが、私にとって運がよかったのか悪かったのか、とにかくこの加代さんが云ってくれたのだ。

「アナタ面白そうなお人ネ、私でよかったらお相手するワ。どこか落着くところで飲み明しましょうか？」

何が面白かったのか知らないが、私に否やはある筈はない。粹を利かしてくれたつもりであろう案内の人の計らいで、ある料理旅館の一室で差し向いになれたときの私は、酔のせいではないホテリで体中がカッカと火照っていた。

「さ、飲みましょうヨ」

女中さんが酒肴を置いて退くと、彼女が私に盃を差した。私はそれを受けたものの、先刻からの痛飲が祟ってか、にがくてとても飲みほせない。そのまま卓に置いた盃を加代さんが見とがめた。

「アラッ どうしたの？」

「いや、もうとても駄目だ」

「まあ、あれっぽっちのお酒で……。弱虫！ 飲まなきや駄目よ！ サア、……どうしても私の盃はあけられないというの？」

加代さん、余り酒癖がよくないらしく、傍へにじり寄って来てからみ出した。

「いや、そういう訳では……」

「じゃあお飲みなさいよッ」

という訳で、私はにがい酒を飲まされた。

「ナニヨッ、飲めるじやないの。サッ、もう一つ。かけつけ三杯ってことがあるワ」

「もう、もうカンベンしてくれッ」

「駄目！ お飲みなさい。サア、……飲まないの？ どうしても？……よしそれならこうして……」

というなり加代さん、いきなりすごい勢いで私をお向けに突倒して、胸の辺りを膝で踏みしき、トクリをとってドブドブ私の顔にかけだした。美しい顔に似合わぬ凄じい酒乱症である。

「これは大変な女だ！」と、浴せられる酒にむせながら思ったが、それと同時にソクソクと湧き上る嬉しさを感じた。一目見たときのマゾ感がホンモノだった訳だ。それから私は意識して彼女にさからった。案の定、加代さんは益々荒れて、組み敷いたままの私をさごんごんこずき廻したり、絞め上げたりして苦しめてくれた。お蔭で日頃の念願の一部を實現することができた。

それでも自分の酒癖は知っているとみえて、翌朝には恥しそうに謝った。私は「とてもない」といいたるところを押えて、「いや大変に面白かったよ」というと、「まあ！」と一言いって、まじまじと私の顔を覗き見ていた。或いは皮肉？ と受取ったのかも知れない。

とにかく私は二日酔も、寝不足も感じない程上気嫌で、その日、松山市をあとにしたのである。とんだところで南国土佐ならぬ四国をあとにした訳だが、旅はよいものである。又、機会があったら、加代さんに荒れてもらいに行きたいものだ。

呼び出された女は二十四、五才。鼻筋のとおった知的な瞳をもった女である。

しかし、三日前から夜も昼もなく二時間毎の責めに、清潔で豪華であった女のスーツはところどころ、ほころび汗とあぶらに地図のように汚れている。よく見れば十分睡眠もとれず、食事も与えられないで、血走った眼は真黒に限どられ、狂い出す前のようにうつろ

になっている。肌色も鈍い。
 女はアーム・チェアの手すりに両手首を固定され、足首も別々に椅子の脚にくくりつけられていた。そして首なわが顔をうつむかせない程度に椅子の背の上に尾をひいていた。女はキッと体を固くしたまま唇をかんでいく。いくら哀願しても悲鳴をあげても、気を

失うまでは許してくれない、この陰惨な責めを全く避けることが出来ないことを過去何十回にか及ぶ体験から知りぬき、絶望的になっていたのだ。
 女に加えられる責めといっても、体に傷がつくような、そんなひどいものではない。ひどいものではないかわりに、体中の骨と肉を



サはアーム・チェアの手すりに
 両手首を固定され

先の矛先の鳥
 の羽が足の
 裏でし
 一番敏感な

だいたいゆる
 相指の
 子ね目がけ

バラバラにほぐしてしまおうような、たえきれないものであった。ことに羞恥心の強い中流の良家の娘にとっては……。

また今回も違う男の顔が五、六人、彼女の縛られている椅子のまわりをとり囲んだ。これも責めの効果を考えての演出らしい。しかし、若くて美しい女の悶えを見る男たちの表情には、おさえきれない欲望の期待があった。それが女の羞恥心を一そう強くしているのも否めなかった。

彼女の係なのである、今迄何十回と自分をひどくいたぶった脳裡にやきついて指先が、思わず身を固くした彼女の胸元にしのびよってきて、スーツのホックを二つ、三つ、パチン、パチンと外した。胸元のふくらみが、むくりと盛り上ったように見えた。

「イイ、、、、、」

女は何回同じ動作をくりかえしたことであろう。しかし、容赦なくスーツの前ははだけられ、裂けたシユミーズの間から、脹れ上って一きわ大きく見える胸の双丘をあらわにした。男たちの眼がギラギラと紅潮する。女は無意識に身をよじった。すでに女の鼻柱に脂汗がにじみ出る。強烈なスポット・ライトが彼女の顔をまともに照らし出した。

徐々にパフが足の裏にあてられる。この柔い毛は軽くすべり、何回も何回も往復した。全くさわるかさわらないか、といった軽いタ

ツチである。それなのに女の足の拇指はピクピクとそりかえり胸をふるわせた。羽根のようなくすぐりは執拗につづく。息をつめたような昂奮がグングンと急坂をのぼりつめるのが、ありありと感じられた。

一分、二分……二分半、

身をひくようにしていた女が、グイと胸を前に突き出すと同時に女の顔はひきつったようにゆがみ、あごがあがってのけぞった。

「ヒイイイ……ユルシテ」

椅子の脚と括ったなわを引きちぎらんばかりに足をつっぱり、足の指全体を曲げたり反ったりしてもがくのを、なおも慎重に軽く軽くなでるようにつづく。女のもだえは、ますます烈しくなる。

「ムウ、ムムツ、ウー、……イヤア、イヤ、

イヤ、……アア、ユルシテエ」

押殺した呻き、甲高い悲鳴が交代して、女の精神状態がひきつってゆくのが、ありありとわかった。ハアハアあえぐ胸が大きくもり上って早鐘のようにふくらみ、しばむのが、この責めの効果をはっきり物語っていた。

先の柔い鳥の羽が足の裏でも一番敏感だといわれる拇指のつけね目がけて、ゆるりゆるりと往復運動を続ける。刺戟されている拇指のまわりには、激しい屈伸運動に、二重三重の肉の皺が盛り上って紫色に変色した、それがなおもピクピクと痙攣をつづけている。

胸のあたりは鳥肌が立って、そのあたりの肌が今にもピチピチと音を立ててハジケルように見えた。空気を求めてあえぐ女の開かれた口から、やるせない女の香りが蒸気となって噴出していった。そして圧力にたえきれなくなった汽罐の安全弁が働くように悲鳴がもれた。

「アアッ、イヒ、ヒ、ヒヒッ、ヒイ、ヒイツ、ヒヒッ、ユ、ユルシテ、ユルシテ」

それは全く冷やかに計算された若い女の柔い足の裏に対するくすぐりは、刺戟に対する効果が失われないように、まだ刺戟されていない部分を探り出し、露出されたわずかな面積から無限の苦しみをひき出そうとしていた。羞恥にもだえながら、おぞましい感覚に全身をふるわせていた女の体に、しばらくすると変化があらわれてきた。哀願の中に意味もない狂的な笑い声がまじってきたのである。計算されたくすぐりは、女の悶絶への昂ぶりをおし止めるように、ますます鈍くなってきたように見えたが、それは刺戟がますます集中し累積してゆくことを狙った悪虐なやり方であった。女の体中から汗がふきこぼれ下着をぬらし、スーツやスカートににじみ出てきた。と、一きわ女が高くもだえた。ピツとどこか女の洋服のほころびる音がした。「ウー、ク、クルシイ、クル、クル、シイ」急に女の体がガククリした。見ると女の目

は白くつり上っていた。この有様を見ていた男たちの口から「ホッ」とためいきがもれた。女の額からツウーと汗の玉が首すじの方へ糸をひいたが、女はビクリともしなかった。

カンフルを打たれた女は、うつろに目を開いた。なわを解かれ檻房にいれられたのも夢うつつの中で、彼女はぐったりと丸太棒のようにならびていた。

女の腰かけていたシートは汗ぐっしより濡れていたが、その中からスエタチーズのような香りが湯気と一しよに立ち上っていた。

× × ×

それから二時間後、前よりも一そうひどく憔悴した彼女は、再び同じ椅子に固定されていた。

「おいッ、Kのアジトをいうか、レポは誰に渡した？」

「し、知りません。あたしは何も知らないんです。かんにんして……」

女は弱々しく叫んだ。そして男の睨むような疑惑に満ちた視線にあうと、ハッと責めの恐ろしさを全身で感じとった。

「ユルシテ……、シラナイ。あたしは何にも知らない、ああ、ユルシテ……」

と絶叫した。それと再び女の胸元がはだけられる。またしても、ひきつるような呻きが、ドアの間からもれてきて隣室に居あわせた人の魂の底をゆさぶった。

彼女の入れられた独房にはトイレはなかった。三十分位前から、しきりに尿意をおぼえて、キンキンに張った下腹が切なく苦しかった。しかし、「トイレにゆかせて……」とたのむことは、男の看守に中々いえなかった。彼女はいまにも洩しそうになるのを、やっとの思いで三十分我慢した。もう限界がきていた。何一つないコンクリートの床に粗相したときのことを考えると、彼女は気の遠くなるような恥しさを覚えた。コンクリートの冷気はヒシヒシと襲ってきて、身ぶるいするような悪感に冷汗が額のあたりに、にじんでくるのだった。

「あああゝゝ」

思っただけでも、そして一寸手や足を動かしただけでも辛抱できなくなりそうだった。

「お願いです。トイレにゆかせて……」

今まで一度だって口に出したことのない言葉、彼女はやっとの思いで、まだ二十にもなるかならない看守に、消えいるような声でたのんだ。男はニヤリとして少女の顔をジロリと眺めた。あどけない少女の面影をのこしている十九の美しい顔には、監房にいれられるだけでもたえきれないのに、用をするのにさえ口に出さねばならない屈辱に、涙でうるんでいた。男にみつめられている間も、少女はたえきれないのか、体をこきざみにふるわ

している。

「お前、小便がしたいのか」

男は彼女をさいなむように、ゆっくりと言葉をきっていった。そうして、少女の様子がもうたえきれないまでに切迫しているのを見ると、

「よし、少し待っておれ」

と、係長のデスクに歩いていった。彼は係長に敬礼して報告した。

「係長殿、女は小便が出たいそうです」

少女はその声をきくと、思わず顔をおほった。

「そうか、じゃ、ここへつれてこい」

監房のドアが開けられると、少女の顔に一瞬、喜悦の表情が生れた。しかしトイレとは反対に警官のたくさんいる事務室の中へひきすえられたとき、彼女は絶望的な気持ちにつきおとされた。敏感な少女の感覚が、これからおこることを無意識の中につかみえたのである。彼女は思わず前かがみになって肩をおとした。

「おい、しゃんとしろ、ビラは誰にももらた？ いえ、いえば小便に行かせてやる」

彼女は下腹からキリキリしぼりあがる痛みに思わず、しやがみこんだ。

「おい、何だッ、云わないか、云え」

羞恥心が一瞬とびそうになった。いくらい

じめられてもいい、この苦しみさえのがれることができるなら……。だが、そのとき彼女のひとみに入ってきたのは、好奇の目で自分を見つめている十数の男の目であった。体がキュッとちぢんだ。

「じ、しりません。ただ、あ、あああ」

彼女はからだをちぢめ、こちこちに固くしてもだえた。もうこれ以上何かいうと、それこそ男たちの目の前でたえきれない醜態をさらけ出してしまいそうで、そのあとのことを思うと、もういても立ってもいられない。羞恥心がやっこのことで生理に勝ったのだ。いや、この場合は恐怖が生理に勝ったのだ。ほんの一時のことではあるけれども。

「おい、言うのか言わないのか、はっきりしろ……え、何だ」

このとき、係長ははじめて、女のコチコチにちぢんでしまった様子に気づいた。

「何だ、余程出たいんだな、こんなところでされては困る。よし、地下室へつれてゆけ、あそこなら、いくら汚してもあとでホースで洗い流すことができる。」

彼女は何のことかわからなかった。しかしここから連れ出されるということはトイレに近くなることだ。彼女はキレイな顔をしかめながらも、やっこの思いでおいたてられるまま部屋を出た。(未完)

新連載長編第三次元小説

影^{かげ}の国^{くに}

雪 俊 遙

第一章 改革へのいけにえ

予審判事は丸顔の小男だった。窓を背にして椅子に腰掛けていた。その両側に判事補と部長刑事が一人ずつ腰掛け、更に両側に二人の書記がノートを開いて座っていた。

後手に括り上げられて引立てられて来た四人の夫人は、机を隔ててその前の椅子に座らされた。数珠繋ぎにされていたので、並んで座ると、後手に廻した四人の間に繋ぎ縄が丸く垂れて、ゆらゆら揺れた。護衛の刑事が一人々々の後に六尺棒を構えて立った。

前も後も屈強の男達に囲まれているので、夫人達は皆、娘の様に可憐に見えた。

「どうだな。一晚、暗い部屋でゆっくりと考えて、白状する気持になったかな。え、島田」

先頭に引立てられて来た、金縁眼鏡の美しいが陰高そうな四十前後の夫人が、キツとした顔で、

「知らないことは申上げられません」

男の憎悪を挑撥する様な言い方でしか物の言えない女の一人であるらしい。

予審判事は意地悪そうにニヤツと笑った。こうゆう女に最初にこう答えさせておくと、後の女も結局、似た様な返事しか出来なくなってしまうのだ。無駄に彼はこの商売で飯を食ってはいなかった。

「星は、どうだ」

「存じません」

「関は」

「私も知りません」

「川島」

最後に呼ばれた女は、胸がくびれる程キュウツと縛り上げられた縄目の上に、がっくり垂れていた首をおこして、おどおどした様な目で、暫く返事をためらっていた。

「……知らないん、です……」

予審判事は満足そうに、もう一度ニヤツとした。やはり俺の思った通りだ。一番年の若いこの女は、きめつけければ真先に口を割る奴だぞ。

「知らっばくれても駄目だぜ。先月、行われた都拡同の秘密集会には、城北区代表として、お前達四人が出席したことは、公安当局の方で確実に調べ上げてあるんだ。その席上で、学拡連の二人の娘が、超次元ロケットで次元の違いを乗り越えて、我が日章国と同じ民族が住む日本国へ脱出し、彼等の次元感覚では知覚し得ない所にある、いわば彼等にとっては影の国に当る、我が国の実情を訴えるという決議がされた。そうだろう？川島」

「存じません」

「しぶとい女だ。言うまでもなく、我国には、拷問法と俗に呼ばれている特別刑事訴訟法がある。お前達は四人ともこの法律を適用して、拷問によって自白を強要されるべき人間なのだぞ」

「……………」

「俺が迅きたいのは当日の出席者、殊に集会の主宰者と、それにつながる地下組織、女権拡張党のメンバーの名前だ。ことわっておくが、脱出特攻隊に選ばれた二人は、ロケット基地に忍び込んだ所を発見されて、逮捕された。今頃は警検庁で責められている筈だが、白状し次第、特別処刑法に従って、うんと残酷な公開死刑が執行されるだろう。そうなれば当日の出席者全員、相当の処刑は免れない。事前に白状すれば、裁判の時に酌量されるから、白状してしまった方が利口だと思うがな」

「……………」

「では、とにかく予審拷問を執行する。誰が真先に口を割るか、俺にはもう解っているが、不公平な訊問はしたくない。四人、一度に同一拷問を課する。立て！」

背後の刑吏が一斉に六尺棒を構えて、四人の背中を、どんと突いた。流石に蒼ざめて四人が力なく立上った。

「上を見る。太い梁が一本渡してあるだろう。上半身をむき出しにして、お前達をあすこへ吊し上げる。いいな。白状する者は今の内だぞ。……。どうやら居ないらしい。じゃ、かかれ」

声と同時に、四人の刑吏が、棒をかなぐり捨てて、四人の女性をその場に押えつけた。

ギリギリ巻きの縄が外された。

「アレッ。何をするんです」

「いやいや、ヒーッ」

「許して。許して下さい」

咎める声は一番背の高い星夫人。拒んで悲鳴を上げたのは一番肥満型の関夫人。哀願するのは言うまでもなく川島夫人。島田夫人のみは、キツと柳眉を逆立てて判事を睨みつけ、見苦しい姿は見せずに、されるままになっている。

白い上品な顔によく映る、濃紫色の地に白い大きな火星蝶を一匹浮かせた羽織を脱がされ、天体絞りの帯揚げを解かれ、白い帯締めを外され、紅の木星渦を正面に描いた帯をほどきにかかっても平然としている。

席に座った男達も、星夫人や関夫人よりも、際立って気品の高い島田夫人の方に、すっかり目を奪われてしまった形。それも無理はないので、一人だけ抵抗しない島田夫人が、一番早い速度で上半身があらわにされて行く。

黄色い細帯一つにされた島田夫人は、その細帯を、結んだまま、襟許に逞ましい男の手をかけられたかと思うと、アッという間に、

羽織と共の御召と、紅縮緬の長襦袢を重ねたまま、一ぺんに肩を抜かれてしまった。

「ア、アッ」

という様な声をあげて、流石の島田夫人も、あわてて胸の双の隆起をかくそうとしたが、もう鳩尾の下まで着物で着物を抜かれているので、白い二の腕がすっかりあらわになって、襟許がひじのあたりに縛縄の様にしかかかって、胸に手をまわすことも出来ない。

気の強いインテリ夫人らしい、一寸中性がかった顔が、みるみる内にポーツと赫らんで、流石に羞しうなだれてしまった。

担当刑事は、情け容赦もなく右腕、左腕と、順に襦袢の袖から抜かせ、そのままひじを掴み背中へ持って行く。

指先が薄い肩越しに前からのぞいて見えるぐらい捻じ上げ重ねておいて、手首より少し下のあたりを器用に括り合わせた。

険のある目許に、女らしい羞恥と苦痛の色が浮ぶ。朱い唇を自嘲気味に歪めて、

「フフッ。流石に縛り方が巧いわね」

担当刑事は答えない。とにかく下膊部の真中あたりを後手に縛り合わせてしまうと、島田夫人をそのままそこに立たせて、後の壁の違ひ棚の方に歩いて行った。そこには責道具が沢山並べてあった。

裏返った紅縮緬の長襦袢が、濃紫色の御召と袖や襟を重ねたまま、足の方へ垂れている。



どんな責道具が取出されるか心配なのか、島田夫人が身体をよじって後を振向いた。それで、背後に重ねられた彼女の腕が予審判事の目にも、はっきり見えた。骨細のふくよかな白い腕が、天体絞りの帯揚げで、くびれる程に強く縛られていた。リボン結びに縛られているので、夫人の背骨が目立つほど肉の薄手な後姿が、少女の様にいじらしく見える。

担当刑事が持ってきたのは、四枚の厚いラシヤの様な布だった。まだ泣いたり喚いたりしながら、夫々のドレスや和服を脱がされている三人の方へ、一枚ずつその布を投げてやってから、刑事は残った一枚を持って、険しい夫人の背後へ廻った。

「縛りにくいから座るんだ。座ったら上半身を少し前へ倒せ。胸にも縄を廻すんだから、胸はぐっと張ってなきやいかんぞ」

細い金縁眼鏡を光らせて夫人が言われた通りの姿勢になると、

「フフ。いざという時には、一番生意気な女が一番素直になるから面白いもんだな」

背後へ廻り、両手の下膊部を横にキチンと重ね合わせて、のり巻きののりの様に、そのラシヤ布でビッシリと包んでしまった。丸く巻かれた布の端から、両腕のひじのこぶと、反対側の腕の指先だけが白々とのぞいている。

布の上から、左右一カ所に三巻、縄目をキッチリと並べて麻縄を巻きつけると、内側で一旦縛ってから、二本の縄を平行に、背中

へ当てがって、肩の中程へ食い込ませ、脇から二の腕へ廻して、背中を斜めに反対側の縄元へ持って行く。大の男に、力まかせにひしひしと麻縄を食い込ませて縛られるので、縄が締上げられる度に、「ムッ、ウーン」

と呻いて、勝気そうに、紅のあざやかな薄い朱唇をキッと噛みしめて苦しみを堪えている。

「よーし。さあ、立つんだ」

縛り終った刑事は、縄許を掴んで島田夫人を引越した。

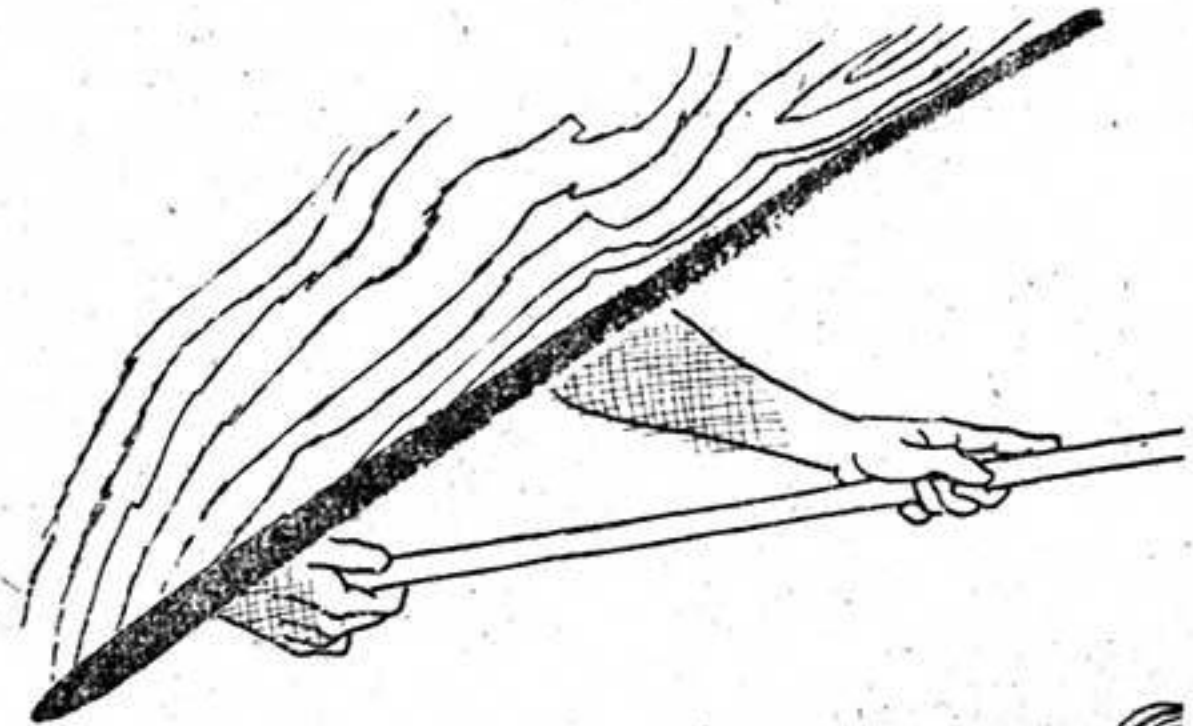
いつでも吊るせる様に、椅子の上に乗って、縄先を頭上の梁についた金具に通し、それを更に背後の柱についた鉄の環に通している。

梁には所々そんな金具が取付けてあって、その後には必ず柱が立っていた。柱には、床から一尺位と六尺位の二箇所環がついている。梁から廻した縄を二つの環に通して柱に結びつけると、重い人体を長時間、吊下げておいても縄がずれる恐れがないからだ。

既に、この影城警検署、鎮圧係調室の建物が出来てより、何百人、いや何千人の犠牲者が、この太い梁の下に吊されたことであろうか。どの柱も、縄を結ぶ部分は深くえぐれて、溝になっていた。

外の三人が同じ様な恰好にされてしまうまで、島田夫人は吊し寸前の姿で、そこに立っていなければならなかった。

「どうやら準備完了の様だな。どうじゃや？やっぱ痛い目に遇わなければ白状出来んなかな」



半裸姿で釣金具の下に立たされた四人の夫人を一度り見廻して、判事は最後の念を押した。

両端の島田夫人と川島夫人が和服姿で、細帯を境に裏返しにされた着物の先が、床に届きそうにぶらぶらしている。真中の二人は洋服姿なので、スカートのベルトの所から、裏返しのスリッパをぶらさげていた。

「返事はない様だな。じゃ吊し上げる」

ギッ、ギイッ、ギイッと金具が鳴って、四本の床縄がピンと緊張した。

「アッ、アッ、ツウッ」

「痛、痛、痛ッ！」

「イーッ、ウッ、ウッ」

「ウーン、ムッ、ツーツ」

四通りの声と共に、殆んど同時に、四人の身体が吊り上った。

ズイッ、ズイッと、縄は四つの身体を徐々に引上げて行く。

身体の重味が縄にかかって、柔肌もちぎれよと食込む麻縄。

コの字に縛られた腕が反り上る。

口を衝く悲鳴。

「イイッ、イイッ」

目と眉を吊上げ、唇を噛みしめて激痛をこらえる顔には、ネットリと不気味に光る脂汗が噴き出て来る。脂汗は顔ばかりか、背中にも、胸にも……。

縛り上げられた上体をかがめ、豊かな体をくねらせ、足が宙を駆ける。

苦痛の為に、野獣の様に面変りした関夫人は、

「ウォーッ。ウォーッ」

と恐ろしい声で号泣しながら、豊かな体をゆさゆさとゆさぶっている。一番体重があるので、縄の食い込みも一番烈しくて、皮下脂肪の厚い胸には縄がうずまって見える位であった。

その日の夕方、三人の少女が縄目も痛ましく護送車を降され、影城警検署の正門の中へ消えて行った。

二階の取調べ室には川島夫人だけが残っていた。

彼女は鉄の棘がビッシリ植えてある台の前に立たされていた。

係の刑事が、冷たい語調で命令する。

「オイーお前はこの上にうつぶせに寝るんだ」

「ヒヤアーッ。そんな怖ろしいことが出来る筈ありません」

「出来ないことがあるものか。さあ寝ろ！」

上半身をむかれたままの夫人を皆で抑えつけて、暴れ泣く夫人を台の上にのせ、両手で台を抱かせて、台の下で手首を縛ってしまった。足は台の端の所で足首を抑えられた。

短かいながら鋭い棘先はチクリチクリと容赦なく肌を刺す。

夫人は台より前に出ている顔をのけぞらせ、

「ワアーッ」

と喚くと、身体に力が加わって、一層、激しく突刺さる。

「どうだ川島。それで白状しなければ、その姿のまま太い鞭でビシビシと叩いてやるぞ」

「ウワーッ、許して、許して下さい。私は本当に都拡同のことは何も知らないんです」

「まだそんな寝言を言ってやがんな」

四人の刑事が、手に手に厚い帯革を持って、台の両脇に並んだ時、——カチン、カッ、カッと重い鉄扉が外からノックされた。

「川島宮子の三人の娘を捕縛して参りました。」

「オオそうか。丁度いい所へ引立てて来たな。入れ」

「ハッ」

ギッ、ギイーッ。

鉄扉が重い音を立ててあくど、後手に縛り上げられた三人の少女が、純白の猿轡も痛々しく、引立てられて入って来た。

「よし。この女に、自分が拷問されるのを見た娘達がどんな顔をするか、とつくりと見せながら苦しめてやれ。オイ、枕許にその三人の女の子を座らせるんだ」

「いいな。じゃ、かかれ」

声と共に、左脇に立った男が、幅が十糎もある帯革を、ビュインと振り降した。

ビュシッ。

「ウ、ウアーッ。」

豊満な三十女の背に、帯革の幅だけの赤い鞭跡が、みるみる無残に盛上って来る。

のたうつ体に新しい棘が刺さる。

「イ、イ、イ、イッ」

涙の目が、おびえて真蒼な三人の娘の顔に、すがりつく様な視線を向けた。涙で視界が崩れて、娘達の顔がボヤッとぼやけて見える。まだ若さの失せきっていない夫人の白い頬を、透明な涙の玉が伝い落ちる。後から後から湧いて出る新しい涙。

ビュシッ。

「ウウッ」

鬼畜の鞭が今度は右の肩胛骨の上へ。烈しい棘の痛みが、全身に伝わる。

ビュシッ、ビュシッ、ビュシッ。

一定の間隔をおいて帯革は、その背中に確実に叩きつけられた。

どんなに痛くても、棘の台の上に寝かされている身体は、思う存分のうち廻ることさえ出来なかった。涙ばかりが、次から次へと湧上って来る。

「ヤ、やめてえーっ」

急に火がついた様な呼び声がした。

氣息奄々の思いで目を上げると、涙でぼやけた目に、次女の珠子が猿轡を口から外し、ヒステリーの様にひきつけられて泣く姿が辛うじて捕えられた。

「タ、珠子。ナ、泣くんじやないよ」

「でも、見てもらえないわ、私」

「ア、有難う。ウツ、私は、私は、どうせ、いつか、こうして責め殺される日が来ると、思っ、ウツ、覚悟して、いたんだよ。お願いですから、娘達に話して聞かせる間、この拷問台から、下して下さい。」

「よし、大分苦しめたから下してやろうか」

手首の縄を解かれると、夫人は、ドサリと棘の拷問台からころがり落ちた。

後手に縛り上げられた三人の娘が、その周りへ、いざり寄る。

「猿轡を外してやって、暫く親子四人にゆっくり話し合わせてやれ。里心がついたら、この女も白状する気にもなるだろう。母親の方もしっかりと縛り上げておいて、皆は一旦、ここから引揚げらるんだ」

「死物狂いで逃出す様なことはないでしょう」

「大丈夫だろう。が、念の為、足枷もかけて、鎖で繋ぎ合わせておけ」

数分後。縛り上げられた母親と、娘達が部屋の中に残された。

四人とも板の足枷で両足を挟まれ、首枷までかけられている。その上、四組の首枷と足枷は、端に小さな金属の鎖が附いていて、細い鎖で数珠繋ぎ。これでは間違っても逃げられそうもない。

「お母様。お辛かったですよう。」

と末娘の美喜子。これはまだ十四才の、痛々しい少女である。

「女を捕えて、こんなむごい拷問を公然とやれる国なんて、今はもう宇宙中でも私達の国位のものよ。お前達が私ぐらいの年になる頃までには、私達の国も女権党が政権を取って、鎖国をやめ、きっと母様がいつもお話している、外界の国と同じ様な文明国になっていくてはね。私は、お前達の将来の為に女権拡張運動をやらなくてはいけないと思っ、この運動に入っただけで、責められている内に、本当に自分が正しかったのかどうか解らなくなって来てしまったよ。」

「お母様。もう剛情張ったりなさらないで、何でも知っていることは、すっかりお話して許して頂いたら？」

「でもそんなことは出来ないのよ。この運動の人達は、皆さん、私達の国で絶えず行われている拷問とか、残酷な処刑とか、奴隷制度などを、何とかしてなくしようと、それこそ命を投出して働いている人達ばかりなんですから。私も、こうなった以上は、あの棘のベッドに何週間も寝ていなければならなかったって、その人達を裏切ることなんか出来ないのよ」

「でも、それじゃあ、お母様が殺されてしまっじやありませんか。いいえ、それどころか、私達だって……。女権党の秘密黨員であることが解ったら、その人達は皆死刑で、その家族は奴隷に売られてしまっしょう」

「それが珠子、間違っ、法律なのよ」

「幾ら間違っ、法律でも、現に私達の国の政治を、残酷なことが好きな男の人達がやっていて、その法律通りのことをやっているの



すもの。間違っているといってみたって始まらないわ。私は奴隷にされるのなんていやです。そんなの、お母様の一人よがりよ」
川崎夫人は目を閉じて、ふっと溜息をついた。ついさっきまで、棘のベッドの上で、悲鳴を上げて泣いた顔は蒼ざめ、やつれて、後れ毛が額や頬にかかっている。
「ねえ、お姉様。そうでしょう？　どんなに立派そうなこといっていったって、子供を奴隷にしてもいいなんて考える親は親じゃないわ。ねえ？」

珠子はムキになって、姉の愛子に向って、食ってかかる様に同意を求めた。
愛子は下脹れのポッチャリした可愛い顔に当惑の色を浮べて、妹の視線をそらせ、
「そんな。……お母様だって、いいなんて思っでやしないと思うわ……」

姉の煮え切らない態度に腹を立てた珠子が、もう一度食ってかかろうとした時、

ギッ、ギイ——ッ。

重い音を立てて鉄扉が開き、予審判事を先頭に、影城署、鎮圧係の男達が、ドヤドヤと中に入ってきた。

母娘の顔色が、さっと変った。無気味な沈黙が四人の上を支配した。不言な予感で心臓が早鐘の様に鳴った。

「どうだ女。白状する気になったかな」

一行が首枷、足枷姿で座っている母娘の前まで来た時、昼間の担当刑事が進み出て、そういうや否や、六尺棒で夫人の首枷の前縁の真中を、力任せにドンと押した。

逃げるも身をかわすもならない。川崎夫人はそのまま仰向けに引っ繰返る。自由の利かない、身体が起上ろうと焦って、縄目のきびしい上体をくねらせている。キッチリ揃えた両足が、足枷を食い込ま

せたまま宙に躍る。

漸く起上ると、待ってましたとばかり、又首枷を押して倒された。ごろんと半回転して、うつぶせになると、肩胛骨に掌がかぶさるほど捻じ上げられて括られた後手の縄目と、太い鞭跡の痛々しく脹れ上った肩口を見せて、じっとしていた。

起上っても又突き倒されるだけだと思ったのだが、それがかえって悪かった。

「こいつ。おとなしそうな顔してる癖に、案外、横着な奴だな」

うつぶせの夫人は、くろりと返されて、座り直させられると、首枷の前の鉄環に紐を一本通された。板の足枷が外されて、膝頭と足首に六尺棒を渡して結びつけた。

「ラジオ体操だ。ソレー、二、三、四」

号令と共に、首枷をドンと押して仰向けに引っ繰り返し、すぐに首枷につけた紐で、ぐっと引張り起す。起きるや否や、又ドンと仰向けに倒される。

「アッ、アッ。ウッ、ウッ。」

打続く激しい拷問にクタクタになって、されるがままに責められている夫人。その、あられもない中年女の貴姿が、愛子の目には、我が母ながら、おぞましいほど浅間しく映った。

「そうだわ。私達の国では、高邁な理想を持つ女程、浅間しい姿で青苦に泣かなければならないのだわ」

奇妙な真理が突然、浮んで彼女の顔を、ぐわんと一撃した。

彼女は彼女なりに母親を理解し、敬愛していたつもりだったが、現実には目の前でヒイヒイ泣きながら、浅間しい姿で転がされたり、起されたりしている無力な母を見てみると、その彼女の理解や尊敬に、複雑な分裂作用が起きて来たのは寧ろ当然だったかもしれない。

首枷を数珠繋ぎされていたので、母の両側に座っていた珠子と美喜子も、その身体の動きにつれて、上半身をのけぞらせたり、かが

めたりしなければならなかった。鎖が割に長かったのが、寧ろ彼女等の為に幸いだった位である。

「しぶとい女め、幾ら剛情を張ったって、きつと口を割らせてみせるからな。今度こそ、この影の国から、女拡張の女共を一人残らず根絶やしにしてしまおうのだ」

予審判事は荒々しく言い捨てると、丁度、今、仰向けにされた夫人を泥靴で、ギューイッ、ギューイッ、と踏みつけた。

「オイ、此の娘達も昼間の女共の様に、梁へ吊し上げてやれ。」

苦痛に呻いていた夫人の顔色がサツと変った。

何かを思い定める様に、目を据えて、じっと天井を見ていたが、急にキラリと怖ろしい程の眼光になって、狂女の様な上ずった甲高い声で叫んだ。

「ホホホ。娘達を責めさえすれば、母親を白状させることが出来ると思ってるの！。娘が可愛くて仕様がな母親なら、最初から女権拡張同盟の仕事を手伝ったりしないわよ。何さ、そんな娘達」予審判事はギョッとなって、母親の顔を見直した。

彼は永年の経験で、こういう女が決して一筋縄では行かないことをよく知っていた。

娘達を拷問するぐらいなら私をもっと責めて下さいと、泣いて哀訴されれば、娘への拷問をもっと烈しくして、一気に口を割らせてしまえと拷問官は一層、意気込むものだ。そんな娘なんか、と薄情に構えている母親の前では、責め手の力もつい鈍ってしまう。しかし、そんな母親でも、決して娘が可愛くない筈はないのだ。

一番白状させやすそうだと見込をつけた女が、一番手に負えない女だったかもしれないと、判事は一寸焦って来た。

まあとにかく、こっちは責められるだけ責め抜くまでだ。

「ようし面白い。うんと責めてやろうじゃないか」

服を剥ぎとられて、ピンクのシャツとショートパンツ姿になった

珠子が突きとばされてドサリと倒れかかって来た。反動で両手が開いたところを素早く、グッと両足で踏みつけた。

「ア—ッ」

と痛がって暴れる脚も、追って来た刑事が膝で押えつける。珠子は、洗った様に新鮮な項を真赫に染めて、靴で踏み躪られたまま、「ヒーッ」

と泣いて、可愛い顔を床に押し当てている。

シュッ、シュッ、

と手早く縄をしごいて、刑事は、珠子の足首を別々の捕縄で嚴重に括ってしまった。

ヒュッ、ヒュッ、

と縄が鳴ると、縄先は梁を越して向う側へ落ちる。川島夫人を責

めていた刑事が手伝って、二人でその縄をぐうっと引張る。「アレーッ。許してエ」

痛ましい悲鳴が上って珠子は足を上に吊り上って行く。

向うでは愛子が長く肩に垂らした髪の毛に髪枷をつけられて頭髪吊りにされていた。美喜子は美喜子で、両手を縛られて、棒の様に垂直にぶら下っていた。

逆吊りにされた珠子は、両手も別々に縛られて、両手両足を斜上へ伸ばされて仰向けに吊された。この人間の形をしている鬼畜達は、一層眼をギラギラさせて痛々しげな犠牲者を見ている。口では強くない切ったものの、夫人は我子の姿を見るにしのびず歯をくいしばり、眼を閉じて心の内で泣いていた。吊られた珠子は失神したようにグッタリしている。刑事の一人が鞭を宙に一振りしてずいっと珠子に近よった。

(次号へ続く)

麻生保氏の生活と意見

麻 生 保

九月号を読んで

沼氏の休載は全く麻生にとってショックです。「ヤプー」や「手帖」が無理なら、せめて雑報だけでも「沼正三だより」だけでも、

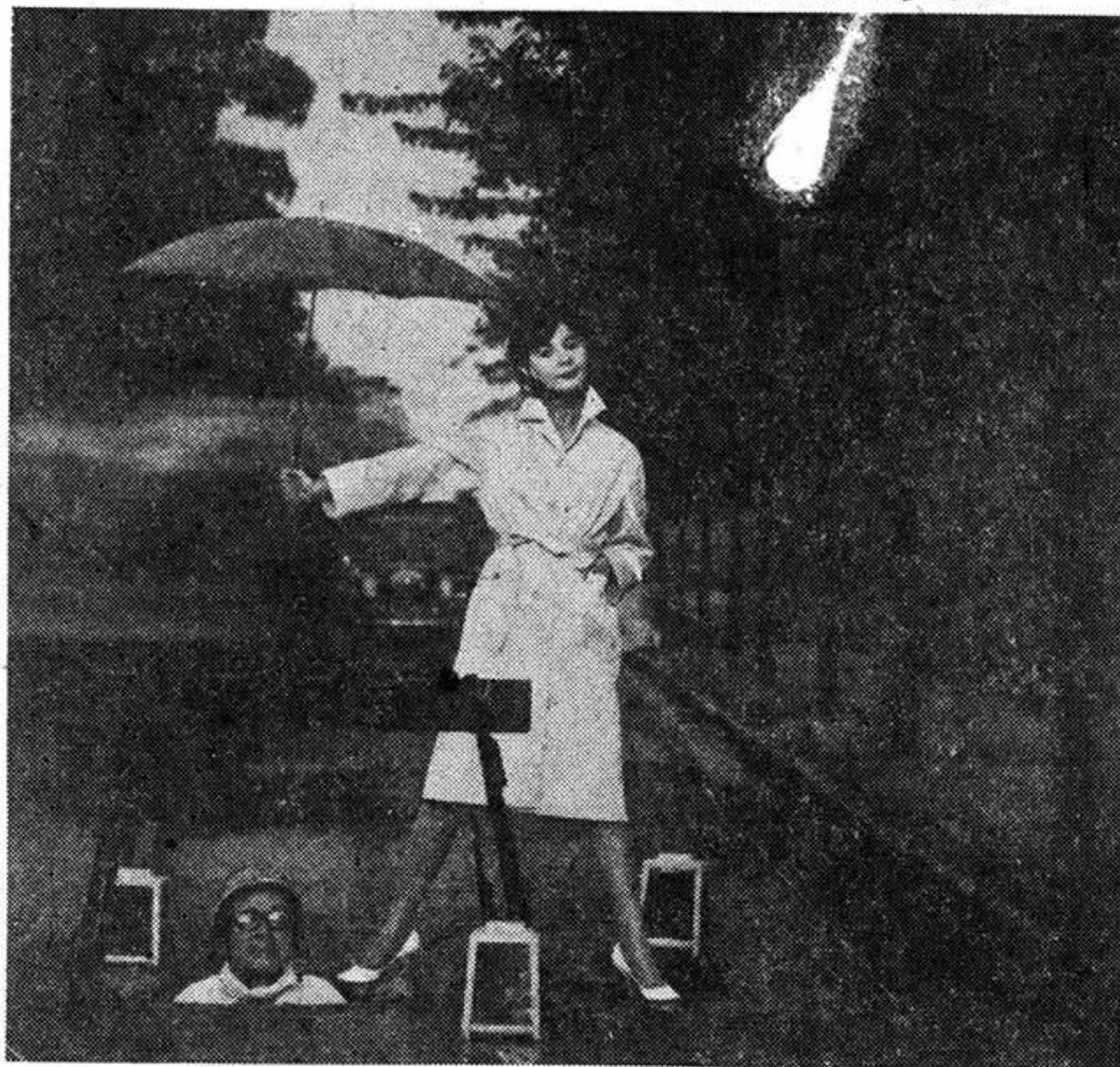
毎号のせて戴きたいものです。

読者通信で、天泥盛英氏の健在を知り得たのは本当に嬉しいことです。旧号時代、同氏のエッセーの熱烈な愛読者だった麻生は、近

頃、同氏の名前に接しない事を大変に物足りなく思っておりました。又、あの革の匂いが誌面から感じられるような、創作やエッセーを是非とも拝見したいものです。

鞍良人氏の「馬化白書」は、まことに貴重なものですが、残念ながら写真があまり感心いたしません。拍車はなかなかよく写っていましたが、かんじんの馬がよくない。あんな首をさげた収縮のない姿勢では馬は駄せず、馬を支配する”というにはほど遠い態勢です。ああやって馬が衝に掛るのは、乗手に抵抗してサボっているのですから、手綱をピツと引上げ、同時に拍車で二、三度、思い切り蹴りつけて懲戒してやる必要があります。：乗手のお嬢さんが、その動作に移る直前だ

一寸、マゾ的ではありませんか？（「週刊東京」七月十八日号表紙）



ところで、本文にも読者通信にもマゾ派の活躍がなかなか盛んなのに、口絵はイゼンとしてサド一遍倒なのは、全くなっとく出来ません。旧号を取出しては溜息ばかりついています。マゾ特集号“そして沼氏の”手帖”が一冊になって早く出るように祈ります。

ついて

沼氏が新旧両手帖で言及されていた、加藤武雄の「珊瑚の鞭」を最近読む機会を得た。すでに、「生活と意見」（三十三年新年号）で、吉屋信子の作品を取上げた時にも感じた

ことだが、こういった風俗通俗小説が、すぐに古臭くなるのは当然ではある。そして、彼女ら美しきドミナ達は、皆、当時のモラルの然らしむるところなのだろうか、割に簡単に男性、—このウスギタナキもの—に降伏してしまうのは、全く興ざめというよりほかない。

然し又、彼女らの日常というものは、沼氏も手帖新稿（三十四年三月号）で指摘していられたように、今日では全く考えられないような特権階級のそれであった。だから彼女らの言動には、デモクラシーに育てられた今日のお嬢さん達には見られない、極端な選民意識が強く働いているのはチョット楽しいものである。（三十三年三月号生活と意見参照）

「珊瑚の鞭」は、柳子という乗馬の好きな富豪の令嬢をとりまく数人の男性の話である。

柳子は彼等にとって全くの女王であり、家庭にあっては手のつけられない我儘娘である。冒頭の柳子の乗馬姿は全く素晴らしい。

「……全身黒ダイヤのように真黒の、サラブレッドらしい細身な馬である。鞍も鎧も銀光燦然として、ゼッケンのいろは血のような真紅。馬上の人は二十二、三の、若い美しい令嬢である。紫紺色の乗馬服、同じ色の乗馬ズボン、浅く鎧にかけた長靴の足先まで、跨った脚が優雅な線を見せて、立ったらば五尺に余る長身であらう。顔も少し長めで、鼻梁の

と書いて眺めるのも一興ですが……。原忠正氏の再登場も嬉しいのですが、森本氏の「残虐なる女達」はどうなったのでしょうか。大分長い間、未完のままの休載で、大変気になっています。

通った羅馬鼻、描いたように濃いこれも少し長めの眉に、やや迫り気味の二つの眼は、青っぽく冴えた白眼のなかにはっきりと黒瞳を躍らせて大きく輝いている。貴族的で上品でそれでいてひどく派手な感じがするのは、やや大き過ぎる口がその古典的な均整を破って唇が花卉のように赤いからである。——中略——軽く拍車をいれながら、キッドの手袋をした手に鞭を振り上げた。馬は一声嘶いて高く前脚を上げた。と、見るうちに四つの蹄に地を蹴ってギヤロップをはじめた。服と同じ紫紺色の、鐙の狭い乗馬帽の下で鬚の毛がサツとなびいた。ミルクのように白い皮膚に血の気が上って、頬は薄あかく汗ばんだ。路傍の草から舞い上った黒い揚羽の蝶が、その頬を掠めて過ぎた……」

それから、彼女の日常の行動やとりまきの男達との会話が、チョッと痛快である。又、男達の採点表を作ってみたりするところも沼氏の指摘された通りである。五平というやぐざな飲んだくれの男に、鞭をふりあげて威嚇したりもするが、後が全くいけない。柳子は華族の息子、佐伯といいや結婚するが柳子自身は、もと彼女の家の書生だった牧師五十公野信介を恋している。いろいろのいきさつがあった後、柳子も佐伯も、信介の高潔な精神に感銘を受け「ブルジョアの原罪」なるも

のを悟って、佐伯は阿川時彦という信介の師のもとに走り、貧しい人達のために働く決心をする。柳子は佐伯とすでに別れていたのだが、変化した佐伯の姿に感激し、涙を流しながらいう言葉で終わっている。

「お願いです。私と、もう一度結婚して下さいまし。今度は私、きっと良い妻になります——」。

もう一つ、中村武羅夫の「女王」というのを読んでみた。昭和二年に講談社から発行されている。前編が約六百頁、後編が又、それぐらいあるらしいが、前編しか手に入らなかった。どなたか後編を御存知の向があったら御教示ありたい。

山本金蔵という成金が、驕慢この上ない一人娘の銀子を連れて北海道の農場を観察に行く途中、一人の老人を二人の乗用車が轢いてしまうところから始まる。前輪に轢かれただけの老人はまだ生きているが、金蔵は「そのまま車を進めろ」といい放つ。銀子是不快気な顔をして黙っているばかりである。そこへ轢かれた老人の孫、雄作がやって来て、この暴慢な成金の金蔵にくってかかる。このあたりで作者は、雄作を「誠意ある貧しき者」の代表に仕立てて、かびくさいヒューマニズムなどを論じているのは全くなわなない。

老人はその夜憤死する。老人は昔から金蔵

に重大な恨みがあったので、つらあてにわざと金蔵の自動車に飛びこんだのである。

雄作は独立独歩、立身出世を夢みて上京しようとするが、林の中でバツタリ銀子と出逢ってしまふ。

「……雄作は、祖父の急変をきいて駆けつけたとき、自動車の中に山本金蔵と並んで傲然と女王の如く誇らかに構えていた令嬢のことを思い出した。自分が、祖父を轢いた責任者は、自動車から降りて謝罪するのが当然であると詰問した時、それが癪に障ったかして、キリリと眉を逆立てた美しい令嬢の姿を思い浮べた。——中略——今、暁の林の中に立っている眼のさめるような令嬢の姿を見た時、彼はさながら忽然としてそこに林の女神でも出たのではないかと吃驚した程であった。その美しさと気高さとは、人間離れのした魅力を感じて、何だか神々しいような感じすらした。彼は思わず頸を垂れようとした程であった。雄作は銀子の魅力のとりこにされて、銀子もまた、雄作に愛情を感じはじめた。然し恨み重なる金蔵の娘の示す高圧的なコケットリーは雄作に反撥しか感じさせない。（このあたりの会話のやりとりはチョットいかす）あとが全くいけない。中川章之助という、華族のニヤケ坊ちやんが銀子に求婚する。銀子は章之助をさんざんに翻弄する。（このあたりも面白い）しかし、銀子の心は、「一介の

貧農の子ではあるが、烈々たる天を沖する如き意気と気魄と力強さと、がっしりした体軀、逞しい腕、鋭い目」の持主であるところの雄作のみを恋してやまない。

雄作は、どんな便宜でも計ろうという銀子の申出をはねつけて上京し、魚屋の小僧になったり、立ちん坊（その当時、坂の下にいて人力車の後押しをしては、一銭二銭を貰ったものの由）をやったりする。銀子は、彼を慕って東京中を探しまわり、やっと重い病気で衰弱し切っている雄作を探し出す。

と、ここで前編が終っているが、要するに雄作の立身出世物語りに過ぎず、麻生には全くくだらない。又、銀子の言動は、あまりにも品がなく、単に成金の娘という感じでしかない。むろん、当時の特権階級意識というものは、そういうものだったかも知れないが、今日の常識でいうならば、あまりにも暴慢で粗暴で、非常識の観があり、麻生の好む「エレガントな気まぐれ」「シックで上品なわがまま」といったものからは程遠い。この点、柳子の方が大分ましである。

なお、吉屋信子の「紅雀」というのも読んだ。乗馬女性が数人登場するが、サド、マゾに關しては特に記すべきことはない。

オスカー・ワイルド「王女の誕生日」

新潮文庫のワイルド童話集「幸福な王子夜

鶯とバラ」の中に牧められている。（西村孝次氏訳）王女の誕生日に道化を演じる小人は美しい王女を恋しているが自分の醜さを知ったショックで死ぬ。それを王女が嘲う。真に芸術の香り高い珠玉の様なマゾ短編である。

週刊漫画八月五日号

特別レポ「乗馬クラブは花ざかり」

乗馬クラブに女性会員が最近ふえてきたが女性スポーツとして、乗馬熱がなぜかくも高まってきたか？……という見出しだが、オリンピックの話などが多く、女性乗馬は案外取上げられていない。又、乗馬女性のいい写真もない。ただチョッと面白いことが書いてあった。

ある人が、「女性が乗馬を好むのは、リズムカルなスイングでエキサイトするからだ」といったところ、ある馬術教官がこう答えたそうである。「そんな助平な話があるもんか。スポーツというものは何でも全身の血を高潮させる。それから来る爽快感がそんなふうにいわれるんだろう。——中略——それに婦人の乗馬服装がいい。あれは一幅の絵だね。あれをみてエキサイトするのは、むしろ男性じゃないかね」（麻生註、両方ともホントでしような）

ところで、沼氏が新稿手帖第二章、馬上の令嬢（三十四年三月号）の中で、

「……今の世に女神ダイアナ（アルテミス）を見たければ、夏の軽井沢に行くがよい。彼女はオリパス別荘から馬に乗ってやってくるだろう。……」

とあったが、戦前はいざ知らず、戦後の俗化した軽井沢に、ダイアナなどはやって来はしないのである。沼氏はおそらく戦前の軽井沢のことをいっておられるらしいが、この言葉を用いて、今夏でも軽井沢へダイアナやアルテミスやらを見に行かれた向きがあったとしたら、さぞや幻滅の悲哀を感じられたことであろう。勿論、そうはいうものの、まだまだブルジョアの避暑地であることはいまでもないが、それにしても、以前の軽井沢の記憶が少しでも残っている麻生には、近頃の彼地の大衆化は全く嘆かわしい。そして乗馬女性たちも、ただ馬の上にチョコンと坐っているに過ぎないのが大部分で、姿勢も、服装も、小道具もエチケットもデタラメに近く馬装をちやんとした凛々しい姿でサツソウと馬を馭す女性など、現今では一夏に何人お目にかかれるというのだろう。ジョパーも長靴も着けず、雑草の茎などを鞭の代りして、勒の一本しかない貧相な、やせこけた貸馬の上にのっかって、ポカポカ散歩している女学生などを、ゆめゆめダイアナだのドミナだのと思いきまれないように、おせっかいながら、麻生は切望する次第である。

連載告白小説

或る倒錯生活

(その二)

西村 憲 一

(朝化粧)

奇妙不可思議な二人の夫婦生活。妖しいまでに倒錯した家庭生活。だが、その妖しい美しさに驚くのは、まだ早い。その驚くべき生活は、これから述べるところにあった。家も道具も、調度も、落ち着いた善美の中に所を得て、現在の文化を思うさま吸収し、能く調和して居るのである。斯かる生活を営み乍ら斯うした世界に有り勝ちな淫靡さも隠惨さも微塵無く自然な高度のたたずまいであった。然も、その生活を繰り展げる二人の中の一人

は、男とは信じられぬ女にも珍らしい美肌と容姿を備えて女として生活し、その一人は女であり乍ら男の様な恰幅と心身を具えて相手を被護し、何の矛盾も破綻も無く社会に伍していささかも怪しまれて居ないのである。そして、その存在は現今、流行する種々の自由主義男女の理念を遙かに超えて想像する嫌悪感も嘔吐感も無く、誇張していえば、むしろ芸術的な美の生活が展開されて居るのであった。その原因と秘密を明かす前に彼等の生活に眼を戻し暫く成行に委せて見よう。性も素性も後廻しにして……。

初夏の朝は早く明けた。雨戸を洩れた薄明りが障子に差込むと彼女は眼を醒した。快よく熟睡する男(?)の眠りを醒さぬ様にそつと抜けて出た。昨夜のまま華やかな長襦袢の胸には綱が絡み、手は後で縛られたままであった。不自由な躰で起ち上り足音を忍ばせて障子の前に来ると、後手でカーテンを引き静かに障子を開けた。

廊下にすべり出て音もなく閉めると、廊下を踏んで化粧室へ入り鏡に後姿を写し乍ら手首の綱を解くのであった。幸い、始め程きつく緊縛されて居なかったため、手指は痺れも

せず良く動くのである。それでも苦勞して綱を外すと夜会巻風に結び直した髪を取って戸棚に入れた。伊達巻を解き腰紐を取ると、長襦袢を脱いで衣桁に掛け、浴室の入口にある洗濯籠に緋絹の腰巻を外して落し、中へ入って行った。壁の瓦斯栓を開いて湯に身を沈め縄の跡を揉むのである。ぬるい湯も段々温度が上り、硝子を通して陽の光りが反射して明るく映えた。流しに上って白粉を落し、泡に包まれて全身を洗うと、再び湯に浸り、伸び伸びと温まった。その湯で浴室内を掃除して洗い流し、新しく水を張って一ぱいに瓦斯栓を開いた。丹念に身体を拭い、小袖簞笥から淡紅い腰巻を出して纏うと、鏡に向って白粉を刷いた。濃い目の化粧を念入りに施し、眉頬、唇を慎重に描き上げると全体を収斂剤で押えて丸髻の髪を乗せた。ぱっちり大きく黒い瞳を中心に、齒は皓く形良い紅い唇に包まれ、通った鼻筋は可愛く、新月の眉は前額を引締めて、豊かな頬と相俟って見返る様な容貌を成して居た。

衣桁に掛けた襦袢を取ると針箱を降し小抽出しから水色の半衿を取り出して掛替るのである。紅絹の細衿を着けた晒の肌襦袢を着て腰紐をすると、其の長襦袢を重ねて伊達巻をした姿は、丸髻の赤い手柄に衿白粉が美しく半脊の水色と良く似合うのであった。先刻の細引を取上げると其一端を柱に結び胸から脊

へ三回、巻いて鏡に写し脊中で結んだのである。手首は縛らず残余の綱を身に巻いて廊下の前の居間の簞笥から薄紫地に薊の花の小袖と帯、紐を出して来た。小袖を羽織り裾を重ねて腰紐を締め衣紋を合わせて伊達巻で胸を整えると錆朱の帯を胸高々緋鹿の子の帯揚げで上げ大きく太鼓に結んで銀地に花の平織の帯締めをした。腕を縛って居るので其の着付は難渋を極めたが鏡を見る其眼は活々として身仕舞いをして行った。

白足袋を履きサロン前掛をすると台所に立った。七時過ぎても彼は起きず朝食の仕度も既に終え、上に上がらぬ為、頭を傾けて苦勞しながら姉さん冠りに手拭を乗せると庭伝いに茶室に行き、其所の掃除をして風炉の火を入れた。出来上って居る朝餉を運んで居ると齒ブラシを使い乍ら彼が庭に現れた。

「お早よう御座居ます」

「ああ」

「お湯をお召しになりませんか？」

「うん、入ろうか」

彼は室内へ引返した。

寢室の障子と雨戸を開き夜具の押入に畳み入れ彼の着物を乱れ籠の儘脱衣場に運んで部屋を掃き出すのである。湯上りの彼を茶室に導き手拭も前掛も外して膝を正すと彼の為に茶を立てるのであった。横顔を見せて余念も無く茶筌を振る手につれて丸髻の髪が揺れ、

着物の袖が動くに従って長襦袢の紅がこぼれた。気品は高く淑やかな中に溢れる許りの優婉さが漲がり見る者の眼を引きつけずには置かなかった。肩の優しさ腰の円さ、手足の柔かさ、何処に男の影があるう。何気なく置く手の一つ、足の一つにも心得ある女の動きの姿であった。

点じ終った黒い楽焼の碗を袱紗にのせ目八分に捧げて膝を起し、すり足で運んで男の前へ置くと一膝下って三指を突いたのである。男も軽く会釈を返し片手を伸して碗を取り膝の上で片手を副えて楽焼の肌を楽しむのであった。

風炉の側に帰り膝の上に両手を重ねて、つましく控え乍らそうした男の様子を見る様は一幅の絵であり名優の舞台の姿であった。雀の鳴声が賑やかに茶室を取り巻いて朝の大気の中に飛び交う影が書院の障子に写った。陽は既に高く燦々たる六月の光りの中に生々として動く前の一静寂であった。

一服喫了えて、

「何時起きたのかちっとも知らなかった。疲れたらう？」

「あらまあ厭ですわ」

赤くなり袖で隠す様に俯くと、白い衿足の奥に肌襦袢の衿の紅が艶めかしかった。

「ハッハッ、もう一服、欲しいな」

「はい」



再び風炉の前に座り帛紗を帯に、茶杓を取る彼女の手が不自由そうなのに気付いた彼は「お前、縛った儘か？」
「ええ、だって解いて下さらなかったでしょ

う？。叱られてはと思って、もう一度縛りましたの……」
帛紗に乗せて運んだ茶碗を受けて、其の黒い碗を傾けながら

「解いてしまえば良かったのに。此方へお出で、取ってあげよう」
「はい……でも後で宜しいわ。着物を脱がないといけませんもの……」
「それもそうだな。でも不自由だろう？」

「ええ」

婉然と微笑む顔は白く、丸髻の手柄が赤く美しかった。服みおえ、茶碗を置いて、

「煙草は無いか？忘れて来た。」

「御免なさい。取って参ります」慌てて膝を起こすと室を出て行った。床の茶掛は蘭の墨絵で、下に活けられた百合と笹が清々しく、違い棚の前に置いた経机の上の椎朱の香合から香が匂って、残る睡気を一度に払う如く、書院に映える朝日の光は室内に輝やいて居た。戸を開けた濡縁の下は泉水が巡り水辺に菖蒲が花を付けて居り、畳まれた巨岩の向うに庭が開け、左手に築山が迫って居た。一面の深緑は陽を受けて燃える如く薫る如く爽かであった。その中を通って小走りに帰る彼女は新聞を胸に抱いて上気した頬が美しくみやびやかであった。玄関から上って来ると、灰皿をそえて彼の横に置いた。
「うっかりして、御免なさい」

「有難う」

煙草を取って吸い付け乍ら、次の間から運び入れる朱の磨出しの会席膳へ並べられた皿や小鉢の料理を見て居ると、

「おビール召上りますか？」

「そうだね、まあ好いよ」

「一本だけ召上れ」

いって栓を抜いてコップに注いだ。

「美味いなあ、お前も飲んだら？」

「いいえ、宜しいのよ」

生卵を割って卵黄だけを二つ小鉢に取り、味の素と醤油を落して彼の膳にのせた。赤い鹿の子の手柄が初々しく、鬢付と香水の匂いが粉白粉の匂いと錯綜して嗅覚を刺激する様であった。

電気釜から御飯を盛り、小鍋から味噌汁を注いで膳に置いた。

「御馳走様」

「あら、もう宜しいの」

「お茶とビールで満腹だよ」

「だって、お腹が空きますわよ。一膳だけでは……」

「好いよ。それより相談があるんだが……」

「何で御座居ますの？」

「此処で客をして呉れないか？」

「あら！」

「厭かい？」

「……」

「一人だけなんだが……厭かね」

「誰方で御座居ますの？」

「平松といってね、中央家具デパートの専務なんだ」

「男の方？」

「うむ……」

「お申し付けなら致しますけど……男の方は許して頂けません？」

彼女は眉を伏せた。すんなりと伸びた統の様な白い衿足を見せて。それを見ると彼ははっとした様に、

「そうか、そうだったね。止めるよ、この話……」

「済みません。我儘いって……」

「うっかりして居たよ。お前に会うと男は妙な気を起すだろうからね。それにお前との事を話す訳には行かないし。ハッハハハ、うっかりして居たよ」

「いえ。私こんな変人ですもの……男の人は怖いんです。我儘いって申訳御座居ませんけど、このまま暮らせて頂きとう存じます」
「そうだったね。私もお前を人に会わせたくはないのだが大事な得意が一軒ぐらつき相なので、その引止策にお前に饗^{もて}なして貰おうと思っただが、考えて見ると其の平松って男は非常に女癖が悪いという話だ。お前に会わせて妙な気を起されでもしたら大変だったよ」

「私……真実の女だと思われもしないでしようけど、……もしそう思われでもして、何か起きた時には困りますわ」

「いやいやお前は、ほんとに女さ。お前を知って見ると世間の女は女じゃないよ。誰が見たってお前見たいな女らしい女が居るものか！」

「旦那様！私を理解して下さいるのは旦那様だけです。何んなお言付けでも致します。厭らしい奴と思わないで……」

一膝下がると両手を突いて眼を潤ませて仰ぎ見た。

「有難う。私こそ頼むよ、こんな勝手な人間だが……もうこの話は止めよう。お茶でも呉れないか」

「はい、でももう一膳お上りになって……」

「いや、ほんとに良い。お前、お上り」

「いいのよ。私」

横を向き指先で眼頭を抑えた。そうした姿を嬉しそうに見乍ら

「煎茶は無いか。熱い湯で、さっと出して貰いたいな。」

「はい！」

違い棚から取込盆を下し蓋を返して九谷の茶碗と急須を取り出した。

「我儘いって済みません」

「いや、もういいんだ」

「ぐらつきそうな御得意様って、何か御座留

ましたの？」

「うむ三月の末頃だったかな。心斎橋筋に陳列場を出すについてね、資金の一部を都合して呉れっていうのを断った事があるんだ」

「まあ……」

「そうしたら、暫くたって、判っきりと現れたのは五月分からだね、取引量がぐっと減って来たんだ」

「ああ……」

「調べさせて見ると、他所から入って居るのさ」

「……」

「家具の大半は中央家具の注文だったので、このままで行くと、こちらも新しい大口の得意を拵えるか、工場の縮少をするか考えなければならなくなってね」

「大変ですこと」

「去年の末、工場の増設をしたのも其処の注文に応じかねたからなんだよ」

「まあ……」

「それをして居なければ、この際、貸せてやれたんだ」

「……」

「支払いも良い得意先で新しく探してもこんな得意は仲々ないので惜しくってね」

「済みません」

「お前の責任じゃないよ。ここへ呼んだからって、もとへ戻るかどうか。結局は金の問題

さね」

「大金でしようね……」

「二千万程だが……」

「そのお金、今品物を入れていらっしやる所からお借りになりましたの？」

「いや借りては居ないらしいね、未だ……」

煎茶の湯呑を茶托に置いて眼を庭に転じ両手を後に突いて眼を細めた。

「庭が綺麗だねえ」

茶を注いで彼の視線を追いつつも彼女の表情は暗かった。彼の事業の苦しみが判るのだ。眼を自分の膝に戻し彼の言葉を反芻して考えて居た。湯呑を取ろうとして、その様子に気が付いた彼は

「何んだね。お前が心配しなかったってよいよ。」

「はい」

「気にしたって、どうにもなるものじゃない」

「そうでしたわね。御免なさい」

「ああそうそう痛いだろう。こちらへお寄り解いてやるから」

「ええでも宜しいの。自分で、ほどきますわ。お出掛けになられても、こうして居れば、何

だか旦那様がいらっしやる様で淋しくありませんの。今日も此方へ帰って頂戴」

「家の方に用事があるんだよ。二、三日、先になるだろうね」

「淋しいわ。なるべく早くいらっして頂戴ね」

「好い子をして居るんだぞ。浮気をすると思知しないから」

笑い乍ら睨みつける彼の眼を艶然と受けてこつくりと肯いて見せるのである。

「さあ、そろそろ出かけよう」

「あら、もういらっしやる時間かしら？」

「もう九時だろう。会社へ寄って行くからね」

「車呼びますからお待ちになつて」

左手で髪を撫でて起ち上った。小走りに主屋へ行く姿を見送り乍ら、馥郁とした残り香の中に煙草をくゆらせた。木木の枝を飛び交う小鳥の声が明るく賑やかであった。間もなく彼女の姿が見え、乱れ籠を捧げる様に入ると、

「お召し替えして頂戴。直ぐ参りますから」
煙草をくわえた儘立上る後へ廻り、膝を突いて兵児帯を解いた。膳を次の間へ下げ庭下駄を揃えて居ると、忽ちスーツの洋装に着替えて来た。内玄関迄送り出すと、彼女は其所に膝を下して門へは行かず、車が動き出すのを待つのであった。自動車が走り去ると門を閉ざし、茶室へ引返してそこを片付け膳類を台所へ運んだ。洗物を済ませて化粧室へ入り丸髷の髻を外した。帯を解き着物を脱いで胸の縛しめをほどくと、明るい日差しに燃上る

様な長襦袢の上へ常着の小紋の単衣を着て伊達メめで巻いて帯を貝の口に結び白い割烹着をした。髪にブラシを掛けて手拭で包むと部屋部屋を開け放して掃除をするのであった。拭掃除を済ませて犬達に食事を与え、寝室や更衣室の衣桁に掛けた衣類を畳んで箆箆に納めた。脱衣場の一隅に置いた洗濯機へ主人や自分の脱ぎ捨てた下着類を入れて洗濯をする、浴室の南側の干場へ掛け並べた。いそいそと一心に家庭の女の仕事に没頭している其の姿は可憐にも微笑ましく、飛び廻る犬達と共に愛らしかった。干し物を了えると風呂に浸り朝化粧を洗い落した。湯上りの肌を冷水で冷やし、アストリンゼンで引締めると、クリームをつけ乳液を伸ばした。昨夜からした若風の化粧ではなく数多の化粧品を駆使し、紅と墨を巧に用いて活き活きとした近代風の粧いを手早くすると、肌襦袢の上へ縞の銘仙の単衣を着て六寸の帯を結び茶の間に入った。残り物で食事を済ませると戸棚から小箱を出し、中から注射の道具を取出して注射器を小鍋に入れ水を注いで火にかけて消毒をし、慣れた手付きでアンプルを切ると二筒一度に吸い上げて縄の跡の残る白い腕へ差し入れた。高単位の女性ホルモンである。十数年一日もかかさずあらゆる方法と費用を投じ、良いと言われる薬を追って体質の女性化に努力を重ねて来たのである。

(運命の桎梏)

中国地方の酒造業を営む豪商の家に四男として生れた彼であったが、兄達は生れて一年も育たず次々と死んで行ったのであった。

三人の男の子を死なせて見て田舎の迷信は根深くもこの家には男の子は育たないのだと信じられ諦められた時生れ出た彼であった。

家族の喜びと悲しみの結果、祖母と母の愛情は彼を女兒として育てる事になったのである。父にも異存は無く、何事にも積極的な性格は名前も女名を付け女兒として入籍すると共に世間へも女兒として発表したのである。産婆にもその旨を含めて秘密を守らせた。

斯くして女の子として生い育って行ったのである。昭和十年七月の生れであった。

暖かい家族の愛情に慈く生まれ、風にも当てず深窓に育くまれた彼女は世を知らず、自分の名と性の矛盾にも気が付かず与えらる環境の中で女の子の習性を疑いも無く身に付けて成長したのである。

人も思い自分も信じて小学校を卒えた時、祖母が世を去った。中学へは上らずに家庭に教師を招き、紅い着物にうずもれて花を茶を習う明け暮れを過したのであった。

十六才の春、不図した感冒がもとで母は世を去った。翌年、父に後妻の話が起きた頃我身の性に始めて疑問を抱いた。即ち体質に

変化が起り始めたのである。

驚いたのは彼よりも父であった。祖母も妻もなく男手の自分には方法がなくて遂に意を決して彼に事情を明かしたのである。

彼は仰天した。始めて知る我身の秘密。本来の性に立返るべきか？。然し、男の世界は何一つ知らないのである。生れてより此の方女として育ち女としての生活しか送つて居ない彼は、物事の考え方まで女としか考えられないのであった。親と子は深刻な懊悩に数日を送ったのである。父とすれば一人しかない子供であり、行く行くは自分の後継者として男に立返る事を望む気はやまやまであったが何も知らない彼を女として育てたのは自分達であり、美しくも女として生い育つた姿を見ては今更、男に返すも不憫であった。

本人である彼としても、女としての仮性は長すぎて男の世界に自信が持てず長年の慣習は全く心身共に女性化して居たのであった。

然し、女として生きる事は世を捨てて事であった。親子の結論は凡て諦めに落ちたのである。信頼する医師に相談した末、不結果を前提として膨大な量の女性ホルモンの投入を先ず始めたのであった。

其れは生長期に在った肉体に著しい効果を現し声帯の変化を喰止めると共に、体内の諸機能の發育を男性より女性へ転化せしめ始めた。皮下脂肪は沈着し始め僅か乍らも乳房は

隆起した許りでなく腰も細く臀部も豊かになったのであった。生来の天分か、将又、ホルモンの影響か骨格の成長も中止して手足の骨は繊細の儘、ふっくらと白い皮肉に包まれたのである。

判っきりと眼に見えたのは生際であった。広かった額に発毛を起し、前へ前へ拡つて富士額を形成して行ったのである。髪も細く豊かに変わり、髭は全く生えず顎の形も円く小さく、雪の様に白い肌は細かいきめに覆われてむっちりとした美しかった。

唯、脛の毛丈が女にしては多かったが、これは時時クリームで脱毛すれば事足りたのである。斯かる愛児の姿に懊悩した父も、自分達が招いた結果である事を悟り、涙を振って廃嫡を決意した。唯一人の子供の為に莫大な費用を惜しみなく投じ、所持する一切の株式債券を彼の名義に書替えてやり、M信託銀行へ信託して其の生活を保証してやったのである。

これは最大の愛情であった。男でも女でも無い女が、生活の裏付けを失った時を想像すれば、そこには如何なる悲惨事が起きるか。予想出来得る事であった。それ等の事を運ぶ傍ら今迄の師匠と親交ある人の伝を求め東京の舞踊の準家元に事情を明して住込ませたのであった。彼が発して間もなく父は後妻を迎えたのである。昭和二十七年、初冬の事で

あった。

彼是否、彼女は女として完成されて行った。

(花開く)

自由主義の日本で其れを阻む何ものも無かったが、亦澎湃たる自由思想は奔馬の如く人其れ其れの好む儘、男女の風紀も紊乱した時代である。斯くて数カ月、今では名取りでもあり、代稽古でもある彼女の美しさは、異常な精励とも相俟つて群鷄中の一鶴の如く人人の眼を見隠らせた。地方支店より東京の本店銀行へ送られた豊富な資力はいやが上にも彼女を輝かすのであったが、其の為に思わぬ障害が次々に襲って来もしたのである。

女性間の嫉妬と反感は滑稽でもあり揶揄たぐも困らされた。それにもまして悩ませられたのは男性の問題であった。彼等は彼女を同性とは知らず恋を打明け、意に従わさんとしてあらゆる手段をつくすのである。彼女を得んとして起る男達の暗闘には為す術もなく悲しまされた。見かねた師匠は、たまたま大阪の知人の中で夫に死なれた後、後家を立て事業を営営する男勝りの女に彼女を託したのであった。

大村せいと言う人である。

舞踊の名取りとしてせいの後援の下で稽古場を開いたのであったが、亦此処でも男の問題に悩まされた。女の一人住居と見て言い寄

る男。中年以上の男は殊に煩さく、金力をかさにきて飽くまで執拗であった。小女一人を置いて居ただけに、これには彼女も悲鳴を挙げてせいに泣き付いたのであった。大阪へ来て半年目、二十九年二月の事である。せいは始め準家元より話を聞いた時、変生男子として軽蔑したが、孫の關係で大阪の後援会の副会長をして居り準家元の事とて断り切れず半分好奇心で其の世話を引受けたのであった。彼女の持つ資力は誰も知らずせいも勿論、知らなかったから持家の一軒を稽古場に改造して立替える位の軽い気持であった。だが彼女に会い、其の日常を見て居るうちに、何時しか彼女に傾倒してしまっていた。

其の美しさに呆然とし、立居振舞の床しさに引付けられ、彼女の人となり魅了されて行ったのである。話に聞き、時折見る変生男子の其れとも、歌舞伎の女形に見る其れとも彼女は全く違い、脊筋を走る嫌悪感も少しもなく、ほのぼのとした愛情と楚々たる風情の中に非の打ち所のない女らしさを感じるのであった。これが男であろうか？。そう思う時、せいは奇妙な倒錯欲が湧き上がるのを感じたのである。

長年の独身生活の反動が起り、元々勝気な性質は自分を男として彼女を征服し、其の美しさを我物としたい欲望に胸を沸らせて居る時、彼女は泣きついて来たのであった。

せいに異存はなく一切を引き受けて稽古場は閉じてしまったのであるが同じ家に居ては何にもならず家を求めて転居したのである。然し、彼女の存在は眼立ち過ぎた。

二三カ所移るうちにせいは彼女を自分のものにしたのであった。初めての事に彼女は怯えると同時に自身に自信がなかったのであるが巧なせいの誘導に依つて成就したのであった。

せいの愛情はあらゆる機会を擲んで彼女に女としての歓びを知らしめたのである。初めて知る人の世の神秘に乙女の如く打ち震えつつせいの為すが儘に身を委ねて行くのであった。自分一人を無上の者として脇目も振らず献身して仕える彼女を見てせいは長年の大阪商人の埒を越える閑静なる此の地に居を求めたのである。固辞する彼女を此の邸に移し、二人限りの別天地



へ事業の暇を作つては通つたのであった。二千五百余坪を擁する宏大なる邸には山在り池在り林在りて、造園の規矩に叶つて居たが、長年の荒廃に見る影も無かった。数十名の人夫を以て復興し、且つ手を加えて数奇を凝らしたのである。廃屋は取り毀ち本屋と茶室だけを改造すると共に浴室と台所を新築して其れに配する器具は文化の粹を集め彼女一人の住いに不便ならしめたのである。

家具、調度は新旧の善美を揃えせいが見立てた衣類だけでも四棹の簞笥に余つたのであった。数頭の猛犬を飼ひ築地塀はブロックに変え高々と巡らして警戒は嚴重にした。芝生も植え更え、泉水も流水にした。

大阪商人と他も許し自負もして事業の鬼と化し、夫の死後の大村鉄工を今日の隆盛に築き上げたせいであつたが、彼女に対する愛情の深さと、物質の消費は驚く程で何物を

も省り見なかったのである。

「弓野理恵。」

此れが彼女の名前である。

弓野寓の表札を掲げ事業の暇々をせい、は彼女の愛情に耽溺した。

何一つりえからは要求した事は無かったが、せいは生活して見て、斯うした物があれば好い、此処は斯うした方が好いと思つた事は、惜しみなく実行して充実を計つたのである。

りえも又貞節であつた。せいの歡びを我身の喜びとして、せいが居ても居なくても、せいの為の日を送って行つた。

りえに取つて若い女は意識の外にあり、男は無縁の衆生でしかなかった。けれど此の縁無き衆生は、常に彼女を当惑させて、中にも手を焼かせるのは商人であり御用聞達であつた。

生活上、彼等とは厭でも交渉を持たねばならなかったが、女の一人住まいと見るや、何かと口実を設けて長居をし、且、頻繁に出入りをさせたが、親切を押し付けられるには困惑以外になく、さりとて身の素性を明かす事も出来なかつた。美女の一人住居と思つて居る彼等にすれば、無理はなかつた。

せいとの生活に懸命になつて居る間に彼女の持株は増資を重ね、子株は孫株を生んでふくれ、生産性方式と神武景氣に乗って上騰して今や膨大な資産と化して居た。信託銀行か

ら送られて来る通知書に依つて払込みし、書替えし、係員の奨める儘に信託替えしたのが

太つて驚く可き数字になつて居た。此の場合彼女に証券界の知識がなく、欲がなかつた事が幸したと云う可きであつた。運用の道も消費の道も知らざる生活はせいに依つて支えられ、必要品も不要品も全て彼に依つて購われて行つた為、銀行の金に頼る必要もなく利息は利息を生んで居たのである。

せいすら彼女の資産は知らなかつた。そしてりえとの愛情の花に老境を飾り、三十二年五月せいは世を去つたのである。

四月の中旬の事であつた。せいが彼女の所へ来なくなつて半月も経つた頃、未知の婦人の来訪を受けせいの急病を知らされたのであつた。

五十前後の体は良く肥り女としては眉が太く上脊もある体をスーツに包んだ其の婦人はせいの手紙と金包みを出してせいの病状を訴えたのである。其の言葉を聞き、手紙を読んだ仰天した彼女は、客の前をも憚らず、身も世もなく泣き悲しんだ。身を震わせてむせび泣くりえの姿に呆れて居た客も、次第に感動し同情して、一目でもと会い度がる彼女の乞いを入れてせいの病床へ伴う事を計つて呉れたのであつた。其の娘として病院のせいの室に通された時せいとりえとの間に交わされた情愛の細まやかさは、其の客をして驚嘆せしめた。

深い感激を面に現して

「せいさん……あんたが此の人の事を話した時、わしや腹を抱えて笑つたでしようが、あんたともあろう人が、そんな馬鹿な事をと云つてね。所が会つて様子を見て居るうちに、全く感心させられましたよ。此の人の様子には此れ許りも嘘、偽りはなかつた。あんたの身を案じてね。見ていてこちら迄涙が出ました。どうしても会わせてやりたくなくなつてね。いや、あんたのお眼の高いのに恐れ入りました。日本一だよ此の人は。」

其れから一カ月、其の客にりえの事を依頼し、りえにも其旨を云い遣して波瀾に富んだ一世の女傑は其生涯を閉じたのである。

病名は肝臓癌であつた。

もとより臨終に立会えるりえではなかつたが、人知れず会葬もし、人目を忍んで墓参りも怠らなかつた。愈々深く門を閉ざして喪に服したのである。新しく求めた仏壇に位牌を安置し朝晩の合掌にも涙する事が多かつた。

世に人多しと言えども、再び得る事の出来ぬ主人であつた彼、故人を思えば如何に若くも美しくも在りとは云え、自然ならざる身の上の彼女には日を経るに従い、一層恋しく慕わしく、且つての日々を想い起しては涙を止める事が出来なかつたのである。せいに依つて開かれた花は其の死と共に閉ざされようと

した。

せいの病中、二人の為に骨を折つて呉れた客は山田常と云い、せいよりは七歳年下の四十九才であった。三十五才の時、夫に死別し二人の子供を抱えて夫の仕事を引き継いだのであった。木工業者として大村鉄工の下請をして居た関係で、夫の死後もせいの庇護を受け、同じ未亡人同志として励まされ、大勢の職人を使いつつ苦難と戦い、今日では和、洋家具の製作も行い木工業界に大を為したのであった。

二人の子も其れ其れ成長し一人は嫁ぎ一人は常の後を継ぐ可く大学に在学中であった。娘の婿は常の下にあって専務として会社を切り廻して居たが、未だ年も若く社長の常も委し切る事は出来なかった。

其んな関係でせいの為に彼女に会い、其の委嘱に依つて彼女の面倒を見ようとしたが、りえは固辞して受けず、ひたすら故人の追慕にふけて静かな生活を送つて行くのであった。

せいの依頼ばかりでなく、りえとの第一印象に好感を持ち其の心情に胸打たれた常は、そうしたりえの態度にも甚だしく引付けられたが、ひっそりとして心を閉じた生活の有様は如何ともなし難く、今では常の方が焦り出していた。せいの病中に於ける真実と死後の貞節さに何時か傾倒して居たのである。長い

孤独生活と仕事に追われて忘れた筈のものがりえに依つて燃え上つたのであった。丁度せいが、たどったと同じ道を。

そうした常の心も知らず、固く門を閉じてひっそりと彼女は暮して居た。

せいの言葉にかこつけて差出す生活の費用も彼女は受けようとしなかった。

其の邸へ行き出してから気付いた事であるが、備えられた道具類や調度品の好みの良さと品質の立派さは驚く程で、家、邸と共にせいが与えた事は判つて居たが、死後半年近くにもなるのに生活の乱れは全くなき、むしろ充実して居るのである。せいが後事を頼んだ理由の第一は、其の生活費であり邸の維持であつた。

其の費用を何うしているのか、せいの死以来、自分の差し伸べる援助の手を彼女は断り続けて居るのである。邸宅こそせいは遺して逝つたが、纏った金を渡してやっけない事は四月分の生活費を託された事でも判り後事を頼んだ事でも知れるのである。

彼女は其れを何うしているのか？

何時来ても一人ひっそりと居て、誰も訪れた様子は無かつた。外出を誘つても出たがらず、常以外に世間との交渉も欲ばなかつた。

考えれば考える程判らなくなり焦燥と共に常は夢中になつて行くのであつた。暇さえあれば、りえのもとへ通つた。遊樂も厭い、援

助も固辞する彼女であつたが、常の来訪は快く応じ喜んでもてなした。

常の誕生日には赤飯を炊いて祝つたり、月見には団子を供えて酒を汲んだりもしたが、其れ以上は踏み込む隙を与えなかつた。雪にも遊び、降誕祭も二人で菓子を切つた。

正月の二日に年賀に行つた時は、文金の高島田で裾を曳き、寿三番叟と松の緑を舞つて見せ、手料理のおせちと酒に夜の更けるのも忘れたのであつた。常はせいの言葉が信ぜられなくなつた。何処から見ても彼女は女である。真実、男なら今迄に、必ず其片鱗でも現われる筈だ。一年近くも交際し長時間対座した事も数知れずに来た今日、女装した男が、五十を迎えた女の眼を胡麻化し得るであろうか？

せいは自分を騙していたのではなからうか？。常の心は千々に乱れたが、そのくせ二日か三日すると驚く程りえに会いたがつている自分に呆れるのであつた。

(次号へ続く)

○各種マゾフォト撮影してありますので、御希望の方には焼増いたします故、返信料同封の上御照会下さい。○本誌写真部に於て使用出来る男性モデルを募ります。略歴、身長、体重等記載、写真同封にてお申込願います。採用の方には折返し詳細御返事致します。

真 昼 の 告 白

泉 辰 之 助

夏の夕方は殊に心地よいものだ。

丁度その時は、暑い日曜の、そして永い一日が漸く暮れかけていた。

「どうして妾の顔ばかり御覧になるの」

「いや、あんまり信子によく似ているのでね。

あれから、もう一年以上になりますね」

「そうね、本当に早いものね……………」

母一人、娘一人のこの家へ養子に來た僕は妻の信子を突然失ってから、この若い義母と一緒に暮すようになってからでも、既に二度目の夏になっていた。僕は一周忌でも済ましさえすれば、もっと早く身を処置すべきだったかも知れないのだが、何んといつても、たった一人ぼっちに、とり残された義母を放ったらかしにして、家を出る事は到底出来るものではなかったのだ。

義母は富子といった。娘の蔭にいつもかくれている様な、おとなしい性格で、体つきまで小柄な、誰が見ても信子の姉ぐらいにしか思えない、若さが残っていた。

若い義母を奥さんと呼び、僕を御主人とし、知らない人は、東京郊外での二人だけの生活は、年上の女との甘い毎日としか見えなかったであろう。僕が会社から帰って来れば、夕食の仕度は勿論、出来ていたし、風呂まで沸かして置いてくれたもの。

「お母さん先に入浴してくれ、ばい、のに」といっても彼女は遠慮して、自分からは決

して先に浴びようとはしなかった。毎日の生活からいっても、僕を旦那様扱いにする様になって行くのは、自然の勢いであつた。こうして、たった二人きりでの毎日はそこに、男と女との仕事の上での自らの區別がある様に、若い義母との間にも、女と男との感情の流れがいつか、目に見えなくとも生まれ育ぐまれて來ていた。しかも困ったことには、彼女が段々信子に似てくる様に思われて仕方がないことだ。

夕刊を読みながら、暮れゆく庭を眺めるともなく眺めている様なとき、風呂場から湯の流れ落ちる音が流れて來て、今にも妻の信子が、それから顔を出す様な氣がする事も度々であつた。

義母と二人で食卓に向いあつた時、思ひなしか近頃、彼女が心持ち薄化粧をしている様に思った。

「貴方に、いおういおうと思つていたんですけれど」

「え、何を？」

彼女は、このとき急にポツと頬を染めて下を向いて了つた。

「早くいえばいいでしょう」

「でも信じて下さるかしら」

彼女が何をいい出そうとしているのか、娘の様に耳まで赤らめながら、モジモジしているのであつた。

義母は
「毒は悪い女です お勉強しなさい」



「いつまでも隠くして置いてはいけない事だわ。信子さんもないことだし、皆んな貴方にいつて了いますわ………実は、信子は妾の本当の子供ではなかったのです。」
「……………」
僕はそのとき、それを聞いた瞬間、自分の耳を疑った。
「信子は妾の姉の子なの。あの子のため、そして皆んなのため妾はあの子の父親の後妻になったのです。信子も妾も本当の親子と心から思い、それが少しも不自然でなく過

として来たのに、妾はどうしても今になって貴方にかくして置けなくなつたのよ」
義母が、いや彼女と呼ぼう。彼女がどうして今になって、こうした真実を急に出したのであるのか。彼女は若い。信子の姉ぐらいにしか見えないのも道理、子供を産んだことがないのだ。時とすると乙女の如き羞恥さえ顔に漂わすことも出来るのだ。

その翌日、偶然であつたともいえるであろう、或はそうなるべき宿命の一步だったかも知

知れない。会社の同僚と一寸ビヤホールに寄つて、いつになくジョッキを傾けてから帰つて来た。夏といつても立秋を過ぎたこの頃はもうあたりが暗くなつていた。駅からの途中、昨日彼女が急にいい出した事実は、よく世間にはある事にしても、何故、今急にいい出さなければならなかつたのであるう。又してもその疑問にブツかつた。僕は、こう思った。

彼女を心して見るならば、彼女には既に母としての誇りより、女としての血のたぎりが身内から湧き出して来て、どうしようも無くなつて来ていたのだ。手の動き、足の運び一つにも、いや彼女の姿態のすみずみまで男に対する女としての、エロティックなものが芽生えて来て、それをジツと心の中にしまつて置くことが出来なくなつて来たのだ。

玄関を開けた。広くもない家だ。一目で家の中が見通せたが彼女が見えぬ。ビール杯の酔も手伝つて勢よく靴をぬぐと、ドッドと廊下を突進して行つた。と突然、風呂場のガラス戸が開いたと思つた瞬間、浴衣を前に抱える様にした彼女とブツかつて了つた。アツという暇もない、よける隙も

ない、彼女の身体を真正面から押し倒すような恰好になっていた。

彼女は、そのまゝ廊下にくずれ折れた。自分の身体をかばう様にしがんで了ったが、白いうなじ、丸い肩、なめらかな肌から流れ下る曲線は僕の目の底まで焼きつくした。僕は全くその瞬間どうしたか、そんな周りにくい経過など憶えてはいない。彼女の顔を片手でささえ、片手で、柔かい背をだき起していた。

「ごめんなさい」

「ごめんなさいなんて」

と、かすかに彼女は声にならない声を洩らした様であった。

それから、二人だけの夕食。却って平素の楽しい会話のはずむ夕食とは、およそ違つて口数少く終つて了つた。

夕刊も目に入らぬ。ラジオも空間をいたずらに流れるだけで、耳の辺りを去って行くのみだ。たゞ彼女の出してくれた冷たいジュースが、僅かに心のかわきをまぎらしてくれたのみで、二人の間には妙な沈黙が続くばかりであった。

そのまゝでは、もう我慢がしていられなくなつた。

「さあ、おやすみなさい」

僕は一言いって立上つた。

その時、僕を見上げた彼女の目、燃えて

いる様な、恐れている様な、そして恥らっている様な目、しかも体を固く引締めながら……

……その目を見た瞬間、足がすくんだ。直感ともいうのか、もう駄目だと思つた。

「貴方、……」

どうする事も出来なくなつた彼女は、その場に体を投げ出す様に、僕の足許にどさりと突つ伏した。その声に僕は吸い込まれでもしたのか、そして反射的に彼女の傍に近づいていた。

「妾は悪い女です。悪い女です……」

妾を思いきり打つて下さい。お願い、お願いです」

彼女は狂乱した様に自分の体を立たまゝの僕の足に押付けて「打つて、打つて」と低く、鋭く、しかも真剣にせがんでやまない。最初、彼女が何をいい出したのか分らなかつた。が然し、あまりにも内気だつた彼女が急に豹変したかのように、燃えさかる炎に身を焼かれ、もたえる姿は僕の目を眩らせるに十分だつた。思いきり呵責のしもとに身をのた打たせたかったのであろう。そうでもしなければ、心も体も静まる涯はないのかも知れなかつた。

しかし、僕は思わず躊躇するように一歩後退した。

再び畳の上に突つ伏した彼女が静かに僕を見上げた時、それは哀願と女のうらみと憎し

みとが交錯したとでもいう名状し難い目の色であつた。

僕もどうかして了つたのであろうか、矢庭に女の襟がみを掴むと引起しざま、はだけた真白い胸元をグッと掴んで浴衣を引きはいた。もう僕は夢中であつた。いつ彼女を縛っていたか、明るい電灯の下には無残な一匹の女獣が転がっているに過ぎなかつた。目茶苦茶に苦しい乱暴な縛り方であつた。が二人とも一言も口はきかず、たゞハアハア息が烈しいばかりだ。

何か適当な得物はないかと隣室にかけ込んだ僕は、洋裁用の竹の物差しを握ると、すぐ引返すなり、女の背中といわずヒップといわず打ち下ろした。しかし、こんなものはすぐ折れて役に立たなくなつた。革のバンドを握り直すと、ピチッと振り下ろした。ピチッと心地よい響き、今までこんな響き聞いた事がない。女はピクッと体をふるわせたが泣き声一つ立てず、歯をくいしばっている。「コイツ」と思うとまたピシッと打ちすえた。見る見る赤紫の線が真白な肌に浮き出して来た。

また一と打ち、また一と打ち。僕の方がその度に狂気のように変化して来るのが分つて来たと思つた次の瞬間、今度は逆に段々心が冷静に冷静に沈んで行つた。女が目をとじ歯をくいしばっていたのが、ハアハア

とあえぎ始め、たまち体をくねらせて、のた打ち廻り出したのを楽しむが如くむさぼり眺めやった。

女は情熱の鬼と化し去ったのか、それとも贖罪に身を捧げているのか、いや、亡夫への追憶にひたって、恍惚境にさまよう様でもあった。

「妾はあなたの奴隷です」

彼女の心の奥からの呻めき声を聞いた様

に思った。

遂に革バンドをその処に投げ棄てると、自由の全く失われた彼女を抱き起した。彼女もこらえこらえて来た苦痛の中から、かすか乍ら喜びを見聞いた目元に漂わしたが、ぐったりと僕の腕の中に倒れ込んで了った。

奴隷、奴隷、

何んのためらいもなく軽る軽ると女の身体を両腕に抱き上げて隣室へ勇敢に歩き出した

のであった。

それから……………。

その彼女もそれから暫くして交通事故で信子のあとを追う事になった。諸君はこれを、真夏の夜の夢だといわれるかも知れない。

然し僕にとっては、これこそ真昼の告白なのである。

(終)

〔新版〕袖珍女体緊縛分譲写真集

Y組六十集 大名刺判 (9×6.5寸) 印画紙焼付

各組一枚一組 (全部送料共)

一組一枚	八〇円
五組五枚	三〇〇円
十組十枚	五五〇円
二十組二十枚	一〇〇〇円
三十組三十枚	一四〇〇円
四十組四十枚	一七五〇円
五十組五十枚	二〇〇〇円

Y1	全裸荷造棒しぼり	(大塚啓子)
Y2	乱れ黒髪裸見本	(大塚啓子)
Y3	観念した胡坐	(大塚啓子)
Y4	見事な飾り物	(大塚啓子)
Y5	浴室股間縛り	(大塚啓子)
Y6	麗しの緊縛裸像	(愛川悦子)
Y7	逆十字後手縛	(愛川悦子)

Y8	裸身の捕われ人	(愛川悦子)
Y9	逆エビ後手足吊り	(愛川悦子)
Y10	全裸ねやの縛り	(田中芳代)
Y11	なまめかしき緊縛	(花坂道子)
Y12	全裸フトンむし	(大塚啓子)
Y13	蒲団貫通またぎ	(大塚啓子)
Y14	初々しき裸全身像	(岩井知子)
Y15	ヌード股間しぼり	(絹川文代)
Y16	全裸脚拳股間縛	(絹川文代)
Y17	セーラー後手吊り	(川辺砂登子)
Y18	庭園ヌード縛り	(絹川文代)
Y19	全裸全身軀自慢	(愛川悦子)
Y20	豊満双丘くらべ	(愛川悦子)
Y21	追いつめられた裸女	(愛川悦子)
Y22	遅ましきヒツプ	(愛川悦子)

Y23	大の字晒し	(絹川文代)
Y24	縛り正面正坐	(絹川文代)
Y25	胸のポリウム自慢	(愛川悦子)
Y26	麗人受難の巻	(益田房子)
Y27	もつこれで許して	(益田房子)
Y28	むしられたスロース	(花坂道子)
Y29	全裸縛りの全身	(平野笑子)
Y30	鎮座する縛り女神	(平野笑子)
Y31	囚女後手柱縛り	(大塚啓子)
Y32	全裸強烈股間縛	(絹川文代)
Y33	ベッド縛りのポーズ	(絹川文代)
Y34	開股一番直線	(絹川文代)
Y35	縛り腰巻模様	(絹川文代)
Y36	亀甲股間縛正面	(絹川文代)
Y37	全裸椅子またぎ	(田原美佐子)
Y38	妖艶闊のしぼり	(絹川文代)
Y39	椅子またぎ後手	(田原美佐子)
Y40	強烈第手首縛	(田原美佐子)
Y41	ハタカ縛り人形	(絹川文代)
Y42	濃艶ハタカ縛り	(絹川文代)

Y43	あられもなき開股	(大塚啓子)
Y44	全裸変形股間正面	(大塚啓子)
Y45	後手立木吊り	(村井知可子)
Y46	全裸後手壁ハリツケ	(愛川悦子)
Y47	全裸寝台羞恥責め	(花坂道子)
Y48	振袖令嬢後手責め	(花坂道子)
Y49	長襦袢後手しぼり	(花坂道子)
Y50	ワンピース縛り	(花坂道子)
Y51	手吊り裸身の乱舞	(絹川文代)
Y52	柱縛り観念の図	(絹川文代)
Y53	不行儀姿態の美	(絹川文代)
Y54	カメラに晒す全裸	(大塚啓子)
Y55	緊縛女体の開陳	(絹川文代)
Y56	膨隆突出した臀部	(絹川文代)
Y57	前手錠全裸像	(大塚啓子)
Y58	股間縛開股の絵	(絹川文代)
Y59	聖壇のさらし者	(絹川文代)
Y60	エビ責めの表情	(絹川文代)

秀 緒 の 日 記

藤 山 秀 緒



U

九月号の誌上で、天泥盛英様が、私の書いた告白についてお教え下さいました事、早速読者通信として御返事いたしました。その後、思いつくまま筆をとりました。

天泥様、と申し上げれば、旧号に「鞭打つ女と馬になる男」という素晴らしい写真をお寄せ

になったので深く印象に残っております。

あの写真、もう一度、もっと大きく載せていただけませんかしら。爪先立つようにして腰をうかせた乗馬靴から乗馬ズボンへかけての線の美しさ、ぐっと下腹を突出すようにしてあごを引き、右手のムチをふるうあのポー

ズは本当にすばらしゅうございました。きっと、その時には、何枚かの傑作が生れていることでしょう。拝見したいものです。

天泥様は、キュロットについても御趣味はお持ちのようですが、それより長靴の方に、一層の魅力を感じていただける御様子です。

秀緒も、長靴なしのキユロットには、あまり興味が持てません。その意味では、天泥様と同じですが、ただ、その重味のかけ方は、天泥様の割合とは反対になっているように思います。

私は此の間、喀血しましたが、私には、その瞬間がどういう訳か、苦痛の中にも陶酔的な、いままでに経験しなかったような複雑な感情を味わいました。これも私の中に住むマゾヒズムのいたずらでございましょう。

その日は、菊枝が来て居りまして、いつものプレイに花が咲き、(七月号にくわしく述べさせていただきました)私は、乗馬ズボンに乗馬靴、ササールコートを着け、フードをかぶって完全武装し、「女間諜散華」をテープに入れて居りました。

シャワーにかかって、ずぶ濡れになった私は、フードからポタポタと濡を垂らしながらササールコートのベルトを、きりりと締めた上から、白布に包んだペーパーナイフを腹に押しあてて、

「ウーッ、ぞ、臓腑を切って、臓腑を、臓腑を!……あうっ……ウーム」

と、床一杯に敷きつめたビニールの布の上で、のたうちましました。

でも、臓腑を引きずり出す時のうめきが、どうやっても物足りないのです。いつもと同じになっってしまうように思えて、台本にない

セリフや、呻きを加えながら何度も何度もやり直していました。

そして、プレイとしての迫真力が表現出来ぬあせりが、必要以上に私を疲れさせて行つたものか、目の前が暗くなって来ました。でも私のマゾの血は、その苦しみを、妖しい喜びに昇華させて行くのです。

菊枝も、立ったまま、上体をかがめ、長靴の両足を爪先立てて喘いでいます。

やがて私は、知らぬ間に右手が、ペーパーナイフを離して、フードを付け、きっちりとフラップで締めつけているトレンチコートの衿元を力一杯抑えているのに気がつきました。

そうだ、衿をしめるのだ!

私は、トレンチコートの衿元に、男物のように取りつけてあるフラップ(雨よけベルト)を鳩目一杯まで絞りあげてしまいました。

頸動脈が、どきん、どきんと音をたて、顔は赫らみ、呼吸が苦しくなりました。

その苦しみの中で、私はもう一度、

「ウーッ、ぞ、臓腑を切って!あうっ、ゲ、ゲエーッ、……ウーム」

と声をしばって、のたうちましました。

それは、すばらしい一瞬でした。私は

「ぐうっ……」

と云ったまま、全身を硬直させていましたし、菊枝も、何やら言葉にならぬような叫び

をあげてヒザをついてしまったのです。

……その次の瞬間に、私は、烈しくむせ返り、生温いものを戻しました。トレンチコートのポケットから、ガーゼを出して口元を覆いましたが、間に合わず、ビニールの床の上に本当に真紅の、花のような濡が一、二滴、散っておりまして。

トレンチコートの胸も点々と血がしぶいています。ガーゼも、あかく染っています。

でも、私も床に倒れて俯伏していましたが菊枝も前にのめって喘ぐばかりで、不思議に喀血の重大さが少しもピンと来ないのです。やがて私が冷静さをとり戻して先ず感じたのは、水をふくんだトレンチコートの悩ましき、冷たさ。そして、あまりにも鮮かな血の色でした。

「菊枝……。ぼく、喀血した。」

それだけしか云えませんでした。

衿のベルトをゆるめ、トレンチコートのボタンを一つ二つ外して胸元に風を入れるようにし、ガーゼで口元を拭って菊枝に見せました。

そして、此の物狂わしい花園が取り片付けられ、医者が迎えられたのは、夜も更けた頃でした。

診断の結果は申上げる迄もございません。

でも私は静養しなければ、と思う気持とは逆に、その翌日から、もう起き上ってお仕事

に出ました。

気のせいかわれやすくなり、顔色もすぐれない日がつづきました。

菊枝は武庫之荘の自宅へ帰らなければならぬので、看護婦さんを頼みましたが、これはある意味での失敗でした。当然ながら、いろいろと生活態度を干渉されるので、これでは原稿書きはおろか、乗馬ズボン姿になることもできません。私は、小さなバッグに長靴を折り曲げて押し込み、乗馬ズボンも突込んで、お仕事に行く時は必ず持って歩きました。細身の黒いスラックスを穿き、上は、乗馬ズボンを穿いても似合うよう、派手なチェックのシャツ・スタイルです。お仕事のひまな時は、途中で乗馬ズボンに穿きかえて、銀座を歩いたり、そのまま郊外電車に乗ってあてもなく走ったりして、慰める始末でした。本誌にも、まとめて送稿してあったので、あまり御無沙汰しなすんだものの、私にとっては、まる三カ月ほど、自分の体のことを思ったとは云え、看護婦さんの目をぬすむことでせい一杯でした。

菊枝は約束通り、毎月、三日だけ上京して来ますので、此の三日間、看護婦さんの目ののがれて、どう過すかに頭の痛い思いをします。いまでは、菊枝は飛行機や汽車の中で、もう乗馬ズボンにはきかえ、「乗馬をおやりですか」とか、「お勇ましいですね」などと

乗客に声をかけられるのを、むしろ楽しんでるようにも見えるのです。私はハラハラしながら見ているのに。

そして日が経ち、看護婦さんにも帰って貰い、晴れて再び私の部屋が、私のものとして使えるようになった時、体に用心しながらも久し振りに男装した私を、お芝居用のペーパーナイフが招くような気がするので、何度か何度もシャワーへ走り寄っては、フールドをまぶかに、うつむいて己がトレンチコートの肩へ水を打ち、ずぶぬれの姿でお芝居をする。

フラップを絞って、むせ返る。乗馬ズボンと乗馬靴が、水をふくんで両脚をしめつけています。むしばまれて行く私の肉体が、再び奮起するのです。

馬装して入浴するのは一年位前からです。山中湖で遠乗会があった時、私の馬が水の中で坐ってしまい、乗馬ズボンを穿いたまま腰までめり込んでしまった時の気持。

その時の気持が忘れられぬまま、帰宅してから、入浴の時に、やってみたのです。

……先ず、設定は看護婦。上官の身代りに軍服を着け、クリークの中で切腹する。そして切腹が長びけば、それだけ日本軍の撤退が容易になる。……という筋で、私の扮する看護婦が、その大任を果すため、上官の軍服と乗馬ズボン、乗馬靴に身を固めてクリークに

腰までつかかり、腹かき切ったうち廻ることにしました。

大好きな高倉みゆきさんを想定し、高倉看護婦として私は扮装にかかります。乗馬ズボンを穿き、ウールの靴下にしたのは、水をふくんだ時に快い重味となるからです。そしてプレイ専用の長靴……。上衣は、ゴムのカーコートにして、シャツ・ブラウスの上からきりりとベルトをしめます。

メーカーは水につかっても、くずれぬよう、油性のものを主として用います。

浴槽は狭いので、はじめにシャワーにかかって、ぐっしり濡れるまでは入りません。ペーパーナイフを白布で包み、姿見を浴場の入口まで運んで置くことも忘れてはならないのです。

準備が整うと、テープ・レコーダーがスタート。

そして筋を追って次第に高倉看護婦の自決へと移るのです。

小雨けぶるクリーク。

高倉看護婦は、短刀を片手に、静かに水中へ足を踏み入れるのです。

乗馬靴が、すうっと水に吸込まれ、水温のつめたさが、革を通して足につたわって参ります。

水は、乗馬靴をすっかり吞込んで、やがて乗馬ズボンを噛みました。

ずぶずぶと水が乗馬ズボンを透してにじみ込んで来ます。長靴の中へも流れて行く。

乗馬ズボンの両脚を心持ち開いて、私はペーパーナイフを右手に持ち直します。

ナイフを押しつけると同時に、腰を落しますから、水は乗馬ズボンのベルト一杯の処まで迫り、ざ、ざ、と溢れて行きます。襲いかかるおののき。

「う、う。う、う……」

私は頬を紅潮させて、ペーパーナイフは左の脇腹を挟りつつけています。

此のお芝居は、私にとって新しい興味になったので、季候が寒くなるにつれて、水の温度を調節しながらつつけてました。

(でも、天泥様もおっしゃったように、長靴のいたみが早いので、一足新調しなければならなくなりました。)

結局、十文字腹を切って水の中に倒れて苦悶するのが筋書ですが、私には水へつかった瞬間が一番好きしいです。

こんな事を書いたついでに、秀緒の一日を日記風に綴って見ました。

○月○日

朝、目がさめると、板敷の上に居た。菊枝の乗馬服姿の写真、菊枝の乗馬ズボンなどが散らかっている。

ひどく寒い。そうだ。私は昨夜のままなん

だわ。長靴、乗馬ズボン、トレンチコート。

そして御ていねいにフードまでかぶって、ずぶぬれの姿で眠ってしまったのだわ。

病気に悪いのに、と、ひとりでに苦笑がこみ上げて来る。それにしても、カーテンってどうしてこう光が洩るんだろう。昼の光が、痛いほど床の上に筋を書いている。お天気なんだわ。

厚いカーテンをあける。姿見にうつる私は我ながら異様である。トレンチコートにフードをかぶって、黒い長靴をはいている。肩の線や、ウエストの線を見なければ、どうしても男だ。まあ、シスターボーイと云うところかしら。シスターボーイ戦場へ行く。か。

ごわごわしたコートを脱ぎ、浴室へ行く。昨夜、と云っても、つい四、五時間前の湯が浴槽に淀んでいる。点火する。

あまり度々乗馬服で入浴するので、服の汚れもないと見え、湯は綺麗。

ぎしぎしときしむ乗馬ズボンを脱ぎ、下着類を盥へつけて入浴。

朝食はベーコンエッグにミルク、トーストそれにオレンヂをしぼって少々。

朝の一ときは、自分のアブノーマルな欲望が、一番恥しく、いとましく思える時だ。

あ、今日はお仕事が遠いんだ。急がなくて

——メーキャップ。

「行って参りまーす。」

誰も居ない。菊枝の写真と、そして乗馬ズボンが壁にかかっている。一寸頬ずりして扉をしめる。

九時半、帰宅。

朝と同じである。

濃いレモンティーをいれる。これからが、藤山秀緒の時間。

今日は新しい乗馬ズボンを穿こうかしら。汚れるとまずいな。

いつものズボンを穿く。

昨夜のしめりが、まだ取れてない。でも、ぐつ、と踏込んだ感じは素敵。

○月○日

今日は一日あいている。颱風が来るのだそう。部屋にとじこもってペンを走らせる。もちろん乗馬ズボン姿だ。

ときどき、自分でも、どきん、とするような表現がある。どうして思いついたのか、どうしてペンが走ったのかさえわからない。

ぐつ、と乗馬ズボンをたくしあげて緊張する。——もうヒロインは腹を切って血だらけだ。ペンは、何度も、ウーッ、ウーッ、と書きつつづけている。

「ウ」と云う字が、気のせい、か、ふるえるようだ。乗馬ズボンは、いつものように汗ばんでいる。それでも、まだ気力はある。

——ああ、ヒロインは瀕死。でも頑張って

いる。苦悶の表現も、もう古めかしくなってしまうた。新しいアイディアはないものか。もっと、もっと……。

——疲れた。

こんな事をしていると一日が夢のようである。雨あしはひどくなってきた。もう夜だ。私は馬装のまま、トレンチコートを着た。こんな晩こそ、私にとっては神のお恵みなのだ。完全武装。

レイン・スタイルに身を固めた私は扉を叩いて戸外へすべり出た。

雨は時々、滝のようにトレンチコートを打った。シャワーでは味わえぬもの。

電車の駅は、ひっそりとしていた。改札掛が、不思議そうに私を見ている。ずぶぬれのトレンチコートと乗馬靴が、なんとなく異様なのだろう。

多摩川べりは人っ子ひとり通らない。

雨は激しくなってきた。

なぜ、ここへ来たのかは自分にもよく分らない。でも、土手を下って、泥田のような河原を、がばがばとこわばるトレンチコートに身を固めて歩いて行く気持はすばらしい。

乗馬靴は泥水の中へ沈んで、ズボンの上のあたりまで、どろどろだ。

トレンチコートも泥まみれになっている。でも、雨がひどいので、泥はすぐ流れてしまふ。

「ううっ……」

腹を切る真似をして見た。雨と、川の音で少し位うめいても人に聞かれて恥しい思いをするような事はないのだ。

「い、いまこそ……や、大和撫子の……さ、最期を……見せるッ、まことの、は、腹切りは……こ、こ、こうして、こうしてッ！見事に……」

ウーッ！と絶叫する。水の音に消されて、いくら呻いても吸込まれるようだ。

「女の防波堤」という映画で、荒川さつきさんが、女の断末魔を心憎いまでにやっていた。あの呻きのすばらしさ。

とてもあの真似は出来ないけれど、土砂降りの中で、完全武装のレインスタイルの腹切りの一人芝居。

叶順子さんが「暴風圏」で、ラストにササールスタイルのトレンチコートを着て、嵐の中をずぶぬれになって活躍していた。あの人はどんな気持ちだったかしら。私はあの人のファンではないけれど、ササールコートで、嵐の中に立っているスチールはよかった。あの人が、乗馬をすれば、きつといいわ。

ああ、私はヒザをついてのめっている。

乗馬ズボンの両ヒザを、きっちりと合わせ前のめりに泥の中へもぐっている。胸まで泥水が迫る。

何時かしら。這い上った私はみじめ。雨は

小やみになってしまった。このままの姿では帰れない。雨よ降れ。

また雨がひどくなる。トレンチコートの上から、両手で体をしごく。泥水が、ざあっと流れ落ちるたびに、トレンチコートは白さを取戻す。

疲れた秀緒。

改札口の眼も、車中の人の、げげんそんな顔も、もう何ともなくなった。気にする力もないのだ。

「遠乗りのお帰りですか」

などと声をかける人も居た。お送りしましたよかと云った人の顔を思わず見る。K誌の愛読者かな。むこうの眼も、そう云っているような気がする。一人で歩き出す。

乗馬ズボンが、ごわごわして痛い。でも私は、歯をくいしばって歩く。私の不倖せは、私の倖せでもあるのだから。

(おわり)

《訂正》十月号の「生活と意見」中、六八頁上段後から三行目から(馬や犬など)いじめるのは全く不愉快でしかありません。とあるのを(馬や犬など)いじめる場合で、男同志か男性が女性をいじめるのは全く不愉快でしかありません。と訂正します。何しろこのくだりは麻生保氏の本質に関する個処ですから――。

(麻生保)

告

白



マゾの

散歩から

中瀬一夫

マゾの旅という体験談のようなものが、かつての奇クにのったと思う。私が今から報告することは、「旅」という程の大きなものではないのですが、(従って奇クの読者には今さら新鮮味のあるものではないかもしれないが) 私がこの一年間、実験したところによると、マゾにしろサドにしろ単なる空想の産物ではなく探したせるものだということをいいたい為なのです。

私がこの実験をやるまではマゾは私にとっては、単なる空想であり、実際には奇クでなくさめ、又それによって空想を豊かにしていたのですが、今では或る程度マゾは私の生活に入っていますし、かえって生活に潤いと落着きを得てきたようです。とはいっても、まだまだ、ほんの初歩的なもので、「馬化白書」までは、とうていいいっていないようです。

さて、本論に入りますが、確か二年程前、私は一度奇クの読者のページに投書したことがあります。それは私が読者になったばかりの頃でした。

『私はマゾ的傾向の男性であり、エプロンに大変興味があり、一人部屋でエプロンをして楽しんで』という挨拶程度のものでした。確かに私はエプロンというものに中学生の頃からひきつけられていたのですが、この二年程前までは単にエプロンだけに関心があり、他のもの(下着類)或はすすんで女装すると

いうところまではいかなかったのです。最近はその辺のところまで興味を持つようになりました。

はじめはエプロン・フエチかなと思いましたが、それだけではなくエプロンをしてする仕事、例えばお台所とか、お洗濯とかをする行為、しかも、女性に命令されてすることに興味があったわけです。ですから、マゾ的な傾向があったわけです。

従って私のマゾの入門は、エプロンの話からはじまるわけです。

一、エプロン購入の巻

洋品店にでかけてエプロンを買うのだが、この行為は私にとっては全く楽しい。

「これを下さい」というと、必ずといっていい位、「お若い方ですか？」ときかれる。恥しように「実は僕がするのだが」というと

「まア！」というあきれた表情。心の中ではきつと「奥さん孝行の人」とか「オサンドンの真似なんかして」とかいふ軽蔑まじりの言葉が吐かれているに違いないが、僕には先ず最初を感じたマゾの味というところ。

適当に「女房の身体が弱くて、いつもオサンドンをさせられますよ」とかいって、その店の人にエプロンを選んでもらう。

しかし、それは最初の頃のこと、最近では、あとで述べるように、私の女御主人と一

緒に買いにゆきます。

洋品店の若い女店員が、「奥さま、これなどは如何でしょう？」という、女御主人が「あら、私のじやないのよ、この子のなの」なんて事もなげに僕の方を指さすと、店の娘はびっくりしたような表情になる。

僕は僕で、オバ様の奴隷のようにふるまうので店員は益々オドロキである。第三者が介在しているので僕のマゾ感最高潮に達することになります。

二、家政婦(夫)志願の巻

これは以前、新聞等にも、こういった話がありました、これを参考にしたものです。

まず最初に電話帳をくって家政婦紹介所を選び出し、片っ端から呼び出して「私を使ってくれないでしょうか」と哀願するのです。勿論、どこも断られるわけですが、そのことわられ方にも僕のマゾ感がいたく刺戟されることになります。

ところがです。その中の一軒だけは反応がありました。「一度来てみてごらん」というのです。家政婦紹介所に男が家政夫志願をするなんて、まったく、こつけないことですが勇を鼓して一度行ってみました。

そのときは、本当に胸がわくわくしたわけです。男が家政婦(夫)を志願しているのに「一度来てごらん」というくらいだから、サ

ド女性かな、と淡い一沫の期待と危惧を抱いて、その家を訪問したのです。

その家政婦会の会長というのは、そういう気配のいささかも感じられない中年の婦人でした。私はサラリーマンだから日曜日だけ家政婦のような仕事をしたかったので世話をしたいといったのですが、その会長は、純粋にアルバイトとして考えてくれたようです。

初対面ではあるし、そうはつきりマゾ的な自分の希望をいうわけにはいかなかったのですが、それでも、「私のところが家族でも多ければ女中がわりに使ってもいいのだけど」などと、ずい分僕の胸をわくわくさせるような話もありました。

結局、ある食堂(かなり大きい)に日曜日血洗いに行くように紹介されましたが、さすがに、そのときは実行に移す自信がなく、それに、そこには男性が沢山働いているのでやめてしまいました。しかし、家政婦紹介所でも、話相手になってくれるところがなきにしもあらずということ、大変自信がついたわけでした。

この電話戦術で、大変愉快だったことは、家事サービス補導所に入所したいという電話をかけたときのことです。

はじめ若い女性が出ましたので、僕の希望を告げると、「少々お待ち下さい」といってから、暫くすると、「男が家事サービスに入

「りたいんだって！」といって、若やいだ女の声でワッハッハ、と笑う声が受話器を通して僕の耳に伝ってきます。流石の僕も思わず耳がぼっと赤くなるのを覚えました。

やがて責任者でもあろうか、中年の女性の声でくどくどと、ここは男子禁制で女性だけしか入所出来ないということを話してくれました。その間約五分間位だったでしょうか。大枚十円にて、こんな「マゾの散歩」ができるとは思いがけないことでした。

三、料理学校の生徒になるの巻

男性が料理学校の生徒になるということは実際にあることだし、これ自体別に珍しいことではないのですが、僕のような考えを持ってゆくと、又格別のマゾの面白さが発見されるのです。

第一に、ここでは公然とエプロンがかけられるし、又かけなければならぬのだから大変都合がよい。この料理学校に關してだけは僕の歴史は古い。それはエプロンと關係があるからかもしれない。

学生時代、東京の某デパートの地下に「お料理教室」なるものが目についた。そこに通ったのが『女の館の中の男』になった最初の経験だが、実に面白かった。先生も助手もすべて女性であり、男性は生徒である僕一人。しかも、僕のエプロンは他の女性生徒のより

も派手だったので、よく目立ち、教室はデパートの中でガラス張りのため外から（特に売場から）よく見られ、女店員達が軽いさやきを交しながら僕の方を指さしているのを、なんとも言えない気持ちで聞きながら、お料理の方はあまり進歩はなかった。

この経験から、料理学校には、近い中、もう一度入学したいと考えている。

四、酒場で主客転倒することの巻

僕は生来大変おとなしい、内気の方だと思っている。

一寸したスタンド・バーだが、半年位前から、そこへときどきゆく。

寒い頃は、オーバーの下にエプロンをしていたり、下着にスリッパを着ていたりして、だんだんマゾの傾向があることを示しているのだが、最近はいく僕願いをかなえてくれるようになった。

日曜の午前中にゆくと、お洗濯だ。そこは女ばかり三人でやっている店なので、スリッパにズロースのお洗濯、これはマゾ男には大変愉快な仕事です。それから店やお便所の掃除。まだ、とやま・かずひこ氏のところまでいってないが。それから前に書いたようにマダムと一緒にエプロンをかけ買物かごを持って市場へ行ったりする。

それから、いよいよ飲む時間になるのだが

それでも、まだ陽は高く、他の客はこないで、居間でスリッパ一枚にされ、腰ひもでしぼられ、酒を口うつしにされたり、飲ましてもらったりするわけだが、ここまでくれば、一応僕もマゾの仲間に入れるのではないかと思っている。

五、参考意見

本当にしぼられてみたい、と思うようになって、その頃東京の飲屋でそれとなくあたったが、全部失敗。家政婦の件も、東京では一カ所だけ年令をきいたりして興味を示してくれたが、あとは全部駄目。

大阪に来て、意識的に飲屋にあたったのが今までに三軒。しぼってくれるところがありません。今書いたところは、マダムは、別な客からしぼられるらしい、そんな話をして、しぼられるより、しぼる方がいいと言っているたら、少しはサドの傾向を持っているのかもしれない。でも、まだ本格的なしぼりなどありません。

家政婦の件だが、新聞の就職欄で女子のところにある「洗濯婦」とか「下女中の雑役婦」なんていうところに哀願すると十％は可能性があるようです。

私のようなサラリーマンだと、おいそれとゆくわけにもいかないが、マゾ男性で失業している人などは思いきって、いってみたら面白い経験になるだろうと思う。

(終)



告 白

被 虐 の 一 夜

中 沢 一 郎

(一)

昨年二、三月号に連載された吉田氏の「被虐の一日」なる一文には嘗てない共感を感じ、頭に血が上る様な気持で拝見したものです。今から私の話す手記も同じ「被虐の一夜」ではありますが、この同

じマゾでも、やはり人によって色々と相違があるものです。私の場合、前記の吉田氏程の激しい刺戟もない、どちらかと云えばマゾとしては不徹底なものかも知れませんが、又別なこの様な種類のものもあると云うことが、読者の方々の関心と共鳴を得れば幸と考え、今まで書くことは勿論、他人に話すことも出来なかった私の体験を誌すことにしました。

(一)

それはもう三年余り以前のことです。當時は未だ新宿二丁目の赤線華やかなりし頃、独身だった私はよくこの附近に出没して居たのです。当時としてはなんの変哲もないことですが、唯私の場合、幾分アブな処があった訳です。遡のぼって考えれば私が自分でマゾであることを自覚したのは中学後期の頃からでマゾと云う言葉を始めて知った時、すぐそれは自分の様なことだと分かったのですが、実際にはなんの経験がある訳では勿論なく、その傾向のあるルソーとか谷崎氏の本を愛読して楽しむ程度でした。終始唯一貫して云えることは、その頃から、若し私が女性から責苦を受け得るならば、それは擦られることが一番望ましいということだったのです。

さて、長じて赤線遊びをする様な年になっても、依然としてその望みは続いています。まともな社会では何人か知り合いの女性があっても、自分を擦ってくれ等と頼むことはとても出来ませんが、ここでは金さえ出せば、見ず知らずの女性に、しかもその場限りで何の後腐れの心配もなく、自分の要求を持ち出すことが出来たのです。中には面倒がっ

たり気味悪がったり、又、時としては自分から云いそびれたりして、失敗したこともありましたが。

こんな変った望みのために時々赤線を訪ねていた私にとって、思いがけない幸運が舞い込んで来たのです。

(三)

それはAなる店にいたK子という女でした。最初、彼女に逢った時には、別段変わったこともなかったのですが、唯彼女は明らかに私の好きなタイプ、即ち中背、幾分やせ型で色白、目が大きく、まあ美人の部に入るでしょう。そして何によりも私を喜ばせたことはその手足の美しさでした。元来マゾの私は、攻撃的なもの、即ち手や足に深い関心を持っていたのですが、この点、彼女の手は全く理想的で、真白な手の甲には薄く静脈が浮き、スナナリと伸びた指、そして何時もシットリと柔い掌を持っていました。

自分の好きなタイプを見つけた私は、二度三度と彼女の許に通っている中に、今までの女からは嘗って得られなかった喜びを見出したのです。例によって彼女に擦ってくれる様に頼みましたが、今までの女が唯お義理で、

又は、しかたがなくするのと異り、明らかに自分から喜んで擦ってくれたのです。

これは単に客へのサービスではなく、彼女自身の中に軽いサデストの素質を持って居たからでしょう。もうすっかり親しくなった頃には、私を擦りながら

「私は、こうして男を虐めるのが大好きさ」と云い、又「お灸を据えてあげようか」「浣腸してあげようか」とも云ったことがありました。(この浣腸が責めの意味であることは、その頃の私は知りませんでした)

又、ある時は私に平手打を喰わせたり、突然寝て居る私の両足を持ち上げ、ズルズル畳の上を曳きずったりしたのです。

たとえ同じ女性の手によって責苦を受けても、それが自分で頼んだのでは、心理的に効果は半減してしまいます。あくまで女性自身の意志によって加えられる責苦であってこそ始めて満足な被虐の喜びが生れて来る訳ですが、彼女こそ私にとって生れて始めて出会った本物のサジスト、しかも、その程度が丁度私のマゾと同程度のものだったのです。

尚、ここで擦りについて一言述べて置きたいのですが、私が幼少の頃から女性からの責苦に擦りを望んで居た理由は分りません。元

来、マゾには理由など無いのが当然で、唯な
んとなく先天的なものだったのでしょうが、
実際の場合に於いても殆んどこれを用いたこ
とは、単に好きなばかりでなく、他にも理由
があつたのです。というのは、原則として女
性からの責め苦ならば、どんな手段であつて
も、又何如なる程度であつてもいいのですが
実際的な立場に於いては、自分の家庭的生命
や社会的生命まで危くする様なものであつて
は困るのです。あく迄、被虐は被虐としてそ
の時限りのもので、他の自分の生活、即ち家
庭の、社会の生活にまで影響されてはなりま
せん。マゾと云つても自ずと限界がありま
す。この様な立場から見た時、擦られるとい
うことは相当な苦痛を伴いながら、事後は全
く痕跡を残さない利点があります。従つて私
がK子から受ける責苦は主として擦りであり
その他のものでも後々に痕跡や苦痛を残す様
なものは望まなかつたし、彼女の方も決して
強いサドではなかつたので、擦る他は余り強
い苦痛を加える様なことはせず、むしろ精神
的な屈辱を加えることが二、三あつた程度で
ありました。

従つてこの私の手記も、あの激しい鞭打ち
の様な刺戟的なものではないのですが、創作

と異り、あく迄体験告白である以上、誇張を
避けて、ありのままの範囲に止まることは己
むを得ないと思います。

(四)

こんな彼女がある時

「あんたの手足を縛つて口にタオルを入れて
思い切り擦つてやりたい」

と云いだしたのです。その時は自分が完全
に身体を自由を失うことに一抹の不安もあ
り、縛られることに対する心の抵抗もあつ
て、その奥底にはこれを望みながら、直ぐに
は承諾せず聞き流していたのですが、売春防
止法の実施が迫つて赤線の寿命もあと二、三
カ月のものとなっていました。

私は何時迄もこの得がたいK子を手放した
くはないのですが、若し彼女が郷里にでも帰
つたり、或は東京に居てももう逢うことが出
来なくなるかも知れず、今の機会を逃しては
一生この様な経験を得られぬかと考え、逆に
意を決して彼女に頼みました。すると彼女は
待つて居たかの様にニヤリと笑つて

「いいわ。じゃ、明日早くいらっしゃい。七
時頃よ。思う存分、苦しめてあげるから」
と承知してくれました。そして、私の身体を

傷けることや、その恐れのある危いこと、及
び不衛生なことはいらないこと。その代り右以
外のことは絶対に彼女の命令に服従し、どん
なことでもすることを誓わせられたのです。
彼女は

「明日は唯、擦るだけじゃないわよ。今云つ
た以外のことは何んでもいいんだから、私の
奴隷にして徹底的に屈従させるから」
と目を光らせて云いました。

これこそ私の望む所で、先にも述べた様に
余り激しい肉体的な攻撃は望まず、否、拒否
しなければならぬのですが、心理的な面の
攻撃こそ、むしろ私は好きなのです。明日こ
そは、生れて始めて女の足下に跪いて、その
甲に接吻するという私の、心の奥底深くこも
った願いが実現するだろうという期待に、た
まらない喜びが湧いて来るのでした。

そして、それは私の期待通り、否むしろそ
れ以上に実現したのです。

当日、かねて覚悟してはいたものの、流石
に胸がドキドキと高鳴ります。会社を出て町
で二、三杯の酒を啣り、約束の時間に彼女を
訪れました。昨日、持参する様に命ぜられた
縄とタオル、手拭等を差し出す時は、まとも
に彼女の顔を正視することが出来ず、言葉も

早や卑屈に「御願います」と云って手渡しました。

「よく来たわね。さあ、洋服を脱いで床に跪いて御願いおし。奴隷が洋服を着てる訳はないわよ」

と云うと彼女はそのまま椅子に足を組んで腰掛け、ジーンと私を見つめました。

嗚乎この瞬間、私は彼女の奴隷となったのです。長い間の待望の時が来たのでした。私は思わず「ハイ」と答え夢中で服を脱ぎにかかりました。もう冬に入って幾分寒いのですが、そんなことを思う暇もなく思わず彼女の足下に身を投げ出して跪き「御願います」と上ずった声で頼んだのでした。

その時、肩を彼女の足でドーンと押され、ひっくり返った私に「やり直し、もっと頭を低く床に付けて」

と云う声と共に、更に足で頭を押えつけられたのです。全身がジーンとする様な訳のわからぬ激情に頭がカーッとなり、瞬間、思考力も何も



一切がけし飛んで、完全なマゾ男性として——何んという因果なことでしょう。か——益々彼女が慕わしく思われたのです。

二度目も

「未だお尻が高いよ。もっとペシヤンコに」

と今度はスリッパで尻の辺を打たれ、組んだ足で私の後頭部をグイグイと踏み付けられ、最早や、人間という感覚すら失われる程でした。如何にプレイとはいえ、その徹底振りに舌を巻いて驚きました。恐らく彼女は前々から今日のマゾ・サドごっこの計画を考えて、先ず肉体的な攻撃の前に精神的な攻撃を加えて、徹底的に支配感を楽しみ、逆に私には被虐の悦びを味わす計画だったのでしよう。

私は床にピッタリと体をつけて云い直しましたが、頭を上げた瞬間、今度は足で首筋を押えられました。「誰が頭を上げると云ったの？他に」

私はその意味がよく分らず、彼女

の足に押えられて顔を他の一方の足のスリッパの上に伏せながら、二、三秒、黙って居ますと、彼女は物差の様なもので背中を発止とばかり打ち据えながら、

「何にか感想を云いなさい。え、光栄なんでしょう」

と更に私に責苦を加えます。

「ハイ、ハイ、御主人様の美しい御手で御仕置を頂くことになって、この上ない喜びで御座居ます」

私は夢中でこう云って、自分で自分のこの言葉に酔いながら、首を押えて居る彼女の足の裏に死にたい様な喜びを感じたのです。

漸く許され、頭を上げて次の命令を待つ私に、彼女は

「さあ、料理してやるから早くそこにお寝」

と促し首を小突き廻しました。心理的に徹底的なマゾの快感を満喫させられた私は、彼女の手によって先ず片手ずつ手首を固く縛られ、左右に開けて縄の端をベッドの足に止められ両足も同様に止められました。

私は自分の想像では後手に組んで縛られるかと思つて居たのですが、こう手足を大の字に開かされては、これから加えられる擦りの苦しさが思いやられます。私を縛る彼女の相

変わらず美しいその指の先きに、今日はマニキュアが塗ってあるのが目に入ります。もうあと一、二分の後に自分がこの美しい指によって七転八倒の苦しみを受けるのかと思えば、たまらない嬉しさと恐怖が湧いて、思わず目を閉じました。

やがて口にタオルを押込み、その上を手拭で前から後と、後から前と二重に縛り上げると、彼女は立上って念の為もう一度、窓の戸をしっかり押しつけ、ラジオのスイッチを入れました。幸いに洋間なので、もう少し位の声を上げて外に聞える心配はありません。

(五)

「じゃ、覚悟なさい」

という声と共に、体を固くこわばらしている私の足にその手は下されたのです。足の裏の方から少しずつ擦りながら次第に上つて来ます、この程度のものは大して堪えるものではないのですが、演技的な意味もあって低い声を出しながら次第に迫って来る急所、即ち私の一番擦つたく感ずる脇腹への攻撃を待つていました。彼女は勿論この急所は十分承知して居ますが、わざと遠廻しに漸次、近づけて行くことによって、心理的な効果を期待し

たのでしよう。

彼女は指を二、三本揃えて、子供が砂遊びで砂を掘る様な手つきで、私の最も感受性の強い脇腹を擦り始めたのです。手足の自由を失い、伸び切った体で受けるこの擦りは、普通の時とは比較にならない苦しさを感じ、思わず大きな呻き声と共に手足をバタツカせ、頭を振り、歯を喰いしばって耐えようとしても、形容のしようもない擦り独特の、あの苦しきの前には如何なる努力も無に等しいものでした。

息苦しく目の前に輪の様なものが見え「苦しい、苦しい。許してくれ許してくれ」とタオルの押し込まれた口の中で叫ぶのですが、彼女は一向に相手にしてくれません。然し彼女の方でも、この急所には十分手加減は加えて居り、若し強く連続的に擦り続けては、とても長くは耐え切れないことを承知して居ますから、時々ゆっくりして、二、三秒、手を休めて「どーお？気分は、」とか「幸福そうな顔してるね」等とからかいながら、生殺しの様に苦めて居るのです。もう私には思考力もなにも失われて、マゾの喜びを感じず余裕すらなく、唯、苦しさとこの斗いに総てを集中するのみでした。

やがて彼女はその攻撃を中止し、私の頭の方に廻って、今度は私の頭越しに両手を伸して肋骨の両側から脇の下あたりに攻撃の手を移しました。これは前と違って叫び声を上げる程の擦ったさはありませんが、全身の力が抜け、胸がバラバラになる様な気持の悪いもので、私は目を閉じ歯を喰いしばってこれに耐えるだけです。その時、耳のすぐそばで「目を開けなさいよ」

という声に思わず目を開くと、ニヤニヤ笑って私を覗き込む様にした彼女の目がありました。この瞬間、激しい屈辱と羞恥のため、「アー」と叫んで目を閉じた私に、残酷にも尚も目を開けと命令しながら

「あんたは私の手に惚れたんだろう。その手に擦って貰ってるんだから、もっと幸福そうな顔をおし。え——何にさ、その顔は」

と云って上から唾を吐きかけ、更に鼻をつまんで目茶苦茶に捻り廻してから、平手打を連発し、

「さあ、幸福そうな顔をしな」と強制します。

嗚乎、こんなに酷く彼女の攻撃を受けるとは想像もしなかった私は朦朧とした意識の中に半ば泣きながら「幸福です幸福でございま

す」というのですが、勿論声は出なく、タオルを詰められた口をもぐもぐさせて憐みを乞うばかりでした。

漸く「一休みして上げるよ」と云った彼女は私のそばを離れ煙草に火をつけ、そばにあった椅子を引きよせて坐ると、もう心身共にくたくたに打ちのめされ、グッタリと伸びた私の姿を眺めて

「どーお？ 大分いい気分だったでしょう。でも、まだまだだよ。まだ三十分しか経ってないのよ。これからK子様の本当の恐しさを教えてあげるよ。お前が一生、K子様の足もとに跪きたくなる様にね」

と愉快そうに云うではありませんか。

私は余りに彼女の加虐が堂に入って、心理的に加える責の巧妙さに、フト私の以前にも誰かが或は何人かがその足下に跪いて、私と同じ様に散々な目に遇わされたのではないだろうかと思いました。ともかく数多くの男に接するのだから必ず二、三人位はマゾも居たに違いない。或は現在でも私の他に彼女の奴隷が居るかも知れぬと想像したのでした。

フトそんなことを考えて居た私に

「何にを考えてんのよ。恐しくなったのかい？ 御前は手足がきかないんだよ。いくら考え

たって私が許してやる以外に、どうすることも出来ないんだからね」

と云って、いきなり顔に濃い煙草の煙を吹きかけ、不意を喰ってむせ込んだ私に、更に指で臉を押し開けて目に煙を入れたのです。これは効きました。ツキンツと目の奥が痛んでポロポロと涙が流れます。

「アハハ………そんなに嬉しいの？ 泣き出す程」

と彼女は面白そうにからかいます。流石に余り痛そうな顔をしたと見え、眼は一度で止めてくれましたが、尚二度ほど顔面に煙を吹きかけられたのです。そして椅子にかけた儘片手を伸して、丁度医者が聴診器を身体のおちこちと移す様に、所嫌わず擦り始めました。手と足は縛られても胴の部分は比較的自由が残されている私は、彼女の手を逃がれるべく、必死なうて胴を動かし、悶え廻るのです。が、彼女はそんな私のあさましい姿を見ている中に、煙草を捨てて立ち上ると、何時もより幾分か高い声で

「さあ、止どめをさしてやるよ」

と云うなり、最初と同じ一番弱い脇腹に、しかも仮借なく攻撃を加えて来たのです。一瞬経験のない激しい恐怖と、すぐ又それを考える余猶もなく私の身体は地獄の責苦の中に

のた打ち廻り、お腹の中が目茶苦茶にかき廻される様な苦しきで、これで腸捻転でも起きないの不思議な程です。どんなに腹部に力を入れて耐えようと思っても、私の弱点を知り尽している彼女の指先の動きにかかつては総て空しい努力に終り、口の中はカサカサに乾き目の前はグルグル廻る様な苦しきで、殆んど動物に近い悲鳴を上げ続けるのでした。最初の時と異って、彼女は口もきかず、又、たとえ何か云っても、もう私には聞えないでしょうが、ともかく、少しの手加減もなく攻められるのですからたまりません。もう生涯あんな苦しいことはない、否あれば危いと思う所まで彼女の手は私を攻めたてます。私はもはや身体が地面に引きずり込まれる様な感じ、半ば気が遠くなりかけ、恐怖の余り必死のもたえ方をしたらしく、やっとその様子が、もう限界に來たと見えたのでしよう、彼女の手は漸く攻撃をやめて引き上げられました。

(七)

あの夜、縄を解かれた後も全身の力が抜け全身がしびれた様で直ぐには立ち上る気力もなくなった私は何時も感ずる様に、そして普段より一層激しく、自己嫌悪と後悔に責められました。マゾと云っても結局は人間ですから、その望みが満たされた後は暫くの間、マ

ゾ的感覚も消失して激しい虚無感に支配されるのです。唯、これもほんの一次的なもので時間がたつと又元の自分に戻ってしまうのでフラフラになって家に帰った頃には、もう今度の経験が素晴らしいものになり、彼女と、その美しい指に、耐らない憧れを持つ程になって居ました。

そして十日程の後、再び彼女の許に足を運んだのですが、その時、先日恐しい言葉「お前が一生、K子様の足下に跪きたくなる様にね」と言ったことが、決して嘘ではなかったことを悟ったのです。

室に入るや否や、彼女は無言で自分の足下の床を指さすと、私はまるで暗示にかかった様に跪いて先日のお礼の言葉を述べてしまったのです。

勿論、あの様な事はそう始終出来るものでなく、その時は簡単なプレーでしかなかったのですが、彼女の私に対する態度はあの日の境にしてガラリと変り終始、命令的で、私も又易々としてその足下に跪き、服従することが当然の様な錯覚から抜けられなくなってしまいました。年もいよいよ暮れた三十日、来年早々彼女と旅行する約束をして私は有頂天になって喜び、旅先のホテルで、女王に侍いて加えられるであろう色々な責苦を想像しては、ゾクゾクする程の気持になるのでした。

然しその期待にもかかわらず、それは実現しなかったのです。否そればかりか、あの約束した日を最後に二度と彼女の姿を見ることは出来なかったのです。

正月の十日頃、彼女はもうAなる店から姿を消して居り、事実その頃になるとポツポツと店を閉め戸を下して真暗になって居る所が次第に目立って來ました。やがて月末の頃にはもう終焉に近いあわただしい空気が流れてドンドン去って行く女達は、国に帰ったり、転業したりしたのでしようが、皆その前身の知れることを恐れて、行先を秘めるので殆んど分らず、彼女も恐らく誰にも語らずに突如として姿を消したのでしよう。私は一斉廃業の最後の日迄数回、万一の僥幸を頼みに残った店々を探し廻りましたが遂に空しく、二度とその姿を見ることは出来ませんでした。

あの時から既に一年半、今でも町の辻々には夜の女が見当りますけれども、とても近づく気にはなれないし、第一あのK子の様に私にピッタリした人はもう二度とないだろうと思うのです。

かくて再び私のマゾは唯、空想の世界に昇天して、止み難い先天的なこの暗い一面を心の奥深く秘めたまま、日常は何ら変わらぬ正常な社会人としての日々を送って居りますが、二度と私の前に彼女の様な素晴らしい支配者の立つ日はないものでしょうか。

私の風俗画

遠藤 春一

◇脱毛室◇◇奇婦院◇

「女の縛り」という題材は、私の得意中の得意のものです。一ファンがこのような姿のも

のを望んでいるということも、一つの当世風俗画としていささかの価値があるのではないでしょう。私の場合、やはりモデルをモデルとしてでなく、実際の場面を想像する方ですので、

全裸ではなく、実感のこもった、今からこのような姿にして見たいという空想を絵にしてみたいのです。こういう考えの人も沢山居ることと思います。

私の場合、自分であの女性をと、思えば、早速筆で描いて楽しみます。或は拙



いながら小説にもしてみます。興味をそそる題材、それは私の制作意欲を最大限に刺激します。男性が女性を責めるという設定、やはりこれが第一かと愚考いたします。女が女を責める、これも悪くはありませんが、これはやはり受身と受身ですので私達男性側から見



れば、それ程興味をそそりません。

次に猿ぐつわの点、これも鼻までかけず鼻の下まで止めておくやり方、こんな感じも悪くないと思います。鼻の線がスツキリして顔の美しさをくずさず、よいと思います。

「脱毛室」では、上下の歯の間にかましました。あの外国映画なんかでよく見るやり方です。尚四馬孝先生の絵は、まったく興味を持

っております。第一に女性のスタイル及び苦悶にみちた表情の描き方には大いに教わる所があると思います。

女性が縛られ、或いは責められ、その痛さとか苦しきとか、または不安と恐怖におののいている表情とか、体の動きを美しく絵にすることは、なかなかの難事です。

きれいな事だけではいかず、かといって余り

リアルでも感心出来ないでしょう。

しかし、絵としての、それ自体の価値はともかくとしまして、現実の社会ではタブーであるところの「女の縛り」を、夢や幻をモデルとして一人静かに筆を走らせることは、大へん楽しいことである反面、一個の社会人として、私が健全な日常生活を保持して行く為に必要なことなのです。



或るフェチシストの素描

△汽車の中にて▽

早 野 勇 作

△芥川賞は実験の宣言を試みた文学に対して

直木賞は実験の結果を発表した文学である▽

これは自からを三流役者と称して趣味のフェチシズム行為に耽ける青春の落し子、白川章の意見である。

その意見の持主である「章」は、昨夜から

東京行きの車の中にあつた。そして向いあつ

た子供連れの母親らしき婦人の足元に心からなる情緒の雰囲気求めていた。

その母親らしき婦人のハイヒールは鮮烈な黄色であつた。フェチシストである章の欲求のすべては、その黄色いハイヒールに口をじ

かに触れる事に集中されていた。

その行為は軽犯罪法上、章にはゆるされそうにもなかったが、章はそれを敢て強引に実行したいと思つた。

章の口唇は乾いている。感觸の後へつづくものを連想した。淡いドットフレヤー・ス

カーットの裾から下着のレース飾りが、車の振動にそよいでいる。

章は或る瞬間を想像した。それはあまりにも美しい光景になるはずであった。章は自分が男の服装をしている事実を悲しい現実として強く意識していた。章はスカートが欲しいと思った。女でありたいと思った。

章が異性の前へ女性の服装を着衣して……三年前の或る夕方、事であった。屋台のおばさんは章のことを「美しい人だね」と形容した。その時、章は妹のブラウスとスカートを着ていた。

章はハンドバッグの中から口紅を取り出して、厚化粧の動作を女としての感覚で開始していた。

「男と待合せでしょう？」

遂におばさんは章の演出効果に完全に魅惑されたのであった。章は云ったものである。

「私、素人じゃないのよ」

「あら、そうは見えないけど——」

三年前、章は反社会的な観察を一部分試みることになった。章は男の客(?)を相手にしてみたのであった。その経験はあながち

ナンセンスではなかったのである。そしてその一つの実験によって三島由起夫の『禁色』という小説を信用したくなった。

あの夜の相手は、章を男と知っては扱ってくれなかった。章はあくまで女性として取扱われたのである。章はその男をつぶさに観察しながら此の世に於ける社会という組織と、人間という個人の習慣性というものに恐ろしさとコッケーさを知らされた。

章の脳細胞は激しく破碎されていた。章の眼はあらゆる物質の価値観を根本から顛復するマルキ・ド・サアドの思想と完全に一致した。貧民窟に於て日常茶飯事として行われる、そんな光景より、もっと反自然的な何物かが、このえたいの知れない人間社会のスタンダードな見てくれの内側にかくされているような気がしてならなかった。

新派の花柳章太郎ではないが、デパートの婦人服売場の前を歩く時、常人では感じられない一種異様な胸のときめきを憶える様にもなってきた。章は、そうした自分の感覚を本物だと自惚れるようになっていた。サルマタを脱いで金魚ばちの様な可愛いフリルをレースであしらった少女向きのナイロン・パン

ティを着衣するようになったのも、その頃の話である。

女性そのものよりも、それに附随する衣服の方が章の心情をゆすぶるのであった。豊かなヒップよりも一枚のズロースの方に。双つの乳房より一枚のブラジャーが章の本能を貪欲な方向へとかり立てた。きっちり肌と肌を喰い込んだズロースのゴム輪の感触は、章の乱れ勝ちな頭脳を静かに慰めてくれるのであった。

さて、向い合った婦人のハイヒールは、そのままの位置にあった。章の乾いた口唇は、目の前へ差し出された二個の物質にくぎづけされたまま淡い感傷に耽っていた。

章の生理的な胃袋はサイダーが欲しいと云った。しかし、章の強烈な節片淫乱の習慣は自然の欲求よりも反自然的なモノマニアの叫びに服従しようとしていた。

ああ！、完全なニンフォマニアにとりつかれた章は、汽車がトンネルへ入るのを待つことにした。

ハ汽車の中で、(その一) 終りV

『話の屑籠』補遺

—本誌を刎上にのせた
『週刊男性』への反論—

辻村 隆

衆目の見るところ不良週刊誌の雄たるところの『週刊男性』が、特別レポートとして、『蝕ばまれた官能』と題し、九月三日号に、本誌を刎上にのせて四頁に亘り、堂々と麗文を掲載したのには、啞然とした。曰く……サドとマゾの機関誌。曰く、「縛り」という痛い快感……曰く「拷問」という狂った遊戯……曰く、奴隷の汚れた喜悅……

成程、本誌をうわつつらだけ眺めて見ると、誠に一言の弁解もない、尤もらしい御意見を並べている。

だが、この企画を敢えて掲載した意図は奈辺にあるのだろうか？ズバリ一言にいうなれば、奇クの引例文の利用にある。これを長々と引例して、チョッピリ御義理の様に、も

っともらしい忠告めいた文を二三行、書き添えてある。企画に行詰った拳句の果、人の禪で角力をとる卑劣さが、行間に歴々とにじみ出ているのである。

それ故に、同業界の手前、流石に気がひけるのか、

「たしかにこの雑誌は、いうところのエロ雑誌ではない。どこを読んでもエロ乃至ワイセツな表現は使われてないのだと、発行人は断言するに違いない。（事実その通り）しかしエロではないが、サドとマゾオの雑誌である。（これもその通り）」

という様に、いざという時の予防線は張ってはいるが……。

併し、茲に『週刊男性』の大きな誤謬があ

りはしないだろうか。

奇ク自体は、ささやかな同人雑誌にも等しい、同好の会員を対象とした稀少雑誌である。毎月毎月の出血を覚悟で、全国の稀少の同好者を相手に、正規の市販ルートへも敢えて乗せず、会員のみを対象に捌き、残少分の幾許かをやむなく赤字補填の償いに所謂ゾッキ本として流しているに過ぎない。各月号にしろ、極く限られた部数しか発行していないのだ。一方、『週刊男性』は弘済会やその他の取次店から敬遠されながらも、毎週全国に正規のルートにより、発行を続けている週刊誌ではないか——。自ら、そこに読む人間の頭数は、奇クに比して桁はずれに多い筈である。

今、仮に、本誌の存在を知らなかった人も、この特別レポートによって、反って刺激され、或いは本誌を読みたい欲求にかられないとも限らないではないか。一人でも多く本誌を読んで貰える事は、それだけ奇クの発展にもなるが、それはむしろ有難迷惑だといわなければならない。変に曲解されたり、妙な正義的道德感を真向から振りかぶられては甚だ困からである。

単なる興味本位にレポートされた結果、本誌が、『週刊男性』なみの不良誌に扱われて

は耐ったものでない。

私は『週刊男性』の編集人、牛丸敏弥が、嘗って数年前「愛情生活」の編集人として、惨鼻を極めた暴行現場写真や、目を掩うような陰惨な犯罪写真又、ドぎついエロを憶面もなく誌上にのせて、この種の尖端を切った男である事を知っている。

事実、この九月三日号をめぐって見ても、殆んどがエロ読物に終始している。本誌を称して、「アブノーマルに拍車をかける」との見出しの許に、

「問題がある。これを絵空事とよむほどのボンサンス（良識）のある人間なら、この雑誌を一寸読んで、いやはやと眉をひそめるに違いない」

この文句も、天に唾して自分にかかる文句ではなからうか。この言葉がそっくり、『週刊男性』の今の在り方に当て嵌まっているのも皮肉である。

今だからこそいえるが、良識ある故溝口健二監督の書齋には、整然と奇クが書棚を埋めていたし、有名な探偵作家E氏も本誌の愛読者である。

況してや、文豪、作家のうちに、アブノーマルの世界に足を踏み入れた小説が、数多

作として紹介され、洛陽の紙価を昂めている事実を、『週刊男性』はどう解釈しているのだろうか。

谷崎氏の『痴人の愛』『富美子の足』『武州公秘話』近くは『鍵』等、どれ一つをとり上げてアブノーマルでないものはない。

江戸川乱歩氏の『パノラマ島綺談』『陰獣』『盲獣』に連なる一連のアブノーマルの小説……。

数え上げればキリがない。

奇クには、流行作家、大家の小説は一つもない。謂わば、素人に毛の生えたのが、やむにやまれぬ欲求から、書き綴った、真実の叫びである。下手であっても、拙くても、読者通信でも判る通り、お互が共鳴し歓喜して、これはこれなりに、健康的な節度を守って、アブの世界に耽溺しているのである。所詮はノーマルな人間の測り知る事の出来ない、窺い得ない特異な世界であるかも知れない。

『週刊男性』の性の享楽に拍車をかけるが如き一文こそ、その影響をうけて、それこそ真似手が出てくると考えても差支えあるまい。

昭和二十二年に創刊して以来、延々十二年間に亘り、風俗誌として発行し続けて来たがこの危険な世代に、奇クの感化をうけて、犯

罪をおかした人間が、果して何人あったか――

、お聞かせ願いたいものである。

では、目を『週刊男性』に転じてみよう。

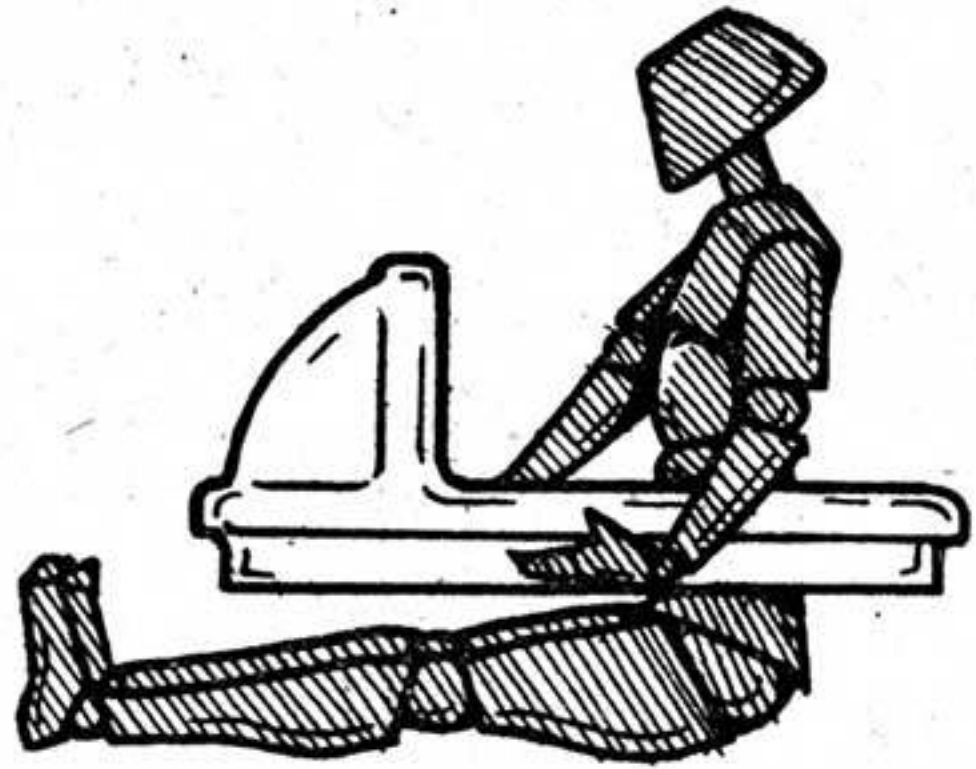
葉田光作、弁天太郎夜行日記なる連作で、九月三日号には「刺青娼婦」が載っている。

縛りが、どうのこうのと云々する『週刊男性』にあって、この小説の挿絵は、またなんと全裸の女を後手に縛って、背中にとかげの刺青を描いたどぎついものが扱われ、文中にも一糸纏わぬ裸女の後手縛りなる個所がチャンと書かれてある。何のことはない。自分の雑誌ならヘイチャラのこと、他誌の事になると目に角立てる卑劣さである。

この一例を見ても、『週刊男性』のこの特別レポートなるものが、奇クの引例文（前後を省略して或る個所だけピックアップしてあるから、殊更にドギツク感じるよう仕向けてある）を売物にした悪趣味に徹したやり方だと非難されても仕方なからう。

『週刊朝日』『サンデー毎日』等の真面目な大週刊誌が、採り上げたのなら、私は何もいえない。相手が典型的不良週刊誌であっただけに、一応反発して見たまでである。

幸か不幸か、或る意味に於て、奇クもすっかり有名になったものである。



愛 好 者 の

マ ニ ア の ノ ー ト

記 録

とやま・かづひこ

九月号をひらいて、非常なショックを受けたものは、かづひこ一人ではないであろう。われらの畏敬する「ヤプー」の生みの親、沼さんがまた姿を消すという。

かづひこの知る、ある腕きゝのジャーナリストは、沼氏のあの異常な筆力を『Mの魔』と表現して激賞していた。沼氏の文章なら、そのまゝ立派な本になると感嘆している。その沼さんの文章が大巾に後退するというのは、誠に惜しく淋しいきわみだ。おこがましいが、せめてその百分の一か、

千分の一を、このペンで埋めたい。それだけでなく量的にめぐまれぬわがK誌の、Mのよみものから研究を、肩のこらない文献として書きとめてゆくことによって、すこしでもカバー出来たら嬉しい。

とはいえ、天才沼氏のブランクを、わが貧寒なるペンが、どの程度まで補ってゆけるだろうか。しかし、「もうやめろ」といわれるまで、野良犬のごとく資料をあさり、体験を積んでこのノートをつづけてゆきたい。：同好諸兄姉のあたたかき御声援を期待しつつ。

(109)

実習用モデル

京都市のSモデル製作所というメーカーが主として医学の実習用に造っているモデル人形があるそうで、そのカタログによると、価格も相当高いが、仲々精巧なものであるらしい。これは看護学の実習用のものらしいが、もしわれわれ向きの人形が出現したら素晴らしいだろうと思う。

高度に進んだ製作技術のもとに、人間と変らないような精巧なのができれば……前記のカタログの実習人形は注射や胃の洗滌まで実習できるそうだから、外形だけの生人形ぐらい、わけなくできそうに思う。……

そしてボタン一つで色々に動きまわる。人形ながら、美しい顔をした女王様。文字通り血も涙もない冷酷さで、かづひこを踏んだり蹴ったりしてくれる。

かづひこは、その看護学実習用モデル人形のカタログをみながら、そんな夢を描いたのだった。

(110)

虫

七月三十日のひるさがり、五反田の親友を

たずねての帰り途のこと。

五反田のガード下の交差点はストップの長いので有名だ。

「まだかナア」

いつもながら、かづひこは心の中で地団駄を踏む思いで、トナリの人に眼をやった。いつ来たのか、そこに三人連れの女性がいた。中の一人が妙なものを右手にぶら下げているのがかづひこをひきつけた。

白い糸の下にいわえた、大きなカブト虫。

あわれにも、全身(?)をギリギリとしばられて、美女のしろい手に吊り下げられて、宙にむなしくもかくカブト虫。

どうも、そこらの露店の虫売から弟さんのオミヤゲにでも買って来たものらしい。

とっさにかづひこは、かづひこ一流の夢幻の境に突入していた。——かづひこは今、処刑を待つ囚われ人のように、くくられてこの若い美女の手にぶらさげられているのだ。

「私ネ、こんなのをみると、ギユウツと握り殺してやりたくなるのヨ」

その美女は、傍の美女に話しかける。

「私なら、足の先で踏みこころしてやるワ」

ニッコリ笑ってその美女は答える。

「私なら……」

更にもう一人の美女がいう。

「金魚鉢に入れて溺れさせてやるワ——」

吊られたかづひこ……否、かぶと虫がゆらゆら揺れて前方へ進んでいった。ザワザワと周囲の人がうごき出した。かづひこはハッとわれにかえって、みると信号灯が青にかわっている。かづひこはあわてて歩き出した。白昼、路上で幻想に酔うた一ときである。

(111) 捨て場

かづひこは、仕事の関係で毎年七月の末の十日程をアタミで過す。今年もまた、社用を無事にすませて、一緒に働いてくれたファッシオンモデルのM・T子さんと肩をならべて本社からの迎えの車にゆられていた。

かの女、温泉にはいりすぎてカゼをひいたとかで、しきりにセキをしては、かわゆくノドをならして、チリ紙で口を拭っては別の紙につつみこんでいる。

その様子を横目ににらんで、かづひこの胸は高鳴るのだった。

それから三十分も走ったろうか。道路が三つまたに別れている地点に一台の車が停っていて人が手を振っている。

「事故かな」と思いながら近づくと、顔なじ

みのモデル協会のSさん。

急にM・T子さんの出演が必要となって、ホテルへ連絡したが、もう発った後だというので、ここまで迎えに来て待っていたのだという。

T子嬢、急がされて降りる準備をしながら手の例の包みをどうしようかとウロウロしている。

「時間が余りないんだ。早く……」

Sさんが外からせかす。

かづひこは、とっさに手を差し出した。げんそうな顔つきのかの女。

「捨ててあげます」

かの女の紙包に眼を落した。

「早く、早く」

と又、Sさんの声。

かの女は無言で、その紙包みをかづひこの手にのせて、車外に出た。

やがて窓から手を振るかの女の車は、かづひこの行く途と直角に折れて走り去った。

かづひこは思いもかけず易々と手に入ったこのおくりものに喜悦しながら、小さくなる車の影を見送っていた。……かの女が、その捨て場を知ったら、どんな顔をするだろうかと思ひながら……。



通信

『浣腸』の記事に寄せて

岡崎春江

九月号拝見致しました。先々月あたりからのファンの方々の願いが酌まれてか、アパートでの浣腸が掲載されて胸のわくわくする様な嬉しさでした。この様に本当に何処にも行われて居る様なシーンの中に、とても捨て難い味わいがあるものだと感じました。

何より嬉しかったのは登場人物も浣腸の理由も自然で、まるで自分が浣腸を施されるみたいな気持ちに誘われた事でした。一寸気になったのは、文中ではイルリガートルが使われるのに挿画がガラスの浣腸器だった事——私は、この浣腸器の方が好きなのですけど——それにしても浣腸器の描き方がお粗末でないでしょうか。私の様な読者は、浣腸器がグリセリンのため、何とも云えない光沢を帯びた感じ、尖端の微妙な曲線や目盛一つの描き方にまで、とても重大な動揺を覚えるものです。

この点では数年前「おしめと浣腸の幻想」と云う挿画で、お便秘

したお姉さまを浣腸なさる女性の描写が一番良かったと思います。最近の「妖婦の生贄」は浣腸器も女中の容貌も全然、感心いたしませんでした。あの頃の月岡映子様、岩村美智子様や池田喜代子様はどうしていらっしゃるでしょう。K誌の性質から半ばあきらめていますけれど、私のはかない夢は一度でよいから浣腸特集号を手にしてみたいと云うことなのです。何か特別な刊行でもこの願いは適えられないものでございましょうか。

夏休みの季節になって、お勤先でもお友達の間で海水浴やキャンプの相談がもちきりですが、私はそんな仲間に入っていてさえ、子供の頃、海水浴から帰った夜お熱を出して、その日、食べた氷あづきでお腹を悪くした(ときめられて)と早速、母の手で浣腸の憂き目を味あわされたのを想い起して、横でしきりにおしやべりしている仲良しのB子さんをぬすみ見し乍ら、一度写真帖で見せていただいた様なB子さんの小さい頃には、やっぱりお母さまの浣腸のお達しにベソをかいいたのかしらと思ったり、若しも急に病院に掛る様な事が起って、無慈悲な看護婦さんの浣腸器の前に屈伏しなくてはならない様にでもなったらB子さんは、どんなお顔をなさるかしら、な

どと空想してしまうのです。

こんなおぞましい興味を懐いている私をご覧になれば、普通の方ならきっと口をきくのもいやらしい女とお考えになるでしょう。私もお嫁に行けなくなる様な自分の困った性癖から抜け出さねばと、幾度心の中で固く誓ったか知れないのです。でも毎年、梅雨時から夏にかけて新聞や雑誌にきまって掲げられる家庭用の軽便浣腸の広告や用い方の記事を見ると、今頃、世の何人かのお母さまは、坊や達にとって拷問に等しい器具を用意なさっていらっしやるに違いない。どこかの病院のベッドではこの悲しい洗礼に服している患者があるんだ」と云う妖しい想像が浮んで、それが私自身の相遇した浣腸の追憶に連ってしまいます。

私の小さい頃は、池田喜代子さんの「子供の時の浣腸」と全く同じ境遇でしたから、女学校に上って始めて、お熱を出しても母が浣腸を持ち出さなかった時の、うれしさを今でもよく覚えてる程です。でもイチジク浣腸は用いられた覚えはございませんでした。母は「固いセルロイドは嫌がって動く痛いし、せいぜい一〇瓦しかお薬が入ってないから、イチジクなんか駄目」と云う意見で、私が物

心ついた時分には、既にあの百目ローソクみたいな恰好の、こわいリスリン浣腸器が常備されていました。その頃の私は、病気になると先ずふりかかる受難の用具と悲しいおマルが、すっかり良くなるまで、私の我儘を封じるための様に片付けて貰えない事に、どれ位口惜しく恥しい思いをしたかわかりません。そして大人になっても、こんな無情な処置を甘受させられる事を知ったのは、四カ月あまり入院して付添さんから御不浄の仕末までしていたただかなくてはならぬ破目に陥った時でした。

病院で浣腸を受けねばならないのは、検査の日とお便秘の時でしたが、どうせ許されぬものなら、せめて秘かな思慕を感じているやさしい看護婦さんの手にかかることを願いました。しかし、皮肉な現実には私の不逞な心中を見透した様に何時も年嵩の邪慳な看護婦さんをよこすのでした。親切にすれば甘えて面倒とでも云わんばかりに、私達患者に拒否や抵抗を差しはさむ余地なんか与えず、まるで網でも押しつぶさるみたいな宣告で、いとも一方的に片付けてしまわれる浣腸は、唯、屈辱と嫌悪が残るばかりで、気分をこわすこと甚だしいものです。それに母の浣腸の方がよ

っぱど文化的な位でゴムのカテーテルなんか用いては下さらず、直接に固く冷たいガラスの攻撃が繰返され、その都度、じっと噛みしめねばならぬせつなさは身じろぎもならぬ立場だけに一層悲しいものでした。

でも、私の心の裏側には、お浣腸——看護婦さんは言葉だけ、こんな気まり悪い位丁寧な言い方をなさいます——のお達しのある時何時も不安の入り混じった妖しい期待が頭をもたげていたのです。その証拠に退院も近づく位恢復した頃、又お便秘して付添さんに「看護婦さんには申し上げないでお通じ薬を飲ませてほしい」とお願いをした時、看護婦さんに云い付けられることよりも、本当に下剤を許される失望の方をおそれました。

付添さんは、暫くたって戻って来た時、私に下剤の害を云い聞かせて、それから私が味わうことになるセロハンの包みを取り出してみせました。イチジク浣腸、実際に使用されるのはこれが始めての気まりの悪い形の容器が、思わずハッと顔をふせた私の前でプチプチと穴を開けられ、付添さんはお便所でする事を告げました。御不浄までの道中にでもこれから行われる処置の知られてしまう、イヤ消えてしまいたい様な気持、でも私は幸福だ

ったんです。

今はもう病気ででもない私に、こんな口にする事も出来ない性癖が満たされる方法は、ただ関連のある作品や文献に接することだけです。

その意味でK誌は、どれ程私の心の窓を開

放してくれたこととごさいます。どうか執筆の方や浣腸フアンのみな様、私の様な読者のために、どんどん新しい作品を発表して下さい。私も、これまで何度か読んでは棄て、又懐しさに集めたものも少しございすから、これから何時でも喜んで使っていた

だきたいと思っております。
では、最後に編集の皆さまの御苦心にお礼を申し上げ、御活躍をお祈りいたします。

サヨナラ

現代マゾヒズム芸術時評

原 忠 正

復刊第七項

出版物「口笛吹いて」

キエーザ著
清水三郎太訳

前掲伊太利映画「口笛吹いて」の台本から作られた少女少女むきの小説、本書は伊太利語の原本から直接日本語に訳出されている。

チータという犬が、或る金持の夫人の許で可愛がられている。チータは或る日、外へ脱け出す。主人の車を見付けて追いかけるが、主人は自分の妻が可愛がっている犬がそんなところをうろついているとは知らず、車は速度を速めて行ってしまふ。やがてチータは田舎まわりの小さな貧しい曲芸師に発見される。

心のやさしい芸人は犬を連れてゆくが、妻の調教師は大の犬嫌いな上に、チータが無理に引き出された舞台上で失敗をするので打ちすえて追い払われてしまふ。疲れ切った犬は浜辺まで来て力つきてしまふ。其処へやって来たのが貧しい家庭で育ったけれども、心の優しい、そうして犬の好きな幼いモスカであった。彼は家へチータをつれて帰る。家の人達は皆やさしい人々だったけれども、家庭は大一匹飼うのにも困る程貧しかった。しかし、人々の愛情、特にモスカの愛情はチータを飼うことに同意させてしまふ。

ところが或る日、チータは犬殺しに捕ってしまふ。けれど幸にも、元の御主人はやっとチータを発見する。モスカは其を知らずにチータを探して歩いている中に遂にチータに出会う。モスカとチータとの愛情を知った元の御主人は、結局モスカにチータを渡す。

小説は映画と同様に、ここで終っている。これは犬のシンデレラ物語である。チータはモスカによって人格を与えられているかの様である。モスカ少年の家は現実的には貧しい家庭ではあるが、チータは心豊かな、富める魂へと導かれる。物質と精神、王子と貧しい少年、貧しい娘と犬とを置き換えてみると、これは立派なシンデレラの物語に違いない。

映画としても、以前に詳しく書かなかったが極めて良心的ないくつかのエピソードを伝えられている。デ・アゴステイニ監督は、此の映画を自費で作った。而も、その費用は極めて少額しか用意することが出来なかった。アゴステイニは、未知の新人をしか集めることが出来なかった。ゾフィア・ローレン、ジナ・ロロブリジタ、アンナ・マニヤーニ、シルヴァーナ・マンガノ、或はエレオノラ・ロッシ・ドラゴ等の著名なスタアは勿論、名前を連ねていない。強いて名前を求めれば、今から四十年程以前にサイレント時代のコメディで名を売った芸人であるポリドルが一人旅芸人として見られるだけである。そしてこの貧弱なネーム・ヴァリュウの為か伊太利でのこの映画の評判は決してよくなかった。そして封切後しばらくしてフランスとドイツで

真価が発見された。そしていくつかの賞を得た。モスカを演じたドルランド少年の名はパブリット・カルボ(汚れなき悪戯)と同様の感情を以って呼ばれた。そして、屢々起る様に、本国である伊太利映画界は改めて此の清々しい作品を国外から歓迎したのである。小説は、同様にその人気から、逆に台本から書き直されたものである。我国の配給会社である東和映画自身が、此の作品に対して商業的興味を感じていないらしく、この映画は、六月上旬封切が七月上旬、八月中旬、九月上旬と変更され、現在では十月封切の予定であるといわれる。

本欄では、前半三分の一位の部分に出てくる曲芸師の妻レティツィア(映画ではレティツィア・ステファン扮)が、奇妙にケバケバしい騎兵の様な上衣を着、乗馬ズボンと長靴をはき、鞭を持って、おひろめにポスターを貼りにゆくところから始まって、群がってくる子供達をうるさがって鞭で追ひ払う部分舞台で芸を覚えようとしないうちに、一遍で後悔させてやるから」といって裏の方へ引きずってゆき、思う存分、鞭で打ちつける部分である。描写は簡単ではあるが、十分に情景をうつしている。この約十頁の部分は、以

前に述べたフランス・ノリの「十六才」などより注目値する。前後をかこむ清純な物語は、反って此の部分を強くうき出させる様である。
(秋元書店七月末刊)

復刊第百八項

出版物「続ヨーロッパの旅」

竹山道雄 著

著者が数年前、外遊後に文芸春秋に連載した旅行記を再編したものである。著者は、かつて「ヨーロッパの旅」という同様の著作を発表したが、これはその続篇である。その前半三分の一位が、アウシュヴィッツ(オスヴェンシウム)ベルゼン、ダッハウ、ブーヒェンヴァルト等でのユダヤ人大量抹殺の加害者としてのナチスの心理を探っている。マゾヒズムに最大の関連をもつ、ユーベルメンシュ(優越人類)ウンテルメンシュ(下等人間)の二つの分類の拠って来るところを求めて、著者は西独の家庭でこの話題を出して嫌がられる。もっと突き進んだ説明を、少くとも一つの見方を希望する人々にとっては不十分な労作であるが、此の種の文献が我国で極めて少いとを考えると、十分貴重な書といふべきであ

ろう。

けれど若し、著書が現在、平和な生活を営んでいる人々に、かつて、世界中の指弾を浴びた話題を出して反応を探ることなどは、全くもってその意図の甘さに呆れる他ない。

ナチスの大量抹殺の時代は、神聖な観念とサディズムとの珍らしい自然な合作であった。

若し、人が、或る幸福な日に、前夜のアブノーマルな行為についての話を始めたなら、そして、それが遠来の客であったとしたら、果して、私達は明快にそれに応答するであろうか。快楽はその享樂が烈しければ烈しい程、プリヴァートなものである。そして、翌日の倦怠は又、正比例して大きい。この無礼な旅行者に、正しく事態を説明したものが、日本でみた映画と廃墟となった収容所とであったことは意味深長である。そこには、かつて百花繚乱と咲きほこった女性男性を問わない淫虐の世界は跡形もなかった筈である。

そして、ノーマルな心理の持主がアブノーマルな心理を究めることの困難さを私達は知ることが出来る。併載の写真も見なれたものばかりである。

創元社刊

復刊第百九項

ソ速映画「虎使いの女」

レンフィルム製作、シネカラー
色彩九巻、監督A・イワノフス
キイ、N・コシエヴエロヴァ、
台本K・ミンツ、E・ポメシユ
チコフ、主演P・カドチニコフ
L・カサトキナ、共演L・ビー
コフ、B・ココフキン

“The Tiger Trainer.”

我国では未公開、未輸入、上映される気配も更にはない作品であるが、マルガリタ・ナザロヴァ女史の協演によるレニングラド・国立サーカスを舞台とした話であるので紹介して置く。私は之をレンフィルムで刊行した輸出のビュレティン(写真入り梗概共十二頁)によって知った。内容は祭りのオートバイ・レースの優勝者がサーカスに入り、其のサーカスの女虎使いのレナと知りあって、めでたく結ばれるという中篇のコメディである。勿論、調教や出演の部分はマルガリタ・ナザロヴァ女史が代役をつとめている。

復刊第百十項

西独映画「情婦ローズマリー」

主演 ナディア・テイルレル

戦後、西独に起った最大のスキヤンダルを題材としたために、政治的圧迫をうけたり、主人公のローズマリーが何者かに殺害されて未だに犯人が判らぬ為にいろいろと物議をかもした作品である。元来、ローズマリーとは「恋人」の意味である。戦時中、独乙将兵の愛唱歌にも「ローゼマリイ」があったことは記憶に新しいところであろう。

さて、此の作品、前半に乗馬の場面が出てくる。それは馬術大会の風景である。けれども女主人公は云う「あんな妙な洋服をあの人は何故着ているのかしら?」

従って、ローズマリイの乗馬のシーンはない。だが、一般に知られている通り、ドイツは婦人の馬術家の多い国柄である。映画「プリンセス・シシー」にも其の場面がある。又最近、数年間の馬術雑誌RIDINGやLES、EPERONS、等にもこのことは詳しく出ている。近時、馬場氏や乗杉氏や鞍氏等が相次いで、女性の乗馬に関するマゾヒスト・サディズムの意見を述べられている。同好の士の圍繞することによるこぼしい限りであるが、それらの方々の為にも本作品の存在をおしらせしておく次第である。猶、ついでに鞭を持って踊る場面が入っていることも付記しておく。

夢 三 夜

第二夜——吊るし女——

(東映・東宝・新東宝作品より)

志 高 牧

小石川、富坂の延命寺の境内で、若い女が吊るされているから見に行かないかと誘われた。

「どうして吊るされたンだい？」と訊いたら「セリ市さ」と答えた男は、ふんだんに何処かの映画で見かける悪役専門の面構えだったから、序でに「じゃ、スターなんだろう？」と念を押すと「そうかも知れない」と頗る頼りない。

兎に角、ゆかたに着替えた着流しに下駄ばきという恰好で出掛けてみた。

こんもりと杉の太木が茂った山門の先きに白くぬうツと石の階段が聳えていて、まるで空の懸け橋かのような様相を呈している。

その懸け橋の麓の方で黒々と何やらひしめき合っているから近寄ってみると、人気商売の瓦版売りだ。もともと物好きが嵩じて夜の散歩と洒落たンだから……とあっさり十文出して一枚を買ってみた。

すっかり夕闇に包まれているのに字が読めたのも不思議だが書き出しが吊るし女の由来で、中程に三行を太字で、越前屋の娘、お雪

(十八才)、同じく相模屋養女、お八重(十九才)、同鳥潟屋娘お兼(十八才)と、いずれも変体仮名で克明に刻印され、最後の余白に、筆法は拙いが色刷で、後手に荒縄で縛り上げられ、裾を乱して吊るされている女の画が添えてあった。三人の娘達が揃いも揃って髪をふり乱し、真紅の湯文字を程よく蹴散らかしているのは大いに頂けるが、どうして色刷りまでして売るのが判らない。

「サア—て、お集りの皆の衆、お立合い。いよいよ、これからこれなる娘達にじっくりコ

新東宝 「朱 桜 判 官」 若 杉 嘉 津 子



ン……とお目に掛けて眼の保養をなさろうとする御奇特な方はこのまま帰っちゃいけない。これからが本当の地獄極楽の見世物だよ。おっ、そのいなせなにいさん、瓦版ばかり見て口ばかりモグモグさせてるだけじゃ困りますぜ。おかみさんにお女中連は聴くだけ聴いても損じやない。サテ、お立合い。

そもそも、どうしてこんな綺麗な、花も恥じらう娘達が吊るし責めに遇わされるのか。いやさ、折檻されるかは、あれなる虹の懸け橋を渡る、いや、空の懸け橋の石段を登ってこそ、初めてハハアーンとお判りだ。さア、さア、小町娘弁天さまはスングそこまで来ていなさる。おっと忘れてい申した、世話役の口上が親切丁寧だからと甘えて、ロハで階段

を登るのは殺生というもの。モギリ代に一両と、はずんで貰いたい……ヘッヘッヘッ、そうじや御座ンせんか、何んのちよいと橋を登り切った処が境内原の広場で、ズラリと美形

が吊るされてるんだよ。嫌やでも素晴らしい光景が眼ノ玉の中に飛び込んで来るのだ。どうです？こう口上を両の耳に聴いちや、黙って帰えれねえのが人情。あのネ、その旦那、あんただけにそっと教えるが指をくわえて吊るされた娘の姿ばかりを眺めるのが見世物じやねえンだよ。気に入ったら、連れて帰って可愛いお人形さんにしてもいいんだぜ。大丈夫、必ずいい娘が縛られてる。間違いいえンだッ……」

と一段高い処で、少々タドタドしいが群衆を見下ろして喋っている瓦版居士も、よく見ると何処かで見た顔である。

別に遠い他国を一人で散歩に來た訳でもないから、橋の渡れる木戸銭を払って、おもむ

ろに麓から登り初めた。仲々の長い階段で名の如く宙に浮いていて足元が危い。一両と云う高い観覧料が物をいったのであろう。誰も続いて登って来る者が無いのを幸い、話の序でにと橋の中途から西の方に向けて一丁、勢よくシャアとやらかしてみたら虹のようにキラキラと雨散して消えて行った……。

「さあ、もう一息。ここが頂上、これ以上はありません。ようこそお出で下さいました。どうぞ、お休憩なされませ……」延命寺と云えば、いつ小坊主が腰元風の女に化けたのか最後の石段を踏み上ろうとした時、助けの手を差伸したのは確かに柔い女の手であった。勿論、吊るされた本人ではない。余程、今晚は女にもてるものと見える。

成る程、広い境内だ。しかも高い処らしく、隅の方は霧がかかっていて、目標とする女の刑場？は見るべくもないが。

「ジッと右の方を見つめていて御覧なさいまし、もうすぐ霧が晴れます。霧が晴れた処がお待兼の刑場で御座います」と別の腰元が微笑しながらささやいてくれた。

その言葉通り、白い煙のような霧が薄らいで行くにつれて、次第にりんかくが現われて來た。何んの事はない延命寺の境内に持ち込

んだ簡易な暗室内で写真の現像をやっているのと変らない。そのうちにすっかり視界が明るくなって来た……。

確かに女が吊るされている。しかも刑場とばかり思っていたのに、竹矢来の柵に代って色取りどりの幔幕が張り巡らしてある処を見ると、矢張り見世物の一種かも知れない。

一番左の柱の前に猿轡をかまされて吊るされているのは越前屋のお雪なのだろう。丸に越の字の燈灯ちようとうが足元に転っている。米屋の娘と見えて足袋の色までが眼に沁みるように白っぽい。続く中の女は鹿の子の長襦袢一枚のまま、荒縄で高手小手に縛り上げられ、太い柱の向う側にぶら下っていた。余程、折檻されたものと見えて、ふり乱した黒髪が半身をなめるように揺れている。この娘が相模屋の養女お八重だとすると最後の一人は隅田川畔老舗の料亭、鳥瀧屋の一人娘お兼であろうか。小柄な身体を黄八丈の着物で包み胸高の黒帯のまま後手に縛られ、腰を落として柱に吊るされたのであろう。ダラリと半ば解けた帯と腰紐はすっかり用をなさずに裾があらわに乱れて無惨である。

成る程、どれを見ても、色刷で瓦版を売る価値は充分ありそうだ。

「いかがで御座いましょう。一つ、およろしいのをお見立下さいまし」と、身元不詳の腰元が、いつの間にか寄り添って来て、ささやく。

「この娘さん達はセリ市じやなかったのかい？ 確かにそう聞いてわざわざここへ来たんだがネ……」

「それは何かのお間違いで御座いましょう。セル処か、口あけに只で差上げておかまいません。ホホホ……ですが、それには条件がただ一つありますのよ。」と、ほほを寄せる。

「条件？ 仕置場でも条件テなものがあるんですかい？」

「御覧なさいまし。あの娘達の素振りでは、まだ折檻が足らぬと、訴えているではありませんか。今一責め欲しい処です。恋しい男のことを思い浮べながら、存分に折檻を受けるのが昔からこの女の宿命なのですから……。」

「どうか、お気の済むまで三人の娘を、いえ、この私でも結構です故、お責めなすって下さいまし。喜んでお縄を頂戴致します」

御奇特な方は、眼の保養の傍ら地獄極楽の味を、とっくりと味わった挙句に、特別に一人をお人形さんにしてもよいとダメされて？ 雲の橋を登り切った途端に、その物ズバリ、

東映 「快傑黒頭巾」 女優名不詳



ぶっつけ本番の条件をすぐさま呑んでくれるとは如何にも、きつい。第一、キリリと締めたハカマ処か、責め道具一つ持たぬ浴衣がけの散歩者を擱えての逆説法は、どう考えても理不尽と云うものであろう。

「それでは一体何が御不満なので御座いましょう？」

「いや、別に不満ということはないんだが、条件を履行する前にアノぶら下っている三人娘のお雪さん、お八重さん、お兼さんに君達、

東宝 「灰神楽火祭」

女優名不詳



あの三人の娘さん達は見受けた処

としたら条件通りの折檻を実行しなければならなくなる。

そろって映画スターのようだが、どなたが何社の誰であらうと一向にかまわないんだ。貴女だって端役ながら、たまには後手に縛り上げられ物置小屋の中に放り

こいつは苦手だ。僕は生れつき、自前の女の折檻にはひどく弱いんだ。夜店のバナナ売りじやあるまいし売る方でタタいて、乱れた並びかたなら、買う方で幾らでも直おして進ぜようが……その代り、手を下さないのなら一年中めしも食わずに、折檻される女を眺めても見飽かないんだ」

置小屋の中に放り込まれる腰元の一人であり、芽の出かかったテレビスターであるかも知れない。

「おッ、その旦那、いい加減な口から出まかせを仰言っちゃハタが迷惑しますぜ。何が折檻に弱いんだ。たかが女の一人二人責めるのに……」

断って置くが、僕はここで今月の縛られ女優の話をしようとしてるんじゃないよ。

「一体、君は誰だ？」

茶坊主ならぬ腰元衆の本心を承らなけや、おいそれと、存分に女の折檻は出来ないねえ。瓦版売りの先生も吊るし責めの理由は、とくと本人に聴けと宣うた。どうだ？ ここに僕がデンと座るから、じっくり、お話を承ろうじゃないか」

断って置くが、僕はここで今月の縛られ女

「ヘッヘッヘッ……御存知雲の下の瓦版売り屋でさア。旦那の前ですがネ、あの娘っ子達は自慢じやねえが、朝晩あっしが直々に責め折檻をしてるんだぜ。もっとも拐わした当初はどいつもこいつも生娘だけに、手首を縛るだけでも喚めきちらして大事でさア。それが、どうだ。今じゃ案内の腰元衆を入れて総勢五人のスターが揃いも揃って、毎日、日課のように縛られなけや、手前達のオマンマの飯が満足にのどに入らネエと来てやがる。女がこうなりや、シめたものでさア……」

そう云ってドッカと坐った処は大地ならぬ丸で手ごたえのない雲の上のようであった。

きった年増の女達が、お説通りに両の手を高手小手に縛られ、縄尻を曳かれてうなだれるあの気持ち、心中心底を、そもそも問題にしているんだ。恐らく女だてらにや、つてみたい

「要するに女の喜びとは何んぞやと云う点なのだ。僕は娑婆から登って来た人間だから、物事万事、現実主義に考えてみたいんだ。ただ残念なことに女に生れついていないから、こうされるのが女の気持なんですわと云われ

ても、さっぱり判らない。

ンで三人のうち一人でも貰う気持ちになった

「要するに女の喜びとは何んぞやと云う点なのだ。僕は娑婆から登って来た人間だから、物事万事、現実主義に考えてみたいんだ。ただ残念なことに女に生れついていないから、こうされるのが女の気持なんですわと云われ

ても、さっぱり判らない。

ンで三人のうち一人でも貰う気持ちになった

「要するに女の喜びとは何んぞやと云う点なのだ。僕は娑婆から登って来た人間だから、物事万事、現実主義に考えてみたいんだ。ただ残念なことに女に生れついていないから、こうされるのが女の気持なんですわと云われ

ても、さっぱり判らない。

ンで三人のうち一人でも貰う気持ちになった

「要するに女の喜びとは何んぞやと云う点なのだ。僕は娑婆から登って来た人間だから、物事万事、現実主義に考えてみたいんだ。ただ残念なことに女に生れついていないから、こうされるのが女の気持なんですわと云われ

だから最前もうちのガイドの腰元が告げ口したでがしよ。どうです、一つ口あけに一責めなすっちゃあ……、それとも今一両がとこハズんで下さりや、旦那に代って、このあつしが存分に泣かせて御覧に入れやすぜ。どうせ延命寺の坊ンさんにや口止め料は前渡ししてあるンだ。

あの通り、縛られた姿が何んと無類なら、ヒイーツと泣く声は、こたえられねえ位なものでさア……」

と、大気焔をあげるのは商売柄そっちの勝手だが、吊るし責めにあわされている三人娘は如何にも哀れだ。その一見して哀れな女達が心の中では折檻を望んでいる——と云うのは果して本当だろうか。いや、どうもそうらしい。その証拠に瓦版居士の親方の鞭がピューと空鳴りすると、娘達は縛られた後手首をピクピクと動かし、グリーンと鞭を受ける姿勢を執った……。

どうも判らない。しかし判らないままに、云いなり放題になって雲の懸け橋を降りるのも余りに芸がなさ過ぎる——（と考えたから）物は試めし、無惨に吊るされた当の娘三人と直々談判をやってみることにした……。

「僕の云いたいことが君達には判るかい？」

「何から何まで……よく判っていますワ」

「成る程。そう見抜かれちゃ、話の腰を折られたように拍子抜けだが、親方のコマーシャルを話半分に聴いても、あなた達三人は大変なモデルさんだ。

毎日そうやって縛る縛らぬは別として、きものの上だけ随分、堅く後手首を縛ってありますネ。ただ柱に縛りつけられても痛いのに、そんなに吊り下げられちゃ、見ても血が下りそうだ。

何故縛られたいンです？ 恥ずかしいとは思わないの？」

「……………」

「僕は三文文士じゃないが、女のあなたがたが両手を後ろに廻わして縛られる時、はだけた裾を曳きずって柱に吊るされる時、直接手は下さないまでも、一鞭喰ってのけぞる時の物心描写に、金文字的な文学を築き上げたい

東宝「灰神楽火祭」

女優名不詳



と知っているンです。笑わないで下さいよ、本当なンだ。処で、もう拐されて随分長くなるのにどうして逃げて帰ろうとしないの？ 親方の鞭が怖い事はないの……？」

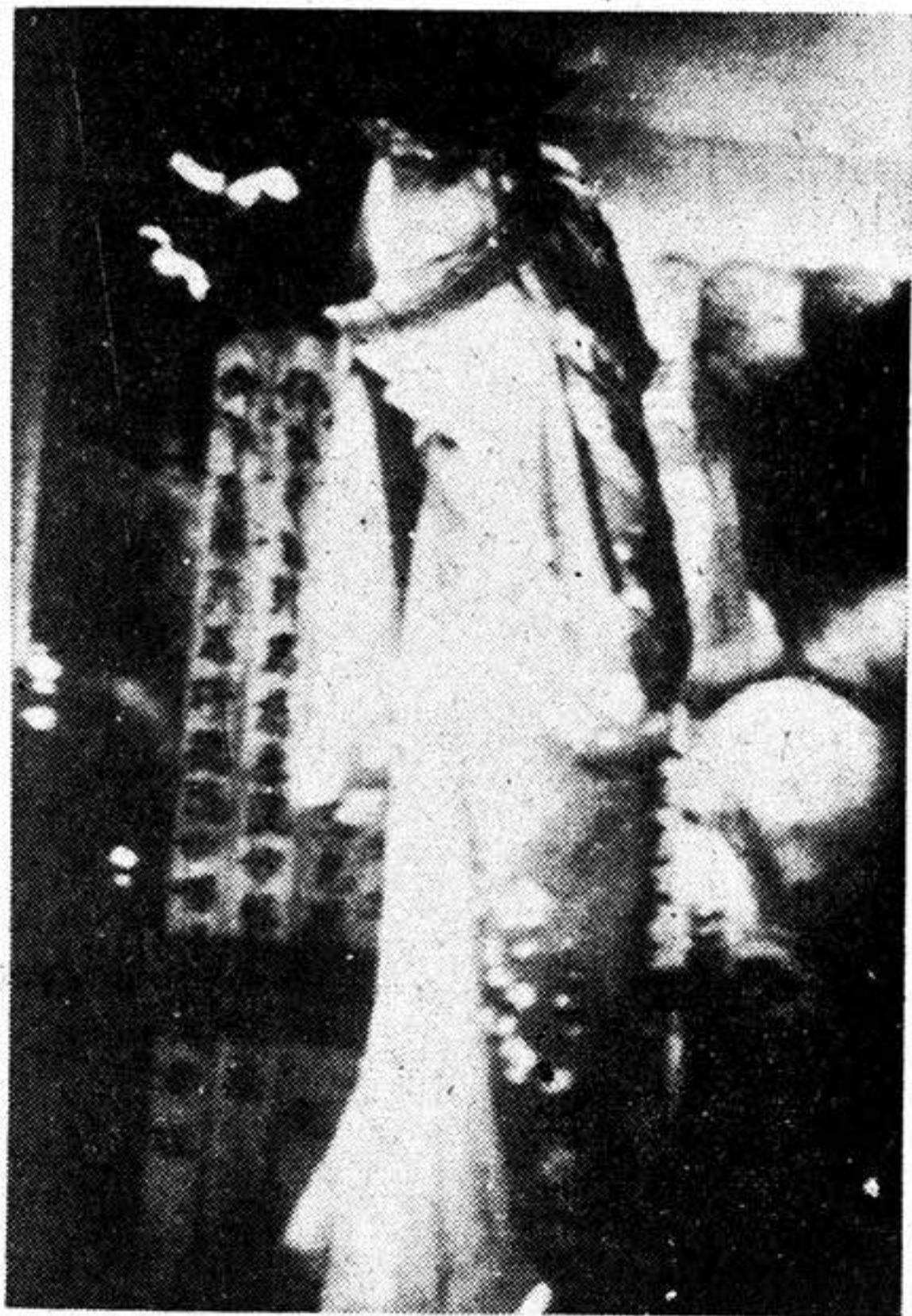
「怖いだなんて……酷らしく縛られた女の姿が皆さんお好きな癖にホホホ……、でも、こゝうなされるのが私達の宿命なのですワ。ですから今では……」

「今では、どうした？」

「毎日責められないと……身体が持たないのです。それは丁度、男であるあなたがたの情熱という情熱が堰を切ってほとばしるのを防ぎ切れないのと同じように……そして数多い

新東宝 「姐」妃のお百

北沢典子



し、だんだん君達の顔が白っぽくなって来るじゃないか」

「も早や、お別れの時刻が迫って来たので御座いますよう。霧が立ち込めて了うと今輪際もお逢い出来なくなるのです…」

「じゃ、今度、瓦版を買っても駄目なんだネ。その時はどうするんだ。

ンなら頼むから教えて呉れ。君達こそ本当の縛られた可愛い女性なのだ。僕は、いい加減なスターの演技には飽き飽きしてるんだ。

君達に思う時にいつでも逢えるンなら、どんな豪華な衣裳でも準備しよう。世界的な化粧品も求めて進ぜよう。一流責め役のミスターも紹介してあげる。だから……是非、再び逢って話がしてみたい。霧が立ち込めないうちにサア、早く、虹の懸け橋を独りで帰えるの

は嫌やだ。どうすれば君達のその美しい姿に逢えるのだ?……」

「その時は……」

「その時はどうする?」

「女の匂いにするものを力一杯、空に向ってお振り下さい。星の降る夜、虹の橋の麓で……そして、いついつまでも私達同様、吊られた映画女優さん達をお可愛がり下さいますように……では、御機嫌よろしう……」

「おーい、おーい、待って呉れ。そりや、薄情……と……云う……もの」

「嫌だわ、あなただったら、詠えて届けて戴いたばかりの和子さんの花嫁衣裳を抱いて、午睡なさったりして……ホラ長襦袢もクシャクシャだわ。どうなすったの? 昼間から三國一の花嫁さんの夢でも御覧になりたかったンでしょう……おあいにくさま」

——ならば、力の限り振るンだった……

「アア、何を? ソンなものお解きにならないで……それ、お裾除ではありませんか。折角、タタンであるものを。ホホホ……まあ嫌やな方……」

銷夏し難き半刻の夢の遍歴

あな妖し……。

(第二夜 終)

縄が紐が、あたし達のアクセサリであり、縛られた姿が四季節々のファッション・スタイルでもあるのですから……」

「縛られたミス何んとかなら、可愛い奥さんになってもよろしいでしょう。ホホホ……」

「成程、仰言る通りだ。道理で麻紐や荒縄の代用とならない長襦袢の端くれだの湯文字の廃品を継ぎ合わせて張り巡らした幔幕の存在理由も判った。処で馬鹿に冷え冷えして来た

MS スリラー

ベビードールの恐怖

沢 木 雪 二

①

野球に限らず、よく「ラッキー・セブン」なんてことを云うが、まったくその通り。

エミーと純が（純吉という名前だが、オレ達はこの呼びならわしている）結婚式をあげた日から七日目、その日、そうその日から三日間に起きた出来事が、この二人にとって、生涯の幸せをあたえてくれるきっかけとなったんだから、人間の喜びや悲しみなんていうもなあ、ちよいとした事が、わかれ道になるものだ、つくづく思ったものさ。

その夜、それは九月もはじめのころで、風のくるあとさきは、む

し暑いものだとは通り相場だが、それにしても生殺しの様な、あつたかい、それでいてしめっぽい夜が、家々の男や女を、寝るに寝られぬイライラにさそいこんで、ぼんやりと霧にとけこんだ街燈も、心なしか、ぞっとする様なアバンチュールに、人の心をそそのかさずにはおかぬ様な、そんな夜ふけのことだった。

二、三日前にも、チャイナ・スタイルのよく似合う、年増ざかりの美人が、その自慢の鳩胸に両刃の短剣をたたきこまれて、こときれていた所。大きくひらいた河口の上を渡している橋の上に、一人の男が姿をあらわしたのは、時間も、はや午前〇時をとくにまわっていた頃だった。

ちらっと見には、背丈は五尺八寸程度もある、肩巾のがっちりし

ているわりにはスラっとしてみえる。こんな港街の夜にはふさわしい、にがみばしった男だ。夜もふけて、場所が場所だけに、男の不気味な程のおちつきはらった態度は、あたりのだらけきった空気を、ピリッと引きしめる凄みがあるようだ。

橋を渡りきれば、左側は船員相手の簡易食堂や飲屋がつづいて、海へひろがっていた。男はじっと、そのあたりを見つめていたが、やがて、ゆっくりと身をまわすと橋を渡りきって、この附近ではただ一つの電話ボックスに入り、ダイヤルをまわした。何を考えているのか、男は薄気味の悪い笑いをもらしていた。まもなく電話は波止場に近い、そう、ついさっき迄、橋の上から男がじっと見つめていたあたり、その中でも一番海に近いある小さな飲屋に通じて、店じまいしたばかりで、ほっとしている、エミーを震い上らせる結果になった。

麻薬、溺死人、腹に風穴をあけられた男、あらくれ男たちの喧嘩——そんな、身近かにおこりながらも、感覚的に、自分の生活にはほど遠い事件とはちがって、彼の不気味な耳の底にピンピンと響いてくる声と、その内容は、心もとない女の胸をぎりぎりとしぼりあげる効果をもっていた。

エミー、

かの女はまだ若い。二十一才だ。顔はいま流行のフアンニー・フェイスという部類だ。つぶらな、くるくるとよく表情をかえて男心をとまどわせるひとみ、平安朝の美人でもおもわせる眉、ことのほか純を夢中にさしている、うすくてかわいい鼻筋と男なら思わずいじめてやりたくなるほどの女らしい鼻孔。ふんわりとした、豊かな髪がひたいに愛らしいかげをおとしている。

夫の純は、今太平洋の海の上だ。

純と恋愛し、許るされて、はれて結婚したのが七日前で、この一航海を仲間とつきあって、それを最後に陸に上って、二人で、小さいながらもレストランをはじめようと、たのしい夢を抱いて三日前港をはなれた。別れはつらいからと、エミーは家の二階の窓から船を見送って、つぶらなひとみを濡したものだ。

あどけない顔、むっちりとした肉ののった肩あたりから、はりきった臀部にかけての曲線は純を知ったせい、か、めっぽうなまめかしさで、飲みにくる客たちに、純の野郎は倅せな奴だと、うらやましく唾をのみこませることも多い。それでもたのしいものさ海の男。二人の幸福を願って店は繁昌する一方だ。そのエミーのよく笑うあでやかな顔も今は青ざめている。

電話のあやしい声は——

『エミーさんだね、さみしいかい、今頃純は太平洋の海の上だね。え？オレかい、そいつはきかないことにねがいますよ、お互いのためにね、ふふふ、ところでね、純の野郎、つまりあんなのかわいい男だ、こんどが最後の航海ってわけだが、めっぽうイカス女房をもらったせい、急に里どころが出たんだね、いくら顔見知りのバアの保険屋の口車にのって、生命保険に入ったってわけさ、半年分のかけ金をまとめて払込んでお船にのって旅にでた。そこでだ、受取人は勿論あんだ。愛妻エミーさ、え？知らないって、それはね、隠しておくのもたのしみの一つだろうよ。ところで相談ってえのは、もうさっしもついただろうが、その金のことさ、純にねむってもらって……ねえ、どうだい、一枚この計画にのってもらえねえかね』



エミーのふるえがつつたわってくる電話に男は話をつづける。

『ふふふふ、ねえ奥さん、こんなやばい計画をぶちまけているんだ。ただじや引かねえよ、どっちにしても、エミーさん、あんたの体だけはほしいねえ、こんなことを考えさして、あんたもつみだぜ、もっともあんたの知ったことじやないだろうがね、िकास女があんな風にお尻を振って歩いちやね、ふふ、全くこうむずむずするぜ、もっとも、あんたにしたって、そのせいもあるかも知れねえねえ、ふふふ』

受話器がエミーのあえぐさまをつたえてくる。可愛いものさ、また男がひくく笑った。

『まあ、ゆっくり考えてもらうんですね、念のために云っとくが、人にももらしたりしたら、いやでも純の命はもらうぜ——じゃ、いずれ後ほど、ふふふ』
電話は切れた。

②

翌日。

どうしよう、どうしようと、いつもどこからか男の眼がからみついてくる様な不安におびえて一日がくれていく。

夕方の河口に立った風景は、申分のない美しさだ。この港街の中心を流れている河の、すんだ流れと、岸をふちどる柳の風情は、このあたりに住む人や、旅人に、いちまつの清風をふきこんでくれる。エミーも波止場への散歩路をあるきながら、そのさわやかな風に頬をなぶらせて、神様に感謝したい様な幸福感を味ったが、フツと、今の現実の中ではまるで、うその様にしか思えない、昨夜の男の不気味な声をおもいだして、夜が近づくれば、近づく程、やりきれないみじめさに家に引きかえすのだった。

時がたつにしたがって、次第に、ゆたかな髪をなぶった海の風が、純と自分の愛情をよみがえらせて、切ないまでに胸をしめつけた。もともと勝気なエミーの心は、あたしには純がついている、純のためならなんだって耐られるさと、そんな心境に到らしめたらしい。

夜のエミーは、いつも通りにいきいきとして、忙しく飛びまわっていた。

音楽好きのエミーに、純がプレゼントしたグラランド電蓄が、素晴らしいジャズの演奏をつたえれば、店は陽気になり、ドラムやペットはエミーの心をしびれさせた。

とはいもものの、外は、ラジオの予報通りに、第九号台風が近ずき、いつもなら、街のお兄さんたちを、遊ばなけりや御先祖様に申訳がねえ、なぞとあやしげな心意気にさせるネオンの光も、一種異様な凄みをただよわせているようで、さすがに、人の足もとだえがちだ。

いつもよりいくらか早じまいにしたエミーは、ジャズと少しばかりの酒にはてる体をきもちよさそうに、小じんまりとしたタイルの浴槽にしずめて、形のいい、ちよいすねているように上を見ている、ピラミッドを思わせるような胸のふくらみを湯に浸してそっと眼をとじたところには、強さを加えた風に、いつからか雨もまじって、小さな裏庭をたたきつけていた。

エミーのそんなうっとり夢みるような顔が、平手打ちでもくった様に、はっとひきしまったのは、それから間もなくのことだった。例の男のうす気味悪い声は、窓の外から聞えてきた。

風呂の小さな窓によりかかって、セントルイス・ブルース・マンボを演奏しているのは、純が大切にしているマスコットのトランジスターラジオだが、その濡れる様な、セクシーな感覚をかきたてるようなリズムのすき間から、低いがよく通る声がしのび込んでくるのだ。

『エミーさん、昨夜はじやまをしたね、おぼえているかい、ちいっ

と急ぎの相談があつてやってきたんだ。風呂場の外まで出てもらいたいね。俺もこの雨の中をわざわざのおでましだ、いやだとは云わせないぜ。さあ、その横のたき口に通じる戸口から出てくるんだ』まるでマンボのリズムがさそいだしたように、大胆に襲ってくる男の声に、さからうすべもわすれて、エミーは浴槽から立ち上った。裏は小さな庭をへだてて海があれていた。

男の姿は見えない。ただ暗い妖しさだけがつつんでいた。

その中で、せますぎる戸口に魅惑がただよった。ピンクのタオルもエミーのポリウムのある身体にはまわりきらないのか、腰を掩っただけで戸口からそっと外をうかがった。男の声がする。

『エミー、もっとでるんだ』

エミーは自分の意志を失った人形のように、いわれるままに、雨にうたれ強風にさらされて、風呂場からの、うすいあかりに照らし出されながら、庭の中程に佇んだ。しかし、おどおどして見まわす眼には、何ら怪しい人影は見えなかった。

姿を見せぬ男、それもその筈、その男は風呂場の屋根の上にいたのだ。

エミーへくいいる様な視線が動いている。エミーは本当にいいからだをしている。豊満な身体の線だ。しなやかだ、まったく見事だ。しかし、もっとおどってもらいたいねえ、ふふこの風で人影はなし、雨にうたれた美女ってものは、なかなかミリキなものさ。突然男の声が頭の上から降ってきた。

『エミーこんどはこっちへくるんだ、ふふふ、そうそう、こんどはそっちへあるくんだ、そら、こんどはこんちへあんよだよ』

歩くたびに、つまづく度に、豊かな曲線を描く鳩胸が小気味がいいほどよくゆれた。それにあのしなやかな四肢が薄明りの光線に妖しく映えて、まるで夢の国の天女の舞いのように見事なものだ。このまま幕にしてしまうのは全く惜しい舞台劇だった。

『そろ、こんどはこっちだ、ふふふ』

エミーは恐怖に惑乱して頭の芯がしびれてきて、いまわしい男の不気味な声も、まるでいとしい純の声であるかのように錯覚して、夢遊病者のように、うっとりとして庭の中をさまよっていた。雨にうたれて一層なまめかしい身体の線を、海からはねあがった人魚のように、くねくねとくねらして、いつか脅迫されていることすらもわすれていった――

③

不思議な恐怖とスリルに満ちた台風の一夜はあけた。

雨にうたれて、たおれていたせいか、いくらか熱もあるようだ。しかし無心によくねむった。夢のつづきの中では、純にしばらくられたり、叩かれたり、考えるだけでも身の起きどころのなくなるようなかつこうでせめられたり――目ざめて、わたしはいったいどうしたというだろう。あの電話の気味の悪い声がひびいてくるまで、考えてもみなかったことをとひとりでは、頬をそめた。

体のほてるような、うずきの中から、そっと時計をみた頃は、もうあくる日も夕方近くになっていた。

今夜はとうとうお店はしめることにした。それにしてもどうしよう。ベツに危害を加える気色もない、あやしい男の出現をいささか心待ちにしはじめている自分の心がこわくなってきた。

こうなったらエミーのとるべき道は、ただ一つしかない。第一に純がこまる事のある時は、かならず相談をかける様にいつていた純の親友に話してみるほかはないようだ。

かの女はもう一度時計を見た。疲れでいつの間にか、またうつらうつらとしたらしい。もう十時を少しまわっている。

エミーは、純の親友に電話をした。

一たん口をきくと、出来事的一切を少し恥らいながらも、一気に説明した。早くきて純とエミーのために力になってほしかった。

たのもしい返事をきいてからは、ただかれに対する期待だけが、エミーを元気づけた。

一杯の水で、ひといきついたかの女は、彼がかけつけてくれるまでに、鏡にむかった。大きな姿見には、薄い、青いセロハンのようなネグリジエを通して、昨夜雨に濡れてさまよった肉づきのよい身体が、すっかり透けて見えた。

花もようのゆかたにきかえるつもりかネグリジエをとると、真白い牛乳のような肌があらわれた、その美しさを誇るかの如くベールに包まれたニンフが、なやましい夢をみているように、うっとりとして鏡にはほえみかけている。

それも、ほんの暫く間で、いそいでゆかたを手にとったが――その必要もなかった。というのは――

もう部屋の中、エミーの後まで、例のまねかざる客がきていたからだ。

着るはずのゆかたは、突然頭からかぶせられた。驚きに声もでないエミーを男は用意の細引でしばりあげた。頭にかぶせたゆかたととり、すばやく目かくしの黒マスクをつけた。つづいてさるぐつわ

もかませる。エミーがあまりの驚きに茫然としているほんの一瞬の出来事だった。

「エミー、とうとう約束をわすれて、この俺をうらぎったな、純の仕末の方は半年先さ、その前におまえにもちいっといたい思いをし

てもらおうか」

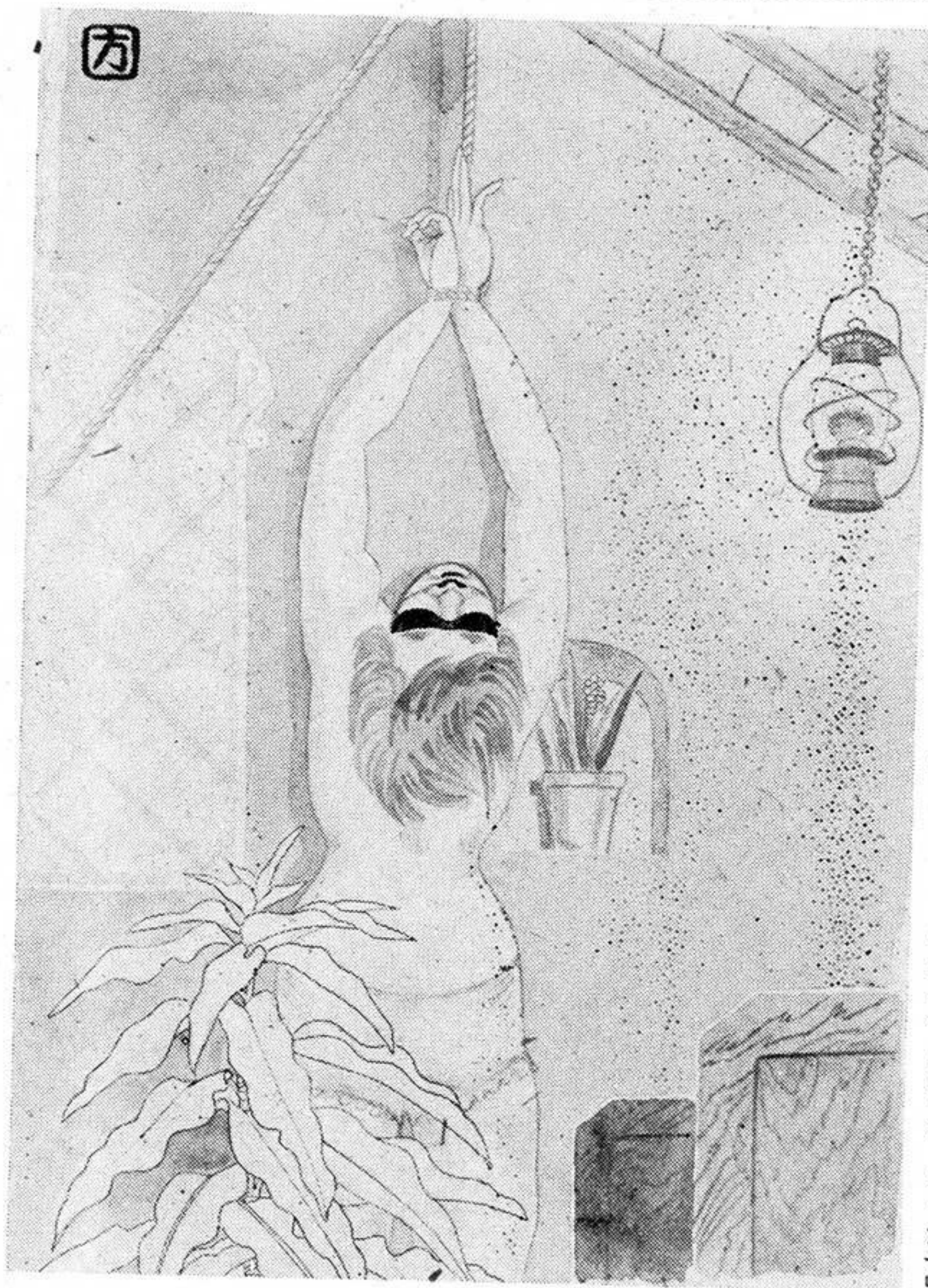
すぐさまエミーはパンティ姿のまま店につれていかれた。男はエミーをテーブルの上に立たせると、天井の梁に器用に細引を渡してエミーの両手をさしあげるようにしぼり上げた。「ふふふ、いいかっこうだぜ」

男は煙草をだして、ゆっくりとすいこむ。

エミーは呼吸のとまるような驚きが、いくらかおさまると、あらためておそってくる恐怖心は目かくしのため、二倍にも三倍にもなあって、さるぐつわのために、言葉にならぬ、うめき声をあげるばかりだ。

男はエミーをテーブルから降した。エミーの両腕は垂直に伸しかっこうでぴんと張りきった。両肩が頭のあたりで頬につかんばかりになった。腋の下のえくぼが大きくえぐったようになって、そのかわいらしさったら——云いようのないものだ。

男はこれも用意してきたのだろう。一本の穂先がひらべったくなつた絵筆でその腋の下を擦りはじ



めた。

「ううう」

恐しさと、たまらないくすぐったさに、エミーは体をくねらせてもがく。

「エミーはなかなかうまいもんだ。フラダンスがさ。おれはこれが大好きでね、もっとおどってもらおうか、裏切りのおしおきにしては、こんならくなことはないぜ。さてよ、このままじゃ、おもしろみがうすいや、オットこいつあ、おあつらえむきだ」

店の片隅に掃除の時につかって忘れてたのだろう、ホーキが一本ころがされてあった。それをとって、少し足をひらかせて足首のところへくくりつけた。

エミーは思いっきり上にのぼした両腕が、しびれたようになってきて、全身をよじらせて身もだえした。まだ十分床についている足を交互に持ち上げて、捧げた両腕の苦痛をやわらげようとつとめた。腕を挙げていることが、こうも苦しいものか、エミーは十分思い知らされた。そんなわき腹から腋の下へかけて十分にのびきっているところへ、男の持った絵筆が走ると、エミーは、さるぐつわの中で呻きながら、体をよじらせ、白いふくよかなおなかを弓なりにそらす。身体を動かすたびに肌は螢光灯の色をうけて妖しく煌いた。男はエミーのかわいらしいおへそに絵筆をあてた。エミーがまたたえられないように、呻き声を一段とあげる。

エミーの背後へ廻った男は、汗ばんでいきづいている背中にピシヤッと一つ平手をくわす。小気味いいおとが響いた。

「さあ、もう一度、やりなおしだ。そら踊るんだ、もっともっと、そら、そら、ふふふふ、もっと踊れ、もっと踊れ」

男は唄う様に言葉をくりかえしながら、脇腹のところきらわず絵筆をはわせていく。

エミーは男へ背中を向けながら、奇妙なフラダンスを踊りつづける。

三十分もたつころは、男のひくい笑い声のながれる前で、エミーはがっくりとなって、精も根もつきはてたように細引にすがっていた。

男はこの家の勝手を十分知りつくしているように立ち振舞った。やがて奥からエミーの七分のストラックスをもちだしてきた。それはエミーの下半身にぴったりはりつくように、その美事な下肢を包んだ。やがて男はストラックス姿のエミーをあらためてうしろ手にしぱりあげた。

さるぐつわははずされたが、後手にきっちり縛られ、七分ストラックスだけをはいた姿で、せまい店のなかを、よろけながら、モンロー・ウオークをさせられることになった。尻のふり方が悪いとさっそく、平手がとんでくる。が、しかし、それにしても、さるぐつわをとかれても、エミーはどうしたわけか声一つ立てようとしない。それどころか、ぼんやりと放心したような表情の中で、呼吸をはずませ、押し殺したようなうめき声をもらしながら、男にこずかれるままに、クリクリと歩き廻った。

「こりやあ、てんでイカスじゃあないか、ふふふふ、もっとあるくんだ」

「純、もっとぶって！もっとぶって！エミーの身体をぶって！」

エミーはまた、昨夜のような錯覚におちいつているのか、うわごとのように口の中でつぶやいている。

いつの間にか、男もエミーのあやしい振舞にまきこまれたように頬を紅潮させている。男はエミーをテーブルの上にうつぶせにする
と、もりあがった唇を平手でうった。

「ああ純！純！もっときつくぶって！」

ルージュがぬれて、なまめかしくひかる半びらきになった唇が、
あえいでいる。

④

もうここまでくれば、つまらねえ、作り声なぞしちやいらねえ。

男は純だった。エミーの錯覚も、つよくむすばれたものの本能的
な嗅覚だったのだろう。つまり、たねをあかせば、S傾向の純が、
さっきエミーが電話した親友に相談をかけ、二人でさんさん智慧を
しぼったあげくの、思いきった狂言だったわけだ。

だけど、少々その傾向のあると思った、エミーから見事に、その
Mをひきだしたのだからまず大成功というわけだ。

親友ってえのはだれだ？モチ、この物語の語り手、かく云う
オレ様さ。

おっと、もうそろそろ電話をうけたオレが二人の様子を見に出か
ける時間さ、まったくごくろうなことが、この趣向が機を得て、
かの女に、Mのみがきがかかれれば、純とは同じ仲間のおれだって、
少しは世の中がたのしいものになろうってものさ、

隣家との露路の入口で、オレを迎えた純は、うらやましい程のゴ
キゲンだったぜ。

そこで、おさだまりの祝宴とはなったわけさ。

その頃、エミーはさっきのあの姿のまま、奥の座敷にころがされ

ていた。

夕方目をさましてから、あの無気味な電話の男が、実は純の芝
居とわかり、そのうれしさと恥しさの中で夢うつつをさまよって
たのだ。半分覚めたような、半分眠ったような、この境地は、又、
なんと、やるせなくも快いものだろうか。その夢心地の中で急に尿
意がもよおしてきた。表へ声をかけようにも、純がまた念いりに足
もしばり、さるぐつをし上から例の花模様のゆかたをかけていた
ので、どうしようもない。しかし、もうがまんできないところまで
きていた。

間もなく、オレと純が、エミーの御機嫌伺いに奥に入った時には、
かの女は畳の上でぐったりと、その美しい足をのばしていた。

純の野郎、オレの見ている前でいけしやあしやあと、最愛のエミ
ー夫人の額に熱烈なキスを一つ。まったくバカバカしくって、な
んねえや。オレは店にひきかえして電蓄にスイッチをいれて、やけ
に杯をかさねたもんだ。そのレコードが、またあまいデュエットの
唄声ときてやがった。

なぜ泣くの まつ毛が濡れている

好きになったの

もっと抱いて……

泣かずに踊ろよ

もう夜も遅い

私が「好き」だと「好きだ」と云って

だめだ。帰ろっと。伴ジュンのせりふじゃないけれど「二等兵は

つれえや、

⑤

音楽といえ、後日、純に聞いた話だが、あの二人のプレイには、いつも、ラテンリズムがひつようなんだってさ、そら例の、ね、わかるでしょう、セントルイス・ブルース・マンボ。ちよっとした創作劇の一幕三場がああ夫婦にとって理想通りの人生を送ることに成功したのだから、まったくうらやましい限り。

エミー夫人も、ますます美しく、若妻らしい、あぶらののりきつ

た。女っぷりで、新しく始めた小さなレストランにくる、海の野郎どもに、食前食後とんでもねえよだれを流さしている。お前も、その一人だろうって、へへへ。

それにしても、手首にうっすらと残っているなわのあとを、わけを知っているオレにはに cand、そっと着物の袖でかくした風情なんざあ――。

ちくしように旅に出よう。オレにも素敵なM女性がさずかりますようにと願ってね。

(オワリ)

奇譚クラブ旧号の在庫案内

復刊第1号 (昭和30年10月号) △売切▽
 復刊第2号 (昭和30年11月号) △売切▽
 復刊第3号 (昭和31年4月号) △売切▽
 復刊第4号 (昭和31年5月号) 定価二百円
 復刊第5号 (昭和31年6月号) 定価二百円
 復刊第6号 (昭和31年7月号) △売切▽
 復刊第7号 (昭和31年8月号) △売切▽
 復刊第8号 (昭和31年9月号) 定価二百円
 復刊第9号 (昭和31年10月号) 定価二百円
 復刊第10号 (昭和31年12月号) 定価二百円
 復刊第11号 (昭和32年1月号) 定価二百円
 復刊第12号 (昭和32年2月号) 定価二百円
 復刊第13号 (昭和32年3月号) △売切▽
 復刊第14号 (昭和32年4月号) 定価二百円
 復刊第15号 (昭和32年6月号) 定価二百円
 復刊第16号 (昭和32年7月号) 定価二百円

復刊第17号 (昭和32年8月号) 定価二百円
 復刊第18号 (昭和32年9月号) 定価二百円
 復刊第19号 (昭和32年10月号) 定価二百円
 復刊第20号 (昭和32年11月号) 定価二百円
 復刊第21号 (昭和32年12月号) 定価二百円
 復刊第22号 (昭和33年1月号) 定価二百円
 復刊第23号 (臨時増刊号) △売切▽
 復刊第24号 (昭和33年2月号) 定価二百円
 復刊第25号 (昭和33年3月号) 定価二百円
 復刊第26号 (昭和33年4月号) 定価二百円
 復刊第27号 (昭和33年5月号) 定価二百円
 復刊第28号 (昭和33年6月号) 定価二百円
 復刊第29号 (昭和33年7月号) 定価二百円
 復刊第30号 (サド特集号) △売切▽
 復刊第31号 (昭和33年8月号) 定価二百円
 復刊第32号 (昭和33年9月号) 定価二百円
 復刊第33号 (昭和33年10月号) 定価二百円
 復刊第34号 (昭和33年11月号) 定価二百円

復刊第35号 (増刊号青い廃院) 定価二百円
 復刊第36号 (昭和33年12月号) 定価二百円
 復刊第37号 (昭和34年1月号) 定価二百円
 復刊第38号 (悦唐小説と緊縛写真) 三百円
 復刊第39号 (昭和34年2月号) 定価二百円
 復刊第40号 (昭和34年3月号) 定価二百円
 復刊第41号 (昭和34年4月号) 定価二百円
 復刊第42号 (サド特集第二集) 三百五十円
 復刊第43号 (昭和34年5月号) 定価二百円
 復刊第44号 (昭和34年6月号) 定価二百円
 復刊第45号 (悦唐第二集) 定価三百円
 復刊第46号 (昭和34年7月号) 定価二百円
 復刊第47号 (昭和34年8月号) 定価二百円
 復刊第48号 (昭和34年9月号) 定価二百円
 復刊第49号 (昭和34年10月号) 定価二百円

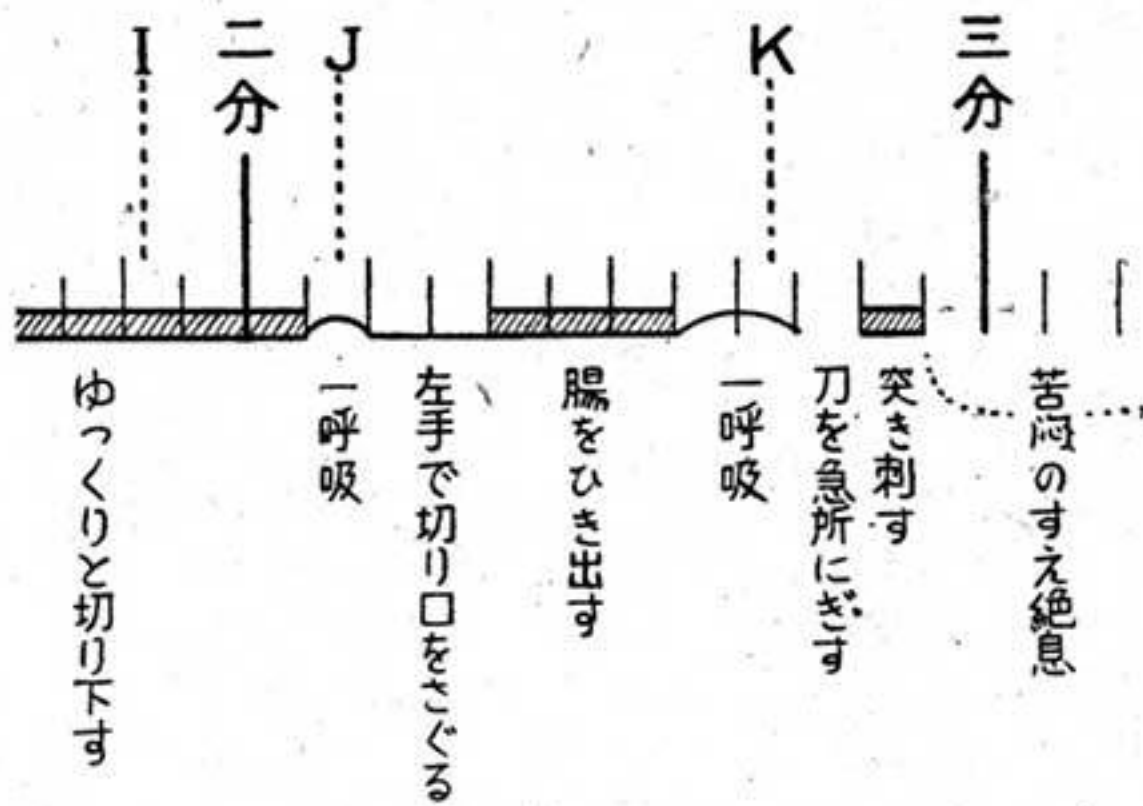
御希望の年月号御指定の上、御申込次第
 厳重包装の上急送申し上げます。御送金は
 なるべく現金書留か振替を御利用下さるよ
 うお願いいたします。

察

考

腹を切る事

折伏下男



百科辞典の「切腹」の項には相当、詳しい説明の出ていた事を記憶している。左脇腹に刀を突き立て右へ一文字に引き廻し、右脇腹迄切ってから刀を抜く。次に刃を下に向けて持ち直し、みぞ落に突き刺し、臍迄切り下げる云々とあったようだ。一応、型通りの切腹である。扇腹等、実際には腹を切らない切腹もあるが、切腹本来の意味は読んで字の如く腹を切る事である。

切腹したといえ、切腹して死んだ事を言うわけだが、中には失敗して死ななかった場合もある如く、腹を切っただけではなかなか死なない。死ぬためならば腹などを切らなくても、もっと確実な急所は五体の中に数多くある。

切腹とは、自ら自殺する直前、又は刑とし

て介錯される直前に、自らの手で自らの腹を切る事であって、死に対するウォーミングアップの如きものである。腹を切るのは痛いし、切れば苦痛も生じよう。辞典にある「切腹によって死に就かしめ介錯人が首を打ち落す」とあるのは、うまい定義である。腹を切っただけで放置するならば、例え腸が流れ出すほどの深傷でも何時間も生きていくわけで、それでは刑の執行に長時間を要する事となる。簡潔に言えば、切腹は名誉ある死の準備行動である。

では、その準備行動としての、腹を切る

切腹とは具体的にいうと、例外は別として、

(1) 腰より上を肌脱ぐか、着衣の前部をくつろげて、腹部を大きく押し出す。

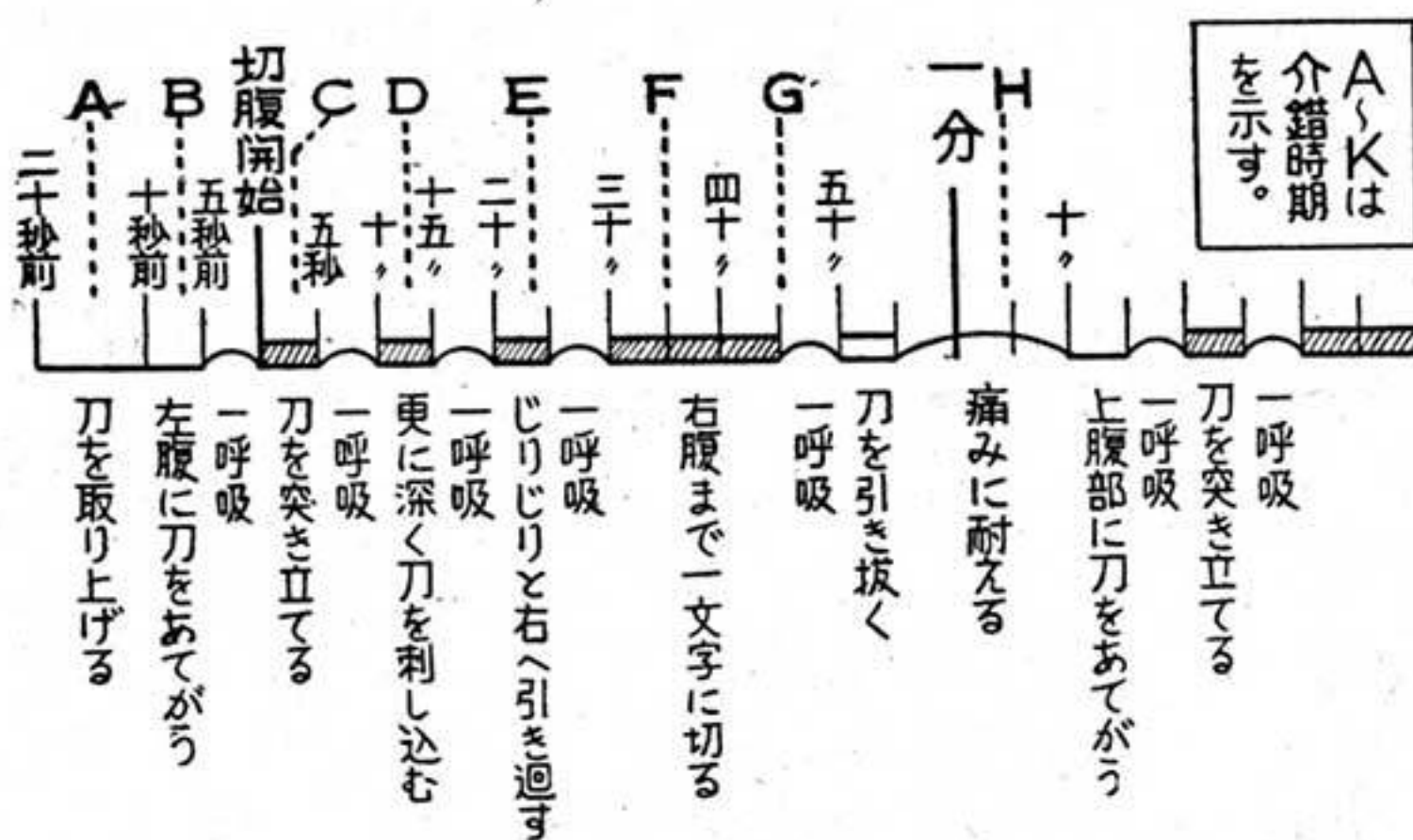
(2) 刀は右手に刃を内側に向けて握る。

(3) 腹を左より右に向けて臍の下辺を通して切り開く。

(4) 十文字腹の時は刃を下に向けて上腹部より臍の右側を通して横一文字の切り口迄切り下げる。

(1)の腹をひろげると言うのは素腹を切る目的であるが、これが切腹と言う一連の行動のうちで深く重要なステップである。精神的には腹を切る心の準備が出来上がり、切腹という儀式をクライマックスへと持って行く。

皮と肉と脂肪で内臓を包んでいる腹は、切る当人も見る他人も突き刺したり切ったりす



るのに柔か味があって心のうずきがない。腹部は身体の重心であって安定感がある。魂の宿る所は腹とも言われている。外見上からも切り開かれるには最適の部分かも知れない。

実際の事についていうと

(1) 切る深さ。五分(十五ミリ)一寸(三〇ミリ)三寸(十センチ)等まちまちだが

血が余り出ない皮切りよりも、肉迄切り開く方が腹中の魂を見分せしめんとする切腹本来の意味には忠実の様だ。これは筆者の私見だが、脇腹では浅く中央部、臍辺りで深く切るのが作法上、好ましいと考える。

(2) 切る長さ。脇腹から切る事もあるが、安定感のあるのは臍の左斜下より五、六寸程度が普通と思われる。

所で、ここに切腹に要する時間について考察してみたい。今、仮りに介錯なしでは自殺完了迄に約八分を要すると推測する。詳述すると、着座迄に一分、腹をくつろげて刀を擬する迄に二分、左腹に突き刺して右腹で刀を引き抜く迄に一分、その後、十文字腹完了迄に一分、苦痛をこらえるのに一分、急所を突いて苦悶が二分、計八分。実際には、この途中で介錯をしてしまうが、準備、後始末等、十二、三分、必要として、一人、二十分。三人なら一時間、十人なら三時間という計算。後始末を最後に一括するとして一人、十分としても十人に一時間半を要する。義士の切腹、堺事件の切腹も大変だった事と想像される。

別表は一気に切らず、ゆっくり腹を切る場合の時間的推移を示すが、正味、刀が左から右へ動いて腹を切っている時間は二十秒程でこれが切腹のクライマックスともいうべき所である。

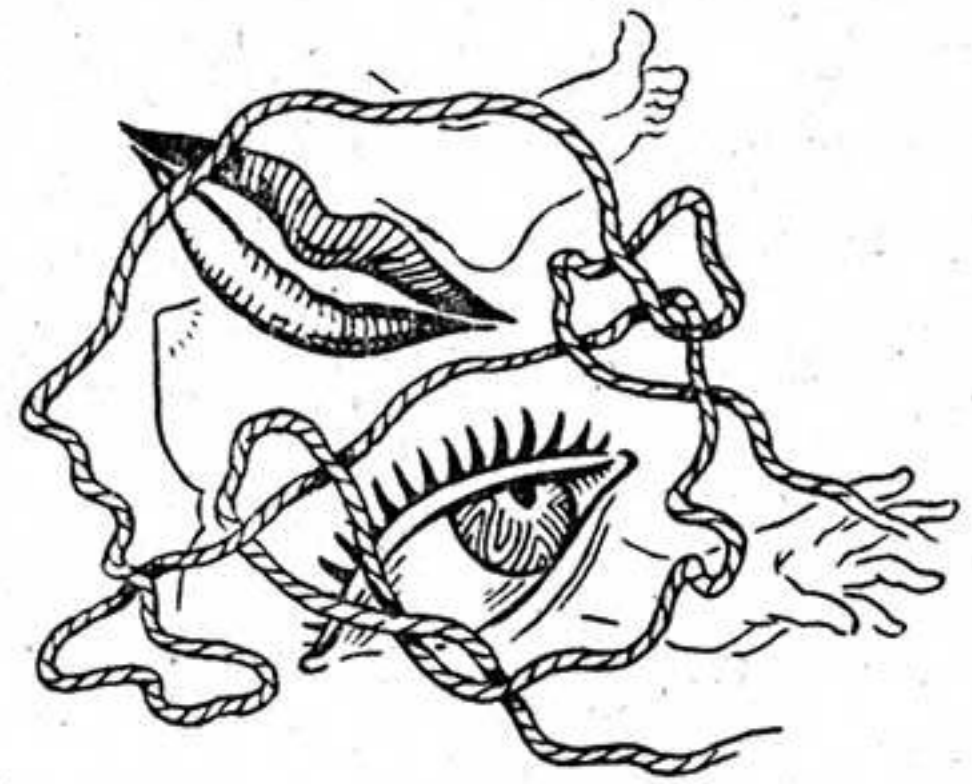
勿論、一気に突き立て気を抜かずに切れば三、四秒で一文字に切ってしまう人もあったろう。

ここで再び筆者の見解によると、相当鋭利な刃でない限り(皮切りの場合は簡単だが)深く切り開くには相当の力が必要で、じりじりとしか刀を引き廻してゆけないのではないかとと思われる。

次に介錯の時機については、別表の如く大体AよりK迄の十一種あり、夫々の時代、格式、その他本人の依頼等によって異ったものと思われる。少くとも切腹本来の意味の面目から考えて、一文字に切り終えたG、H点、又は、せめて半分以上、切ったF点以後の介錯が腹を切る切腹となろう。

現今では死刑としての切腹という制度が存せぬ為、筆者の私見を加えて、古来、行われていた切腹、本人は死ぬ事には変りないが死の手段としての切腹という考え方ではなくて、死の準備として腹を切る事、それを少し掘り下げて考察してみたいと考え、次回には更に切腹の座に着座する時より切腹開始後、死に到る迄の

- (1) 精神的、心理的動揺、不安、恐怖
- (2) 肉体的苦痛(表面的及び内臓的苦痛)即ち痛み
- (3) 苦悶
- (4) 願望と快感
- (5) 立会人又は検視の心理状態の変せん等について書いてみようと思っている。



写真のアイデアに

ついでにの雑感

大 熊 寿 夫

○ 写真のアイデアについては、従来から読者諸氏から数多くの奇抜なものや、種々趣向の変わったものが寄せられていましたが、それらは多くは静的なものだったようです。

私としては、それら静的なものの外に動的なものも、もっと欲しいと思います。昭和二十八年十一月号（第七卷第十一号）の本誌に萩千恵子さんだったかの（編集部註、モデル杉美美）『女が縛られるまで』という数葉の

組写真が誌上を飾ったことがあり、まことに素晴らしく、更にその関係のものを所望して、同じく萩さんの（編集部註、杉）『強襲』（編集部註、急襲）の組写真を分譲いただき今もこのうえなく秘蔵している次第です。

勿論、映画と違って、写真では動きといっても難しく結局主として組写真的なものになるかと思いますが、それでもよいでしょう。兎に角、『女が縛られるまで』と『強襲』（編集部註、同前）は何れも素晴しかった。

最近の『女囚第十四号』について、あれはあれで、近來の傑作に近かったと思いますが、更に進んで二十葉を使うならば、これを物語りに展開させて、

- a、先ず捕縛の図
- b、牢屋に収容
- c、拷問を受けるの図
- d、裁判
- e、牢屋から刑場に引出される。（或は昔風なら裸馬で引廻しの図）

f、死刑執行の図

というふうな、美しい絹川さんを思う存分に駆使して、一つの美しくも悲しい物語写真を繰りひろげることが可能ではないでしょうか。

この場合、背景などに拘わると面倒ですから、むしろ、着衣とかその乱れ、顔の表情、手錠、腰縄、冷めしぞうり（以前囚人にははかされたといいますが、今はどうか知りません）編笠、鉄格子、とか、或はそれらのクローズ・アップ等で生々しく、或は想像に訴えながらストーリーを盛り上げてゆく。

例えば、

△就縛Vで後手にねじ上げられたところ（全図）、両手首を縛られるところ（その部分のクローズ・アップ）

△刑務所に収容V（どこかの鉄格子を通して写す。ここで囚衣を着せられるところ）、牢屋の中で足の爪を切っている姿（これは勿論手足とも自由、或は足は鎖で繋がれている方がよいかも分らないが、比較してみないと判断が付きません。私は素足フアンのせいではない足の方に重点がゆきますが悪しからず。美しい囚われの女人が、牢屋の中で一人淋しく足の爪を切っている姿は、胸がしめつけられ

るような切なさを感じます）

△拷問V（海老責がいいと思いますが、拷問の写真そのものが出せなかったら、又足になります。拷問を受けて苦しさの余り、足の指が内側に曲ついているところをアップで撮って、説明で「拷問」或は「痛い痛い！」などと書く）

次に手錠と足鎖をつけられるところの部分（手首と足首）をアップで、更に△裁判Vにかけられるところ、再び牢屋へ護送（編笠をかぶせる）、それから刑場へ引出される。死刑執行の図……等々……という風に。

特に、この際注意していただきたいことはあくまでも、余り深刻や残酷にならないように、むしろ、「緊縛の美」や「囚われの悲しみ」をほのかなエロチシズムを添えて生かしていただきたいと思っています。この点は、従来の貴誌の傾向を拝見して大丈夫と思っております。伊藤晴雨氏式の陰惨な残虐写真になっ

てしまつてはお終いです。同じ緊縛写真であっても、一見して顔を背けたくなるようなのは真平御免です。醜惡以外の何物でもありません。

矢張り一見ドキリとし、それから、ワクワクとするような、温い血が体の中をかけめぐ

るような、そして、見れば見る程見飽きないような写真が欲しいと思います。

そんなゼイタクな写真が実際にあるかと問われるかもしれませんが、立派にあるので、従来貴誌に載った中で秀作といわれるもの、例えば、さきにあげた「女の縛られるまで」や「美囚第十四号」をはじめ、何れもそのはんちゅうに入るでしょう。

いつかの「蜘蛛と蝶々」なども、よいストーリー写真になるのではないのでしょうか。あながち「蜘蛛と蝶々」に限らず、貴誌の記事には、よいアイデアのものが、たくさんあると思います。

今ちよつと考えてみた「奴隷売買」「戦争捕虜」（これは全モデルさんを動員、後手に縛って地下室のようなところに品物のように転がしておく、着衣と全裸とどちらがよいかわかりません）

それから、例えば責めのうち、海老責め一つを考えてみて――

薙のうえに立たされる、後手に括られる、胡坐をかかされる、

両足首を幅広く紐で括られる、両方の紐を両肩のうえから廻して後手の緊

縛のところへ通す、

上体をグッと前に押えつけられ、紐を締めあげられる。

一分の身動きも出来ない肉塊をドンと突かれてのけぞる美しいけにえ……

と、この過程を動的に撮ってゆく。露骨で発表出来ないところは、部分や表情でゆく。

この式で行くと、何十とある「責め」を対象にするだけで組み合わせは無限でしょう。

なお、この物語式は、写真だけでなく、絵でもよいと思います。前記「女の縛られるま」でと同じ奇巧に載った都築峯子さん描くところの「拷問部屋」も楽しいものでした。

○

前の項でも触れましたが、全体的の写真の外に、部分を強調してアップで出してみたらいかがでしょうか。クローズ・アップの活用は意外な効果を発揮することがあります。

勿論この試みは、「悦特第二集」に於て、『ロープ・ブラジャー』その他、従来から随所に試みられているところではありますが、

例えば――

○緊縛を受け薄目をひらき口を僅かに開けた絶望の美女の表情。

○くびれてハチ切れんばかりの乳房、手指、

◎撮影会兼読者座談会開催◎ 参加者を募る

爽秋を迎えて左記の通り「モデル撮影会並に読者座談会」を開催いたしますから出席御希望の方は奮って御申込願います。

記

- 一、月 日 昭和34年10月中旬又は下旬
- 一、場 所 大阪市郊外Y温泉庭園借切
- 一、出席者 司会並に撮影指導 辻村隆
- モデル、絹川文代、大塚啓子、愛川悦子
- の中の有志及び新人モデル一名。

△編集部読者座談会係

- 一、参加御希望の方は編集部宛連絡場所明記の上お申込願います。日時集合場所その他詳細決定次第、出席して頂く方へ御連絡申し上げます。カメラ持参歓迎（但しシネカメラを除く。又カメラ持参なくも可）
- 一、会費 不要（希望者多数の際は編集部に於て選定いたします故御諒承願います）
- 当日、食事の準備はいたしておきます。

足指の苦悶の表情（内や外に反り返る筈。この点、モデルさん達には一寸お気の毒ですが実際に身動きの出来ないよう縛しめたいえ、くすぐったり、つねったり、一寸痛みつけてみると、勿論、予め納得のうえ、手、足の表情も正確に記録でき、貴重な研究資料ができるでしょう。）

○手錠や足枷を嵌められるところのアップ等要するに緊縛個所の動的強調。

○

はっきり緊縛姿態を出すことは、勿論主流でしょうが、以上述べたような緊縛美の強調とは逆に、時にはチラリズムを発揮させる方がより効果的な場合があります。例えば、全

裸よりも、膝頭ぐらいをチラリと見せた方が露出の効果が強い場合があると同じように、はっきりと、グルグル巻きを見せてしまうよりも、むしろ想像に訴えるやり方、これも一つの方法ではないかと思えます。

例えば、手は後ろに廻していますが、実際には縛ってはいないというようなもの。写真だけでは縛っているのか、いないのか、はっきりしないのも空想の余地があつていいでしょう。また、完全なヌードのものより、或る程度着物なり洋服なりを着ていて、はだけた方が、より一層風情があると思います。これは自分で実際にモデルを使って、いろいろ写真を撮ってみて、その結果を見てみるとよく

わかります。

貴誌には優秀なお嬢さんが自由に使えるのですから、それらのお嬢さんたちを駆使して素晴らしい写真を撮って下さい。尤も、これは前の二項よりは、実際には難しいかも知れませんが。

世間一般でよくいわれることですが、女の人が、指輪、腕輪、首輪、ブローチ、等を好むのは、その装飾的な役目の外に、その柔かい肉体を何ものかによって拘束されることを望む潜在的な願望のあらわれといえることができるでしょう。

また、縛られて自由を失った女体の美しさ

に、世の男性が奇妙に心をかき立てられるのは、その昔の掠奪結婚の名残といわれていますが、それも満更こじつけとばかりはいえないと思います。人の心の奥深く潜むこれらのものは、一片の道徳や法律や世間態などという規範以上に強く、われわれの心を揺さぶるものであります。

〔新版〕女体緊縛フォトオンパレード

各組一枚一組（全部送料共）

R組 百花撰

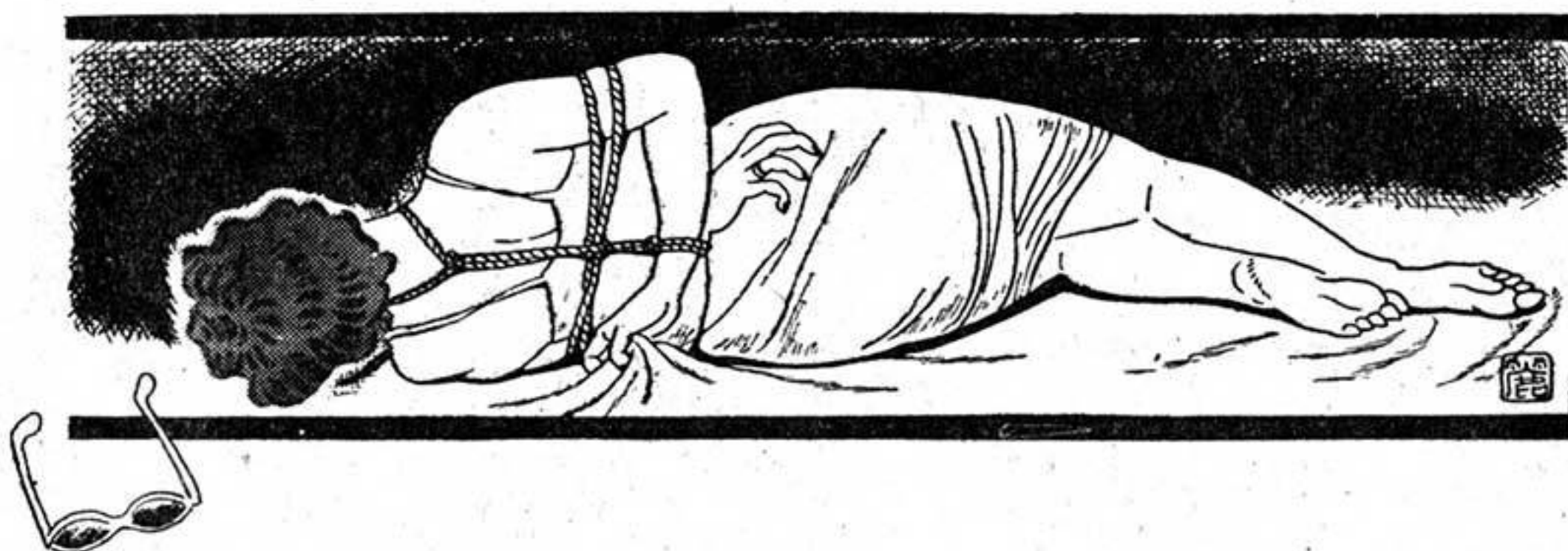
大手札判（印画紙9×13）

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇円

R10	鎖しはり晒責	(萩千恵子)
R11	股間しはり正面	(伊吹真佐子)
R12	女学生制服しはり	(須川令子)
R13	尻立後手しはり	(萩千恵子)
R14	開股しはり	(川辺砂登子)
R15	猿ぐつわの魅力	(伊吹真佐子)
R16	トイレでの縛り	(須川令子)
R17	立木野外しはり	(村田那美子)
R18	緊縛横臥	(厚狭春江)
R19	足場梯子ゼメ	(伊吹真佐子)
R20	いたぶり	(春日ルミと伊吹)
R21	帆立しはり	(萩千恵子)
R22	強烈な梯子ゼメ	(伊吹真佐子)
R23	梯子責め	(佐賀美智子)
R24	逆さ本吊りゼメ	(伊吹真佐子)
R25	後手吊りゼメ	(同右)
R26	股間しはり後手	(中塚文子)
R27	逆エビ責め	(伊吹真佐子)
R28	高小手しはり	(加賀利江子)
R29	変型足手しはり	(萩千恵子)
R30	松樹後手しはり	(村田那美子)
R31	くさりゼメ	(伊吹真佐子)
R32	薄羅の後手緊縛	(加賀利江子)

R33	股間タテしはり	(中富綾子)
R34	首縄股間しはり	(坂口利子)
R35	手足逆吊り	(伊吹真佐子)
R36	和服の後手しはり	(藤田節子)
R37	仰向全裸悦唐責	(川端多奈子)
R38	後手首縄シメ	(加賀利江子)
R39	乳房下しはり	(村田那美子)
R40	肉体美への折檻	(伊吹真佐子)
R41	お灸ゼメ	(春日、伊吹二嬢)
R42	後手猿ぐつわ	(萩千恵子)
R43	松樹縛り晒責	(村田那美子)
R44	コルセット縛り	(中塚文子)
R45	股間しはり	(同右)
R46	手と足と緊縛	(萩千恵子)
R47	後手しはり	(加賀利江子)
R48	御開帳	(萩千恵子)
R49	くさりゼメ	(川端多奈子)
R50	折檻の魅力	(須川令子)
R51	全裸の股間しはり	(愛川悦子)
R52	逆立の折檻	(大塚啓子)
R53	開股椅子ゼメ正面	(花坂道子)
R54	振袖の緊縛	(村田那美子)
R55	腰元の吊り責	(愛川悦子)
R56	ヌードしはり	(田中芳代)
R57	本縄しはり	(萩千恵子)
R58	股間しはり	(村田那美子)
R59	落花狼藉の緊縛	(川辺砂登子)
R60	樹間のハリツケ	(益田房子)
R61	帆立舟のゼメ	(同右)

R72	逆エビ責め	(愛川悦子)
R73	変型全裸股間縛	(花坂道子)
R74	ヌード縛り	(村田那美子)
R75	全裸横臥緊縛	(萩千恵子)
R76	ビクニツク	(須川令子)
R77	ハイヒール	(同右)
R78	湖畔の宿にて	(大塚啓子)
R79	尻立逆しはり	(田中芳代)
R80	下着の色模様	(愛川悦子)
R81	目隠し開股縛り	(花坂道子)
R82	後手高小手	(愛川悦子)
R83	乳房しはり	(萩千恵子)
R84	開股ベツド縛り	(愛川悦子)
R85	全裸床柱縛り	(花坂道子)
R86	亀ノ甲縛り	(愛川悦子)
R87	ヌード股間縛り	(萩千恵子)
R88	全裸乱れ髪	(大塚啓子)
R89	ガンジガラメ	(川辺砂登子)
R90	臀部責め	(愛川悦子)
R91	後手股間しはり	(中塚文子)
R92	腹丸出し猿轡	(伊吹真佐子)
R93	破れたシユミース	(坂口利子)
R94	女学生しはり	(須川令子)
R95	仰向開股しはり	(萩千恵子)
R96	乳房くさりゼメ	(川辺砂登子)
R97	野外バンド責め	(村田那美子)
R98	トイレ正面排世縛	(中塚文子)
R99	開股正面いじめ	(伊吹真佐子)
R100	乳房搾りゼメ	(佐賀美智子)



創作「一筋縄では駄目な娘」

女はそれでも

我慢が出来る

鳴 滝 三 郎

○ 懸賞募集原稿入選作品 ○

(一) 愛情強盗

夜の十二時過ぎから終電車へかけての乗客は、女が多い。

銀座、新橋、渋谷、新宿、池袋、等の歓楽街から吐き出されて来る女達だ。

バア、キャバレー、アルサロ、純喫茶、ダンスホール等が終業になると、厚化粧もその儘に、彼女達は家路へ急ぐのである。

子持ちの未亡人、病床の良人を養う妻、大学へ通う女子学生も居る。潑刺とした十代の娘も有れば、疲れた四十過ぎの大年増も居る。容貌もピンからキリまで有った。

新宿の、バア「螺旋」の看板娘、柏田京子は、ピンの部類に属する。年令は二十一。スラリと背が高く、恵まれた美貌は同性をも圧倒した。杉並の、閑静な高台に有るアパート「南風荘」の二階に住んでいる。

駅前の果物屋で、西瓜を活撥に値切り、中華そば屋で遅い夜食を済ました。

あとは帰って睡るだけ——気儘な独り暮らしだ。アパートは寝静まっていた。窓を開けると、夜風が爽快に流れ込んだ。

派手な衣裳を脱ぎ捨てて、下着姿になった。あられもない恰好には違いなかったが、高台

の有難さで覗き見をされる心配は無い。

「これで水道が部屋の中に有ったら文句は無いんだけど……」

呟やきながら、京子は西瓜を冷やしに廊下のはずれへ行った。夜の水道は勢いが良い。

顔と手を洗い、序でにスナリと伸びた白い足を濡れた手拭で拭いた。フト誰かの足音を聞いたような気がした。(見られちゃったワ!) 狼狽して振り返ったが誰も居ない。

気のせいだろうか? だが、別に大した事ではない。私の体は美しいのだから……と思った。

部屋へ戻って布団を敷き、蚊帳を吊る。殆んど大の字に近い形に寝転んで、手足を思い切り伸ばした。

「起きてみつ寝てみつ蚊帳の広さかな、か。あーあ、早く素敵な恋人が現われないかなア……」

京子は駄々子のように胸を振り、両足をバタバタさせた。

しばらくして扉に鍵を掛けなかった事に気が付き、面倒臭そうに起き上った。ハンドバッグの中、洋服のポケット、鏡台の上と探したが鍵が無い。

扉の外側にさし込んだ儘であるのをやっと思ひ出した。フフと笑って扉へ近付いたが、扉は京子が触れないのに、ひとりでに開いた。ギクリとした。風の仕業とは思えない。

黒眼鏡を掛けた背の高い男が、ヌツと入って来た。鍵は、その男の手に有った。京子は何か叫ぼうとしたが、舌が硬わ張って声にならなかった。

男は悠然と鍵を掛け、指先でチャラチャラと弄びながら低い声で云った。

「不用心だね。鍵が泣くぜ」

「……人を、呼びますよ!」

「止した方が良い。おとなしくしていないと、そのキレイな顔を台なしにしてしまうぞ!」

「呼ばなくても、隣の人には聞えます!」

男は不敵に笑った。

「嘘はいけないな。右隣は空室。左隣は大学生だが夏休みで故郷へ帰った。調べてある」

「お金なら、あげます。すぐ帰って!」

「いや、始発の電車が出るまで、ここに居る」

いつの間に用意したのか、男の手には真新しい細引が握られていた。

ズイツと上り込んだ。逃げる暇も無い。髪を掴まれ、引き倒された。逞しい体が躍りかかり、女を組み敷いた。

女は、よく磨かれた紅い爪で男の顔を掻きむしろうとしたが、男はせせら笑い、女の両手首を掴んだ。体術の心得でも有るのか、グイと背中へねじ上げ、ピタリと十字に組み合わせると、もうビクともしなかった。女は足で暴れるだけだった。

男は片手と口で縄を捌き、女の手首をきびしく縛り上げた。京子は逃げようとしたが、縄尻を引かれ、ズルズルとたぐり寄せられてしまった。

余った縄は随分、長かった。男は女の上体を引き起こして正座させた。そして、その過程を愉しむように、ゆっくりと縄を操作し、女の美事な体へ、適確に巻き締め上げて行った。

女は震えていた。もう抵抗はしない。

まず豊かな胸部が制圧された。昔の罪人が牢屋で本縄を打たれた時のような、複雑な縛り方だった。首から胸へかけて菱形に縄が走った。合理的で、無駄や乱れの無い拘束だった。弾力の有る豊かな胸部が前へ張り出し、細引が喰い込んだ。強靱な縄の威力が、若い女体を責めた。

女は、眉をしかめて身をよじり、両手の指を屈伸させた。

「……痛いかな？」

「当り前だわ……」

「辛抱しろ。君が不用心だからこんな事になる。……以後、気を付けた方が良く」
男は勝手な事を云った。だが、その口調には、とぼけた愛嬌のようなものがあった。

女は震えが止まった事に気が付いた。
度胸さえ据わって来たようだ――。

「今晚、お友達が三人訪ねて来るのよ」
男は女の前へ廻り、顔を覗き込んだ。

「……嘘だ。もっと巧い事を云うべきだ」
と少しも動揺しない。

灯の下で見ると、男の顔には見憶えが有るような気がした。浅黒く、引き締った容貌は、当世風の好男子と云えた。唯、黒眼鏡が不気味だった。年配は三十前後か――。

「あなた、誰なの？ お店のお客さん？」



男は応えない。

ズボンのポケットからナイフを取り出し、刃を開いた。
女は体を硬直させる。顔からは血の気が引いた。顔を切られるのだろうか？ 騒がないのに！

然し、男は余った縄を切ったのだった。

そして、指先で女の胸を突いた。女は倒れた。その拍子に白い脚が、膝の上辺りまでもむき出しになってしまった。女は逃れようと激しくもがいた。

だが、無駄な事だった。忽ち抑え付けられてしまう。強い力だ。

女は絶望的な表情をみせて、グッタリとなった。眼の前が暗くなった――。だが、男はそれ以上の事をしなかった。そと、抑えた手を引いた。

短かい縄で容赦なく足首を括り合わせただけだった。女は、むしろ意外気に、男へ視線を投げた。けれど、やはり見ない方が良かった。

男は、脱ぎ捨てられてあるワンピースからバンドを外していた。

女は眼を閉じ、唇を噛んだ。

鞭打たれるのだろうか？

「何だ、観念したのか？」

男は低く笑い、バンドの金具の方で女の頬を軽く叩き、颯り始めた。仲々止め

ない。

女は、急に激しい屈辱感を覚えた。眼を開き、下から睨んだ。

「憤ったね。やっぱり、思った通り、君は面白い娘だ。さて、今度は、どうやって喜ばれようか？」

男は、京子の腰へバンドを巻き、ウェストを思い切り締め上げた。

京子は、思わず呻き声を洩らしてしまっ

た。男は、バンドの革にナイフで新らしい穴をあけた。

京子のウェストは、まるでスタイルブックの中の絵のような、非現実的な細さに締め付けられ、固定されてしまった。

「さあ出来上りだ。やっと君を思い通りの形にする事が出来た。どうだい？ 苦しいか？ それとも、嬉しいかね？」

男は、ハンカチで汗を拭き乍ら、女の返事を待った。

「……こんな目に遭わされて、嬉しい筈は無いじゃありませんか！」

「とは云わせないぞ。僕は随分前から君という女を研究していたんだ。君がどんな雑誌を買うか、どんな映画を見るか、……ちゃんと知っている。素直になり給え」

「あなたは、誰なんです？」

「早縄の平次、というお泥棒様だよ」

「そんな、目明しみたいな名前の泥棒なんて……」

「おかしいかな？ ハハハハ」



男は、机の上から灰皿を持って来て、煙草を喫い始めた。仕事の後の一服——という感じでいかにも美味そうだった。「私にも喫わせて……」

「よし来た」

男は、煙草を京子の口にくわえさせ、火を点けた。そして荒々しく髪を掴み、女の顔を真上に向け、抑え付けた。

煙草を呉れたのは、親切でも思いやりでもない。責め道具として与えられたのだ。

女は煙にむせび、顔を灰で汚し、やがて唇を焙かなければならない。と同時に、火の点いた煙草は、最も小さい猿轡の役目をした。

女は、むせ返り、眼で許しを乞う。泪が浮かんだ。唇が熱くなった頃、男は漸く女を放し、短くなった煙草を除いた。

「どうだい？ 美味かったか？」

女はせき込みながら、怨ずるような表情で云った。

「味わう事なんか、出来ないわ」

「素直にすれば、あとでちゃんと喫わせてやる」

男は黒眼鏡を外した。

意外な程に柔和な眼が、無邪気と云いたいような笑いを見せていた。深く、澄んだ瞳だった。

女は、負けそうになる自分を感じた。心まで縛られてしまう——と思った。

俄かに羞恥を覚え、頬を染めた。男は静かに語り出した。

「君はバア螺旋のナンバアワンだ。誘惑は降る程有ったに違いない。だが、君は堅いという評判だ。何故だろう？理想が高いのだ、と批評した女が居た。お高くとまっているんだそうだが……どうかな？」

「もう帰って！」

「電車が無いよ」

「タクシーなら有るわ」

「まだ目的の全部を達した訳じゃないから帰る訳には行かん」

「好きなように、勝手にしても良いから、早く帰って。どうにでもしたら良いわ」

「指図は受けない。君の申し出は折角だが断わる。今の儘で充分美しい。まあ、話を聞き給え……」

「聞きます。聞くから手を解いて下さい」

「それは出来ない」

「痛いよ。痺れて来たわ。お願い……」

「駄目だ」

「じゃ、せめて少しだけでもゆるめて」

「我慢をしない。余計な事を云うと、口を縛るから、その心算で居給え。或る時、君を映画館の中で見付けた。僕はすぐ近くの席に座り、君を見守った。君は、ヒロインが迫害されたり、縛られたり、拷問されたりする場面になると緊張して見ていた……」

「そんな事、有りません」

「いや、有る。それだけではない。君は、ロードショウの初日の早朝割引を利用して或る種の特定の映画を見に行った事が、少くとも三度以上は有る。『ノートルダムのせむし男』『カルタゴの女奴隷』

『私は死にたくない』『熱砂の女盗賊』等の洋画だった……」

「見たいから見ただけです」

「違う。ヒロインが縛られる映画だからだ。ロードショウの初日の早朝割引、という事は、日本で一番早く見た、という事だ。唯の興味とは思われない……」

「洋画は好きなんです……」

「それも嘘だ。マリア・シエルの『居酒屋』なんかは、この近くの五十円の映画館へ来ているのに、君は見なかった。何故だろう？マリア・シエルは縛られないからだ」

「『最後の橋』というのを見ました……」

「女医が捕虜になる話だからだ。特種な場面を期待して見たに相違ない」

京子は恥かしかった。心の秘密を見知らぬ男に見抜かれている。京子は顔をそむけようとして、不自由な体で寝返りを打った。女はのけぞり、背中で交叉された儘の両手の指が、白いシーツを固く握りしめた。

男は再び語り始めた。声優のそのように、洗練された口調であり、落着いた声だった。

「もっと種々なデータを集めたが、そんなものは抜きにしても、印象で判る。直感が有った。君こそ、長年、僕の求めていた人だと信じた。つまり、こうされるのを悦ぶ女なのだ」

女は、身も世も無く悶え、呻いた。

「今日は、求愛に来たのだ。少し手荒だが、最も理想的な手段を選んだつもりだ。唯、予想外の事が一つ有った……。君は、僕以外に誰かから縛られた経験を持っているに違いない。これも直感だが、

残念ながら間違いいではないようだ……」

男は、ズバリズバリと断定してくる。

京子は戦慄した。確かに男の云う通りなのだ。忘れかけていた忌まわしい記憶が、急激に甦えってきた。

「云い給え。どんな男に縛られたのだ？」

京子は臉を伏せた。黒い、長いまつ毛が美しかった。

「誰に縛られた？ いや、縛らせた、と云っても良い……」

「男なんかじゃありません。女の人も居ました。警官も来たんです……」

「なに？」

「……お話しても良いけど、……あなた誰なのですか？ 求愛、と仰有ったから、強盗ではないんですね？」

「その一種だろう。愛情強盗、とでも云うところかな……」

「本当に愛して下さるのなら、被害者になってさし上げても良ろしいけど……」

「愛する！ 天地に誓う」

「求愛する人が、いきなり虐めるなんて」

京子は、甘えた動作で身を揉んだ。心には不思議な程の余裕が生れていた。

「短刀直入に確かめてみたまでだ。そこが愛情強盗の、強盗たる所以だ」

「……完全に正体を確かめられたわ。私って仰有る通りの女です。

……白状したんですから、もう許して下さい」

「駄目駄目！ 余計なお喋りをすると口を縛る、と云った筈だ」

「そうされたら、何も話せなくなるわ。どんな男や女に縛られたの

かも……」

「成程。じゃ早く話をし給え」

「いやいや！ いやだわ。あなたが誰かも判らないのに、そんなことを話すなんて……」

「……よし、じゃ僕の事も明らかにしよう。但し、その後で逃げ口上なんかを使うような事が有れば、僕は……紳士でなくなるぜ」

京子は、ゆっくり頷いた。信頼出来る男らしい、と思えた。この男を長い間、待っていたような気がした。

「私、裏切られるのが嫌いな。だから自分も人を裏切らないわ」
「よし。僕等は婚約したんだぞ……」

男は京子の手首を乱暴に握み、上へ吊り上げた。京子は喘いだ。
「あ、かんにんして。もう責めないで！」

男は黙った儘、京子の白魚のような指へ金属製の固い物をはめた。
「何をなさったの？」

「エンゲージ・リングさ。丁度、ぴったりだ」

「まあ」

京子は、クスリと笑った。

「随分、手廻わしが良い人なのね」

「手廻わしが良い？ 何の洒落だ！」

「痛い！……だって早手廻わしに、痛い！ 痛いわ！、何故憤っていらっしやるの」

「そんな皮肉を云う芸当が有るとは知らなかった」

「……あ、そうか。違うのよ、そんな心算じゃないの。純粹に感謝した言葉なのよ」

「どうだか……」

「お気に触ったら御免なさい。……指輪、見たいわ……」

「いさぎよく前科を白状したら、見せてやるよ」

「意地悪——。あなたこそ、早く住所氏名職業年令、を素直に述べよ」

「……僕は、二十八才。結婚に一回失敗した。目下のところは、無論、独身。仕事は、種々有る。小さな新劇団の演出家、これが本業の心算だが、公演は大概赤字だし、巧く行ってトントンだ。だからその方の収入は無い。アルバイトとして役者を兼ねている。映画、テレビ、放送、等に出て、安いギャラを貰っている。他に、小説を書いたり、脚本を書いたりもする。時々売れる。以前は絵も描いていた。ネクタイのデザイン、つまり図案屋をやった事も有る。だから、君のヌードぐらいなら描ける……」

「いや……」

「いやな事は無い。美人に描くぞ。結局固定収入は無いが、三人や四人は食うに事欠かない」

「三人や四人？」

「子供が欲しくなった時の事を計算に入れての話だ。僕の話は、早手廻わしか？」

「もう、それは云わないで！」

「住居は六帖のアパートだ。精々きれいに住んでいる心算だが、こよりは、やはり汚ない。番地は、ここだ……」

男は名刺を出し、京子の胸の縄目へ挟んだ。

「意地悪しないで！ それじゃ、読めないわ……」

「読んで有難いような字は、別に無い」

「だって、名前が判らないわ」

「そうか、うっかりした。由利修平だ」

「ユリ、シユウヘイ……良い名前ね」

「おだてても縄は解かないぞ。さあ、今度は君の番だ。かくさず白状してえ」

(二) 一 筋 縄

京子がいくら哀願しても、由利修平は絶対に縄目から解放しようとはしなかったが、二人の心は、女の苦痛が増すに従って急速な接近をみせ、外見とはおおよそ正反対の親しみが湧いていた。

女は一刻も早く嚴重な縛しめを許されて、男の胸にすがりたいような気になったが、この形式以外には結ばれなかった相手なのだと心に云い聞かせ、苛責に耐えた。

そういう心理状態になってみると、やわ肌に張りめぐらされた苛酷な縄の中にも、幸福という名の電流が通っているのだ、という気がした——。

由利修平が初めて京子と会ったのは、劇団の稽古場でだった。

春の公演に『北京の娼婦』といの諷刺劇が選ばれ、彼が演出を担当していた。娼婦の解放を題材としたこの芝居は、原題を『西望長安』といい、戦後の中国で上演され好評を博したものだ。

内容は一種のアクションドラマで、欺されて売られて来た娘達に楼主側の年増の女が、客を取れと強要し後手に縛り上げて鞭打った、吊り上げたりする場面が幾つか有る。

修平は女優達に迫真の演技を付け、折檻の場面は体当りで行くように要求した。稽古が白熱化した頃の或る日、京子が学校時代の友達をたずねて劇団を訪れた。

縛られる娘達の一人に扮していた京子の友達は、研究生から抜擢されてこの役を貰ったので、誰よりも熱心だった。彼女は自から進んで、修平の手で本当に縛って貰ったので、他の女優達も対抗意識



からそれを真似た。

「さあ、もう台本を読もうたって読む事は出事ないんだから、その心算でしっかり演るんだ！」

と修平は怒鳴った。

そこへ、京子が訪ねて来たのであった。京子の友達は、縛られた姿の儘で玄関へ出て来た。

京子は愕いて暫し絶句してしまったが、事情が判ると、何だかこの友達が羨ましいような気がした。その場で、手早く用件を話したのだが、進行を妨げられてイライラした修平は、思わず稽古場から飛び出して来て、二人を叱り付けた。

「何をグズグズしているんだ！ 勝手な用事で皆を待たせるなんて、不謹慎だぞ！」

京子は逃げ出すようにして劇団から去った。だが、修平は注目した。今度の公演にはあんな娘を使いたかった、と考えたりしながら、後ろ姿を見送っていた――。

「……あの時のコワイ人があなただったのね。それ以来、チャンスを狙い続けていたという訳？」

「馬鹿！」

「今までに随分、女を縛ったんでしょ？」

「いや、あの芝居の時だけだ。だが、不純な気持は少しも無い。芸術の為だからな」

「今日はどうなの？ 不純ないたずらで玩具にされているんだったら、私、口惜しいわ」

「無論、純粹さ。恋愛感情の為だからな。つまらん事をいってない

で、早く被縛歴を白状に及べよ」

「ヒバクレキ？……ああ、括られた前歴ね。いいわ。でも、何だか恥かしいな」

「拷問の手段に訴えてもいわせるぞ」

「もう今でも拷問を立派に受けてるわ。痛いなア、荷造りされたみたい……」

「鞭打ちと、水責めのどっちを選ぶ？」

「白状します。もうこれ以上のお仕置は嫌よ。修……平さんって暴君の見本みたいな人になりそうね。でも、捨てないでね。お話しします。……十八の時だったわ。初夏の或る夜更けなの。父と喧嘩をしちやって家出を決行しました。着物とお金を少し持って、知らない町を泣きながら歩いたわ。けれど、天が下には隠れ家も無し、なの。気が静まってから途方に暮れちやった。結局、旅館を探したの」

「悪い娘だったんだな」

「電柱に近くの旅館の広告が出ていたんだけど、それがとても判り難いのよ。ウロウロしていたら、男の人が二人通りかかったから訊いてみたんです」

「ははあ、筋書が読めた……」

「一緒に探してあげる、といわれて、三人で探したわ。ところが、段々淋しい方へ誘導されてしまったんです」

「馬鹿だな」

「林の傍まで連れて来られて、すっかり怖くなったのよ。二人の男の人が、私の前後で急に立ち停ったんですもの……」

「君の運命は風前の灯だ」

「被害妄想だったのかも知れないけど、私は男達から逃げ出しまし

た」

「何もされないうちにか？」

「ええ。それでね、近くの大きな邸の中へ駆け込んだら」

「然し、そこは空家であった……」

「違ふのよ。人が居たわ。私、夢中で助けを求めたの。男達は門の脇迄追って来て、影法師みたいに立っているんですもの、他に方法が無かったわ」

「まあいいさ。それで？」

「どうしても玄関を開けてくれないのよ。何だか内で相談をしている様子だったわ。その中、隣の家に灯が点いて、人が起き出して来てくれたの。気が付くと附近の二・三軒が全部起きてる。助かった、と思ったわ」

「ははあ、防犯ベルの設備が有るんだな」

「男二人は慌わてて逃げ出したわ。けれど私は、とんでもない目に遭わされました。いきなり後ろから木刀みたいな物で撲たれ、足をすくわれて、倒れたわ」

「悲劇だね」

「叩かれたり、蹴飛ばされたりしました。寄ってたかって抑え付けるのよ。近所の人々が皆集って来たらしいの、誰かが忘れもしない、キンキンした女の声だった。縄！ 縄！ って叫ぶのよ。忽ち手や足を結わかれ、弁解する暇も無いんです。唇が切れて血が出ても、誰も拭いてくれません」

「女をおとりにした三人組強盗、と思ったんだな」

「そうなの。すぐにパトカーが飛んで来たわ。私はその車へ曳いて行かれ、警官に渡されたわ。言訳は本署でしろ！ って怒鳴るん

です。縄も解いてくれないで、警官達の真ん中へ坐らされたわ。刑事部屋で冷たい手錠をはめられました。泣き続けたわ。手錠つてもがくと段々締まって来るように出来てるのね」

「そうらしいね」

「残酷な機械だわ。刑事さんに取調べられました。何人も刑事さんが、入れ代り、立ち代りして、何回でも同じ事を訊くのよ。その口惜しさったらないわ！」

「君が悪いんだよ。刑事は嘘かどうかを確かめる為に、多勢で訊いたのさ。昔なら拷問に掛けられるところだ」

「クタクタになったわ。でも、いい度くない事はいわなくても良い、というから、住所はいわなかったの」

「馬鹿だな。余計怪やしまれるじゃないか」

「それはそうだけど、父に知られたくなかったんですもの。それでとうとう牢屋へ入れられたの」

「留置場というんだよ」

「男の牢屋、留置場の前を通った時、いやらしい眼付きで眺め廻わされたわ」

「美人だからな。グラマラスでもあるし」

「牢屋の中でも手錠をされた儘かと思っていたけど、許してくれたわ。でも哀しかった」

「同囚は居たかい？」

「三人居ました。下品な若い女と、馬鹿みたいな汚ない女と、もう一人は奥様風の美人だったわ。何をしたのかしら？」

「それからどうした？」

「毎日、泣いてました」

「毎日？ おいおい、お父さんの名を白状しなかったのか？」

「ええ。だって、余計怒られるに決まってるんですもの。それから二週間ぐらい居たかしら？ 昼間はね、手錠をはめられて縄で一列につながれて、自動車で東京の真ん中まで連れて行かれるのよ」

「東京地方検察庁だろう？」

「そう。随分沢山の人に見物されて、辛かったわ！ 死にたいと思った。」

「おかしい女だね、君は」

「家では必死になって探したらしいの、どこにも居ないので、私立探偵を頼んだりもしたらしいけど、とうとう搜索願を出したので、連れ戻されました」

「やれやれ。その間、強盗未遂の被疑者として豚箱暮らしか。呆れた家出だね」

「愛想が尽きた？」

「そんな事はない。可愛い女だと思うがね。唯、君がそんなにまで縄や手錠の味を知っているとは、思いも寄らなかった。まさに縛られる事のザエテランだね」

「ひどいわ！ 自分で白状させたくせに」

「その時は辛らいつと思ったんだね。死にたいとね。今はどうだ？」

「痛いと思うわ。でも、辛くはないわ。事情が違うからかしら？ 私ね、警察でよくいわれました。一筋縄ではいかない女だ、って。そういう古めかしい言葉、いやに現実感が有るのよ。グルグル巻きにされた後だったから」

「成程、一筋縄か。そいつはいいや」

修平は笑い出した。

彼は長い間、サディストとしてのコンプレックスにつきまとわれていた男だったが、この女を得る事によって自分は救われる、と信じた。少しも陰惨な感じのしない、むしろ普通以上に明朗な家庭を建設する事が出来る、と思った。

「君と僕とは、正に好一对というところだよ。シツクリ行くだろう。楽しい暮らしが出来るとは違いない。僕はサディストだし、君はマゾヒストだ。こういう性格は、思い切って徹底させてしまう事だ。そうなれば、僕等は健全ということになるのだよ。二人で巧みに発散して、明るく生きて行くんだ。いいね」

「はい。……嬉しいわ。でも、今からこんなに苛められたんじや、先が思いやられるな」

「生意気をいうな。だが……よく我慢が続くもんだね、内心驚いているんだ。凄い忍耐力だよ全く。男には、とてもその真似は出来ない」

京子は、愛らしく首を傾げた。

「そうかしら？」

「そうなのだ。女はそれを我慢出来ない——というのは洋画の題名だが、女は、実は我慢が出来るのだ。拷問ばかりじゃない。手術でも、戦争中のような苦しい生活でも、あらゆる迫害にも、よく耐え得るものなんだ。男は比較にならない」

「科学的根拠が有って？」

「有る。女は子供を産む使命を持っている。出産の時は死の苦しみを体験しなければならない。それに耐え得るように体が出来ているのだ。神経や精神力の在り方が男とは違うのだよ」

「つまり鈍感だ、といい度いんでしょ」

代理部案内

☆最新作女体緊縛写真

大手札(9×13) 印画紙焼付

凌辱 略号(れん)

愛川悦子、辻村 隆

連続12枚1組 八〇〇円

浴室股間縛

愛川悦子 略号(よく)

3枚1組 二五〇円

悦虐雨さらし

愛川悦子 略号(あめ)

3枚1組 二五〇円

剥れた腰巻

花坂道子 略号(まき)

3枚1組 二五〇円

全裸強烈股間縛り

花坂道子 略号(きよう)

5枚1組 四〇〇円

ヌード縛り五態

益田房子 略号(ふさこ)

5枚1組 四〇〇円

寝室の苦悶

益田房子 略号(くもん)

3枚1組 二五〇円

腰元拷問

村井知可子 略号(もん)

5枚1組 四〇〇円

湯上りの折檻

大塚啓子 略号(せつ)

3枚1組 二五〇円

行燈(アンドン)

愛川悦子 略号(あん)

3枚1組 二五〇円

いたぶり

略号(いた)

春日ルミ、愛川悦子

3枚1組 三〇〇円

妖艶閨の縛しめ

田中芳代 略号(ねや)

5枚1組 四〇〇円

太股縛り三態

大塚啓子 略号(ふと)

3枚1組 二五〇円

「そのいい方は不可ない。神の摂理で、大脳の組織がそうなっているんだ。尊重すべき事なんだ」

「尊重しながらお仕置きしたり、苛めたりするの？」

「それをいうな。甘くするとすぐつけ上るから困る。少しけなしてやろう。女は、嘔吐きで、残忍性が有るんだ。男の方が善良だ。だから時々は苛められるのも止むを得ない」

「急に株が下ったものね」

「これも女の習性が原因なのだ。つまり、こうだ。女は一般に料理やその他で、血を見る事に慣れている。だから残忍なところが有るのだな。と同時に、女は自分の生地を隠す。一番手取り早い例が化粧だ。本来の素顔というものをすっかり化粧で変えて平然たる様子を装おう。これが嘘の名手になる原因だ」

「ひどい事をいうわね。でもいいわ。女はどんな事でも我慢が出来る、尊い性（きん）を持っているんですからね。憤らないわ」

「うむ、その調子その調子。気に入ったから、縄を解いてやろう」

「ありがとう」

女は身をくねらせて、不自由そうに後手を差し出すしぐさをした。白魚のような指が、しなやかに屈伸する。

「チョットおいしい気もするネ」

「いやよ。今日はこれでカンニン……」

「ではポツポツと……」

「意地わるッ！」

修平は、京子の縄目に手をかけた。

「真っ先に手首を解いて！」

「足首は一番後、か？」

腰元全裸折檻

村井知可子 略号(せつかん)

3枚1組 二五〇円

振袖哀歓

花坂道子 略号(ふり)

3枚1組 二五〇円

股間縛り三態

大塚啓子 略号(こか)

3枚1組 二五〇円

股間縛り五態

益田房子 略号(ます)

5枚1組 四〇〇円

全裸高手小手

愛川悦子 略号(たか)

3枚1組 二五〇円

女学生凌辱図絵

川辺砂登子 略号(りよ)

5枚1組 四〇〇円

賭 機 (カケニエ)

愛川悦子 略号(かけ)

3枚1組 二五〇円

御注文次第嚴重包装の上急送申し上げます。

お申込は 天星社代理部へ

修平は女の縄を解きながら考えた。

(明日から早速、結婚式の準備だ。近代的な、型破りな華燭の典を挙げてやろう！)

京子は男に縛めを解かれながら考えた。

(きっと体中に縄の痕が残っているわ。結婚費用を稼がなきゃならないというのに、明日から暫らくはお店へ出られないわ。ああ、三面鏡を何とかして買い度い！)

三面鏡はともかくとして、この新しい夫婦が住む部屋の鏡には、今後、毎日どのような情景が映し出される事だろうか――。

(おわり)

乳房に火をつけるな
第八回

十字架の囀

藤 木 仙 治

本誌百号突破記念

懸賞募集原稿入選作品

陰険な計画

朝になった。

星島大五郎は、洗面所で歯ブラシを使いながら、次第に身心が緊張していくのを感じた。鏡のなかの自分の顔をにらんで、大五郎はつぶやく。

（二、三日うちに、いや、早ければ今日、たったいまにも、哲夫はここにやってくるにちがいない。うぬ、あのキチガイ犬め！……）
数日前、芝浦の埋立地で、哲夫の拳銃に射たれた右肩が、まだホウタイもとれぬままに痛むのだ。

昨夜おそく、横浜の埠頭から、ズル松とチビ啓が連れ帰った二人の女——美佐と真紀子。哲夫が惚れぬいている女、美佐。そして、真紀子は哲夫にとって、たった一人の肉身である。二人がこの星島大五郎の邸へ連れこまれたことを知れば、哲夫は当然、猛り狂った火のようになって、なぐりこみをかけてくるにちがいない。

（油断はできない。これをチャンスに、こんどこそ、あの復讐に狂った犬を、おち殺してやらねば！……）

大五郎はふかく決意し、ペツペツと唾を吐いた。美佐と真紀子をおさえてある以上、勝算はこっちにある。

「おい、鶴松、啓介、野呂玄——」

大五郎は、星島組の幹部三人を、居間へ呼びつけた。三人とも、昨夜からこの邸に泊りこんでいる。

「へい……」

小腰をかがめて、その男たちがはいってきた。

「社長、お早ようございます……」

畳に両手をつき、そろって頭をさげる。この男たちにはそぐわない、型にはまった固いあいさつだが、これがヤクザの礼儀というやつだ。

「うむ……」

と、大五郎は軽くそれにこたえ重々しい表情に改まっていった。「お前たちも、もう察しているだろうが、こんどこそ、哲夫のやつ、ここへなぐりこみをかけてくるにちがいない……」



「へい……」

と、三人はうなずいて、これも殺気をおびた緊張の顔になった。

哲夫のなぐりこみ——それは、美佐と真紀子を奪い返すことと同時に、彼の最初の目的である、大五郎、ズル松、チビ啓、郎呂玄に対する復讐のための挑戦である。殺すか、殺されるか、二つに一つの決斗であった。

「馬鹿とキチガイには手がつけられねえというが、哲夫もいまは頭にすっかり血がのぼっているだろうから、死にものぐるいでやってくるだろう。おれたちもそれだけの覚悟をしておかなければならねえ……」

「へえ……」

「そこで、いまから当分のあいだ、この邸の表門、裏門、通用口の三カ所には、

昼も夜も二人ずつの見張りをおく。お前たち三人も、ここから外へ出ねえほうがいい。なアに、どうせこの二、三日が勝負だ。古いセリフだが、飛んで火に入る夏の虫にしなければいけない。あんな若僧一人に、いつまでかまっちゃいらねえからな」

「へい、そのとおりで……。あつしたちも、奴に狙われていると思うと、どうも枕を高くして眠ることができねえ。ここンところ、どうもノイローゼ気味で……」

ズル松が首すじに手をあてて、本音を吐いた。

「いくじのねえことをいうな。こっちには、奴の妹の真紀子がおさえてある。それに奴は美佐にもまだ未練があるはずだ、あの女たちを囀にし、それから、おれたちの身の安全を守る楯にするのだ」

「へえ、楯といいますと？」

ズル松がきいた。

「おれに、おもしろい考えがあるんだ。哲夫の奴を、ギョツとさせる趣向だ。もっとこっちへ寄れ」

大五郎は、そのあから顔に陰険な微笑をうかべながら、今朝思いついた計画を、三人に語りはじめるのである。

狂った野獣たち

ひさしぶりに、やわらかい布団に身を横たえた美佐と真紀子であった。

この一時の安息のあとには、またおそろしい運命が待ちかまえていることを、知らない二人ではなかったが、この数日間のはげしい身心の疲労に、ぐったり泥のような眠りをむさぼったのである。

昨夜は風呂をあてがわれて、縄目の痕を揉みほぐし、今朝はあたたかい食事をすすめられた。大五郎の手中にある恐怖よりも、飢えの本能のほうが強く、美佐と真紀子は、かぶりつくように箸をとった。

しかし——。風呂も夜具も湯気のでる飯も、すべては人質としての価値を認めた待遇であり、それからまもなく、二人には受難の運命がおそいかかるのである。

昼近くになると、この邸の中庭に、白木の十字架が二本並んで建

てられた。十字架といっても、荒削りの角材を、むぞうさな素人造りで、十字に組み合わせただけのものであるが、それは昔の刑場に似た不気味な気配をただよわせた。

コの字型に建っている母屋の中庭であるために、葉の茂った樹木も多いし、さらに邸の周囲には高い石塀もめぐらしてあるので、外部から見える心配はない。

この静かで上品な郊外の邸宅の内側に、まるで江戸時代の鈴が森か、小塚原を思わせるような十字架が建てられているとは、誰も夢にも思わない。

一室に閉じこめられている二人の前に、大五郎が現われた。二人の女は、おびえて肩を寄せあった。

「フフフ、美佐、よくもおれを裏切って、哲夫のところへノコノコとでかけていったな。三年前は哲夫のイロだったお前だが、いまではおれの女房だ。昔なら重ねておいて四つに斬る、というところだろうが、おれはまだお前が可愛い。だから殺しはしないが、仕置きは充分にしてやるぞ。覚悟はできているだろうな」

口もとには微笑をうかべているが、眼は怒りと嫉妬の色をみせて、大五郎はねちねちといった。

「あなた、ゆるして！」

美佐は大きな瞳をみひらき、おがむようにして哀願した。この男の残忍、冷酷さは、よく承知している美佐である。無駄とは知りながら、畳の上に手をついて、頭をさげずにはいられない。

大五郎の眼が、美佐から真紀子に移った。

「——真紀子。お前の兄貴が、もうすぐここへやってくるだろう。お前を助けだし、おれの胸板に弾丸をぶちこむためにな。しかし、

おれはまだ死にたくない。気の毒だが、またお前を利用させてもらうよ。ヤクザの兄貴をもったために、お前もずいぶん苦勞するな、フフフ……」

「やめて！もうそんな、そんな恐ろしい喧嘩はやめてください！」

直紀子は、顔をあげてさげんだ。真紀子の眼から見れば、兄の哲夫もこの男たちも、おそろしく愚かで、無法で、血なまぐさい暴力に狂った野獸にしか思えない。

しかし、その血と暴力が、ヤクザ社会の宿命なのだ。

「さあ、泣きごとはそのくらいにして、美佐も真紀子も中庭へでるんだ。そろそろ準備もできただろう」

「ゆるして！」

「うるせえ！こいといったらくるんだ！」

大五郎の声が、凄みをふくんで命令した。

恐怖の予感におびえる美佐と直紀子の片手首をつかみあげ、ぐいと背中にねじると、この部屋から廊下へとひきたてる。

十字架の女

「さあ、二人とも着物をぬげ。——さっさとぬげ。ぬがなければ、こっちでひき剥がしてやるぞ！」

大五郎の非情な命令が、庭土の上に投げだされた美佐と真紀子の頭上にとぶ。

二人の女の周囲には、ズル松とチビ啓、それに野呂玄の足が、ぐるりと取り巻いている。そして、男たちのすぐ背後には、不気味な十字の柱が二本、よっきりと立っているのだ。だが美佐も真紀子も、この柱がなんのために庭の中央に立っているのか、まだ気づか

ない。

「あ、あなた、ゆるして！乱暴はもうやめて！」

美佐は大五郎の足もとにとりすがり、髪を乱して哀願する。

「ぎゃあぎゃあ騒ぐな！手間ばかりとらせやがる。よし、おい、お前たち、かまわねえから、二人の着物を引きはいで、その柱にくくりつける！」

焦れて大五郎が怒鳴った。

「へいッ。でも、真紀子はいいとして、社長の奥さんを……」

ズル松がいった。

「かまわねえと言ってるんだ。早くやれ。こうしているうちにも、哲夫がやってくるかも知れねえんだぞ！」

「へいッ！」

三人の男の手が、ひっ掴むようにして、美佐と真紀子の着物にかかる。二人とも、昨夜からありあわせの寝巻きを与えられていた。ちょうど、料理する前に鶏の毛をむしるときの光景に似ていた。

白々とした二人のパンティ一枚の裸像が、黒く湿った庭土の上に、改めて投げだされた。

「あれえッ！」

二人の女は、本能的に背をまるめ、両手で胸をおさえて前こごみになると、男たちの凝視から、羞恥をおおう。

だが、その可憐な動作も、羽毛をむしりとられた二羽の鶏であってみれば、はかないものであった。

必死に伏してうずくまる美佐の弱腰をめがけて、大五郎は庭下駄の足をあげて思いきり蹴りつけたのだ。

「ああ！……」

美佐は、もろくも前につんのめり、赤ン坊がころんだときのよう
に、ぶざまに地面に這いつくばった。膝と胸が黒土にまみれた。二
本の下駄の齒のあとが、くっきりと黒い土をつけて残っているのが
痛々しかった。

無情に蹴倒された痛みと恐怖に、美佐はのめったまま抵抗力を失
った。

(社長の奥さんの肌を、こんなまっぴるまの太陽の下で見るのはは
じめてだが、なるほどきれいなからだをしてやがる!……)

ズル松が感嘆して、一瞬見惚れた。

「馬鹿野郎、なにをボンヤリ見ていやがるンだ! かまわねえから
柱にはりつける!」

大五郎が怒鳴った。

「へえいッ!」

のめって身もだえている美佐のからだを、三人の男が、引き起こ
して十字架の上におしあげるのだ。

「よいしょ、重たいな」

チビ啓がうなった。

「足を二本ともその足台にのせて、足首をまずくくりつけるんだ」
ズル松が指図した。

「よし、こうかい。上のほうをしっかりとおさえておいてくれよ」
と野呂玄。三人ともパンティ一枚の美佐を前にして、まぶしいよ
うな眼である。用意した縄で、まず美佐の両足首をそろえて、ぎっ
ちりと柱に縛りつける。

足首の高さは、地上一尺五寸ばかりの高さである。だから、昔の
ハリツケ台のように、見上げるほどの十字架ではない。それだけに

縛りつけるのにハシゴも台もいらぬが、十字架におしつけられた
美佐が、必死になってあばれはじめたので、男三人も全力をあげね
ばならなかった。

「やめて、やめて! あなた、こんなひどいことをするのは、やめ
てください!」

美佐は顔をゆがめてさげんだ。

両腕がむンずとつかまれ、大きく左右に拡げられた。ズル松と野
呂玄が、のびあがるようにして、その手首を柱に縛りつけるのだ。

「あなた、もう、もうゆるして、ゆるしてください!」

美佐は、咽喉をふりしぼって泣いた。

ゆたかな胸が日光の直射を浴びて光り、ヒクヒクとのけぞった。

足首が固定し、両手首もしっかり水平にくくりつけられると、美佐
のからだは、文字どおり十字になった。

「腹にも縄をかける。手ぬるい。もっと力をいれて、ギリギリ縛り
つけるンだ!」

大五郎がそばから叱咤した。

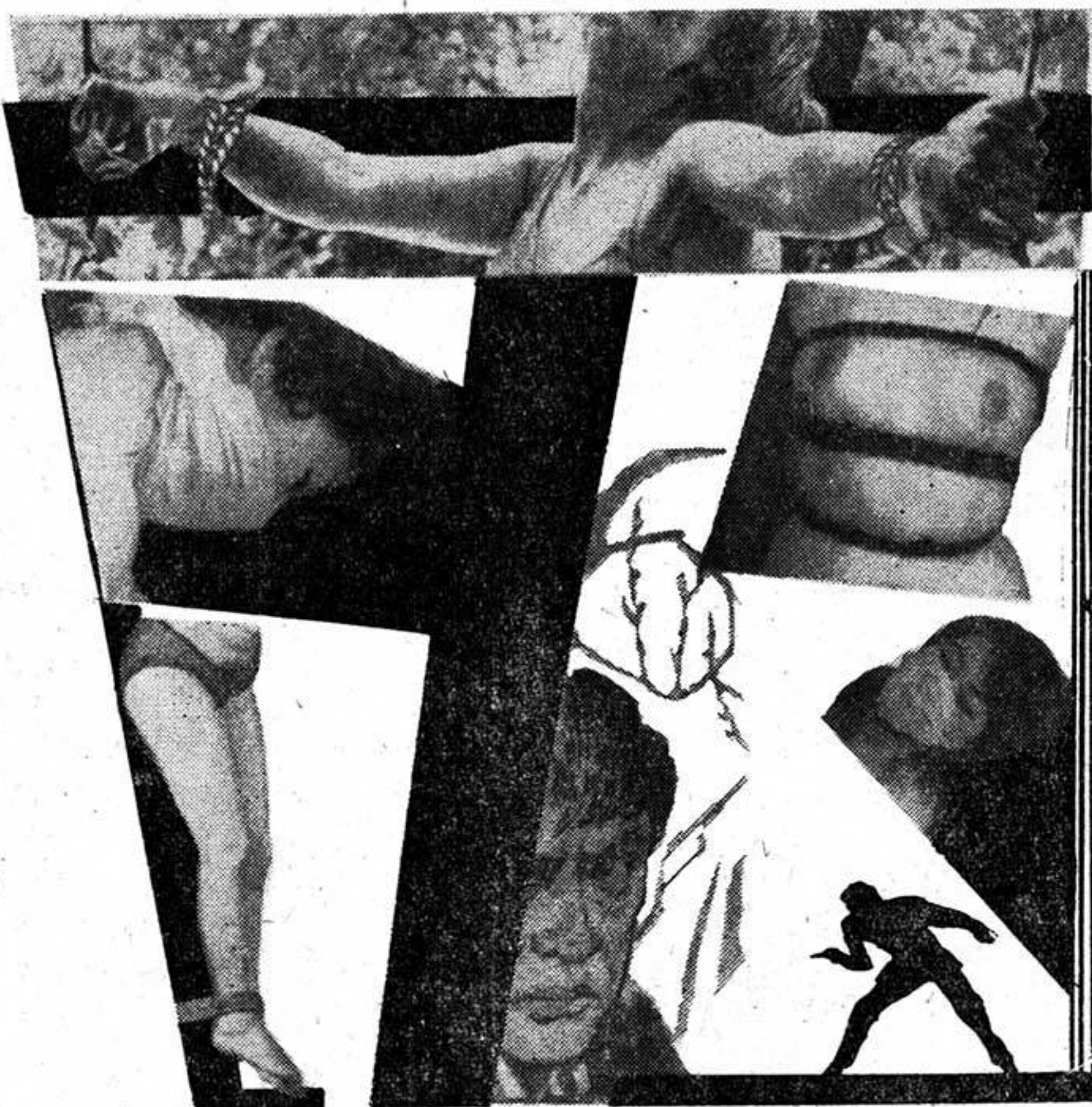
哲夫の言葉に従った美佐が憎いのだ。哲夫の面影をひめている美
佐の胸の内を、縛りあげ、責めつけることで浄化するつもりである。
くねくねともだえる美体に、固い縄がギリギリと噛まされた。は
じめは遠慮がちだった男たちの手が次第に勢いづき、熱っぽさを加
えて、容赦ない力で縄をしめあげる。

美佐の背中には、びったりと五寸角の柱におしつけられているのだ。
その柱に縄をまわして結びつけ、ぐるぐると縛りつける。すると、
縄はおもしろいほど、喰いこんでいくのだ。

「ああッ、むむむ……」

歯を噛んでのけぞる美佐。まるで、自分のからだに、胸からまっぶたつにちぎれてしまいそうな苦しみであった。
「よし、その調子だ。ついでに胸にも縄をかけてやれ。身うごきで

胸も腹も、
あった。



きねえようにしてやるんだ。とにかく、おれを裏切った憎い女だからな。それだけの罰は加えてやらねばならんのだ」

大五郎の眼がギラギラと光り、次々に残忍な命令を発していく。

「へいッ」

男たちは、もうこの仕事に憑かれたような、うわずった声の返事をして、荒々しい縄を、きりッ、きりッと巻きつける。

白いゆたかな胸の双丘の裾に、固い縄目が喰いこむと、そのふくらみは、上下からしほりあげられる形になって、プックリと異常な大きさに盛りあがる。

「ああッ……」

もう美佐は、うごけなかった。首をふっても胸をふるわせても腕をゆすつても、からだは柱に、ひしと密着してうごかない。無理にうごかせば、縄目がなおさらに喰いこんで苦しみを呼ぶだけである。

「ああ、ああああ……」

美佐は白い咽喉だけをのけぞらせて、吠えるように泣いた。

なんという、みじめな姿であろう。両手はぴいんとのばして水平に、足はそろえてまっすぐに、そして、幾重もの縄に縛りつけられた、哀れな十字架台の美女で

生きてゐる楯

つぎは、真紀子の番だった。

十字架は二本並んでいる。一本には、いま美佐がむぎんな姿にくくりつけられ、残る一本が自分のためであることをさすると、真紀子はあまりのおどましさに気を失いかけた。膝がふるえた。肩の力も、腰の力もぬけて、真紀子はぐったりとうつ伏せになったままである。

そのからだを、ズル松がうしろから引き起こした。

「さあ、立ちな。こんどはお前の番だよ」

「いや、いやッ！」

その声は、咽喉のなかでかすれた。

ズル松、チビ啓、野呂玄の三人が、手どり足どりして真紀子をかつきあげる。

真紀子の背骨に、固い、つめたい、ザラザラした柱の触感がおしつけられた。

「ひいッ！」

という悲鳴もかすれて口の中で消える。

「こいつはもう、ふるえあがってクラゲみたいになっているから、胸からまず縛りつけよう」

力をぬけばくずれ落ちる真紀子に手をやいて、ズル松が提案した。「よし来た」

チビ啓が、びゅうッと縄をしごいた。柱のうしろにまわって、背後から真紀子の胸に縄をまわす。二巻き、三巻き、芋俵でもくるような手さばきで、縄をしめあげる。縄に力がいいるたびに、真紀

子の胸もとが、クウツクウツときしるのだ。

さらに両腕が横にもちあげられ、左右の手首がそれぞれ水平にくくりつけられると、真紀子のからだは、腰と膝に力がいっていたために、ちょうど十字架を背負ったキリスト像のように、だらりと垂れさがった。

両足首も、きちんと揃えて、両膝ものばしておさえられ、ぐるぐると縄で巻かれる。両方の脚がびたりと密着した。ハリツケは完了し、もう完全に抵抗のできない哀れな姿だった。

真紀子の心は錯乱し、恐怖すら失せて、白痴のようにうつろな瞳になっていた。ただ、無情に加えられる苦痛だけには、いやもおう

〔編集だより〕

いるようです。

○最近、本誌の寄稿家や執筆者の方或は読者の方から、原稿を削りすぎているのではないかと、他の週刊誌や月刊雑誌では、もっと突込んで書いた個所がある」と実例を挙げての御意見や、或は口絵や写真についての要望が相当参っておりまふ。これと呼応するように、すでに新聞紙上でもごらんの通り、「全大阪不良文化財から青少年を守る会」(会長辻元八重さん(大阪府婦人団体連絡協議会会長))など不良週刊誌の追放撲滅運動から漸次月刊雑誌に及ぼし(単行本やテレビ映画には及んでいないようだ)非常な効果を挙げて

○勿論、本誌などは青少年を対象とした雑誌でないのはいわずとされたことですが、そうかといつて、青少年の眼に絶対に触れさせないということは、現状に於ては中々困難なことなので(売店や書店の店頭に一冊も陳列されないのならよいが)やはり、その内容に或る程度のセーヴを加える必要があるものと思われまふ。

○青少年の眼に絶対に触れないというのが理想的ですが(屑籠運動や焼却運動は、その点効果的とは思いますが)今の段階では、やはり悪影響を及ぼすかもしれないと思われる内容のもの

もなく、かわいた悲鳴をあげ、縄のあいだから身をのけぞらせ、そしてうめいた。

「よし、それでいい。それから、念のために猿ぐつわを噛ませておけ」

大五郎が命令を加えた。

美佐にも真紀子にも、もう外へきこえるほどの声も悲鳴もあがる力はなかったが、それでも手拭の猿ぐつわが噛まされた。

明るい日光を浴びて、虫のように声もなくうごめく、十字架の二人の美女の姿は、妖しい白昼夢のなかの一光景に似ていた。

この残酷な作業を終えた三人の男は、さすがに額にういた汗を拭く。汗を拭きながら、自分たちが協力して、いま仕上げたばかりのむごたらしくも美しい芸術品を、そつと見上げるのだ。まぶしいような眼になるのは、さすがの悪党どもも、この明るい太陽の下では、自たちの所業がうしろめたく感じたせいであろうか。

しかし、大五郎だけは、神も太陽もおそれぬ不敵の面がまえであった。

「いいか。よくきけ。——やがて、哲夫がくる。奴のハジキの腕前は、お前たちも知っているとおりに、まず一流だ。用心しなくちゃいけねえ。そこで俺達は、奴のハジキを避けるために、この十字架の人柱のうしろにかくれてたたかう。卑怯なようだが、喰うか喰われるかの場合に、卑怯もクソもねえ。早く相手を倒した方が勝ちだ。いくら哲夫の奴が狂犬みてえになっても、この十字架に縛りつけた女二人を見れば、ギョツとして立ちすくむ。ハジキだって射てやしねえ。その隙を狙って、こっちからいっせいに奴を倒すんだ。——みんな忘れねえように、ハジキには消音装置をつけておけ。こ

は没にするか又は大幅に削除訂正若しくは書き直しをするのがマニヤ諸氏の淡い希望の灯を、淡いながらも、出来るだけ永く続けさせる手段だと思ひます。

○数年前発行の本誌の古書価値が定価の数倍にも謳われてい

に「沼正三だより」を締切間際に御送付頂きましたが、誌面の都合で、「沼だより」のみを本号に掲載、他は来月号廻しとなりましたので、悪しからず御諒承願います。

○秋の臨時増刊号としてお待ちをいたしました『SADO特集号第三集』は、来る十月上旬発売の予定でありますので、何卒御期待下さい。搭婆十郎氏の傑作「地獄の無法地帯」外、口絵写真なども、今迄にない充実ぶり目下編集集中でありますのできつと皆様の喝采をなくするだろうと自信を持っております。

○沼正三氏の「手帖雑報欄」並

(三四・九・十)

のあたり、いくら家数がすくねえといっても、ハジキの音は遠くまでひびくし、たまには塀の外を通る人間がいるからな。できるだけ注意をするんだ。あんな死にぞこないを殺したくらいで、おれたちが警察にあげられるなんてのは、バカげた話だからな……」

斗志にあふれた顔で、大五郎が訓示した。

三人は頬の筋肉をひきつらせてうなずく。

大五郎の言葉が、十字柱上の美佐と真紀子の耳にもとどき、二人の女は戦慄の瞳を大きくみひらき、猿ぐつわのなかで、なにごとかを必死にうめいた。しかし、大五郎は傲然とせせら笑い、哲夫を迎えうつための、生きた二人の楯をピシャピシャと叩き、さらに声をあげて哄笑するのであった。

(未完)

沼正三だより

一（富岡陽夫氏に）八月号読者通信で懐しいお名前を発見、また拙作への好意ある御批評に接し、嬉しく感謝しました。「赤い館」の内容をお教え下さって有り難う。望蜀の言を洩らせば、短いもの故、貴誌全文に接したかったのですが……。以前にも申したとおり私は貴下のあげられた三冊とも読んでおりません。是非一読させて戴きたく、編集部を通じて授受方法をおはかり下さい。責任をもって保管返却します（勿論お譲り戴けるなら勿怪の幸ですが）。ただ九月号の休載宣言の様な事情があり、早急に成果を発表できないことは了承願いたいです。去年でしたら訳文を作る余暇もあったのですが……。なお私は技術とは無関係の職業に就いていますので、ヤプーについての御高見をもっと詳しく伺えれば幸甚です。

二（麻生保氏に）十月号で久々の登場、「愛の喪章」「足袋」両作とも気づいていなかったので、紹介を感謝しました。「愛の喪章」早速一読、これを先に読んでいたら、手帖新第二章の題辞はこちらから選んだのだに！と思いました。スサノオノミコトへの金髪美人の連想は全く暗合です。（そういえば、雑報三〇六でも触れましたが、「日本誕生」で原節子の扮する天照大神は金髪美人という設定だそうで、ヤプーとの暗合に驚いたことでした。）「あるロシア踊子の回想」の訳出は当分ひまがありません。また御希望の人間馬

平場競走の場面はそれほどのものではありません。「ヴィーナスの持つ嗜虐性」について。これはギリシヤのアフロディテにも、ロマンイズされたヴィーナスにもないことです（人間を獣畜に変えることはあるが、それは女神だから当然です）。マルス打擲の神話は、私の知る限りありません。ただ両神姦通の神話から、女性尊重的なロココ画家がそういう場面を描いたのです。「キューピッドいじめのヴィーナス」という画題も豊富で、フックスなどこういう絵を沢山蒐集していますが、女性に本来潜む冷酷性を具象させたものと見れば十分でしょう。いずれ余暇を得れば、更に詳細に論じたいと考えます。

三（芳野眉美氏に）八月号読者通信に貴名を見出しました。デビュー作「孤独なファンタジー」は当時の私を魅了した一篇でした。あなたの傾向は検閲関係で書き難くなっているとは思いますが、その困難を克服して、名作を発表して下さい。

四（土路草一氏に）完結篇が早すぎて残念でした。スクラップして一冊に仮製本し、繰り返し愛誦していますが、構想的には未完成の印象が強いのは遺憾です。然し、おしまいに Water Closet にまで踏み切って下さったのを私なりに喜んでいきます。紅唇による小分けという着想は殊に面白い。ただ、沈んでいる物の小分けをどうするか疑問なので、路子がミキサ勤務を命ぜられたことにし口腔内で咀嚼し——嚥下も一度に吐き出すことも禁ぜられて——沢山の小皿に少しずつ吐き入れてゆく、という場面を私流に加えています（……）。（こういう読み方は、読者それぞれに違うことでしょうけれど）。サド派読者の他にも、貴作の続篇、新篇を待望しているもののあることを忘れないで下さい。



二百十日も無事にすみ、朝夕涼しい風が吹くようになりました。みなさんお変わり御座いませんか。先日は「緊縛写真と緊縛画集」を早速お送り下さいまして有難う御座います。早速拝見しましたところ、どれもみなすばらしいものばかりで、毎日くりかえしながめてはたのしんでおります。この次は田中芳代嬢の緊縛写真もおねがい致します。又本誌も今まで、ずっと引続き永く愛読しておりますが従来読んだ中では、なんと一「魔教圏NO・8」が私をひきつけました。いつも本を開いて先

ず最初によむ位でしたが、中絶のような形で完結となりましたのはなんだか物足りない感じが致します。今でも、その頃の本をとり出しては何遍もくりかえし読んでおります。土路草一先生に是非続篇をお願いして下さい。なお、出来なれば、「魔教圏」及び「潰滅の前夜」をまとめて一冊にして臨時増刊号として発売していただければよいと思います。以上勝手なことばかり書きましてまことにすみません。どうぞ悪しからず。ではさよなら。(京都 永原敏夫)

残暑厳しき折柄、御一同様益々御清昌の段お喜び申し上げます。さて、十月号に一愛読者氏がお書きになったお便りを読み、矢も楯もたまらず、サポーターパンツを買に行きました。近所の運動具店にはありませんでしたので、注文して置きました。午後、運動具店でビニールの袋に入ったサポーターパンツを入手した時は、胸がワクワクしてきました。早速家に帰って袋からサポーターパンツを出した時は、思わずアツと声をあげるところでした。一愛読者氏が云われる通り、大へん寸法の小さいもので、とても胴囲り八十糎

の私にはけそうにない位にゴムがビッシリと縦横に織り込まれて居ります。すぐ洋服を脱ぎ、素肌にそれをはいてみました。が、種など比べものにならないほど、きつい緊縛力なので、びっくりしてしまいました。私はサポーターパンツを脱ぐ気がしませんでした。入浴の時以外は夜寝る時も、ずっとそれをはいて緊縛力の強さを楽しんでおります。サポーターパンツを教えて下さった一愛読者氏に厚く御礼申し上げます。尚、外に変わったサポーターをお持ちの方は誌上で御紹介下さるようお願いします。乱筆おゆるし下さい。(大阪 川本生)

◎写真特写引受◎

特別に変った着衣、ポーズ、アイデア等によつて写真の特写を御希望の方は写真部に於てお引受致します。詳細なる趣向を御連絡下されば費用其の他に於いてお返事いたします。(返信料同封下さい)

私は貴誌の古くからの愛読者ですが、貴誌が困難なる状況下に於て毎月確実に発行されている御努力には厚く敬意を表しております。本日、偶然書店にて雑誌を見ていたところ、週刊男性なる週刊誌に、四頁に亘つて相当悪意に満ちた記事を発見し驚き且つ貴誌愛読者の一人として、この厚顔な書きぶりには憤りをさえ感じさせら

れました。不良週刊誌としてヤリ玉に挙つてゐる「週刊男性」が殊更何故このような記事を掲載したか、編集者の意図はわかりませんが、私たちとしては、その醜い心の裡がはつきりとわかるような気がします。あんな記事に反駁するなど、かえつて大人げないし、それに、貴重な貴誌の誌面がむしろ勿体ないくらいです。私としては、そんなことを貴誌に望んでゐるわけではありませんが、私の調べたところによりますと「週刊男性」の編集人の牛丸敏弥という人は、以前発行されていた「愛情生活」という雑誌の、編集人だった人です。「愛情生活」という雑誌はどんな雑誌であったか、本誌の読者なら、一度は書店でなりと目を通された方多いと思います。あの「愛情生活」を編集していた人が、私はその便乗主義に徹した醜い見下げ果てた心を憎むものです。貴誌におかれては、こんな記事にまどわされることなく黙殺の上、更に

優秀なる雑誌として邁進されるよう、愛読者の一人としてお願い致します。(東京 T・S生)

△編集部からV 右に類したお便り多数頂きました。掲載外の分につきましても厚く御礼申し上げます。

名古屋の酒井二三夫様、山本様十月号の読者通信欄で拝読致しました。小生三十一歳になるマゾヒストで、特に酒井様とは何から何まで全く同一といつてよい程の嗜好性を持っているものです。酒井様のアイデアは、どれをとつても、小生の夢そのままだです。日常は黒パンティに白ズロースを着用し、スリーマーも欠かさずに用いています。ズボン下にも女性用の長ズロース(七分)を使っています。すが、時には白パンティ、黒ズロースの外にも、メンスバンドやクロステイ、トリコットやナイロンの各色のパンティ、運動用のブルマースやショーツを穿くこともあります。サイズは大人用よりSサ

イズのものや、十二歳用、十四歳用などのものの方が好きです。サデイズトの女性にめぐりあう機会もないままに、いろいろな空想で僅かに自身を慰めている次第ですが、是非一度両氏とお話し致したいと存じますが如何でしょうか。小生、郡部に住んでおりますので毎日名古屋まで出かけるわけには行きませんが、一応、十月の第二日曜(十二日)の午後五時に名古屋駅の大時計の下でお待ちいたします。目印として、茶色のベレー帽をかむつて、手に白ハンカチを持っていきますから、話しかけて下さい。もし、この日が不成功の場合は、十一月の同じく第二日曜(九日)の五時に同様にお待ちしています。勿論お互いの秘密は固く守り合つて交友を続けて行きたいと存じています。(美柳輪生)

肩車について——男が四つ這いの馬になつて女性の騎手を乗せて走る場面は、映画や舞台、雑誌のグラビアでさえも殆んど見られな

女体

『切腹風景十二態』

(9×13センチ)印画紙焼付
十二枚一組 九百円

モデル

大塚啓子嬢

略号(せふ)

新人モデル嬢新作緊縛姿態集

大手札型(9×13センチ)印画紙焼付

愛川悦子嬢の巻

☆ベッド変型縛り(略号1)
四枚一組 三〇〇円

☆全裸縛り(略号4)
五枚一組 三五〇円

田中芳代嬢の巻

☆全裸強烈縛り(略号2)
四枚一組 三〇〇円

☆セーラー服縛り(略号5)
五枚一組 三五〇円

大塚啓子嬢の巻

☆股間縛り(略号3)
四枚一組 三〇〇円

☆股間しばり(略号6)
四枚一組 三〇〇円

我が「肩車」は時折、散見できる。しかも考へ方によつては「肩車」の方が却つて屈辱的快感を強く味わえるものである。先日、チエコのサーカスをテレビで見たが、我々男性マゾにとつてはサーカスも亦、大きな魅力である。しかもこのチエコのサーカス団の女性達はよくもこれだけ曲技の出来る美人を集められるものだと感心するほどの美貌の持主ばかりである。サーカスでは立体的に曲技が多い。即ち人の上に人が乗る。そして男はいつも下におかれて支え役、女が男を踏み台にして肩の上に立ち或は肩車に跨る。肩車は女性が男の首に跨り、男性が彼女の尻の下に、しかも彼の顔が衰れにも彼女の股倉に挟みつけられるわけである。あの豊満な魅力的な女性の太股が肩越しに眼の前に迫つて男性を圧倒する。四つ這いで女性の馬にされるとは又別の快感がある。女性に乗馬によつて跨がることと馬上豊かに他人を見下すことに喜びを感じることであるが肩車の場合、彼女の尻の下に、股間に男性の首を見下しながら乗り廻すのだから、彼女は乗馬以上の征服の快感を覚えるのではなからうか。我々マゾにとつて彼女が、このような位置で、そのような快感を持つ

のだろうと想像することは、又、たまらぬ屈辱的快感である。テレビで見たチエコのサーカスの中で、空中曲技の際、男女のコンビで次の曲技に移る間、空中ブランコ上で彼女が足首にロープを結んだりして準備する際、男に肩車で跨ったままの処が、かなり長い間映っていた。又、自転車曲技の際、自転車で走る男に美女が肩車に跨る。丁度、その時、男が、やゝハシンドルを切り損ねたか、グツと傾きかけた。その時、彼女の両の太股がグツと男の首を締める。そして男が自転車を立て直して走り続ける。彼女が丁度騎手が馬の横首を軽く叩くように彼の頬を「しっかりせんか」というように叩いた。その素振り、いかにも彼女が男を馬並みに扱っているように見えて素晴らしい一瞬だった。外国では海浜の写真などには、よく水際に戯れる男女が、肩車をして楽しんでる処があるが、私は又、この肩車になる前の情景を想像する。女性の前に男性が背を向けて跪く。女性が先ず左足を男の肩越しにかけ、更に股を開いて右足を大きく上げて、ガッキと男の首に玉に跨る。或は女性が仁王立ちに股を開いて男の前に立ち、男に

彼女の後ろから股の間に首を突込むことを促す。男が彼女の尻の下にかがみ込んで股倉に後ろから首を入れると、彼女がドッカとその首筋に尻を下して跨る。あゝ何んという屈辱的快感だろう。私は或る時、一女性と室内で、この遊戯を試みたのだったが、私は体重五十九キロ、彼女は四十七キロ、持ち上らぬ筈はないのだが、要領が悪いか私は跪き彼女が後ろから私の首に跨り「さあ、立って」といわれて立とうとしたが、重くてなかなか立てない。彼女は面白がって「弱虫ね」といいながら両

股で私の首を締めつけ膝頭でグイグイ抑えつける。哀れにも、私は辛うじて首を突き出したまま、眼を白黒して力みかえる。ようやくにして中腰まで立ち上ってみたが、忽ち、よるめいて折重って倒れ、私の頬は完全に彼女の尻の下に押し潰されてしまった。徹底した被征服感、屈辱の歓喜。肩車については二度と見られぬのかと思うが、第一回シネラマ作「これがシネラマだ」の水上スキーの場面。水上スキーで走る男に美女が肩車に跨る。水上スキーは勿論、不安定でバランスをとり難いので、男の肩

女体緊縛フोटE組

9×13印画紙焼付

- | | | | |
|------|--------|------|-----------|
| ES1 | ヌード緊縛集 | ES6 | あわや寸前 |
| モデル | 佐賀美智子嬢 | モデル | 佐賀美智子嬢 |
| 三枚一組 | 二五〇円 | 二枚一組 | 二〇〇円 |
| ES2 | 全裸悦集 | ES7 | 剥れたズロース |
| モデル | 須川 令子嬢 | モデル | 佐賀美智子嬢 |
| 四枚一組 | 三〇〇円 | 五枚一組 | 三五〇円 |
| ES3 | 羞 | ES8 | 乙女のすべて |
| モデル | 佐賀美智子嬢 | モデル | 花坂 道子嬢 |
| 三枚一組 | 二五〇円 | 七枚一組 | 四五〇円 |
| ES4 | 酒宴の弄者 | ES9 | 女学生の縛り |
| モデル | 佐賀美智子嬢 | モデル | 須川 令子嬢 |
| 二枚一組 | 二〇〇円 | 二枚一組 | 二〇〇円 |
| ES5 | 脱がされる娘 | ES10 | 緊縛のベッドシーン |
| モデル | 須川 令子嬢 | モデル | 佐賀美智子嬢 |
| 五枚一組 | 三五〇円 | 六枚一組 | 四〇〇円 |

の上から落ち相になる度に、彼女の太股が男の首をグイグイ締めつける快感に酔うような男女の表情随分、長時間、肩車の場面が続いた。終りに質問を一つ。馬族保氏著「祭壇に君臨する脚」。山本節太氏著「私のイタ・セクシユリアス、室内乗馬倶楽部」に二頭立即ち男二人が四つ這いになって女性一人が跨る乗馬場面があるが、どういうことなのか、出来れば絵に描いて御説明頂きたいのですが、是非、宜しくおねがいします。

(横浜 姫馬痴人)

山田那津子様、小生一立半のイリガートルを持っていきます。他に、ビニール製折たたみ式のもの(二立入)を三つ持っています。赤や黄色の美しいチャーミングなアメリカ製品です。貴女のお楽しみに役立てたいと思います。送る先お知らせ下さいれば愛用の品一個進呈致します。(東京中央郵便局私書箱第一三二三号 良武満。)

久しく御無沙汰いたしましたが貴誌は毎月入手、引続き愛読しており、益々発展の途上にある事を心から喜んでおります。特異な存在であるだけに一般誌には想像も

及ばぬ困難と障碍があるとはお察し致しますが、一日も早く旧号時代の豪華さに戻って欲しいと願っております。次に最近の小生の要望をお願いいたします。(一)八月号は近來になく小生を楽しませてくれました。特に「羞恥の異」はこの処、待望久しい責めの描写でした。死ぬより辛い羞恥と屈辱に、必死になって哀願しながら悶え苦しむ美女……これこそ責めの醍醐味でなくてはなんでしょう。引き続きこの種の責め場の登場を望んでやみません。(二)魔教園の中絶を大変残念に思います。土路氏の奮起を切望します。(三)毎号「王宮の浣腸室」を最も期待してありますのに隔月掲載は何故ですか。挿画も非常に優れたものであり、豊かな想像力を楽しませてくれます。ただ欲をいうと、浣腸の場面、つまり苦しみ悶える(羞恥と屈辱に)情景が描かれておりませんが、もう少し突込んで書いて頂けませんでしょうか。四口絵、落城後日譚は垂涎ものです。しかし、これとて欲をいえば姫の表情が気品に欠けております。今度は四馬氏の麗筆にお願いして、これの現代版をお願い出来ませんか。たとえば犬の首輪を嵌められた美女が四つ

ん這いに這わされておられ、その周辺に土の入ったミカン箱が置いてあるといった様な構造で……。勿論、責め手が女であれば、より効果的だと思います。(五)限定版「緊縛」を申込んだのも、見出しにある「オシメをした大きな赤ん坊」という活字に魅せられたためであり、つまり小生のように、この種の責めに憧れる読者の多いこともお忘れなくと強調したい故に、他の記事が何百頁あっても、好みのものが一頁もなければ失望し、反対に一頁でもあれば、それで満足するものだという事をお伝えいたします。以上、毎度のことながら勝手なことを申しましたが、賢明な編集陣の理解ある御配慮をお願いいたします。(M・M生)

前略、御免下さいませ。私は女装マニアの一人でございます。三月号の桜井良子さんの体験文は大変、参考になりました。私も時々女装して外出しますが、少し背が高いので外出は夜に限っています。私の知人で同好者のMさんは白昼から自由に女装して外出なさいます。それも家族の方達と一緒にです。から、うらやましくなります。私もMさんぐらいに小柄でしたら堂

○浣腸フオート

大手札型印画紙焼付

四枚一組三〇〇円

モデル 絹川文代 略号(ちせ)

○浣腸責アツプ

大手札型印画紙焼付

四枚一組三〇〇円

モデル 絹川文代 略号(ちあ)

々と昼から女性になつて暮せるのにと思ったりしますが、ハイヒールを履くと相当な大女になつて目立つので困つてしまいます。ですから、夏以外は和服に革草履で出かけることが多いです。私の生活の大半は女装のために費します。女性用の化粧品やホルモン剤から季節毎の衣裳や下着など殆んど普通の女性に劣らぬだけの身廻り品を所持しています。毎朝、出勤前には女性ホルモンを服用し、パンティ、コルセットをつけた上に背広を着ます。こうして、ひたすら女性的な雰囲気と生活に徹することに努めて生活に喜びを求めています。本来は男であるべき私

が女性生活に憧れる気持は、仮装行列や素人芝居の女形の化粧とは本質的に違っていると自覚しています。それは外見的に女性を模倣するものではなく、心理的に肉体的に自ずからを美化することを目的とするのです。自らを美化することは女性化する喜びと合致することから、女装し女らしく歩き女らしく微笑するのです。女装は自らを美化する手段であり、それ自体が目的なのです。美しさを強調したいために自分を女性化するのですから、私には親しい友人は殆んどございませんし、それに会社における同僚の男達の交際であつても好みませんから、なるべく避

美貌汚辱

△鼻責めを中心とした▽

大手札型印画紙焼付

略号(はせ)

三枚一組 二五〇円

モデル 絹川 文代

特高拷問

△破られたズロースから▽

大手札型印画紙焼付

略号(とく)

三枚一組 二五〇円

モデル 絹川 文代

けますし、会社には女性も少くありませんが、女である私には女性は今も必要なのです。とても男性の立場で楽しむことは出来ませんもの。といっても女としての私には全く知人はありません。女としての私は百合子と申します。百合子を知っているのは私（桂一）と百合子の兄妹だけしかありません。百合子は女装した男性ではなくて、未完成な女性の一人なのです。未経験なため他人と交際したがいけないからなのです。百合子からは決して進んで友人を求めません。私の生活の大半は百合子なのです。でも、どうしても百合子に出来ないことがあります。それは高いソプラノで唱うこと、女性の風呂に入ることです。ホルモンで乳房は乙女のように盛り上がりブラジュアをつけないならなりませんし、細長い首筋にはノド仏も目立ちません。整形手術で、もっと女性化することは容易ですけど、私には両親と妹が故郷におり、学歴や収入のある勤めを捨てられない苦しみもあります。将来のことを考えると、心細さと淋しさが身にしみますが現実の自らを美しくという願望が何ものをも克服してしまふのです。私が本誌の愛読者として

いろいろと夢をえがき、喜びを満喫してきましたが次に常々願っていることを述べさせて頂きます。それは本誌のグラビアの一面を利用して行う女装、男装コンクールです。女装マニアの方は、それぞれの女性名で簡単な経歴をつけて美しいポート・レイトを載せ、男装マニアの方は男性としての自画像を載せ、読者によるファン投票でNO・1をきめ、ミス、ミスターの当選者は天然色写真で全身のポート・レイトを掲載できないものでしょうか。若し、この企画が発表されれば、私も是非、コンクールに参加したいと存じます。私のような小心者でも誌上コンクールだったら喜んで協力できると思います。ぜひ私達マニアの夢をかえて下さい。（東京 新井生）

柴崎黎子さんの「王室の浣腸室」二回、興味深く読みました。三回を期待しています。創作と同時に以前、本誌に発表されたような告白記も書かれることを希望します。47号の通信欄の浣腸愛好生、横浜の一読者、菅千代さん、その他、浣腸マニアの方と文通したく思います。浣腸写真の交換及び、浣腸に関する資料を交換したと思いま

す。小生、かなり多数の浣腸写真を持つています。お譲りしても宜しい。10CCの浣腸器、求めていますが、誰かお譲り下さいませんか。50CCの浣腸器と交換しても結構。尚、その他、色々な器具持っています。30CCの浣腸器、欲しい方に差し上げます。（島直樹）

小生目下欧米旅行中であります

新作『血紅使用切腹フォト』分譲

モデル 絹川文代嬢

（大中判印画紙焼付）

第一集 五枚一組 八百円

略号（によ1）

第二集 五枚一組 八百円

略号（によ2）

禪美切腹

大手札型（9×13寸）印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

二枚一組 二五〇円
略号（こせ）

切腹のプレイ

大手札型（9×13寸）印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

三枚一組 三〇〇円
略号（れい）

女性自刃三態

大手札型（9×13寸）印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

三枚一組 三〇〇円
略号（じじん）

豊麗切腹三態

大手札型（9×13寸）印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

三枚一組 三〇〇円
略号（ほう）

が貴社御発行の奇巧に常々旅情のうるおいを与えられております。さて小生本年二十八歳の青年です。二月号の四日市S生様、東京の岩瀬不二夫様。三月号の京都池田勇様、五月号の大阪T・O生様、皆様の御意見拝見しました。小生、身長五尺六寸、体重十七貫五百で自分より年下の男性に憧憬を抱いております。二十五歳以下の男性

的な遅ましい若人より思う存分恥かしめられ苦しませて頂きたいのです。勿論身体に傷をつけられたいりされて人前に出られない様にされては困りますが、その範囲内に於て平常押えて誰にも打明けられない内攻した気持を一掃したいのです。小生は肉体的苦痛よりむしろ精神的屈辱を望みます。自分より年下の暴君に身も心も屈してその足下にひざまずいて忠誠を誓う様子など、写真や絵に表しても面白くも思いません。このような小生ですが、相手になる人としては発刺たる健康な身体の主主でなければ小生の性向に合いません。弱々しい女々しい人は小生の対象ではありません。又全然知的な感じの伴なわない人にも余り気が向きません。本当に信頼し、心と心が触れあつたところでS・Mプレイも満喫出来ると思います。誰か僕の絶対の王子様はおられませんか？僕は早く自分のすべてを捧げる事が出来る全権を有する王子様の出現を待っております。

(在アメリカ H・T生)

○ K K読者の中には殆ど無いと思われる脱腸帯マニヤです。杉俊夫様、森太一様以外、脱腸帯につい

て書かれたものは殆どありませんが、私はどういうものか、脱腸帯以外は殆ど興味がありません。新聞雑誌の脱腸帯の広告、銭湯などで見かける脱腸帯をした子等を異常な興味をもって眺めております。高見順著「故旧忘れ得べき」の中の主人公の小学時代の脱腸の悩みが、非常にうまく現実味をもって書かれています。運動会の日に、俵かつぎに出なければならなかった主人公が、便所の中ですでに出ている脱腸をおさめるところ、俵を担いで転倒して脱腸を打って気絶する所、それ以後、公然となつた脱腸の悩み、経験した者でないといふ分りませんが、全くりアルに描かれていて何度も読みかえしました。昨年の「京都新聞」の家庭相談室に投書されていました一文問「女子高校生、ヘルニアで悩んでいます。脱腸帯をしていました。が、中学校の時にとり、現在はしていませんが、その跡がゆくてかきますので、ただれた様になっていきます。このまま放っておいてもお産の時に差支えないでしようか」という相談が投書されていたが、これ等は色々な想像がでると思います。答は例によって手術せよというだけでしたが、私

花坂道子緊縛フोट集 大中判印画紙焼付

○全裸緊縛 略号(はな1) 八枚一組 八〇〇円

○ヌード縛 略号(はな3) 二枚一組 三〇〇円

○股間縛集 略号(はな2) 八枚一組 八〇〇円

○股間緊縛 略号(はな4) 二枚一組 三〇〇円

等から見れば脱腸の人がもつと脱腸帯を使用すれば良いと思います。私は脱腸帯で根治したのですからでも、脱腸帯は苦痛もあり、又、人に見られると恥しい等で、あまり使われませんが、この投書の人には中学までしていたとは全く忍耐力があつたのだらうと思います。いつぞや森太一氏の投書の様に脱腸帯をする事が特殊な体に生れた少年の特権であり、友人達からうらやましがられる様だったら、という様な個所がありました。脱腸帯に興味を持つ人が全然ない事はありません。私の友人にも、非常に(少年時代から)脱腸帯に興味を持っていた人がいて、よく私の使用している脱腸帯を貸して呉れと云われ、よく貸してやった事が有ります。現在では色々な型の脱腸帯を集めコレクションを楽しんでいる様です。私ももう一度脱腸帯をして銭湯へ行ったり、水泳に行ったりしてみたいと思います。が、公衆の面前で脱腸帯をする勇氣もなく、今さら脱腸時代がなつかしく思い出されます。森太一様杉俊夫様、どうぞ又脱腸帯に関する記事をお願いします。

(野原美喜夫)

○ 鞍良人様、この間は失礼を返り

絹川文代緊縛姿態集 大手札印画紙焼付

○全裸緊縛集 略号(きぬ) 三枚一組 二五〇円

○全裸高手小手略号(きた) 三枚一組 二五〇円

○股間縛三態 略号(きこ) 三枚一組 二五〇円

○緊縛全裸立姿略号(きり) 三枚一組 二五〇円

写真 三態

(ハリツケ)

三態

略号(はり)

大判印画紙焼付 三枚一組 四〇〇円
モデル 大塚啓子

みませずお便りを差上げました
ぶしつけをどうかお許し下さいま
せ。私事、世にも得難きマゾ男性
の対象を得て毎週、悦虐のプレイ
を行っておりませんが、この間の土
曜日の午後、この男性相手にレス
リングを行いましたので、その様
子を急にお知らせいたして見たく
なりました。三隅千恵子様や長瀬
昭子様等の様に同性を相手にして
これを征服しても、さも誇らしそ
うに誌上に御発表になるのですも
の歯がゆくて仕様がありませんわ
何故、もっと勇敢に振舞って男性
の上に君臨なさろうとしないので
しょうか。私の場合、いくらマゾ
ヒストとはいふながら男性ですか
ら屈伏させた時のあの快よい気持
とても口ではいふあらわせないも
のですわ。ですから私は三隅千恵
子様や長瀬様に挑戦するなどとい
う気持は毛頭ございませんが、そ
のかわりにこの私の勇敢な男性悦
虐の体験を堂々と誌上に発表し名
実共に女王として君臨したいと存
じますから三隅様、長瀬様に、ど

うかよろしくお伝え下さいませ。
勿論、レフリーは必要といたしま
せんが、ルールは十分間フオール
して、まだ起き上れなかったら勝
者は敗者を思うまゝに責めるとい
う特権を設けておきます。そして
徹底的にノバしたら、そこで初め
て勝負が決ります。私はブラジャ
ーにパンティ、ハイヒール、男性
は長ズボンに上半身裸体で、いよ
いよ試合開始です。打つ蹴るは禁
止、その他は投げる押え込む絞め
る、何をしても自由です。先ず立
技では最初に、がっとならば腕を
やがて力に於て、はるかに優れて
おります私は、相手の首に腕を巻
きつけ、立ったままグイグイ絞め
上げます。相手が弱って腰が浮い
た処を、すかさず先ず腰車一本、
どんと投げつけ、起き上った処を
腕をとらえてハンマー投げで投げ
つけ、上から押え込んで寝技にう
つります。そして素早く相手の頭
の方に廻り込んで首を太股の間に
はさみ込みヘッドロックに移りま
す。両足に力を入れてグイグイ咽

喉を締め上げて痛めつけます。か
ろうじて私の両足をふりほどいて
立ち上った相手は、やゝグロッキ
ーです。そこをすかさず背負い投
げの大業で一本、ドン！フラフ
ラと立ち上った処を、ハイヒール
を穿いた足を下腹に当てゝの巴投
！男の体は宙に一回転して私の体
をこえ向うヘズデンとひっくり
かえります。素早く立上った私は
グロッキーになった相手を体固め
に押え込みます。一分、二分、三
分、相手は跳ね返えそうと懸命に
もがきますが、私は上から、しっ
かりと押え込んで動かさせません。
次第に抵抗は弱まり十分位たつと
とうとう動かなくなってしまうま
した。でも完全にノビタわけでは
ありません。まだ少し手足をばた
つかせていますが、もう起き上る

気力がなくなつた様です。意気揚
々と立上った私は心持ち両足を開
いて、足許にノビて横たわってい
る男の両腕をシツカと踏んまえて
両手を腰にあてがいながらジツと
しばらく見下します。男は私に両
腕を踏んづけられてるので起き
上ることも出来ずに足をバタつか
せてもがいています。いよいよ最
後に私の大好きな奥の手でこのか
弱き男性に止めをさすのです。ハ
アハアと荒い息使いに波打ってい
る男の胸に悠々と馬乗りに跨った
私は、両方の膝頭で男の両肩をふ
んづけて完全に屈伏せしめてしま
いました。も早や、こうなつては
跳ねかえすことはもとより一寸で
も動くことは出来ません。こうな
りますと私の思うまゝです。私は
少しづつ前の方ににじり上って喉

甲斐に参案

「涙のダイヤモンド」

略号

(なみ)

○胃の洗滌

○ヒマシ油責

大判印画紙焼付 二枚一組 三百円

甲斐に参案

『涙のダイヤモンド』

略号

(かん)

○申し責

○苦悶のコルセット

○浣腸責

大判印画紙焼付 三枚一組 四百円

咽の所に跨ると両股で男の両ほゝを挟みこみ顔を動かぬようにすると上から鼻をつまんだり両股に力をいれてグイグイしめ上げます。男が、やっと顔だけを私の両股の間からのぞかせて「アッアッアッ」と苦しむところを上からじつと見下している時の気持！ほんとうに得も云われない境地にうつとりしながら、この姿勢で一時間でも二時間でもいたい気持になり、私の胸は次第に高鳴るのを覚えていきます。こうして苦しもうにもがく男の顔を見下しながら心ゆくまでゆっくり楽しみます。延々数時間のプレイに、か弱き男性は完全に私の足下に長々とノビてしまったのです。私は征服の喜びに、しばらくは我を忘れて、うつとりとしていましたが、やっと我に振り返いでノビた男を介抱して息を吹き返らせ、椅子に腰を下した私の足下にひざまずかせ、私の家来になつて絶対服従することを誓わせ、そのしるしとして私の両足を押しただかせ、代る代る足なめさせてこの試合を終了しました。それから私は二十五歳、身長五尺四寸、体重十六貫ありますから御参考のため申しそえておきます。職業はこの前お便りした通り、容姿は、

やゝ肥り気味かもしれませんが、醜い方ではなく、まあまあ普通の方でしょう。大変失礼なことばかり書きましてお許し下さいませ。では又。かしこ (M・A)

○ 十月号と「緊縛」受け取りました。口絵は相変らず見事な出来ばえです。九月号の緊縛写真の口絵「はずれた脇息」もよかったが、本号のも素晴らしい。九月号では、茶色(?)の縄が白い肌に喰い込むばかりの緊縛感をあらわしている傑作です。この縛り方には全く感服しました。それにひきかえ、本月号は緊縛感の方では、もう一つ足りないようですが優美典雅なポーズがなんともいえません。最近出場のモデル嬢は、いずれも容貌姿態ともすぐれています。特に、この絹川文代嬢は、ポーズのとおり方という、伸々とした肢体といふ、その近代的な美貌といふ、最上の人ということが出来るでしょう。只、一部の人が嘗て云われことですが、ポーカーフェイスというか、何か無表情なところをキャッチした場面も時折ありますので、このモデルは本格的に縛り上げて本当に苦痛の出た表情を掴むか、又は一度泣き出したとこ

ニューモデル未発表緊縛フォト集

ヌード初縛り

大名刺 三枚一組 二〇〇円
ニュー・モデル 平野笑子
略号 (みい)

全裸股間縛

大名刺 五枚一組 三〇〇円
ニュー・モデル 岩井知子

観念の座

大名刺 三枚一組 二〇〇円
ニュー・モデル 平野笑子
略号 (みほ)

開股縛くらべ

大名刺 五枚一組 三〇〇円
ニュー・モデル 絹川文代
略号 (みと)

ヌード初縛

大名刺 五枚一組 三〇〇円
ニュー・モデル 田原美佐子
略号 (みろ)

全裸後手くらべ

大名刺 三枚一組 二〇〇円
ニュー・モデル 平野笑子
略号 (みに)

全裸股間縛

大名刺 五枚一組 三〇〇円
ニュー・モデル 絹川文代
略号 (みへ)

椅子開股縛

大名刺 三枚一組 二〇〇円
ニュー・モデル 絹川文代
略号 (みち)

ろを撮ってみては如何ですか。十月号の口絵の「真紅のシユミーズ」と「やんちゃな妖女」はともに第一級の作品です。後者の第一頁の下側の写真、眼がいきっています。この写真なら外国へ出しても決して恥しくないでしょう。下手に演出したり、泥くさいストーリーをつけたりしないで、このように純なバックで、美しい緊縛ポーズを見せてくれるほうが、いくら楽しいかしれない。四馬、滝の口絵はベテランだけあってソツがありません。楽しく毎号眺めることができます。北原の口絵は、もう一息がんばってほしい。何か病後の弱々しさといったものを感じさせるもろさと、筆の省略が見立つよ

うです。「緊縛」を拝見し、本号の近藤一氏の批評を面白く拝見、大いに同感です。私の好きな絹川文代嬢が縦横に活躍しているので、気に入りました。近藤氏と同じく「女囚第十四号」美貌の女囚の哀れさがよくにじみ出ていると思います。表紙の腰巻姿の同嬢もいゝですね。たしかに、同じモデルを酷使することは、その寿命を縮めることかもしれません。しかし、優秀なモデルなれば、一人のモデルで特集号一冊を独占してみても

如何でしょうか。数多くのモデルで読者にサービスしようという気持はよくわかりますが、私の希望としては本誌はマニヤの一つのバブルとして、用紙印刷とも厳選して高価になっても、長期保存に耐えるようにしてほしい。価格とえば、週刊男性の九月三日号に奇巧の定価が高いつか書いてあったが、私の友人も、このインキ週刊誌にあることないことを、でっ上げ記事で書かれて憤慨していることをきいたので、私は前か

らこの週刊誌のデタラメをよく知っていました。全く怪しからんとです。思いついたまゝ。

(大阪 龍田生)

○

緊縛フォト新作発表		大手札型印画紙 焼付 各組三枚一組 二五〇円	
聖壇の裸女	略号(けい)	絹川文代	開股三番勝負 (その一)
カーテンの翳	略号(けろ)	大塚啓子	開股三番勝負 (その二)
艶姿色模様	略号(けは)	絹川文代	開股三番勝負 (その三)
浴場の欲情	略号(けに)	大塚啓子	開股三番勝負 (その四)
いけにえ	略号(けほ)	絹川文代	開股三番勝負 (その五)
のぞき見	略号(けへ)	絹川文代	開股三番勝負 (その六)

残暑尙厳しき折柄、貴社益々御繁栄の事とお喜び申し上げます。小生古くからの貴誌愛読者にて、日本に於ける特異な文獻誌として貴重な存在であり、殊にマゾ派にとって、又とないものである事を心から感謝致しております。沼正三氏の学究肌の論文、「ある夢想家の手帖」「家畜人ヤプー」馬場好男氏の「マゾヒズム百景」姫島痴人氏、鞍良人氏、とやま・かづひと氏等の軽い読物、乗杉貴代子氏の告白記等、たまらない魅力です。小生も馬化狂的内因子を持つていかに、特に若く美しい女性の乗馬姿には、ぐっとくるものがあります。又、最近の邦画にも、ちよくちよく、マゾ的のシーンが見られ(男性マゾの)嬉しく感じます。大映の「泥濘」の一シーン、新東宝の「暴力娘」の中のシーン、東映の大川恵子が「姫君一刀流」で男装で白馬を駆るシーン。新東宝の高倉みゆき主演の物には、乗馬シーンが多く、又、新東宝の宇治みさ子主演の女剣戟物。最近では

【G】組 緊縛フォト

判紙	一枚一組	一五〇円
中画付	五枚一組	六〇〇円
大印	十枚十組	一〇〇〇円

G1	鉄鎖と柔肌	(高瀬 忍)
G2	股間縛り正面	(高瀬 忍)
G3	海老晒し	(萩千恵子)
G4	羞紅の椅子	(菅登紀子)
G5	量感の帯	(伊吹真佐子)
G6	アイデア	(萩千恵子)
G7	叫喚の森	(伊吹真佐子)
G8	全裸目隠し	(村田那美子)
G9	優すがた	(花坂道子)
G10	開股一番	(萩千恵子)

「女俠客陣大暴れ」にて颯爽たる所を見せ、特に賭場のイカサマを見破って、かゝってくるやくざの一人をかわして倒れた処を右足で踏まえて、ぼんと蹴るシーンなど中々見事でした。さて、かゝる傾向の時代ですから、貴誌に於ても、益々サド女性、マゾ男性を扱った記事、小説なりをどんどん掲載して頂きたいと思ひます。尚、既にサド特集限定版は発行されているようですが、我々マゾ派も可なりいる事と思われまうので、マゾ特集号限定版を一日も早く発行して頂

待望の臨時増刊号『SADO特集号』第三集 十月上旬愈々発売！

(定価三百五十円)

きます様に、くれぐれもお願ひ致します。貴誌に於てのみ出来る企画ではないでしょうか。甚だ勝手な事を書きましたが、失礼の段お許し下さい。(広島 K・E生)

○
小生の創作など掲載される事はあるまいと諦めておりましたところ、思いがけなく九月号にて「猖紅匪」を掲載され思わず歓声を上げました。しかも、あのようによくの頁を喰うものを取り上げて下さった英断に感謝しています。抵

触する個処があるのか、技術的にまずかったのか、挿絵が三葉とも書き換えられていましたが一寸残念でした。何よりも肝腎な被虐者の容貌が違ってしまったのでいさゝかイメージを破られました。それでも或る程度満足することが出来て、第一回(逆吊り)と第二回(海老責)は気に入っています。口髭が落されなかったのは嬉しく思いました。私は口髭と胸毛のな

懸賞原稿募集

☆ 規定 ☆ ☆ 賞 金 ☆

告白と手記と体験記

優作 一篇に付 一万円 若干篇
秀作 一篇に付 五千元 若干篇
佳作 一篇に付 二千元 若干篇

- 一、必ず未発表の自作であること。
- 一、枚数に制限はありません。
- 一、原稿の第一頁に「懸賞告白」と朱記して下さい。原稿の返却は勝手ながら致しかねます。
- 一、締切は別に定めません。入選作は順次最近号誌上に発表いたします。
- 一、賞金は発表と同時に送りいたします。

い男には魅力を感じませんので。文章も大分カットで、殊に紅房夢の処を切られたのは残念でした。ずい分、きわどい描写を避けたつもりでしたけれど、いけませんでしたか。来月号の続篇も何卒よろしくお願いします。挿絵は三葉つけていただきますと思います。あの小説は、荒尾中尉(三船敏郎)沖伍長(久保明)黄老人(志村喬)頭目劉永福(三島雅夫)元蒼龍(信欣三)邱(三井弘次)豊艶麗(淡路恵子)という映画俳優のイメージで書きました。(菅良太)

第二信——拙作「猖紅匪」二回に亘り掲載いただき感謝いたしております。前篇では「蠟燭跨ぎ」で数行のカットと、「紅房夢」で数十行のカットでしたが、後篇はカットというより書き改められた点が多く、覚悟はしていましたが、殊に晒台へ行く途中の個処、三角の背の木馬にのせられてゆく所のカットとさそり責の処、水責の後で尿意を訴える所は小生のもっとも力を入れた処でしたが、カットされているのは残念でした。私は検閲制度については何も知らぬ者ですが、どうも他の週刊誌や単行本、月刊誌よりも、きびしいように思われるのは納得できません。他誌ではもっともときわどい描写が公に通っているのに、貴誌のこの遠慮はうなづけません。小生の筆などかなり婉曲に描写していますので決して字句に於ける危険性は少いと思うのですが、如何でしょうか心配していた榎村氏の文章と一緒に掲載された事は何と云ってもよろこびで、あの種のファンにもきつと喜ばれると思います。今月の読者通信でも、拙作「猖紅匪」はかなり好評のようで喜んでいますが、しかし原作がもっと生きたら、もっと好評だったろうにと残念です。好評に甘えるようですが、お送りした「童貞中尉」又「立石さま様起」どちらか掲載していただけたらと思っております。榎村氏のは甘いソドミヤとフェチズムで私は、オーソドックスな男性責小説なので自然と趣がちがい、それぞれの人の好みに合うと思います。(菅良太)